

Novell Identity Manager

3.5.1

www.novell.com

インストールガイド

2007年9月28日



Novell®

保証と著作権

米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、この文書の内容または使用について、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。また文書の商品性、および特定の目的への適合性について、いかなる黙示の保証も否認し、排除します。また、本書の内容は予告なく変更されることがあります。

米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、すべてのノベル製ソフトウェアについて、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。またノベル製ソフトウェアの商品性、および特定の目的への適合性について、いかなる黙示の保証も否認し、排除します。米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、ノベル製ソフトウェアの内容を変更する権利を常に留保します。

本契約の下で提供される製品または技術情報はすべて、米国の輸出規制および他国の商法の制限を受けます。お客様は、すべての輸出規制を遵守し、製品の輸出、再輸出、または輸入に必要なすべての許可または等級を取得するものとします。お客様は、現在の米国の輸出除外リストに掲載されている企業、および米国の輸出管理規定で指定された輸出禁止国またはテロリスト国に本製品を輸出または再輸出しないものとします。お客様は、取引対象製品を、禁止されている核兵器、ミサイル、または生物化学兵器を最終目的として使用しないものとします。ノベル製ソフトウェアの輸出については、「[International Trade Services \(http://www.novell.com/company/policies/trade_services\)](http://www.novell.com/company/policies/trade_services)」の Web ページをご参照ください。弊社は、お客様が必要な輸出承認を取得しなかったことに対し如何なる責任も負わないものとします。

Copyright © 2007 Novell, Inc. All rights reserved. 本ドキュメントの一部または全体を無断で複写・転載することは、その形態を問わず禁じます。

米国 Novell, Inc. は、本文書に記載されている製品に統合されている技術に関する知的所有権を保有します。これらの知的所有権は、「[Novell Legal Patents \(http://www.novell.com/company/legal/patents/\)](http://www.novell.com/company/legal/patents/)」の Web ページに記載されている 1 つ以上の米国特許、および米国ならびにその他の国における 1 つ以上の特許または出願中の特許を含む場合があります。

Novell, Inc.
404 Wyman Street, Suite 500
Waltham, MA 02451
U.S.A.
www.novell.com

オンラインヘルプ: 本製品とその他の Novell 製品の最新のオンラインヘルプにアクセスする場合は、「[Novell Documentation \(http://www.novell.com/documentation\)](http://www.novell.com/documentation)」の Web ページをご覧ください。

Novell の商標

Novell の商標一覧については、「[商標とサービスの一覧 \(http://www.novell.com/company/legal/trademarks/tmlist.html\)](http://www.novell.com/company/legal/trademarks/tmlist.html)」を参照してください。

サードパーティ資料

サードパーティの商標は、それぞれの所有者に属します。

目次

このガイドについて	9
1 概要	11
1.1 Identity Manager の概要	11
1.2 用語の変更	14
1.3 Identity Manager 3.5.1 の新機能	14
1.3.1 Identity Manager	14
1.3.2 Designer for Identity Manager	16
1.3.3 ユーザアプリケーション	17
1.4 Identity Manager のインストールプログラムおよびサービス	19
1.4.1 インストールプログラム	19
1.4.2 サービス	21
1.5 Identity Manager のシステム要件	28
1.6 推奨される展開方法	34
1.7 Identity Manager とそのサービスの入手先	36
1.7.1 Identity Manager 3.5.1 のインストール	38
1.7.2 Identity Manager 3.5.1 製品のアクティベート	38
2 計画	39
2.1 Identity Manager の実装におけるプロジェクト管理面の計画	39
2.1.1 Novell Identity Manager の展開	39
2.2 一般的なインストールシナリオの計画	46
2.2.1 Identity Manager の新しいインストール	46
2.2.2 同じ環境での Identity Manager および DirXML 1.1a の使用	48
2.2.3 スターターパックから Identity Manager へのアップグレード	50
2.2.4 Password Synchronization 1.0 から Identity Manager のパスワード同期へのアップグレード	52
2.3 Identity Manager の実装に関する技術面の計画	54
2.3.1 Designer の使用	54
2.3.2 Identity Manager がサーバで必要とするオブジェクトの複製	54
2.3.3 スコープフィルタリングを使用した異なるサーバ上のユーザの管理	56
3 アップグレード	59
3.1 アップグレードパス	59
3.2 ポリシーアーキテクチャの変更点	59
3.3 アップグレード手順	60
3.3.1 ドライバのエクスポート	60
3.3.2 最小要件の確認	61
3.3.3 エンジンのアップグレード	62
3.3.4 リモートローダのアップグレード	63
3.3.5 UNIX/Linux 環境のアップグレード	63
3.4 パスワード同期のアップグレード	63
3.5 RNS から Novell Audit へのアップグレード	63
3.6 DirXML 1.1a ドライバ環境設定のアップグレード	64
3.7 Identity Manager のアクティベート	64

4	Identity Manager のインストール	65
4.1	インストールの準備	65
4.2	Identity Manager のコンポーネントとシステム要件	65
4.3	NetWare への Identity Manager のインストール	65
4.4	Windows への Identity Manager のインストール	71
4.5	Windows での接続システムオプションのインストール	77
4.6	UNIX/Linux プラットフォームでの GUI を使用した Identity Manager のインストール	81
4.7	コンソールを使用した UNIX/Linux プラットフォームへの Identity Manager のインストール	86
4.8	コンソールを使用した UNIX/Linux への接続システムのインストール	90
4.9	ルート以外への Identity Manager の インストール	93
4.10	インストール後のタスク	95
4.11	カスタムドライバのインストール	96
5	ユーザアプリケーションのインストール	97
5.1	インストールの必要条件	97
5.1.1	JBoss アプリケーションサーバと MySQL データベースのインストール	100
5.1.2	JBoss アプリケーションサーバのサービスとしてのインストール	103
5.1.3	MySQL データベースの環境設定	104
5.2	インストールと環境設定	105
5.3	ユーザアプリケーションドライバの作成	105
5.4	インストールプログラムの概要	110
5.4.1	インストールスクリプトおよび実行可能ファイル	111
5.4.2	インストール時に必要な値	111
5.5	インストール GUI からの JBoss アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションの インストール	112
5.5.1	インストーラ GUI の起動	113
5.5.2	アプリケーションサーバプラットフォームの選択	115
5.5.3	データベースの移行	115
5.5.4	WAR の場所の指定	117
5.5.5	インストールフォルダの選択	118
5.5.6	データベースプラットフォームの選択	120
5.5.7	データベースのホストとポートの指定	122
5.5.8	データベース名および権限を持つユーザの指定	123
5.5.9	Java のルートディレクトリの指定	124
5.5.10	Jboss アプリケーションサーバ設定の指定	124
5.5.11	アプリケーションサーバ環境設定タイプの選択	126
5.5.12	Novell Audit のログの有効化	127
5.5.13	マスタキーの指定	128
5.5.14	ユーザアプリケーションの設定	129
5.5.15	選択内容の確認とインストール	142
5.5.16	ログファイルの表示	142
5.6	WebSphere アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール	143
5.6.1	インストーラ GUI の起動	143
5.6.2	アプリケーションサーバプラットフォームの選択	145
5.6.3	WAR の場所の指定	145
5.6.4	インストールフォルダの選択	146
5.6.5	データベースプラットフォームの選択	148
5.6.6	Java のルートディレクトリの指定	150
5.6.7	Novell Audit のログの有効化	151
5.6.8	マスタキーの指定	152
5.6.9	ユーザアプリケーションの設定	153
5.6.10	選択内容の確認とインストール	166
5.6.11	ログファイルの表示	167

5.6.12	ユーザアプリケーション環境設定ファイルと JVM システムプロパティの追加	167
5.6.13	WebSphere キーストアへの eDirectory ルート認証局のインポート	168
5.6.14	IDM WAR ファイルの展開	169
5.6.15	アプリケーションの起動	170
5.6.16	ユーザアプリケーションポータルへのアクセス	170
5.7	コンソールインタフェースからのユーザアプリケーションのインストール	170
5.8	単一コマンドによるユーザアプリケーションのインストール	171
5.9	インストール後のタスク	178
5.9.1	マスタキーの記録	178
5.9.2	クラスインストールのチェック	179
5.9.3	JBoss サーバ間の SSL 通信の設定	179
5.9.4	外部パスワード WAR へのアクセス	179
5.9.5	[パスワードを忘れた場合の設定] の更新	180
5.9.6	電子メール通知の設定	180
5.9.7	インストールのテスト JBoss アプリケーションサーバの場合	180
5.9.8	プロビジョニングチームと要求の設定	181
5.9.9	eDirectory でのインデックスの作成	182
5.10	インストール後の IDM WAR ファイルの再設定	182
5.11	トラブルシューティング	182

6 Novell Identity Manager 製品を有効にする 185

6.1	Identity Manager 製品のライセンスの購入	185
6.2	資格情報を使用した Identity Manager 製品のアクティベート	185
6.3	プロダクトアクティベーションキーのインストール	187
6.4	Identity Manager およびドライバのプロダクトアクティベーションの表示	187

このガイドについて

DirXML[®]の後継製品である Novell[®] Identity Manager は、アプリケーション、ディレクトリ、およびデータベース間で情報を共有するためのデータ共有および同期サービスです。このサービスでは、分散された情報をリンクし、ユーザは識別情報の変更時に指定システムを自動的に更新するポリシーを設定できます。Identity Manager は、アカウントプロビジョニング、セキュリティ、シングルサインオン、ユーザセルフサービス、認証、認可、自動化されたワークフロー、および Web サービスの基盤になります。Identity Manager を使用すると、分散された識別情報を統合、管理、および制御できるため、適切なユーザに適切なリソースを安全に提供できます。

このガイドでは、Identity Manager の技術の概要と、Identity Manager のインストール、管理、および設定の機能について説明します。

- ◆ 11 ページの第 1 章「概要」
- ◆ 39 ページの第 2 章「計画」
- ◆ 59 ページの第 3 章「アップグレード」
- ◆ 65 ページの第 4 章「Identity Manager のインストール」
- ◆ 97 ページの第 5 章「ユーザアプリケーションのインストール」
- ◆ 185 ページの第 6 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする」

対象読者

このガイドは、計画を立案し、Identity Manager をネットワーク環境に実装する管理者、コンサルタント、およびネットワークエンジニアを対象としています。

マニュアルの更新

このマニュアルの最新のバージョンについては、Identity Manager のマニュアルの Web サイト (<http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html>) を参照してください。

追加のマニュアル

Identity Manager の他のドライバに関するマニュアルについては、Identity Manager ドライバの Web サイト (<http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html>) を参照してください。

マニュアルの表記規則

Novell のマニュアルでは、「より大きい」記号 (>) を使用して手順内の操作と相互参照パス内の項目の順序を示します。

商標記号 (®、™ など) は、Novell の商標を示します。アスタリスク (*) は、サードパーティの商標を示します。

プラットフォームによっては、シングルパス名に円記号 (()) を使用できる場合とスラッシュ (/) を使用できる場合がありますが、パス名は円記号で表記されます。Linux*、UNIX* など、スラッシュを使う必要があるプラットフォームを使用しているユーザは、必要に応じてスラッシュを使用してください。

概要

- ◆ 11 ページのセクション 1.1 「Identity Manager の概要」
- ◆ 14 ページのセクション 1.2 「用語の変更」
- ◆ 14 ページのセクション 1.3 「Identity Manager 3.5.1 の新機能」
- ◆ 19 ページのセクション 1.4 「Identity Manager のインストールプログラムおよびサービス」
- ◆ 28 ページのセクション 1.5 「Identity Manager のシステム要件」
- ◆ 34 ページのセクション 1.6 「推奨される展開方法」
- ◆ 36 ページのセクション 1.7 「Identity Manager とそのサービスの入手先」

1.1 Identity Manager の概要

Novell® Identity Manager は、データの管理方法を大きく変えるデータ共有および同期ソリューションで、賞を獲得しました。このサービスでは中央データストアである識別ボールドを活用して、アプリケーション、データベース、およびディレクトリ間における情報を同期、変換、および分散します。

しかし、Identity Manager の機能はこれだけに留まりません。次に、Identity Manager の機能の一部を示します。

- ◆ パスワード同期
- ◆ パスワードセルフサービス
- ◆ ログ機能および監査サービス
- ◆ ユーザアプリケーションによるユーザ管理
- ◆ ワークフロープロビジョニング
- ◆ 電子メール通知
- ◆ Designer ユーティリティを使用したドライバやポリシーの設計

このバージョンの Identity Manager に含まれるこれらのコンポーネントの新機能を確認するには、14 ページのセクション 1.3 「Identity Manager 3.5.1 の新機能」を参照してください。Identity Manager を構成するさまざまなコンポーネントやサービスをより深く理解するには、19 ページのセクション 1.4 「Identity Manager のインストールプログラムおよびサービス」を参照してください。

Identity Manager を使用すると、接続されているシステム (SAP*、PeopleSoft*、Lotus* Notes、Microsoft* Exchange、Active Directory* など) で次のことが可能になります。

- ◆ 識別ボールドとデータを共有できます。
- ◆ 接続されたシステムでデータが変更されたときに、識別ボールドとの共有データを同期および変換できます。
- ◆ 識別ボールドでデータが変更されたときに、接続システムとの共有データを同期および変換できます。

Identity Manager でこれを実行するには、双方向フレームワークを構築して、管理者が識別ポータルからアプリケーションへのデータフローと、アプリケーションから識別ポータルへのデータフローを指定できるようにします。このフレームワークでは、XML を使用することにより、識別ポータルのデータとイベントを指定したアプリケーション固有の形式に変換するデータおよびイベント変換が可能になります。さらに、アプリケーション固有の形式は、識別ポータルが認識可能な形式に変換されます。アプリケーションとのすべてのやり取りは、アプリケーションのネイティブ API を使用して行われます。

Identity Manager を使用すると、関連する接続されたシステムに固有のレコードおよびフィールドに対応する属性とクラスだけを選択できます。たとえば、ディレクトリデータストアでは、人事データストアが含まれるユーザオブジェクトを共有し、サーバ、プリンタ、およびボリュームなどのネットワークリソースオブジェクトは共有しないようにすることができます。人事データストアでは、ユーザの姓、名、イニシャル、電話番号、および勤務場所を他の社員と共有しつつ、より個人的なユーザ情報（家族の情報や職歴など）は共有しないようにすることができます。

識別ポータルに、他のアプリケーションと共有するデータのクラスや属性がない場合、eDirectory スキーマを拡張してそれらを含めることができます。この場合、識別ポータルは情報のリポジトリとなり、識別ポータルでは必要なくても、他のアプリケーションから情報を使用できます。アプリケーション固有のデータストアには、そのアプリケーションだけが必要とする情報のリポジトリが保持されます。

Identity Manager は、次のタスクを実行します。

- ◆ イベントを使用して、識別ポータルの変更をキャプチャします。
- ◆ すべてのデータをまとめて引き出すハブとして機能することにより、データ管理を集中化または分散します。
- ◆ ディレクトリデータを XML 形式で公開し、XML アプリケーションまたは Identity Manager によって統合されたアプリケーションで使用および共有できるようにします。
- ◆ 識別ポータルオブジェクトと、他のすべての統合システム内にあるオブジェクト間の関連付けを慎重に保持して、データ変更がすべての接続システム間で適切に反映されるようにします。

データの同期にとって重要なのはポリシーです。ポリシーは次の機能を持ちます。

- ◆ システムで定義されたデータ要素を制御する特定のフィルタを使用して、データフローを制御します。
- ◆ 許可およびフィルタを使用して、信頼されるデータソースを適用します。
- ◆ XML 形式のデータストアデータにルールを適用します。これらのルールは、Identity Manager を介して変更がフローするときに、データの解釈と変換を制御します。
- ◆ データを XML から実質的にあらゆるデータ形式に変換します。これにより、Identity Manager は任意のアプリケーションとデータを共有できます。

Identity Manager を使用すると、ビジネスにおける HR リソースの簡素化、データ管理コストの削減、細かくカスタマイズされたサービスによる顧客関係の構築が可能になり、成功の阻害要因となる相互運用性の障壁を取り除くことができます。Identity Manager により可能になるアクティビティの例を次に示します。

表 1-1 Identity Manager のアクティビティ

アクティビティ	Identity Manager のソリューション
ユーザアカウントの管理	<p>単一の操作で次のことが可能になります。</p> <p>Identity Manager は、従業員のリソースへのアクセス権をただちに付与または削除します。</p> <p>Identity Manager には、新しい従業員にネットワーク、電子メール、アプリケーション、リソースなどに対するアクセス権を自動的に付与する従業員プロビジョニング機能があります。ワークフロープロビジョニングを使ってこのプロセスを設定し、承認プロセスを開始できます。</p> <p>Identity Manager では、解雇や退職時にアクセス権を制限または無効化することもできます。</p>
アセットインベントリの追跡と統合	<p>Identity Manager では、すべての資産インベントリ項目 (コンピュータ、モニタ、電話、図書リソース、椅子、机など) のプロフィールを識別ボールドに追加し、それらを個人、部門、または組織などのユーザプロフィールと統合できます。</p>
個人 / 職業別電話帳ディレクトリの自動化	<p>Identity Manager では、内部使用および外部使用目的で、さまざまなレベルの情報をもつ統一ディレクトリを作成できます。外部ディレクトリには、電子メールアドレスだけを登録し、内部ディレクトリには住所、電話番号、Fax 番号、携帯電話番号、自宅の住所などを含めることができます。</p>
ユーザプロフィールの強化	<p>Identity Manager では、電子メールアドレス、電話番号、自宅の住所、初期設定、所属関係、ハードウェア資産、電話、キー、インベントリなどの情報を追加または同期することにより、ユーザプロフィールがより充実します。</p>
通信アクセスの統一	<p>Identity Manager では、各個人ユーザまたはグループのディレクトリを共通管理インタフェースと同期することにより、それらの個人ユーザまたはグループのネットワーク、電話、ポケベル、Web アクセス、無線アクセスが簡素化されます。</p>
パートナー関係の強化	<p>Identity Manager では、ファイアウォール外のパートナーシステムにプロフィール (従業員、顧客など) を作成して、パートナーが必要に応じてすぐにサービスを提供できるようにすることにより、関係が強化されます。</p>
サプライチェーンの向上	<p>Identity Manager は、各顧客の複数のアカウントにあるインスタンスを認識および統一することにより、顧客サービスを向上します。</p>
顧客の信頼の確立	<p>Identity Manager は、顧客のニーズを認識するという新しいサービスを備えており、データを別々のアプリケーションや場所に孤立して保管するのではなく、一箇所で参照できます。</p>
サービスのカスタマイズ	<p>Identity Manager では、関係、ステータス、およびサービスレコードなどの同期化された情報を備えたプロフィールをユーザ (従業員、顧客、パートナーなど) に付与します。</p> <p>これらのプロフィールを使用すると、サービスおよび情報に対するさまざまなレベルのアクセス権を付与し、顧客の状態に応じてカスタマイズされたサービスをリアルタイムに提供できます。</p>

アクティビティ	Identity Manager のソリューション
パスワード管理	<p>ユーザアプリケーションを使用して、管理者は本人確認の質問を設定できるほか、ユーザに独自のパスワードを設定することを許可することもできます。</p> <p>Novell Identity Manager 3.5.1 用 Client Login Extension を使用すると、Novell および Microsoft GINA のログインクライアントにリンクを追加して、パスワードセルフサービスを容易に利用できるようにすることができます。これにより、これらのクライアントに Identity Manager ユーザアプリケーションのパスワードセルフサービス機能からアクセスできるようになります。</p> <p>Identity Manager ドライバがパスワード同期をサポートしている場合は、接続システム間でパスワードを同期できます。</p>

1.2 用語の変更

次の用語が、旧リリースから変わりました。

表 1-2 用語の変更

旧用語	新用語
DirXML®	Identity Manager
DirXML サーバ	Metadirectory サーバ
DirXML エンジン	メタディレクトリエンジン
eDirectory™	識別ポータル (eDirectory 属性またはクラスを参照する場合は除く)

1.3 Identity Manager 3.5.1 の新機能

- ◆ 14 ページのセクション 1.3.1 「Identity Manager」
- ◆ 16 ページのセクション 1.3.2 「Designer for Identity Manager」
- ◆ 17 ページのセクション 1.3.3 「ユーザアプリケーション」

1.3.1 Identity Manager

- ◆ 15 ページの 「Open Enterprise Server 2 のサポート」
- ◆ 15 ページの 「iManager プラグイン」
- ◆ 15 ページの 「その他のオペレーティングシステムプラットフォームのサポート」
- ◆ 15 ページの 「その他のアプリケーションのサポート」
- ◆ 15 ページの 「ルート以外へのインストール」
- ◆ 15 ページの 「バンドルコンポーネント」

Open Enterprise Server 2 のサポート

Open Enterprise Server 2 には、SUSE® Linux Enterprise Server 10 Support Pack 1、NetWare® 6.5 Support Pack 7、eDirectory 8.8 Support Pack 2、iManager 2.7、および Security Services 2.0.5 などの多くの必要なソフトウェアコンポーネントが含まれています。Identity Manager は、Linux と NetWare Open Enterprise Server 2 の両方のプラットフォームでサポートされています。

iManager プラグイン

このバージョンの Identity Manager の iManager 用プラグインは、Identity Manager 3.0 と互換性があります。Identity Manager 3.5.1 には、後方互換性だけでなく、IDM 3.0 のドライバキャッシュファイルから情報をレポートできるプラグインも含まれています。

その他のオペレーティングシステムプラットフォームのサポート

Identity Manager は、旧バージョンの Identity Manager がサポートしていたオペレーティングシステムプラットフォームをすべてサポートしています。さらに、Identity Manager の特定のコンポーネントは、Microsoft Windows Vista*、AIX* 5.3、Red Hat* 5 AS/ES 64 ビット、および Open Enterprise Server 2 (これには SUSE Linux Enterprise Server 10 SP1 および NetWare 6.5 SP7 が付属します) でも動作します。

その他のアプリケーションのサポート

Identity Manager は、旧バージョンの Identity Manager がサポートしていたアプリケーションをすべてサポートしています。さらに、Identity Manager は、サポートされているアプリケーションが動作するプラットフォームでは、eDirectory 8.8 SP2 および iManager 2.7 もサポートしています。

ルート以外へのインストール

Identity Manager 3.5.1 には、ルート以外にインストールされた eDirectory に Identity Manager メタディレクトリエンジンをインストールするための情報とスクリプトが含まれています。Identity Manager をルート以外にインストールする方法の手順については、[93 ページのセクション 4.9 「ルート以外への Identity Manager のインストール」](#) を参照してください。

バンドルコンポーネント

Identity Manager には、Novell Identity Manager 3.5.1 用 Client Login Extension と Designer 2.1 が付属しています。

Identity Manager の新しいコンポーネントである Novell Identity Manager 3.5.1 用 Client Login Extension を使用すると、Novell および Microsoft GINA のログインクライアントにリンクを追加することで、パスワードセルフサービスを容易に利用できるようになります。ユーザがログインクライアントで [パスワードを忘れた場合] リンクをクリックすると、Client Login Extension によりブラウザが制限付きで起動され、ユーザは Identity Manager ユーザアプリケーションのパスワードセルフサービス機能にアクセスできます。この機能は、パスワードを忘れたユーザがヘルプデスクに問い合わせる件数を削減するのに役立ちます。

Novell Identity Manager 3.5.1 用 Client Login Extension の詳細については、『[Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド](#)』の「[Novell Identity Manager 3.5.1 用 Client Login Extension](#)」を参

照してください。Designer 2.1 の詳細については、[16 ページのセクション 1.3.2 「Designer for Identity Manager」](#) を参照してください。

1.3.2 Designer for Identity Manager

この項では、Designer for Identity Manager の強化点について説明します。Designer 2.1 のすべての強化点と変更点に関するより詳しいリストについては、「[新機能 \(http://www.novell.com/documentation/designer21/index.html\)](#)」を参照してください。

- ◆ [16 ページの「ロケールのサポート」](#)
- ◆ [16 ページの「プロビジョニングチームエディタ」](#)
- ◆ [16 ページの「プロビジョニングビューの使い勝手の強化」](#)
- ◆ [17 ページの「電子メールアクティビティ」](#)
- ◆ [17 ページの「承認アクティビティ」](#)
- ◆ [17 ページの「ログアクティビティ」](#)
- ◆ [17 ページの「フォームの強化点」](#)
- ◆ [17 ページの「ECMA の強化点」](#)
- ◆ [17 ページの「プロビジョニング要求定義の表示名の強化点」](#)

ロケールのサポート

Designer for Identity Manager のプロビジョニングビューで、次の項目を定義できるようになりました。

- ◆ ユーザアプリケーションのデフォルトのロケール (これは、ユーザのロケールに一致するものが見つからない場合にコンテンツの表示に使用されるデフォルトのロケールになります)。
- ◆ ユーザアプリケーションドライバがサポートするロケール。

さらに、Designer では、電子メールテンプレートのローカリゼーションデータもインポートおよびエクスポートできるようになりました。

プロビジョニングチームエディタ

Designer for Identity Manager に、プロビジョニングチームエディタプラグインが付属するようになりました。この新しいエディタを使用することで、ユーザアプリケーションの [要求と承認] タブでチームとして作業できる一連のユーザを定義できます。チーム定義により、プロビジョニング要求やそのチームに関連する承認タスクを誰が管理できるかが決定されます。

プロビジョニングチームエディタは、チーム管理用の iManager プラグインの代わりとして使用できます。

プロビジョニングビューの使い勝手の強化

プロビジョニングビューが次の操作を実行できるように強化されました。

- ◆ プロビジョニング要求定義をカテゴリで整理する。ディレクトリ抽象化レイヤエディタを使用して、カテゴリを定義できます。

- ◆ 1つのプロビジョニング要求定義に対して同時に複数のプロパティ (トラスティの割り当てなど) を割り当てる。

電子メールアクティビティ

電子メールアクティビティにより、承認アクティビティ外の関連当事者に電子メールを送信できます。

承認アクティビティ

承認アクティビティでは、そのプロパティページから新しいフォームを作成できるようになりました。

また、承認アクティビティにより、電子メール通知に、[送信者] とは異なる [返信先] アドレスフィールドを設定することもできます。

ログアクティビティ

ログアクティビティでは、ワークフローのコメント履歴にカスタムメッセージを追加できるようになりました。

フォームの強化点

フォームで onload イベントがサポートされるようになりました。

ECMA の強化点

次のフィールドメソッドがサポートされるようになりました。

- ◆ getName()
- ◆ validate()
- ◆ hide()
- ◆ show()
- ◆ focus()
- ◆ select()
- ◆ activate()
- ◆ setRequired()

プロビジョニング要求定義の表示名の強化点

プロビジョニング要求定義の表示名をスタティックな文字列またはローカライズ可能な ECMA 式として定義できるようになりました。式を定義すると、承認タスクの表示名をカスタマイズできます。これにより、同じワークフローの異なるインスタンスにおいて、ユーザアプリケーションのタスクリストに一意のエントリを表示できます。

1.3.3 ユーザアプリケーション

- ◆ 18 ページの「ユーザインタフェースの強化点」
- ◆ 18 ページの「クロスプラットフォームの変更点」

- ◆ 18 ページの「相互運用性の変更点」
- ◆ 19 ページの「SOAP エンドポイントの強化点」
- ◆ 19 ページの「その他の機能の強化点」

ユーザインタフェースの強化点

[チームタスク] の表示が強化され、インタフェースの柔軟性が向上し、最適のユーザエクスペリエンスが得られるようになりました。[チームタスク] ページでは、2つの新しいプレゼンテーションビューであるテンプレートビューと表示ビューに動的なコンテンツが表示されます。これらのフォーマットはどちらも表を使用してユーザにデータを表示します。どちらのフォーマットでも、ユーザは表示するカラムの選択、カラムの表示順序の指定、およびカラム内の値を基準にしたタスクのソートを行うことができます。

どの表示フォーマットを選択するかは、管理者が制御します。管理者はプレゼンテーション上の好み、または次の異なる機能を利用するために、いずれかのビューを選択できます。

- ◆ テンプレートビュー(デフォルト)は、非ビジュアルユーザ向けにユーザ補助をサポートしています。さらに、カスタマイズ可能なページ機能も備えています。
- ◆ 表示ビューはフィルタリングをサポートしており、データエクスポート機能を備えています。

クロスプラットフォームの変更点

このリリースでは、次のアプリケーションサーバプラットフォームのランタイムサポートが追加されています。

- ◆ SUSE Linux Enterprise Server 10.1、SUSE Linux Enterprise Server 9 SP2、および Windows 2003 Server SP1 上の JBoss* 4.2.0
- ◆ Solaris* 10 および Windows 2003 SP1 上の WebSphere* 6.1
WAR はユーザアプリケーションのインストールプログラムによってインストールされます。ただし、WebSphere には WAR を手動で展開する必要があります。
WebSphere は、データベース Oracle* 10g、MS SQL* 2005 SP1、および DB2 をサポートしています。
サポートされているすべてのプラットフォームのリストについては、28 ページの「Identity Manager のシステム要件」を参照してください。

このリリースでは、次のブラウザ環境のサポートが追加されています。

- ◆ Windows 2000 Professional SP4、Windows XP SP2、および Windows Vista Enterprise Version 6 上の Internet Explorer 7
- ◆ Red Hat Enterprise Linux WS 4.0、Novell Linux Desktop 9、SUSE Linux 10.1、および SUSE Linux Enterprise Desktop 10 上の Firefox* 2

相互運用性の変更点

このリリースでは、次の点で相互運用性に変更されています。

- ◆ 管理者が環境設定で、ユーザアプリケーションに [ヒント] または [パスワードを忘れた場合] 画面を表示するかどうかを指定できるようになりました。

- ◆ 管理者が環境設定で、[ログイン] ダイアログボックスでのパスワードの自動補完機能の有効または無効を指定できるようになりました。これにより、ブラウザにユーザが自分の資格情報を保存できるかどうかを制御されます。
- ◆ ログインプロセスにおいて、Access Manager を使用することで、代理スマートカード認証がサポートされるようになりました。この方法で認証を行うには、ユーザアプリケーションが、HTTP ヘッダに挿入された SAML アサーションを受け入れ、これらのアサーションを使用して、ディレクトリとの SASL 接続を行う必要があります。

SOAP エンドポイントの強化点

このリリースでは、SOAP エンドポイントの次の点が強化されています。

- ◆ SOAP エンドポイントを提供して、ディレクトリ抽象化レイヤに対してクエリを実行するために、新しい VDX サービスが追加されました。
- ◆ SOAP エンドポイントで電子メール通知を送信できるように、新しい通知サービスが追加されました。
- ◆ プロビジョニングサービスに `getProcessesArray()` という新しいメソッドが追加されました。これには、返すプロセスの数を制限するための引数が含まれています。
- ◆ プロビジョニングサービスに `startWithCorrelationId()` という新しいメソッドも追加されました。これにより、ユーザは、相互関係 ID を使用して一連の関連ワークフローを開始し、トラッキングできます。

SOAP エンドポイントにより、開発者は独自のアプリケーションを作成できます。これらは、ユーザアプリケーションのユーザインタフェースに表示されません。

その他の機能の強化点

ユーザアプリケーションで、URL パラメータを指定して、プロビジョニング要求フォームに直接移動できるようになりました。

1.4 Identity Manager のインストールプログラムおよびサービス

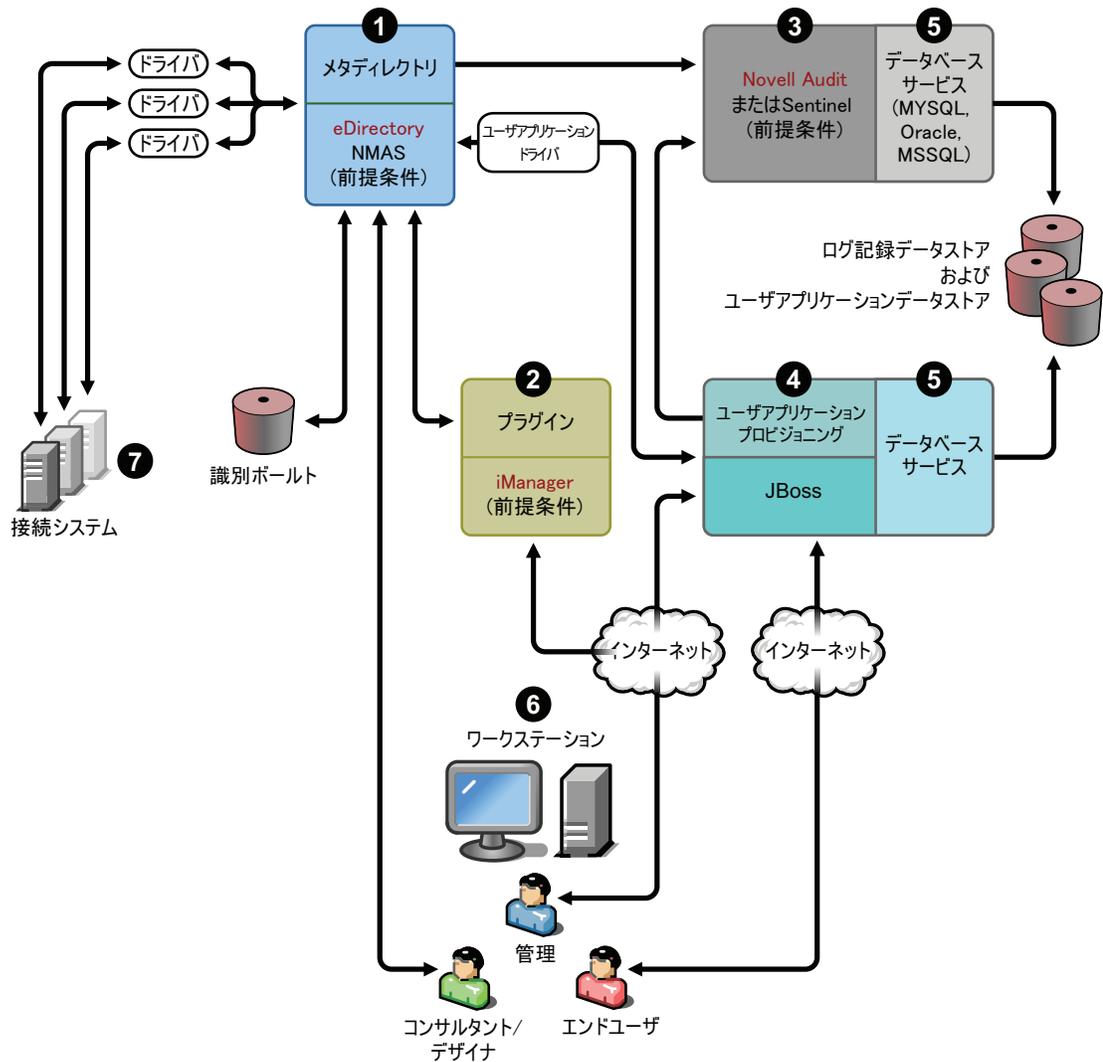
次の節では、Identity Manager のインストールプログラムおよびサービスについて説明します。この項では、Identity Manager の全機能を構成するさまざまなサービスについて説明します。

- ◆ [19 ページのセクション 1.4.1 「インストールプログラム」](#)
- ◆ [21 ページのセクション 1.4.2 「サービス」](#)

1.4.1 インストールプログラム

Identity Manager には、7つのサービスをインストールして設定する3種類のインストールプログラムがあります。次の図は、Identity Manager が全機能を発揮するために必要なすべてのサービスの概要を示しています。

図 1-1 Identity Manager の 7 つのサービスの概要図



インストールプログラムと、各インストールプログラムで実行される内容のリストを次に示します。

- ◆ 21 ページの「Identity Manager メタディレクトリシステムのインストール」
- ◆ 21 ページの「ユーザーアプリケーションとプロビジョニングモジュールのインストール」
- ◆ 21 ページの「Designer のインストール」

注: Identity Manager コンポーネントをインストールする前に、まず eDirectory 8.7.3.6 以上 (上の図で 1 番および 3 番で示されているサービス)、Security Services 2.0.4 と NMAS 3.1.3 (1 番および 3 番)、iManager 2.6 以上 (2 番)、および Novell Audit 2.0.2 スターターパック または Sentinel 5.1.3 (3 番) などのインストールに必要なソフトウェアをインストールする必要があります。必要なソフトウェアは、[Novell のダウンロード Web サイト \(http://download.novell.com\)](http://download.novell.com) から入手できます。必要なソフトウェアおよび要件の詳細なリストについては、[28 ページのセクション 1.5 「Identity Manager のシステム要件」](#) を参照してください。

Identity Manager メタディレクトリシステムのインストール

インストールプロセスでは、次の機能が実行されます。

- ◆ Identity Manager 製品の eDirectory スキーマが全体に拡張されます。
- ◆ メタディレクトリエンジンとシステムサービスがインストールされます。
- ◆ iManager の Identity Manager プラグインがインストールされます。
- ◆ メタディレクトリシステムとシステムリモートローダ (選択した場合) がインストールされます。
- ◆ 接続システムのドライバがインストールされます。(ドライバがインストールされますが、使用前に初期化されるまで休止状態になります)。
- ◆ Identity Manager のレポートと、メタディレクトリシステムのユーティリティおよびツールがインストールされます。

ユーザアプリケーションとプロビジョニングモジュールのインストール

Linux* および Windows には次のサービスがインストールされます。

- ◆ JBoss および MySQL* (選択した場合)。
- ◆ ユーザアプリケーションの実行に必要な WAR ファイル。

Designer のインストール

Linux 用のインストーラと Windows 用のインストーラがあります。各インストーラは次のタスクを実行します。

- ◆ Eclipse* フレームワークをインストールする。
- ◆ 基盤となるプラグインをインストールする。
- ◆ メタディレクトリエンジンをインストールする。
- ◆ ディレクトリ抽象化レイヤプラグインをインストールする。
- ◆ ワークフローエディタプラグインをインストールする。

1.4.2 サービス

Identity Manager には、インストールおよび設定可能な 7 つのサービスが付属しています。運用環境では推奨されませんが、1 つのコンピュータに 7 つのすべてのサービスをインストールして設定できます。または、各コンピュータに 1 つのサービスを展開したり、任意の数のサービスをインストールしたりすることができます。各サービスでサポートされる

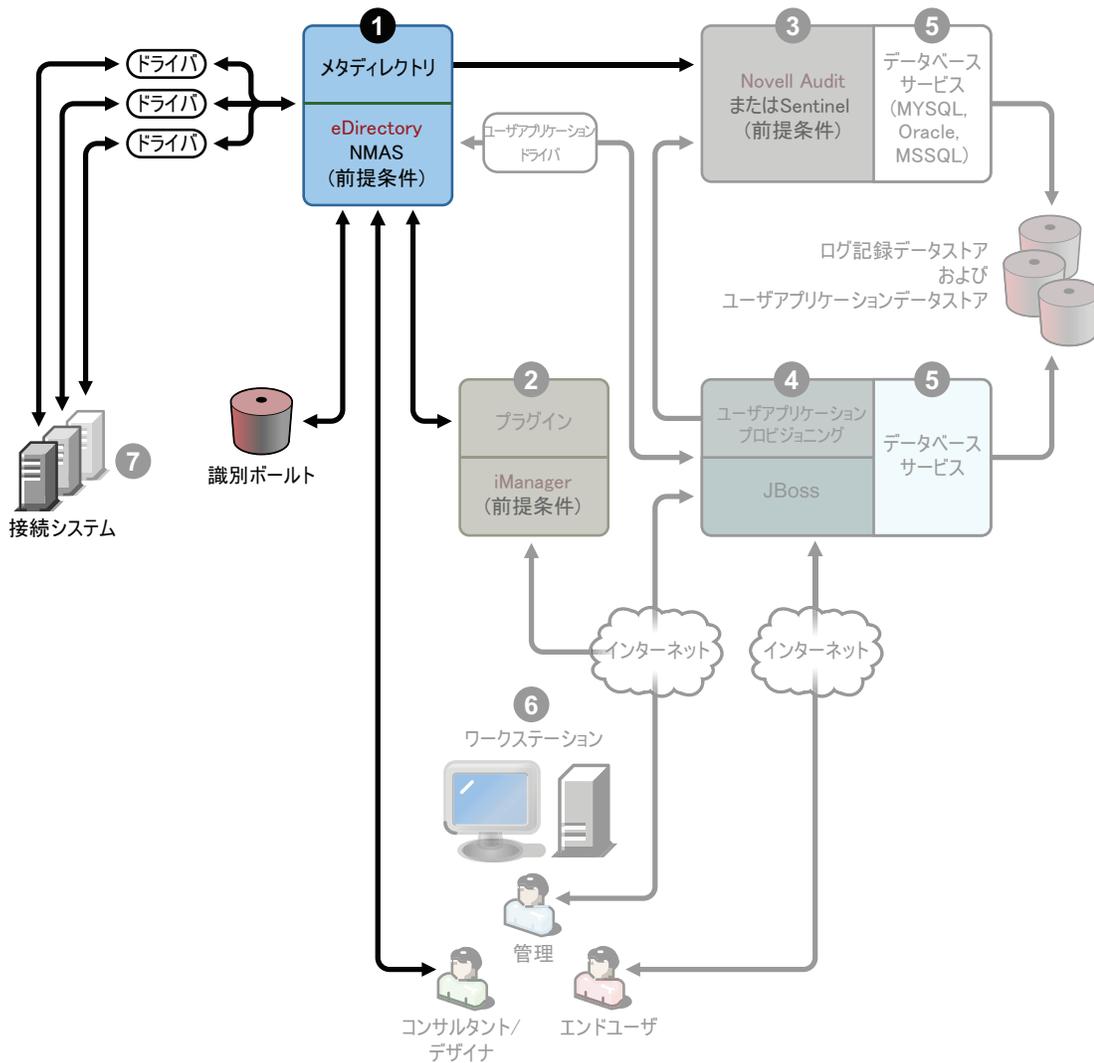
ハードウェアおよびソフトウェアの必要条件は、28 ページのセクション 1.5 「Identity Manager のシステム要件」で説明します。

- ◆ 22 ページの「メタディレクトリシステムサービス」
- ◆ 23 ページの「Web ベースの管理サービス」
- ◆ 24 ページの「セキュアログサービス」
- ◆ 25 ページの「ユーザアプリケーションとプロビジョニングモジュール」
- ◆ 25 ページの「データベースサービス」
- ◆ 27 ページの「ワークステーション」
- ◆ 27 ページの「接続システム」

メタディレクトリシステムサービス

このシステムは識別ポータルとして使用され、運用環境ではメタディレクトリエンジンのインスタンスが1つだけ必要になります。

図 1-2 メタディレクトリシステムサービス

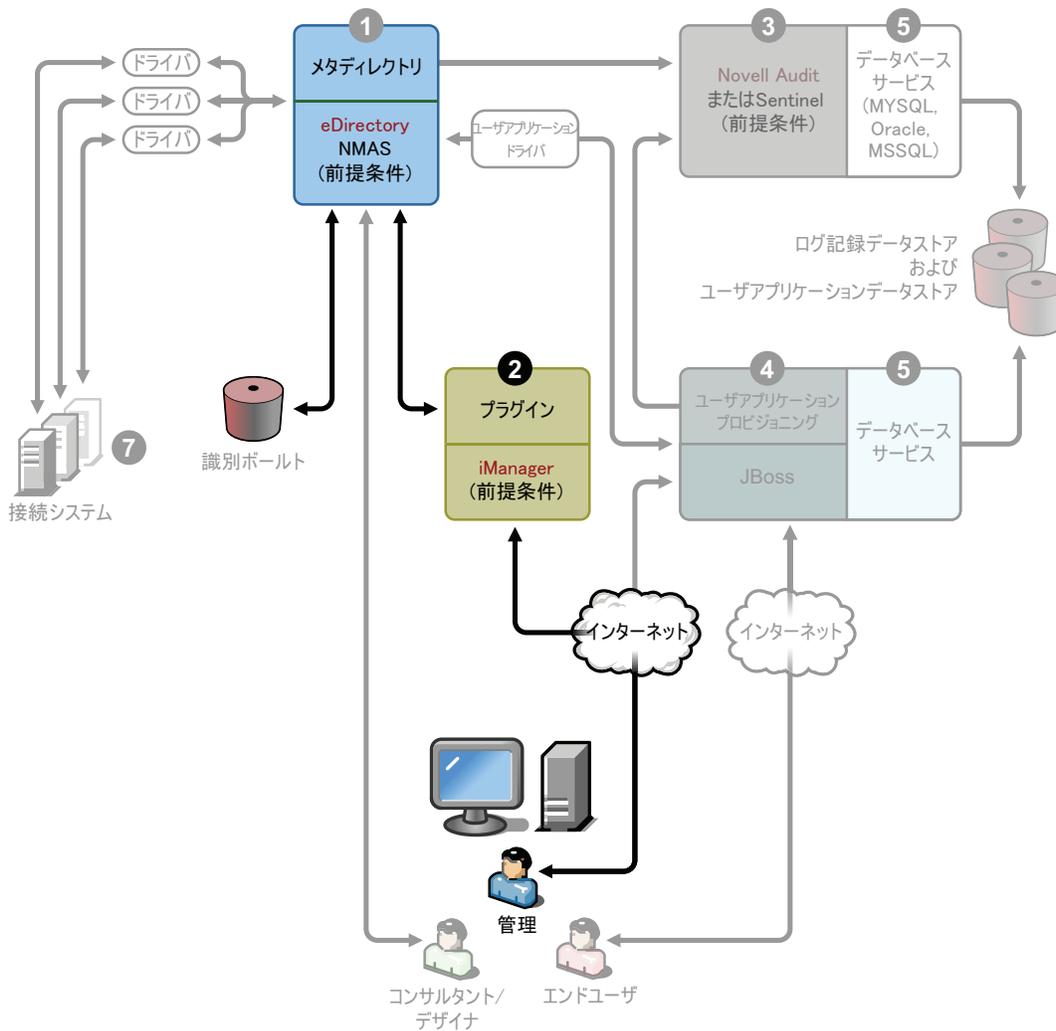


あるシステムのデータが変更されると、Identity Manager に組み込まれたメタディレクトリエンジンがそれらの変更を検出し、定義した業務ルールに基づいて他の接続されているシステムに伝えます。このソリューションを使用すると、特定のデータに信頼されるデータソースを適用できます（たとえば、HR アプリケーションがユーザの ID を所有する一方で、メッセージングシステムはユーザの電子メールアカウント情報を所有できます）。

Identity Manager とこのサービスをインストールするには、65 ページの第 4 章「Identity Manager のインストール」を参照してください。Identity Manager をインストールする前に必要なソフトウェアを確認するには、29 ページの「メタディレクトリシステム」のシステム要件を参照してください。

Web ベースの管理サービス

図 1-3 Web ベースの管理サービス

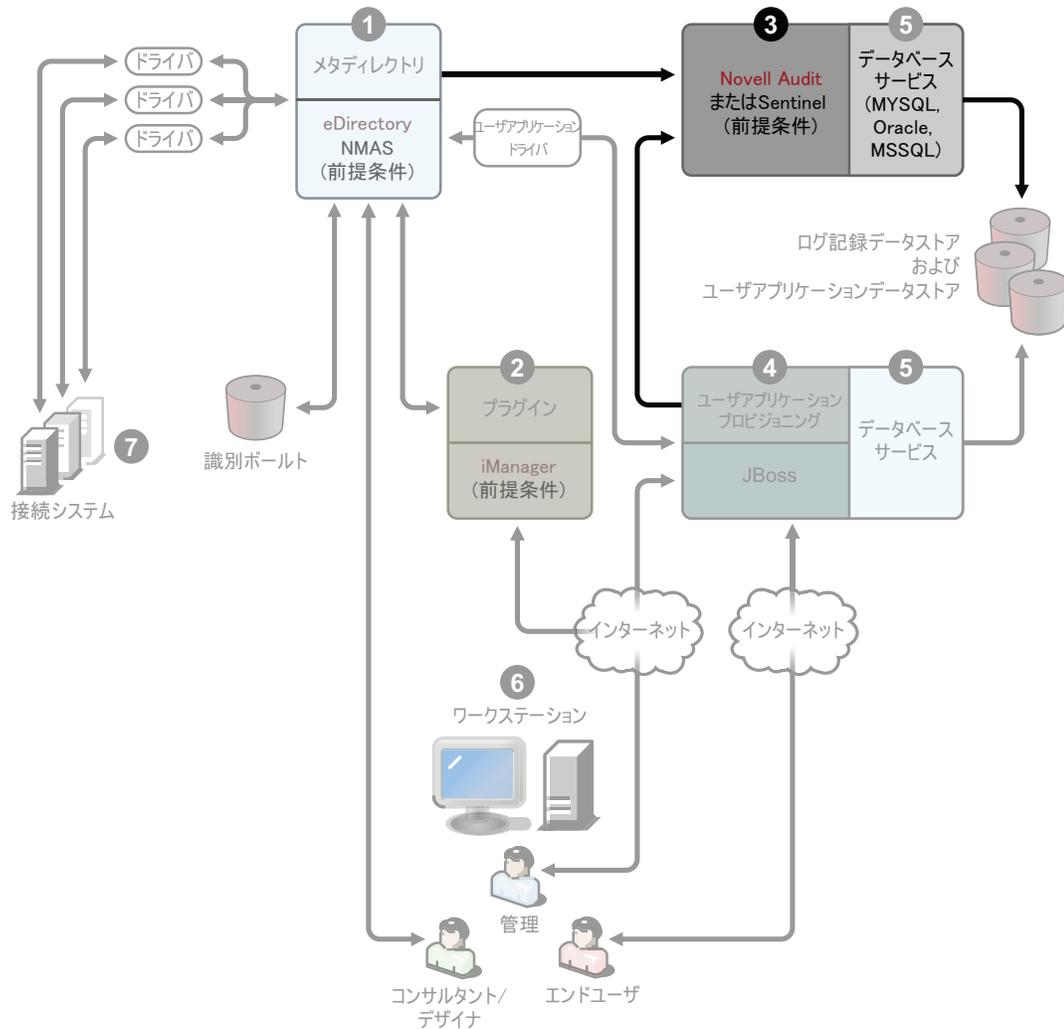


このサービスは、Identity Manager とユーザアプリケーションプラグインがインストールされた iManager 2.5 以上を使用する、eDirectory およびメタディレクトリシステムの管理用に使用します。Identity Manager プラグインは、Identity Manager をインストールするサーバ上の iManager にインストールします。Identity Manager プラグインとこのサービス

をインストールするには、65 ページの第 4 章「Identity Manager のインストール」を参照してください。

セキュアログサービス

図 1-4 セキュアログサービス

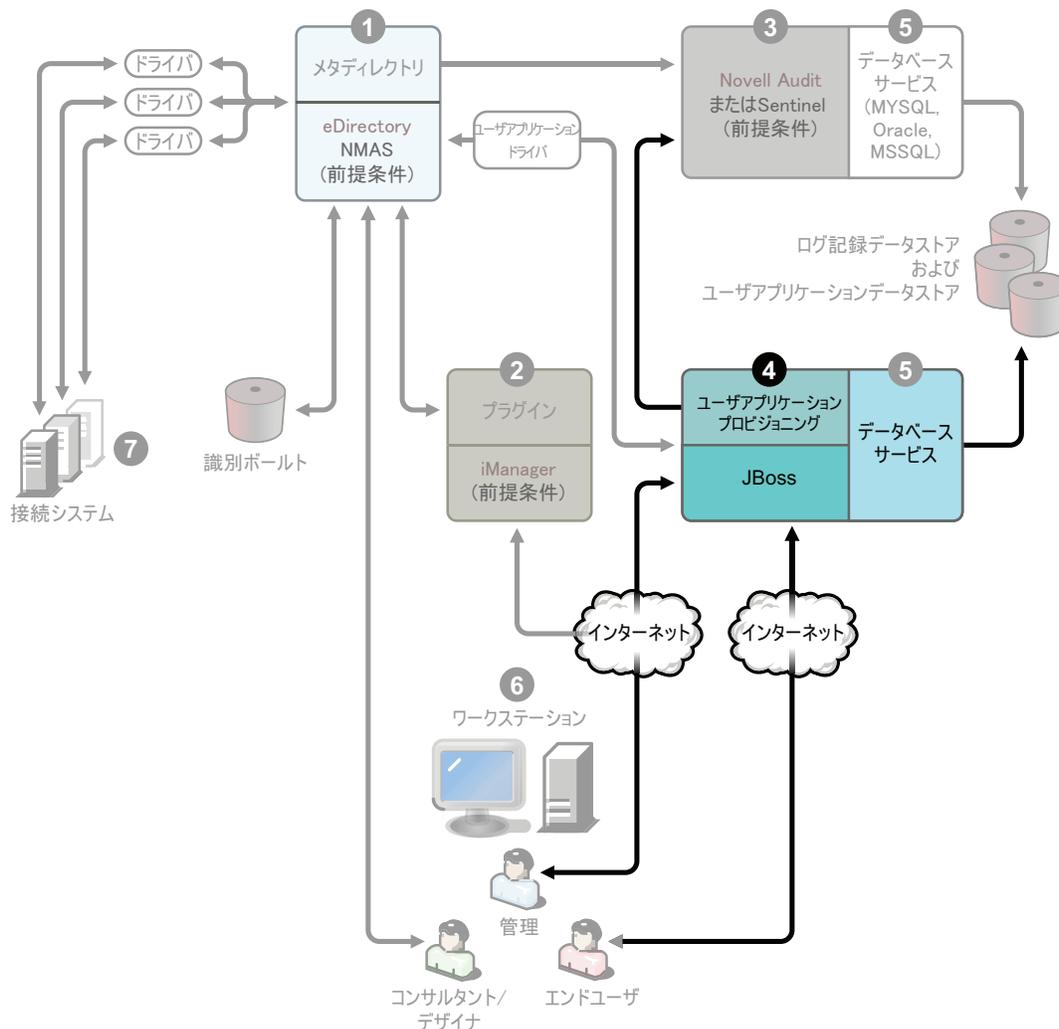


ログイベントのリポジトリです (Identity Manager ソフトウェアはこのサーバにはインストールされませんが、セキュアログサービスは必須です)。これは、Identity Manager と、エンドユーザアプリケーションおよびワークフローサービスにより使用される中央サービスで、Novell のダウンロード Web サイト (<http://download.novell.com>) から個別にダウンロードします。

ダウンロード Web サイトの [製品または技術] プルダウンメニューから、[Audit] を選択して [検索] をクリックします。[Audit 2.0.2 Starter Pack] をクリックします。Starter Pack に含まれているインストール手順に従います。

ユーザアプリケーションとプロビジョニングモジュール

図 1-5 ユーザアプリケーションとプロビジョニングモジュール

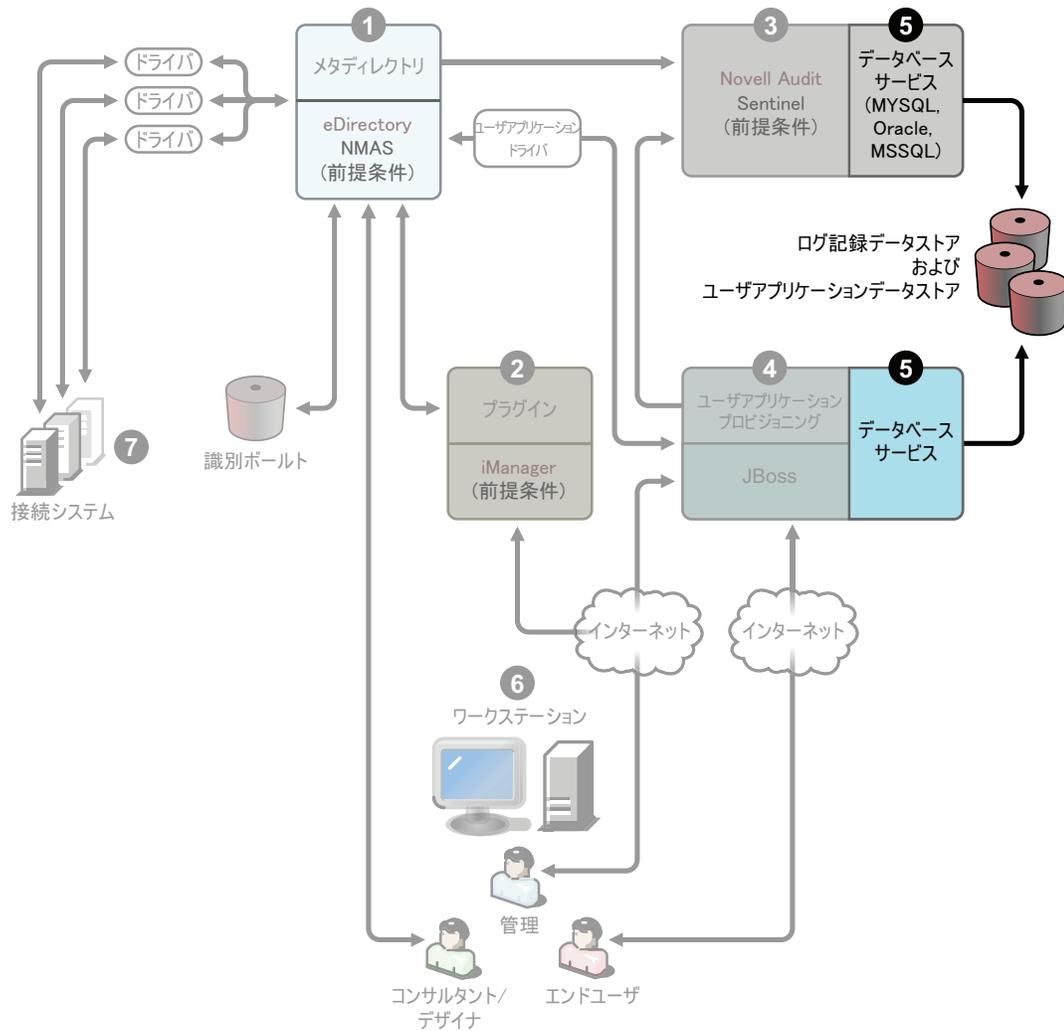


このサービスをインストールするには、97 ページの第 5 章「ユーザアプリケーションのインストール」を参照してください。各サービスでサポートされるハードウェアおよびソフトウェアの必要条件是、97 ページのセクション 5.1「インストールの必要条件」で説明します。

データベースサービス

セキュアログサービスとエンドユーザアプリケーション/ワークフローシステムには、どちらもデータベースが必要です。1つのデータベースを設定して両方のアプリケーションにサービスを提供するか、それぞれに独立したデータベースを設定することができます。

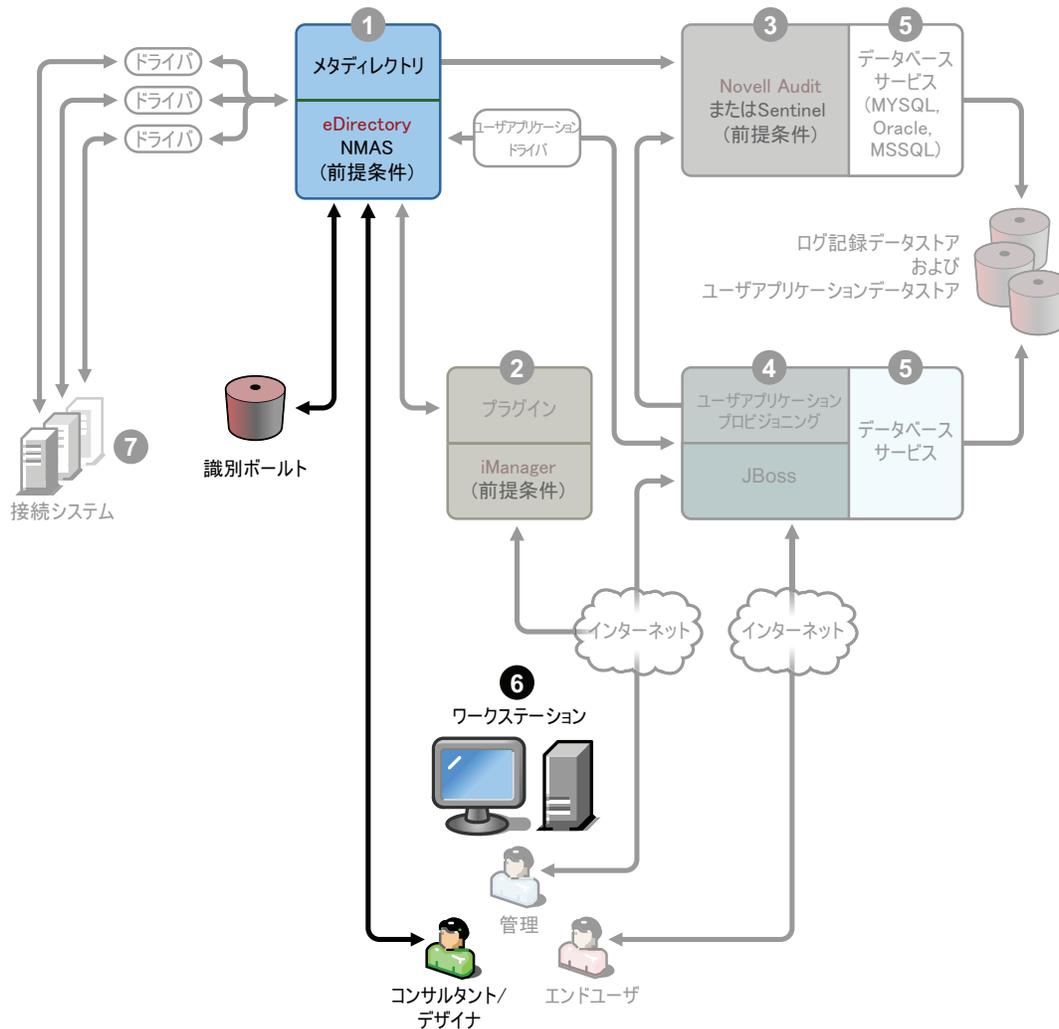
図 1-6 データベースサービス



セキュアログサービスには、特定のデータベースが含まれていません。ただし、ユーザアプリケーションおよびプロビジョニングに付属する MySQL データベースを使用できます。ユーザアプリケーションには JBoss アプリケーションサーババージョン 4.2.0 が付属しています。また、ユーザアプリケーションには JRE* 1.5.0_10 が必要です。このサービスをインストールするには、105 ページのセクション 5.2 「インストールと環境設定」を参照してください。

ワークステーション

図 1-7 Designer のワークステーションサービス



Designer で Identity Manager システムを設計、展開、およびドキュメント化するため、および製品に含まれているユーティリティ、レポート、およびツールを実行するために使用されます。Designer をワークステーションにインストールするには、『*Designer 2.1 for Identity Manager 3.5.1*』の「**Installing Designer**」を参照してください。

接続システム

これは、ドライバがホストされる場所です。これらの接続システムは、アプリケーション、データベース、サーバ、および他のサービスの可能性があります。接続されたアプリケーションの場合は、アプリケーション固有の知識と責任を持つユーザが必要です。ドライバの場合は、接続されたシステムが使用可能となっており、関連する API が提供されている必要があります。

表 1-3 Identity Manager のシステムコンポーネントと要件

システムコンポーネント	システム要件	メモ
メタディレクトリシステム	次のいずれかのオペレーティングシステムが必要です。	メタディレクトリシステムプラットフォームを使用している場合は、お使いの実装において VMWare* を使用できません。
<ul style="list-style-type: none"> ◆ メタディレクトリエンジン ◆ Novell Audit エージェント ◆ サービスドライバ ◆ Identity Manager ドライバ ◆ ユーティリティ (アプリケーションツール、および Novell Audit Setup ツールを含む) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 最新のサポートパックを適用した NetWare 6.5 ◆ 最新のサポートパックを適用した Novell Open Enterprise Server (OES) 1.0 ◆ Novell Open Enterprise Server (OES) 2.0 ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows 2000 Server (32 ビット) ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows Server 2003 (32 ビット) ◆ Linux Red Hat 3.0、4.0、5.0 ES および AS (32 ビットと 64 ビットの両方がサポートされています) ◆ 最新のサポートパックを適用した SUSE Linux Enterprise Server 9 および 10 (32 ビットと 64 ビットの両方がサポートされています) ◆ Solaris 9、または 10 ◆ AIX 5.2L、バージョン 5.2 および 5.3 	<p>このリリースの Identity Manager ソフトウェアコンポーネントはすべて、64 ビットプロセッサまたは 64 ビットオペレーティングシステムで動作していても、32 ビットです。別途示されている場合以外は、OES、NetWare、Windows、および Linux プラットフォーム (Red Hat および SUSE) では次のプロセッサのすべてが 32 ビットモードでサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Intel* X86-32 ◆ AMD x86-32 ◆ Intel EM64T ◆ AMD Athlon64* および Opteron* <p>Identity Manager は eDirectory 8.8 の次の機能をサポートしています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 同じサーバ上にある eDirectory の複数のインスタンス ◆ 暗号化属性 <p>eDirectory 8.8 は 64 ビット Red Hat Linux 4.0 をサポートしています。</p> <p>Windows Server 2003 では 64 ビットバージョンのパスワード同期を利用できます。</p> <p>eDirectory 8.8 をインストールする前に、必ず eDirectory データベースを完全にバックアップしてください。eDirectory 8.8 はデータベース構造の一部をアップグレードし、その後でロールバックはできません。</p> <p>Xen Virtual Machine (VM) で SLES 10 を並行仮想化モードでゲストオペレーティングシステムとして実行している場合、SUSE Linux Enterprise Server 10 において XEN の視覚化機能がサポートされるようになりました。SLES 10 用の Xen パッチが必要です (TID 番号 3915180 (http://www.novell.com/support/search.do?cmd=displayKC&docType=kc&externalId=3915180&sliceId=SAL_Public&dialogId=20406933&stateId=0%200%2020414606) を参照してください)。</p>
セキュリティサービス (NMAS 3.1.3)	次のいずれかのバージョンの eDirectory が必要です。	
	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 最新のサポートパックを適用した eDirectory 8.7.3.6 ◆ 最新のサポートパックを適用した eDirectory 8.8 	

システムコンポーネント	システム要件	メモ
Web ベースの管理サーバ	次のいずれかのオペレーティングシステムが必要です。	このリリースの Identity Manager ソフトウェアコンポーネントはすべて、64 ビットプロセッサまたは 64 ビットオペレーティングシステムで動作していても、32 ビットです。別途示されている場合以外は、OES、NetWare、Windows、および Linux プラットフォーム (Red Hat および SUSE) では次のプロセッサのすべてが 32 ビットモードでサポートされます。
<ul style="list-style-type: none"> ◆ パスワード同期 ◆ iManager 2.6 およびプラグイン ◆ iManager 2.7 およびプラグイン ◆ ドライバ環境設定 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 最新のサポートパックを適用した、NetWare 上の Novell Open Enterprise Server (OES) 1.0 ◆ Novell Open Enterprise Server (OES) 2.0 ◆ 最新のサポートパックを適用した NetWare 6.5 ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows 2000 Server (32 ビット) ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows Server 2003 (32 ビット) ◆ Microsoft Windows Vista ◆ Linux Red Hat Linux 3.0、4.0、5.0 ES および AS (32 ビットと 64 ビットの両方がサポートされています) ◆ 最新のサポートパックを適用した Solaris 9 または 10 ◆ 最新のサポートパックを適用した SUSE Linux Enterprise Server 9 および 10 (32 ビットと 64 ビットの両方がサポートされています) <p>iManager Workstation を使用してサポートされるオペレーティングシステムは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows 2000 Professional ◆ Windows XP SP2 ◆ SUSE Linux Enterprise Desktop 10 ◆ SUSE Linux 10.1 <p>次のソフトウェアが必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 最新のサポートパックとプラグインを適用した Novell iManager 2.6 および 2.7 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ Intel x86 ◆ AMD x86 ◆ Intel EM64T ◆ AMD Athlon64 および Opteron ◆ サポートされるブラウザは、iManager 2.6 により決まります。このリストには現在、次のブラウザが含まれています。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ Internet Explorer 6 SP1 以降 ◆ Internet Explorer 7 ◆ Firefox* 2.0 以降 ◆ iManager 設定ウィザードまたは Designer ユーティリティを実行して、ポータルコンテンツを eDirectory にインストールまたは展開する必要があります。 ◆ (Windows の場合) Novell Client™ 4.9 は、ノベル用ダウンロードの Web サイト (http://download.novell.com/index.jsp) から入手できます。 ◆ iManager によって他のツリーにログインしてリモート Identity Manager サーバを管理すると、リモートサーバの IP アドレスの代わりにサーバ名を使用している場合はエラーが発生することがあります。 ◆ パスワード同期エージェントは 64 ビット版の Windows 2003 上でのみサポートされます。

システムコンポーネント	システム要件	メモ
セキュアログサービス	<p>セキュアログサーバでは、次のオペレーティングシステムのいずれかがサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Novell Open Enterprise Server (OES) 1.0 および 2.0 の最新のサポートパック ◆ 最新のサポートパックを適用した NetWare 6.5 ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows 2000 Server (32 ビット) ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows 2003 Server (32 ビット) ◆ Red Hat Linux 3.0、4.0、5.0 AS および ES (32 ビットと 64 ビット。ただし Novell Audit は 32 ビットモードでのみ動作します) ◆ 最新のサポートパックを適用した Solaris 9 または 10 ◆ SUSE Linux Enterprise Server 9 または 10 (32 ビットおよび 64 ビット。ただし、Novell Audit は 32 ビットモードでのみ動作します) ◆ 最新のサポートパックを適用した Novell eDirectory 8.7.3.6 または 8.8 (セキュアログサーバにインストールする必要があります) <p>プラットフォームエージェントでは、次のオペレーティングシステムのいずれかがサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Novell Open Enterprise Server (OES) 1.0 SP1 または最新のサポートパック ◆ 最新のサポートパックを適用した NetWare 6.5 ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows 2000 または 2000 Server、XP、あるいは Windows Server 2003 (32 ビット) ◆ Red Hat Linux 3 または 4 AS および ES (32 ビットおよび 64 ビット。ただし、Novell Audit は 32 ビットモードでのみ動作します) ◆ Solaris 8、9、または 10 ◆ SUSE Linux Enterprise Server 9 または 10 (32 ビットおよび 64 ビット。ただし、Novell Audit は 32 ビットモードでのみ動作します) <p>最新のサポートパックとプラグインを適用した iManager 2.6 および 2.7</p>	<p>OES、NetWare、Windows、および Linux プラットフォーム (Red Hat および SUSE) では次のプロセッサのすべてが 32 ビットモードでサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Intel x86 ◆ AMD x86 ◆ Intel EM64T ◆ AMD Athlon64 および Opteron <p>セキュアサーバの最小要件は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Pentium* II 400 MHz を搭載した単一プロセッサのサーバクラス PC ◆ 最低 40MB のディスク容量 ◆ 512 MB RAM <p>eDirectory イベントのログ記録を可能にする eDirectory Instrumentation では、次のバージョンの eDirectory がサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ eDirectory 8.7.3 (NetWare、Windows、Linux、および Solaris) ◆ 最新のサポートパックを適用した eDirectory 8.8 <p>NetWare イベントのログ記録を可能にする NetWare Instrumentation では、次のバージョンの NetWare がサポートされません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 最新のサポートパックを適用した NetWare 5.1 ◆ 最新のサポートパックを適用した NetWare 6.0 ◆ 最新のサポートパックを適用した NetWare 6.5 または NetWare 6.5 ◆ 最新のサポートパックを適用した Novell Open Enterprise Server (OES)

システムコンポーネント	システム要件	メモ
ユーザアプリケーション	<p>アプリケーションサーバユーザアプリケーションは、次に説明するように、JBoss および WebSphere 上で動作します。</p> <p>JBoss 4.2.0 は次のサーバでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Novell Open Enterprise Server (OES) 1.0 SP2 または最新のサポートパック -- Linux のみ ◆ Novell Open Enterprise Server (OES) 2 -- SLES 10 SP1 および NetWare 6.5 SP7 ◆ SUSE Linux Enterprise Server 9 SP2 (OES 1.0 SP2 に付属) および 10.1.x (64 ビット JVM) ◆ Windows 2000 Server SP4 (32 ビット) ◆ Windows 2003 Server SP1 (32 ビット) ◆ Solaris 10 サポートパック (日付が 6/06 のもの) <p>WebSphere 6.1 は次のプラットフォームでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Solaris 10 (64 ビットモード) ◆ Windows 2003 SP1 <p>WebLogic 10 は次のプラットフォームでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Solaris 10 (64 ビットモード) ◆ Windows Server 2003 SP1 <p>ユーザアプリケーションには JRE* 1.5.0_10 が必要です (97 ページのセクション 5.1 「インストールの必要条件」を参照してください)</p> <p>ブラウザ. 次に説明するように、ユーザアプリケーションは Firefox と Internet Explorer の両方をサポートしています。</p> <p>Firefox 2 は次のプラットフォームでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Windows 2000 Professional SP4 ◆ Windows XP SP2 ◆ Red Hat Enterprise Linux WS 4.0 ◆ Novell Linux Desktop 9 ◆ SUSE Linux 10.1 ◆ SUSE Linux Enterprise Desktop 10 <p>Internet Explorer 7 は次のプラットフォームでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Windows 2000 Professional SP4 ◆ Windows XP SP2 ◆ Windows Vista Enterprise バージョン 6 <p>Internet Explorer 6 は次のプラットフォームでサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Windows 2000 Professional SP4 ◆ Windows XP SP2 	<p>SUSE Linux Enterprise Server では、次のプロセッサが 32 ビットモードでサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Intel x86 ◆ AMD x86 ◆ Intel EM64T ◆ AMD Athlon64 および Opteron <p>SUSE Linux Enterprise Server は次のプロセッサでは 64 ビットモードで動作します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Intel EM64T ◆ AMD Athlon64 ◆ AMD Opteron ◆ Sun* SPARC* <p>Xen Virtual Machine (VM) で SLES 10 を並行仮想化モードでゲストオペレーティングシステムとして実行している場合、SUSE Linux Enterprise Server 10 において Xen* の視覚化機能がサポートされるようになりました。SLES 10 用の Xen パッチが必要です (TID 番号 3915180 (http://www.novell.com/support/search.do?cmd=displayKC&docType=kc&externalId=3915180&sliceId=SAL_Public&dialogId=20406933&statId=0%200%2020414606) を参照)。</p>

システムコンポーネント	システム要件	メモ
ユーザアプリケーション用のデータベースサーバ <ul style="list-style-type: none"> ◆ MySQL ◆ Oracle ◆ MS SQL ◆ DB2 	JBoss では次のデータベースがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ MySQL バージョン 5.0.27 ◆ Oracle 9i (9.2.0.1.0 および 9.2.0.5.0) ◆ Oracle 10g リリース 2 (10.2.0) ◆ MS SQL 2005 SP1 WebSphere では次のデータベースがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ Oracle 10g リリース 2 (10.2.0) ◆ MS SQL 2005 SP1 ◆ DB2 DV2 v9.1.0.0 	ユーザアプリケーションでは、環境設定データの保存や、処理中のワークフローアクティビティのデータの保存など、さまざまなタスクにデータベースを使用します。 セキュアログサービスと、ユーザアプリケーションおよびワークフローのプロビジョニングには、どちらもデータベースが必要です。1つのデータベースを設定して両方のアプリケーションにサービスを提供するか、それぞれに独立したデータベースを設定することができます。セキュアログサービスには、特定のデータベースが含まれていません。 Oracle はシンククライアントドライバおよび OCI クライアントドライバの両方でサポートされています。
ワークステーション <ul style="list-style-type: none"> ◆ Designer ◆ iManager による Web アクセス 	Designer は、次のプラットフォームでテストされています。 Windows: <ul style="list-style-type: none"> ◆ 最新のサービスパックを使用した Windows 2000 Professional ◆ Windows XP SP2 ◆ 最新のサービスパックを使用した Windows Server 2003 (32 ビット) ◆ Microsoft Windows Vista Linux: <ul style="list-style-type: none"> ◆ SUSE Linux Enterprise Server 10 (Designer の場合のみ) ◆ SUSE Linux 10.1 ◆ SUSE Linux Enterprise Desktop 10 ◆ Red Hat Linux 4.0 (Designer の場合のみ) ◆ Red Hat Fedora* Core 5 (Designer の場合のみ) ◆ Novell Linux Desktop 9 ◆ GNOME*、KDE、Red Hat Fedora 	Designer は、 Eclipse を開発プラットフォームとして使用します。プラットフォーム固有の情報については、 Eclipse の Web サイト (http://www.eclipse.org/) を参照してください。 Designer のハードウェアの最小および推奨要件は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ プロセッサ: 最小で 1 GHz。2 GHz 以上を推奨。 ◆ RAM: 最小で 512 MB。1 GB 以上を推奨。 ◆ 解像度: 最小で 1024 x 768。1280 x 1024 を推奨。 ソフトウェアの前提条件は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ◆ Microsoft Internet Explorer 6.0 SP1 ◆ Microsoft Internet Explorer 7 ◆ または Mozilla* Firefox 2.0

システムコンポーネント	システム要件	メモ
接続されたシステムサーバ (リモートローダが実行されるサーバとは別のサーバでホストされます) <ul style="list-style-type: none"> ◆ リモートローダ ◆ リモートローダ設定ツール (Windows のみ) ◆ Novell Audit エージェント ◆ パスワード同期エージェント ◆ 接続されたシステムのドライバシム ◆ 接続されたシステムのツール 	ドライバでは、接続されたシステムが使用可能であること、関連する API が提供されていることが必要です。 各システムに固有のオペレーティングシステムおよび接続システムの要件については、 Identity Manager ドライバのマニュアル (http://www.novell.com/documentation/idmdrivers) を参照してください。	接続されたアプリケーションの場合は、アプリケーション固有の知識と責任を持つユーザが必要です。 リモートローダシステム： <ul style="list-style-type: none"> ◆ 最新のサポートパックを適用した Windows NT* 4.0、Windows 2000 Server、または Windows Server 2003 ◆ 最新のサービスパックを適用した Windows Server 2003 (64 ビット) ◆ パスワード同期エージェントは Windows Server 2003 (64 ビット) でサポートされています ◆ Red Hat Linux 3.0、4.0、5.0 ES および AS ◆ SUSE Linux Enterprise Server 9、または 10 ◆ Solaris 9、または 10 ◆ AIX 5.2L、バージョン 5.2 および 5.3 Java リモートローダシステム： <ul style="list-style-type: none"> ◆ HP-UX* 11i ◆ OS/400 ◆ zOS* ◆ JVM 1.4.2以降がインストールされているシステムで使用できる必要があります

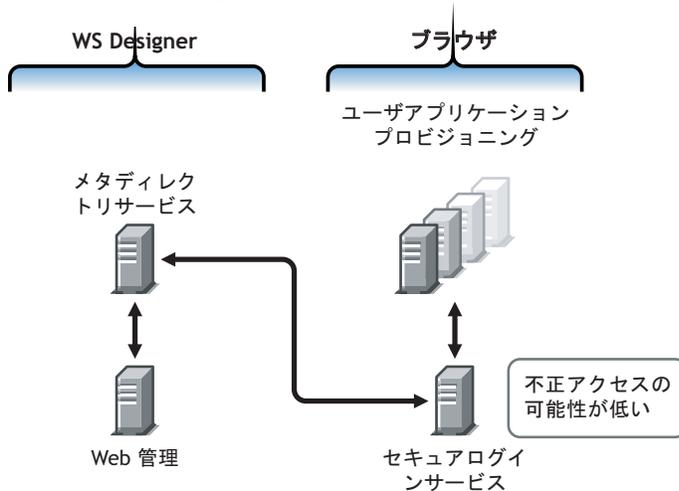
1.6 推奨される展開方法

前述のように、Identity Manager には、インストールおよび設定が必要な多くのサービスが付属しています。運用環境では推奨されませんが、1つのサーバに必要なサービスをすべてインストールして設定できます。または、各サーバに1つのサービスを展開したり、任意の数のサービスをインストールしたりすることができます。

作業負荷は、Identity Manager の展開を設計する上で、主な要素になります。分散可能なトラフィックが増えるほど、アプリケーションの潜在的なスループット能力も向上します。

図 1-3 は、メタディレクトリサービスに1つのサーバ、Web ベースの管理サービスに1つのサーバ、セキュアログサービスに1つのサーバ、およびユーザアプリケーションとプロビジョニングサービスに1つのサーバという展開を示しています。

図 1-9 Identity Manager の展開方法



メタディレクトリサービス

Identity Manager サービスの展開方法に応じて、サービスの作業負荷が変わります。たとえば、Identity Manager のメタディレクトリサービスは、接続システムと通信する 1 つのサーバにインストールできます。必要なのは、eDirectory が実行される 1 つのサーバにメタディレクトリエンジンをインストールすることだけです。

iManager を使用するとスループットが大きくなる可能性があるため、メタディレクトリサービスとともに Web ベースの管理サービスをインストールすることは推奨されません。iManager を Identity Manager と同じサーバにインストールする場合は、iManager をインストールした後で、Identity Manager とそのプラグインをインストールします。

Web ベースの管理サービス

iManager 2.6 がサーバにインストールされている場合は、Identity Manager のインストールを実行して、iManager の Identity Manager プラグインをインストールするだけです。ユーザーアプリケーションおよびプロビジョニングサービスをインストールする場合は、ユーザーアプリケーションのインストールも実行して、iManager のユーザーアプリケーションプラグインだけをインストールする必要があります。これは、ユーザーアプリケーションをインストールする場合も、User Application with Provisioning Module をインストールする場合も (これらは 2 つの別個の製品です) 行う必要があります。

ユーザーアプリケーションおよびセキュアログサービス

大量のプロビジョニングを実行する場合は、ユーザーアプリケーションを専用のサーバにインストールすることをお勧めします。さらに、必要に応じてクラスタリングを設定することもできます。ユーザーアプリケーションには MySQL 5.0.27-max が付属しており、ユーザーアプリケーションまたは User Application with Provisioning Module のインストールの一部として展開した場合は、別のデータベースサービスを設定する必要はありません。

ただし、セキュアログサービスには特定のデータベースが含まれていないため、セキュアログサービス/プロビジョニングサービスには、どちらもデータベースが必要です。1 つのデータベースを設定して両方のアプリケーションにサービスを提供するか、それぞれのサービスに独立したデータベースを設定することができます。これは、プロビジョニングの実行量と、ログサービスの作業負荷によって決まります。

注：Oracle 9i または 10g を別個（リモート）のサーバで設定する場合は、Oracle をインストールし、データベースにリモート接続できるよう、アプリケーションサーバを設定する必要があります。

リモートローダ設定の使用

eDirectory サービスとメタディレクトリエンジンを接続されたシステムサーバにインストールしない場合は、Identity Manager のインストール中に [接続されたシステム] オプションを使用できます。さらに、リモートローダは、SSL 技術を使用してメタディレクトリエンジンとドライバの間に安全な通信パスを確立します。システムを Identity Manager に接続する場合は、この点に注意してください。

Identity Manager の計画の詳細については、[39 ページの第 2 章「計画」](#) を参照してください。

1.7 Identity Manager とそのサービスの入手先

- ◆ [38 ページのセクション 1.7.1 「Identity Manager 3.5.1 のインストール」](#)
- ◆ [38 ページのセクション 1.7.2 「Identity Manager 3.5.1 製品のアクティベート」](#)

Identity Manager とそのサービスをダウンロードする

- 1 [Novell のダウンロード Web サイト \(http://download.novell.com\)](http://download.novell.com) にアクセスします。
- 2 [製品または技術] メニューで、*[Novell Identity Manager]* を選択し、[検索] をクリックします。
- 3 Novell Identity Manager のダウンロードページで、目的のファイルの横にある [ダウンロード] ボタンをクリックします。
- 4 画面の指示に従って、ファイルをコンピュータ上のディレクトリにダウンロードします。
- 5 必要なすべてのファイルをダウンロードするまで、手順 2 以降を繰り返します。ほとんどのインストールには、複数の ISO イメージが必要です。

次の表に、ダウンロード可能な Identity Manager コンポーネントを示します。

表 1-4 ISO イメージの対応表

Identity Manager のコンポーネント	プラットフォーム	ISO
<p><i>Identity Manager DVD</i></p> <p>次の Identity Manager コンポーネントは、1つの ISO イメージとして DVD に書き込んで使用できます。次のコンポーネントは個別にダウンロードすることもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Identity Manager および ドライバ ◆ Identity Manager の Designer 	<p>Identity Manager:</p> <p>Linux、NetWare、Windows、および UNIX*</p> <p>Designer:</p> <p>Linux および Windows</p>	<p>Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso</p>
<p><i>Identity Manager および ドライバ</i></p>	<p>NetWare、および Windows</p>	<p>Identity_Manager_3_5_1_NW_Win.iso</p>
<p><i>Identity Manager および ドライバ</i></p>	<p>Linux</p>	<p>Identity_Manager_3_5_1_Linux.iso</p>
<p><i>Identity Manager および ドライバ</i></p>	<p>UNIX</p>	<p>Identity_Manager_3_5_1_Unix.iso</p>
<p>ユーザアプリケーション</p> <p>これは、購入した Identity Manager 3 に含まれているユーザアプリケーションの標準バージョンです。</p>	<p>Linux および Windows</p>	<p>Identity_Manager_3_5_1_User_Application.iso</p>
<p><i>Identity Manager のプロビジョニングモジュールとユーザアプリケーション</i></p> <p>これは、ユーザアプリケーションのプロビジョニングバージョンで、Identity Manager のアドオンとして別途購入する必要があります。</p>	<p>Linux および Windows</p>	<p>Identity_Manager_3_5_1_User_Application_Provisioning.iso</p>
<p><i>Identity Manager の Designer</i></p>	<p>Windows</p>	<p>Identity_Manager_3_5_1_Designer_Win.iso</p>
<p><i>Identity Manager の Designer</i></p>	<p>Linux</p>	<p>Identity_Manager_3_5_1_Designer_Linux.iso</p>

購入した Identity Manager には、すでにライセンスをお持ちの可能性がある複数の一般的な顧客システム (Novell eDirectory、Microsoft Active Directory、Microsoft Windows NT、LDAP v3 Directories、Novell GroupWise[®]、Microsoft Exchange、および Lotus Notes) 用の統合モジュールも含まれています。他のすべての Identity Manager 統合モジュールは別途購入する必要があります。

ユーザアプリケーションコンポーネントは2つの ISO イメージで付属します。ユーザアプリケーション ISO イメージは標準バージョンで、購入した Identity Manager 3 に付属しています。Identity Manager の User Application with Provisioning Module は、強力な承認

ワークフローを統合するアドオン製品です。このプロビジョニングモジュールは個別の ISO イメージとして販売される別売の機能です。

さらに、購入した Identity Manager には、Identity Manager の Designer も含まれています。Designer は、環境設定と展開を大幅に簡素化する、強力で柔軟性の高い管理ツールです。

1.7.1 Identity Manager 3.5.1 のインストール

- ◆ Identity Manager 3.5.1 を Windows、NetWare、UNIX、および Linux にインストールするには、[65 ページの第 4 章「Identity Manager のインストール」](#)を参照してください。
- ◆ ユーザアプリケーションをインストールしたり、User Application with Provisioning Module をインストールしたりするには、[97 ページの第 5 章「ユーザアプリケーションのインストール」](#)を参照してください。
- ◆ Designer をインストールするには、『*Designer 2.1 for Identity Manager 3.5.1*』ガイドの「[Installing Designer](#)」を参照してください。

注：Linux および UNIX (以前の NIS)、メインフレーム、ミッドレンジのドライバインストールプログラムは、/platform/setup ディレクトリにあります。これらのインストールは、Identity Manager およびユーザアプリケーションのインストールプログラムとは別にインストールする必要があります。

既知の問題のリストについては、Identity Manager に付属する Readme ファイルを参照してください。

1.7.2 Identity Manager 3.5.1 製品のアクティベート

Identity Manager 製品にはアクティベーションが必要です (Designer を除く)。以下の製品は 90 日間の評価期間の後、使用を中止するか、購入してアクティベーションを行う必要があります。

- ◆ Identity Manager 3.5.1
- ◆ Identity Manager のプロビジョニングモジュールとユーザアプリケーション
- ◆ 統合モジュール

重要：ユーザアプリケーションを正しくアクティベートするためには、適切な ISO イメージをダウンロードする必要があります。たとえば、Identity Manager を購入しても、プロビジョニングモジュールを別途購入しないでユーザアプリケーションのプロビジョニングモジュールをダウンロードした場合、ユーザアプリケーションの実装は 90 日後に動作を停止します。

アクティベーションの詳細については、[185 ページの第 6 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする」](#)を参照してください。

- ◆ 39 ページのセクション 2.1 「Identity Manager の実装におけるプロジェクト管理面の計画」
- ◆ 46 ページのセクション 2.2 「一般的なインストールシナリオの計画」
- ◆ 54 ページのセクション 2.3 「Identity Manager の実装に関する技術面の計画」

2.1 Identity Manager の実装におけるプロジェクト管理面の計画

この節では、Identity Manager を実装するときの高レベルな戦略的側面およびプロジェクト管理面についての概要を説明します。(技術的側面については、54 ページのセクション 2.3 「Identity Manager の実装に関する技術面の計画」を参照してください)。

この計画用資料では、Identity Manager プロジェクトの始まりから、運用環境に完全に展開されるまでに通常、行うと想定されるアクティビティの概要が示されます。識別情報管理を導入する上では、環境内の要件と対象となるユーザを見極め、ソリューションを設計し、当事者の賛同を得た上で、十分にテストを行い、このソリューションを展開することが不可欠です。この節の目的は、そのプロセスを十分に理解するための指針を示すことで、Identity Manager を最大限に活用できるようにすることです。

ソリューション展開時には、Identity Manager のエキスパートの参加を要請するよう強くお勧めします。提携オプションの詳細については、Novell® ソリューションパートナーの Web サイト (<http://www.novell.com/partners/>) を参照してください。Novell トレーニングでは、Identity Manager の実装を扱う各種コースもご提供しています。

また、ソリューションのテスト、分析、および開発を行うことが可能なテスト/開発用環境をセットアップすることを強くお勧めします。作業が滞りなく進むようになったら、最終製品を運用環境に展開します。

この節は内容を完全に網羅しているわけではなく、可能性のあるすべての環境設定を扱うことや、そのまま実行に移すことを目的とはしていません。各環境は異なっており、使用するアクティビティの種類によって柔軟性を必要としています。

2.1.1 Novell Identity Manager の展開

Identity Manager を展開するときのベストプラクティスとして、次のアクティビティが挙げられます。

- ◆ 40 ページの 「調査」
- ◆ 40 ページの 「要件と設計分析」
- ◆ 43 ページの 「概念の吟味」
- ◆ 44 ページの 「データの検証と準備」
- ◆ 44 ページの 「運用準備」
- ◆ 45 ページの 「運用開始計画」
- ◆ 45 ページの 「運用展開」

調査

Identity Manager の実装は、調査プロセスから始めるのが妥当です。調査プロセスでは次のタスクを行います。

- ◆ 識別情報を管理する主な目的の特定
- ◆ 対処するビジネス上の問題の定義または明確化
- ◆ 未解決の問題に対処するのに必要なイニシアチブの決定
- ◆ それらのイニシアチブの1つまたは複数を実行するために必要なものの判別
- ◆ 高レベルな計画または「ソリューションロードマップ」と、一致した実行経路の開発

調査を行うことにより、すべての関係者間で問題とソリューションについて共通の見解が得られます。ディレクトリ、Novell eDirectory™、Novell Identity Manager、XML 統合に関する基礎知識を、分析段階で関係者に周知することが求められます。調査プロセスは、そうした情報の理解に大変役立ちます。

- ◆ すべての当事者間で、基礎レベルの理解を確立できます。
- ◆ 当事者から重要なビジネスおよびシステム情報を得ることができます。
- ◆ ソリューションロードマップが開発可能になります。

調査により、そのすぐ後の手順を識別することもできます。たとえば、次の手順などがあります。

- ◆ 要件および設計フェーズに備えた計画アクティビティの特定
- ◆ 一般ユーザ向けの追加教育の定義

主な成果物

- ◆ 主要なビジネスユーザおよびテクニカルユーザとの構成的インタビュー
- ◆ ビジネスおよび技術的問題の高レベルな概要レポート
- ◆ 次の手順の推奨事項
- ◆ 調査結果の概要を示す幹部対象プレゼンテーション

要件と設計分析

この分析フェーズでは、プロジェクトの技術およびビジネスの両方の側面について詳細に調べ、データモデルと高レベルな Identity Manager アーキテクチャ設計を生成します。このアクティビティは、ソリューションを実装する上で非常に重要な、起点となる手順です。

設計の焦点は特に識別情報管理にあります。ファイルおよび印刷など、従来リソース管理ディレクトリと関連付けられていた要素の多くも扱うことができます。次に示す各項目の例も参照してください。

- ◆ 使用されているシステムソフトウェアのバージョンは何か。
- ◆ ディレクトリ設計は適切か。
- ◆ ディレクトリは識別ボルトおよび Identity Manager のホストに使用されているか、または他のサービスの拡張に使用されているか。
- ◆ 全システムのデータの品質は適切か。(データが使用可能な品質でないと、ビジネスポリシーが正しく実装されない場合があります)。

- ◆ 環境ではデータ操作が必要か。

要件分析の後、実装の範囲およびプロジェクト計画を確立して、あらかじめ必要なアクティビティを行う必要があるかどうかを決定できます。大幅な手戻りを未然に防ぐため、情報の収集と要件の文書化はできる限り徹底的に行ってください。

要件を検討することで、同時に次のタスクを完了できる場合があります。

- ◆ 41 ページの「ビジネス要件の定義」
- ◆ 42 ページの「ビジネスプロセスの分析」
- ◆ 42 ページの「エンタープライズデータモデルの設計」

ビジネス要件の定義

組織のビジネスプロセスと、これらのビジネスプロセスを定義するビジネス要件を収集します。

たとえば、従業員が退職するときのビジネス要件は、従業員のネットワークおよび電子メールアカウントのアクセス権を、その従業員が退職するのと同じ日に削除することです。

次のタスクは、ビジネス要件の定義を理解する上で役立ちます。

- ◆ プロセスフロー、プロセストリガ、およびデータマッピング関係を確立します。
たとえば、特定のプロセスで何かが発生する場合、そのプロセスが原因で発生するのは何か。また、それによってトリガされる他のプロセスは何か。
- ◆ アプリケーション間のデータフローをマップします。
- ◆ 2/25/2007 から 25 Feb 2007 への変換など、ある形式から別の形式への変換に必要なデータ変換を特定します。
- ◆ 存在するデータの従属関係を文書化します。
特定の値が変更された場合、その値に従属関係があるかどうかを調べるのは重要なことです。特定のプロセスが変更された場合、そのプロセスに従属関係があるかどうか知っておくことも重要です。
たとえば、人事システムで「一時的な」従業員ステータス値を選択することは、制限された権限と特定の勤務時間のネットワークへのアクセス権を持つユーザオブジェクトを、IT 部署が eDirectory で作成する必要があることを意味しています。
- ◆ 優先度を一覧表示します。
関係者全員のすべての要求、要望を即座に満たせるわけではありません。プロビジョニングシステムの設計と展開の優先度を考慮することは、ロードマップを計画するのに役立ちます。
展開のある部分を先に実装して、展開の他の部分を後で実装することができるように、展開を複数のフェーズに分けることが役立つ場合があります。段階的な展開方法も同様に行うことができます。組織内のグループ別に行ってください。
- ◆ 前提条件を定義します。
展開の特定のフェーズを実行するのに必要な前提条件は、文書化する必要があります。これには、Identity Manager とのインタフェースになる接続システムへのアクセス権も含まれます。
- ◆ 信頼されるデータソースを特定します。

システム管理者やマネージャが自分の担当範囲と考えている項目を早期に知ることが、関係者全員の同意を得て、円滑に作業を進めることにつながります。

たとえば、アカウント管理者には、特定のファイルおよびディレクトリに対する権限を従業員に付与するため、所有権が必要な場合があります。これは、アカウントシステムでローカルトラस्टィの割り当てを実装することにより行うことができます。

ビジネスプロセスの分析

ビジネスプロセスの分析は、多くの場合アプリケーションやシステムを実際に使用するマネージャ、管理者、および従業員など、中心となる個人へのインタビューから始まります。想定される問題としては、次のようなものが上げられます。

- ◆ データの送信元はどこか。
- ◆ データの送信先はどこか。
- ◆ データの責任者は誰か。
- ◆ データが属すビジネス機能の所有権を持っているのは誰か。
- ◆ データの変更時に連絡しなければならないのは誰か。
- ◆ データの変更がもたらす影響は何か。
- ◆ データ処理 (収集や編集) にはどのような作業方法が存在するか)。
- ◆ どのような種類の操作が実行されるか。
- ◆ データの品質と整合性を保証するために取られている方法は何か。
- ◆ システムはどこにあるか (どの部署のどのサーバか) 。
- ◆ 自動処理に適していないプロセスは何か。

たとえば、人事部の PeopleSoft システムの管理者への質問として想定する場合、次のようなものが考えられます。

- ◆ PeopleSoft データベースに保存されているデータは何か。
- ◆ 従業員アカウントの各種パネルに表示される内容は何か。
- ◆ プロビジョニングシステム全体に反映するのに必要なアクションは何か (追加、変更、または削除など) 。
- ◆ これらのうち、どれが必須で、どれがオプションか。
- ◆ PeopleSoft で実行されたアクションに基づいてトリガするのに必要なアクションは何か。
- ◆ 無視すべき操作、イベント、アクションは何か。
- ◆ データはどのように変換されて Identity Manager にマップされるか。

主要な人へのインタビューにより、プロセス全体をよりはっきりと把握できる、組織の他の領域を導き出すこともあります。

エンタープライズデータモデルの設計

ビジネスプロセスの定義が完了した後は、現在のビジネスプロセスを反映するデータモデルの設計に着手できます。

モデルには、データの送信元、送信先、および送信不可能な場所を示す必要があります。重要なイベントがデータフローにどのような影響を与えるかも示す必要があります。

ビジネスプロセスの案と、そのプロセスで自動化されたプロビジョニングを実装する利点を示す図を開発することもできます。

モデルの開発は、次のような質問に回答することから始めます。

- ◆ 移動されるオブジェクトの種類 (ユーザ、グループなど) は何か。
- ◆ どのイベントが重要か。
- ◆ 同期が必要な属性はどれか。
- ◆ 管理対象のさまざまな種類のオブジェクトに対し、ビジネス全体で保存されるデータは何か。
- ◆ 同期は一方向か双方向か。
- ◆ 各属性に対して、信頼されるソースであるシステムはどれか。

システム間のさまざまな値の相互関係について考慮することも重要です。

たとえば、PeopleSoft の従業員ステータスフィールドには、従業員、契約社員、およびインターンの 3 つの設定値があるとします。一方、Active Directory システムには、常駐および臨時の 2 つの値しかないとします。この場合では、PeopleSoft の「契約業者」ステータスと、Active Directory の「常駐」および「臨時」の値の間関係を決定する必要があります。

この作業の焦点は、各ディレクトリシステム、相互の関係、システム全体で同期する必要のあるオブジェクトおよび属性について理解することです。

主な成果物

- ◆ すべてのシステム、信頼されるデータソース、イベント、情報フローおよびデータ形式の標準を示し、接続システム間の関係と Identity Manager 内の属性をマップするデータモデル。
- ◆ ソリューションの適切な Identity Manager アーキテクチャ
- ◆ 追加のシステム接続要件の詳細
- ◆ データ検証およびレコード照合の方針
- ◆ Identity Manager インフラストラクチャをサポートするディレクトリ設計

従属関係

- ◆ すべての外部システムに精通している従業員 (HR データベースの管理者、ネットワークおよびメッセージングシステムの管理者など)
- ◆ システムスキーマおよびサンプルデータの可用性
- ◆ 分析および設計フェーズからのデータモデル
- ◆ 組織図、WAN およびサーバのインフラストラクチャなど、基本情報の可用性

概念の吟味

このアクティビティの結果は、会社のビジネスポリシーおよびデータフローを反映するサンプル実装を、テスト環境で行うことです。これは、要件分析および設計時に開発されたデータモデルの設計を基にし、運用準備段階の最終手順になります。

注: この手順を行うことで、管理サポートを得ることができ、最終的な実装作業を行う能力を培うことができます。

主な成果物

- ◆ すべてのシステム接続が機能している状態で、動作している Identity Manager の概念の吟味

従属関係

- ◆ ハードウェアプラットフォームおよび機器
- ◆ 必要なソフトウェア
- ◆ 必要な接続を特定する分析および設計フェーズ
- ◆ テスト目的での可用性と、他のシステムへアクセス状況
- ◆ 分析および設計フェーズからのデータモデル

データの検証と準備

運用システム内のデータでは、品質と整合性が保たれない場合があるため、システムの同期時に不整合が発生する可能性があります。この段階では、リソース実装チームと、統合されるシステム内のデータを「所有」または管理するビジネス単位またはグループの分離の明白な点が示されます。場合によっては、関連付けられたリスクとコストの要素が、1つのプロビジョニングプロジェクトには収まらない場合もあります。

主な成果物

- ◆ 識別ポータルへのロードに適した運用データセット (分析および設計アクティビティで特定したもの)。これには、考えられるロードの方法 (バルクロードか、コネクタ経由のロードのどちらか) も含まれます。検証または形式指定されるデータの要件も識別されます。
- ◆ 使用されている機器と、Identity Manager の展開の分散されたアーキテクチャ全体に関して、パフォーマンスにまつわる各種の要因も識別、検証されます。

従属関係

- ◆ 分析および設計フェーズからのデータモデル (レコード照合の案およびデータ形式の方針)
- ◆ 運用データセットへのアクセス権

運用準備

このアクティビティの目的は、運用環境への移行を開始することです。このフェーズ中には、追加のカスタマイズが発生する可能性があります。この限定的な導入では、先行するアクティビティの期待される結果を確認でき、運用開始の合意を得ることができます。

注: このフェーズでは、ソリューションの受け入れ条件と、完全な運用までに必要なマイルストーンが得られる可能性があります。

主な成果物

- ◆ 実物による概念の吟味と、データモデルおよびプロセスの期待される結果の検証を行う準備ソリューション。

従属関係

- ◆ これまでのすべてのアクティビティ (分析および設計、Identity Manager 技術プラットフォーム)。

運用開始計画

このフェーズでは、運用展開の計画に移ります。計画では、次のことを行う必要があります。

- ◆ サーバプラットフォーム、ソフトウェアリビジョン、およびサービスパックの確認
- ◆ 全体的な環境の確認
- ◆ 混在した共存環境での識別ポータル導入の確認
- ◆ パーティション化およびレプリケーション方針の確認
- ◆ Identity Manager の実装の確認
- ◆ 従来のプロセスの切り替え計画
- ◆ 予期しない問題のロールバック方針の計画

主な成果物

- ◆ 運用開始計画
- ◆ 従来のプロセスの切り替え計画
- ◆ 予期しない問題のロールバック計画

従属関係

- ◆ これまでのすべてのアクティビティ

運用展開

このフェーズでは、運用環境で実際のデータ全体に対し、試験的なソリューションを拡張します。通常、運用準備がすべての技術的要件およびビジネス要件を満たしたという合意に基づいて行われます。

主な成果物

- ◆ 移行の準備が完了した運用ソリューション

従属関係

- ◆ これまでのすべてのアクティビティ

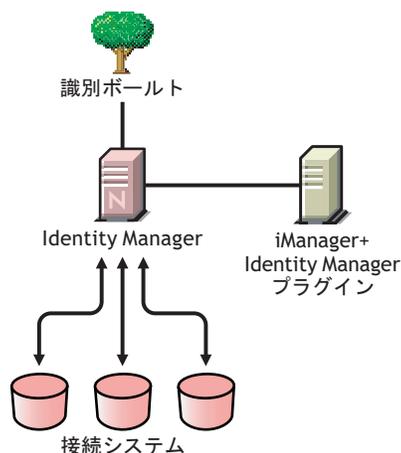
2.2 一般的なインストールシナリオの計画

次に示すシナリオは、Identity Manager を使用可能な環境の例です。各シナリオでは、実装に役立ついくつかのガイドラインが示されます。

- ◆ 46 ページのセクション 2.2.1 「Identity Manager の新しいインストール」
- ◆ 48 ページのセクション 2.2.2 「同じ環境での Identity Manager および DirXML 1.1a の使用」
- ◆ 50 ページのセクション 2.2.3 「スターターパックから Identity Manager へのアップグレード」
- ◆ 52 ページのセクション 2.2.4 「Password Synchronization 1.0 から Identity Manager のパスワード同期へのアップグレード」

2.2.1 Identity Manager の新しいインストール

図 2-1 新しいインストール



Identity Manager は、識別ポータルを活用して、アプリケーション、データベース、およびディレクトリ間における情報を自動的に同期、変換、および分散するデータ共有ソリューションです。

Identity Manager ソリューションには、次のコンポーネントが含まれています。

- ◆ 46 ページの 「識別ポータルと Identity Manager」
- ◆ 47 ページの 「iManager サーバと Identity Manager プラグイン」
- ◆ 47 ページの 「接続システム」
- ◆ 47 ページの 「Identity Manager の一般的なタスク」

識別ポータルと Identity Manager

識別ポータルには、他の接続システムと共有または同期するユーザデータやオブジェクトデータが含まれています。Identity Manager は、独自の eDirectory™ インスタンスにインストールして、専用の識別ポータルとして使用することをお勧めします。

iManager サーバと Identity Manager プラグイン

Identity Manager ソリューションを管理するには、Novell iManager プラグインと Identity Manager プラグインを使用します。

接続システム

接続システムには、識別ボールドとデータを共有または同期する他のアプリケーション、ディレクトリ、およびデータベースを共存させることができます。識別ボールドから接続システムへの接続を確立するには、その接続システムに適したドライバをインストールします。具体的な手順については、「[ドライバ実装ガイド \(http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html)」を参照してください。

Identity Manager の一般的なタスク

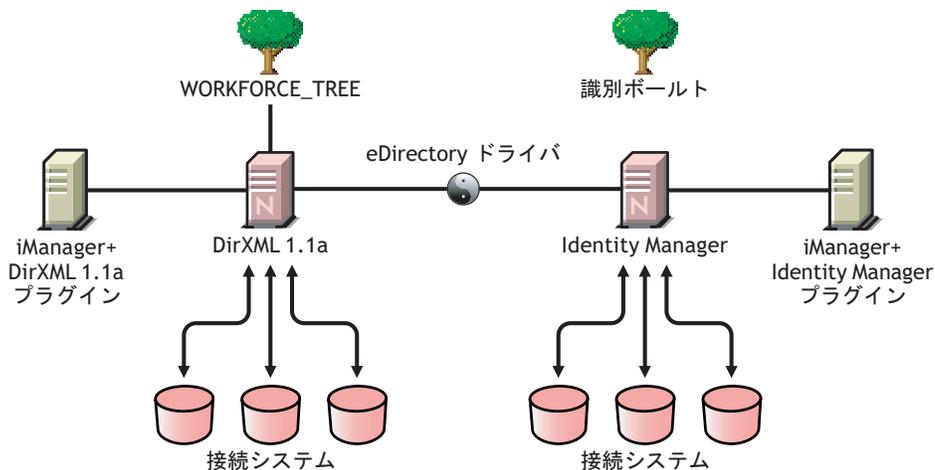
- ◆ **システムコンポーネントのインストール**：Identity Manager ソリューションは複数のコンピュータ、サーバ、またはプラットフォームに分散して使用する可能性があるため、システムごとにインストールプログラムを実行して、適切なコンポーネントをインストールする必要があります。詳細については、[19 ページのセクション 1.4 「Identity Manager のインストールプログラムおよびサービス」](#)を参照してください。
- ◆ **接続システムの設定**：具体的な手順については、[19 ページのセクション 1.4 「Identity Manager のインストールプログラムおよびサービス」](#) および「[ドライバ実装ガイド \(http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html)」を参照してください。
- ◆ **ソリューションを有効にする**：Identity Manager 製品 (professional edition、Server Edition、統合モジュール、およびユーザアプリケーション) は、インストールから 90 日以内にアクティベーションを行う必要があります。詳細については、[185 ページの第 6 章 「Novell Identity Manager 製品を有効にする」](#)を参照してください。
- ◆ **ビジネスポリシーの定義**：ビジネスポリシーでは、識別ボールドでやり取りする情報のフローを特定の環境に合わせてカスタマイズできます。また、ポリシーは、新しいオブジェクトの作成、属性値の更新、スキーマ変換の実行、一致条件の定義、Identity Manager の関連付けの維持など、多くのタスクを実行します。ポリシーの詳細なガイドは、『[Policies in iManager for Identity Manager 3.5.1](#)』に含まれています。
- ◆ **パスワードの管理の設定**：パスワードポリシーを使用することで、ユーザのパスワード作成方法を規定し、セキュリティを向上できます。ユーザ自身でパスワード忘れや、パスワードリセットに対処できるセルフサービスオプションを付加することにより、ヘルプデスクの運用コストの削減にもつながります。パスワード管理の詳細な情報については、『[Managing Passwords by Using Password Policies \(http://www.novell.com/documentation/password_management31/index.html?page=/documentation/password_management31/pwm_administration/data/ampxj0.html\)](http://www.novell.com/documentation/password_management31/index.html?page=/documentation/password_management31/pwm_administration/data/ampxj0.html)』を参照してください。
- ◆ **エンタイトルメントの設定**：エンタイトルメントの定義により、接続システムのエンタイトルメントを、識別ボールド内のユーザの定義済みグループに付与できます。エンタイトルメントポリシーを使用すると、ビジネスポリシーの管理を合理化できるため、Identity Manager ドライバを設定する必要性が軽減されます。詳細については、『[Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド](#)』の「エンタイトルメントの作成と使用」を参照してください。
- ◆ **Novell Audit を使用したイベントのログ**：Identity Manager は、監査とレポートに Novell Audit を使用するように設計されています。Novell Audit には、監査、ログ、レポート、および通知などの機能を実現する技術が集約されています。Identity Manager では、Novell Audit と統合することで、ドライバとエンジンのアクティビティに関する現在と過去の状態の詳細な情報を供給します。この情報は、設定済みの

レポート、標準の通知サービス、およびユーザ定義ログなどの一連の機能により提供されます。『*Identity Manager 3.5.1 Logging and Reporting*』の「Using Status Logs」を参照してください。

- ◆ **ワークフローの承認とユーザアプリケーション** : Novell Identity Manager ユーザアプリケーションは、洗練された識別サービスフレームワークにより直感的で高度な設定や管理が行える、多機能で強力な Web アプリケーション (およびサポートツール) です。Provisioning Module for Identity Manager および Novell Audit と組み合わせて使用すると、Identity Manager ユーザアプリケーションは安全でスケーラブル、また容易に管理できる総合的なエンドツーエンドのプロビジョニングソリューションになります。ユーザアプリケーションのドキュメント (<http://www.novell.com/documentation/idm35>) を参照してください。

2.2.2 同じ環境での Identity Manager および DirXML 1.1a の使用

図 2-2 DirXML 1.1a と同じツリーへの Identity Manager のインストール



Identity Manager と DirXML[®] 1.1a の両方を同じ環境で実行している場合、次の点を考慮してください。

- ◆ 48 ページの「識別ポールの作成」
- ◆ 48 ページの「管理ツール」
- ◆ 49 ページの「後方互換性」
- ◆ 49 ページの「パスワード管理」

識別ポールの作成

Identity Manager は、別個の eDirectory インスタンスにインストールし、専用の識別ポータルとして使用することをお勧めします。

管理ツール

- ◆ ConsoleOne[®] は DirXML 1.1a ではサポートされますが、Identity Manager ではサポートされません。

- ◆ 2つの iManager サーバ (DirXML 1.1a プラグインと Identity Manager プラグインにそれぞれのサーバ) が必要になります。これは、プラグインの機能が拡張されていること、Identity Manager では DirXML スクリプトが使用されていることに起因します。
- ◆ DirXML 1.1a の iManager プラグインは、ほとんどの Identity Manager ドライバの定義済みドライバ環境設定で使用される DirXML スクリプトを読み込めません。
- ◆ Designer は、Identity Manager ドライバの設計、テスト、更新、およびドキュメント化を行うことができるツールです。

後方互換性

- ◆ DirXML 1.1a ドライバシムおよび環境設定は Identity Manager サーバで実行でき、iManager のドライバはドライバセットの [Identity Manager の概要] で表示できます。ただし、Identity Manager プラグインを使用する場合、ドライバを Identity Manager 形式に変換せずにドライバ環境設定を表示および編集することはできません。

Identity Manager プラグインでは、1.1a 形式のドライバをクリックすると、変換を実行するかどうかを確認するメッセージが表示されます。これは、ウィザードで簡単に実行でき、ドライバ環境設定の機能には影響しません。処理の一部として、DirXML 1.1a バージョンのバックアップコピーが保存されます。

- ◆ DirXML 1.1a ドライバのアクティベーションは、Identity Manager エンジンとともに実行している場合でも有効です。ただし、ドライバシムを Identity Manager バージョンにアップグレードした場合は、新しいアクティベーションキーを入手する必要があります。詳細については、[185 ページの付録 6「Novell Identity Manager 製品を有効にする」](#)を参照してください。
- ◆ ほとんどの場合、Identity Manager ドライバシムを DirXML 1.1a 環境設定で実行することはできません。アップグレード情報については、それぞれの[ドライバ実装ガイド](#) (<http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html>) で参照してください。
重要な例外として、ドライバシムをアップグレードすると、他のドライバポリシーを追加しない限り Password Synchronization 1.0 が Windows AD および NT で正しく動作しなくなります。方法については、Active Directory および NT ドメイン用 Identity Manager ドライバの[ドライバ実装ガイド](#) (<http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html>) にあるパスワード同期に関する節を参照してください。
- ◆ Identity Manager ドライバシムとドライバ設定を DirXML 1.1a エンジンで実行することはできません。
- ◆ Identity Manager ドライバ環境設定を DirXML 1.1a ドライバシムで実行することはできません。
- ◆ 同じ Identity Manager ドライバ環境設定を複数のサーバで実行する場合、すべてのサーバで同じバージョンの Identity Manager と同じバージョンの eDirectory が実行されていることを確認してください。

パスワード管理

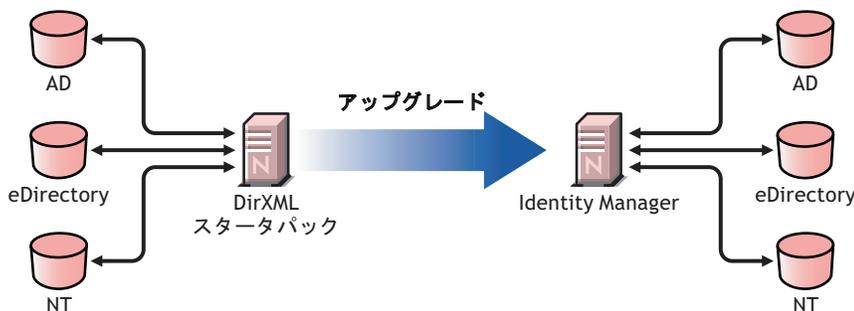
- ◆ 強力なパスワードを要求する高度なパスワードルールや、[パスワードを忘れた場合] セルフサービスおよび [パスワードのリセット] セルフサービスなどの機能を有効にするパスワードポリシーを作成できます。『[Password Management 3.1 Guide](#) (http://www.novell.com/documentation/password_management31/index.html)』の「Managing Password Synchronization」を参照してください。
- ◆ Netware 6.5[®] の初期リリースでユニバーサルパスワードの使用を開始した場合、新しいパスワードポリシー機能を使用するにはいくつかのアップグレード手順を実行する

必要があります。『Password Management 3.1 Guide (http://www.novell.com/documentation/password_management31/index.html)』の「(NetWare 6.5 only) Deploying Universal Password」を参照してください。NetWare 6.5 SP2 でユニバーサルパスワードの使用を開始した場合は、これらの手順は必要ありません。

- ◆ Identity Manager のパスワード同期では、双方向パスワード同期を使用でき、Password Synchronization 1.0 より多くのプラットフォームがサポートされます。
- ◆ Windows AD または NT で Password synchronization 1.0 を使用している場合は、新しいドライバシムをインストールする前に必ずアップグレード手順を確認してください。詳細については、52 ページのセクション 2.2.4 「Password Synchronization 1.0 から Identity Manager のパスワード同期へのアップグレード」を参照してください。
- ◆ ドライバポリシーの「オーバーレイ」は、双方向パスワード同期機能を既存のドライバに追加するのに役立ちます。『Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド』の「パスワード同期をサポートするための、既存のドライバ設定のアップグレード」を参照してください。

2.2.3 スターターパックから Identity Manager へのアップグレード

図 2-3 スターターパックから Identity Manager へのアップグレード



他の Novell 製品に含まれている Identity Manager スターターパックソリューションにより、NT ドメイン、Active Directory、および eDirectory に保持されている情報をライセンスに従って同期することが可能になります。PeopleSoft、GroupWise[®]、および Lotus Notes などの、他のいくつかのシステム用の評価版ドライバも、他のシステムのデータ同期を参照するために含まれています。

さらに、このソリューションによりユーザーパスワードの同期が可能になります。PasswordSync を使用すると、ユーザはこうしたシステムにログインするのに、複数のパスワードを使い分ける必要がなくなります。管理者は、選択したそれぞれのシステムでパスワードを管理できます。これらの環境のいずれかでパスワードが変更されても、すべての環境で更新されます。

NetWare 6.5 および Nenterprise[™] Linux Services 1.0 に同梱されている Identity Manager スターターパックは、DirXML 1.1a 技術を基にしています。スターターパックから最新バージョンの Identity Manager にアップグレードするときは、次の点に注意してください。

- ◆ 51 ページの「後方互換性」
- ◆ 51 ページの「パスワード管理」
- ◆ 51 ページの「アクティベーション」

後方互換性

- ◆ DirXML 1.1a ドライバシムおよび環境設定は Identity Manager サーバで実行でき、iManager のドライバはドライバセットの [Identity Manager の概要] で表示できます。ただし、Identity Manager プラグインを使用する場合、ドライバを Identity Manager 形式に変換せずにドライバ環境設定を表示および編集することはできません。

Identity Manager プラグインでは、1.1a 形式のドライバをクリックすると、変換を実行するかどうかを確認するメッセージが表示されます。これは、ウィザードで簡単に実行でき、ドライバ環境設定の機能には影響しません。処理の一部として、DirXML 1.1a バージョンのバックアップコピーが保存されます。

- ◆ DirXML 1.1a ドライバのアクティベーションは、Identity Manager エンジンとともに実行している場合でも有効です。ただし、ドライバシムを Identity Manager バージョンにアップグレードした場合は、新しいアクティベーションが必要です。
- ◆ ほとんどの場合、Identity Manager ドライバシムを DirXML 1.1a 環境設定で実行することはできません。アップグレード情報については、それぞれの [ドライバ実装ガイド \(http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html) で参照してください。
重要な例外として、ドライバシムをアップグレードすると、他のドライバポリシーを追加しない限り Password Synchronization 1.0 が Windows AD および NT で正しく動作しなくなります。方法については、Active Directory および NT ドメイン用 Identity Manager ドライバの [ドライバ実装ガイド \(http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html) にあるパスワード同期に関する節を参照してください。
- ◆ Identity Manager ドライバシムとドライバ設定を DirXML 1.1a エンジンで実行することはできません。
- ◆ Identity Manager ドライバ環境設定を DirXML 1.1a ドライバシムで実行することはできません。
- ◆ 同じ Identity Manager ドライバ環境設定を複数のサーバで実行する場合、すべてのサーバで同じバージョンの Identity Manager と同じバージョンの eDirectory が実行されていることを確認してください。

パスワード管理

- ◆ ドライバシムをアップグレードすると、他のドライバポリシーを追加しない限り、スターターパック (DirXML 1.1a) に同梱されている Password Synchronization 1.0 が AD および NT で正しく動作しません。方法については、Active Directory および NT ドメイン用 Identity Manager ドライバの [ドライバ実装ガイド \(http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html) にあるパスワード同期に関する節を参照してください。
- ◆ このアップグレード処理に関する具体的な手順については、[52 ページのセクション 2.2.4 「Password Synchronization 1.0 から Identity Manager のパスワード同期へのアップグレード」](#) を参照してください。

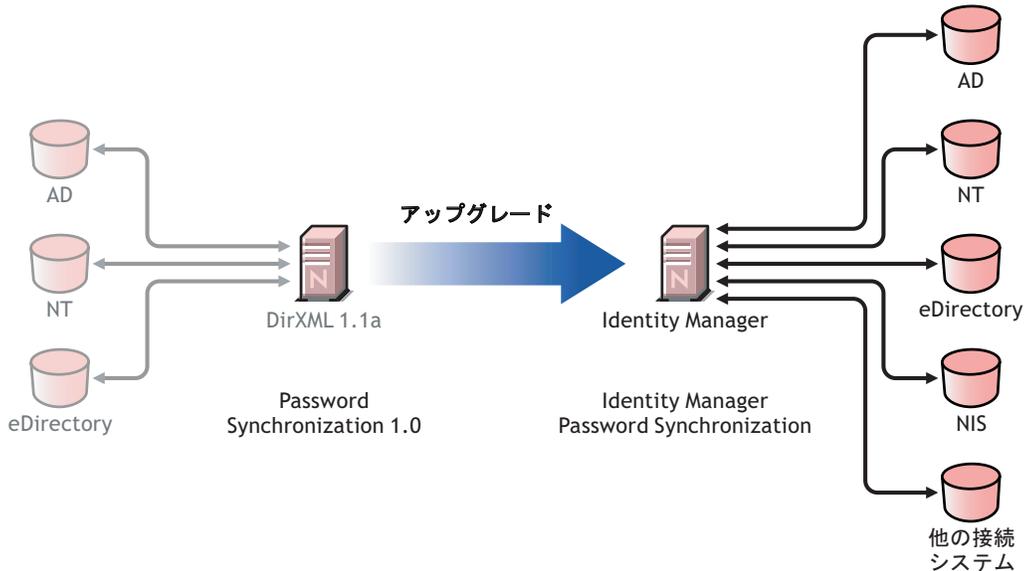
アクティベーション

- ◆ すべての Identity Manager 製品は、90 日以内にアクティベートする必要があります。他の Novell ソフトウェアを購入した場合、DirXML スターターパックには、DirXML 1.1a エンジンと、NT、AD、および eDirectory ドライバのアクティベーションキーが含まれています。Identity Manager スターターパックからアップグレードする場合は、それらのドライバに対し、アクティベーションキーを再適用しなければならない場合があります。

アクティベーションの詳細については、185 ページの付録 6 「Novell Identity Manager 製品を有効にする」を参照してください。

2.2.4 Password Synchronization 1.0 から Identity Manager のパスワード同期へのアップグレード

図 2-4 Password Synchronization 1.0 から Identity Manager のパスワード同期へのアップグレード



Identity Manager のパスワード同期には、双方向パスワード同期、追加のプラットフォーム、およびパスワード同期に失敗した場合の電子メール通知など、多くの機能が備わっています。

Active Directory または NT ドメインで Password Synchronization 1.0 を使用している場合、新しいドライバシムをインストールする前に必ずアップグレード手順を確認してください。

Identity Manager 2.x を Password Synchronization 2.0 とともに実行している場合は、それらの手順に従う必要はありません。

Identity Manager のパスワード同期の概要については、『*Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド*』の「**接続システム間のパスワード同期**」を参照してください。その節には、旧機能と新機能の比較、必要条件、各接続システムでサポートされる機能のリスト、既存のドライバにサポートを追加する方法、新機能の使用法を示すいくつかのシナリオなど、概念的な情報が含まれています。

この節では、次の項目について説明します。

- ◆ 53 ページの「Active Directory または Windows NT 用のパスワード同期のアップグレード」
- ◆ 53 ページの「eDirectory のパスワード同期のアップグレード」
- ◆ 53 ページの「他の接続システムドライバのアップグレード」
- ◆ 54 ページの「機密情報の処理」

Active Directory または Windows NT 用のパスワード同期のアップグレード

新しいパスワード同期機能は、別個のエージェントではなく、ドライバポリシーにより制御されます。これは、同時にドライバ環境設定をアップグレードせずに新しいドライバシムをインストールした場合、Password Synchronization 1.0 が既存のユーザに対してのみ機能し続けることを意味しています。新しいユーザ、移動したユーザ、または名前を変更したユーザは、ドライバ環境設定のアップグレードが完了するまでパスワード同期の対象にはなりません。

アップグレードするには、次の全体的な手順に従います。

1. 環境をアップグレードして、ユニバーサルパスワードがサポートされるようにします。Novell Client™ を使用している場合は、これをアップグレードすることも含まれます。
2. Identity Manager 3.5.1 ドライバシムをインストールして、Active Directory または Windows NT の DirXML 1.1a ドライバシムと置き換えます。
3. ドライバ環境設定にただちに新しいポリシーを追加することで、Password Synchronization 1.0 との後方互換性を維持します。
この手順により、Identity Manager のパスワード同期に切り替えるまで、Password Synchronization 1.0 が正常に機能し続けます。
4. ドライバポリシーを使用して、Identity Manager の新しいパスワード同期機能のサポートを追加します。
5. 新しいパスワード同期フィルタをインストールして設定します。
6. 必要に応じて SSL を設定します。
7. 必要に応じて、パスワードポリシーを使用してユニバーサルパスワードをオンにします。
8. 使用する Identity Manager のパスワード同期シナリオを設定します。
『*Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド*』の「パスワード同期の実装」を参照してください。
9. Password Synchronization 1.0 を削除します。

詳細な方法については、Active Directory および NT ドメイン用 Identity Manager ドライバの [ドライバ実装ガイド \(http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/idm35drivers/index.html) を参照してください。

eDirectory のパスワード同期のアップグレード

eDirectory の場合のアップグレードは比較的容易で、ドライバシムおよび環境設定に最新のパッチが適用されていれば、通常は、既存の DirXML 1.1a ドライバ環境設定を変更しなくてもドライバシムは機能するようになっています。方法については、『*eDirectory 用の Identity Manager 3.5.1 ドライバ: 実装ガイド*』を参照してください。

他の接続システムドライバのアップグレード

Identity Manager のパスワード同期では、Password Synchronization 1.0 より多くの接続システムがサポートされます。

他のシステムでサポートされる機能のリストについては、『*Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド*』の「パスワード同期をサポートする接続システム」を参照してください。

ドライバポリシーの「オーバーレイ」は、双方向パスワード同期機能を、以前はサポートされていなかった接続システムの既存のドライバに追加するのに役立ちます。『*Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド*』の「パスワード同期をサポートするための、既存のドライバ設定のアップグレード」を参照してください。

機密情報の処理

ユニバーサルパスワードは、eDirectory 内で 4 段階の暗号化を施して保護されているため、その環境内では非常に安全です。双方向パスワード同期を使用していて、ユニバーサルパスワードを配布パスワードと同期する場合は、eDirectory パスワードを抽出して他の接続システムにそれを送信しているという点に注意しなければなりません。パスワードの転送手段だけではなく、パスワードを同期する接続システムも保護する必要があります。

パスワードの他に、Novell SecretStore[®] と Novell SecureLogin を使用して資格情報を同期することもできます。これらによって、否認防止が必要な環境で SecureLogin パスフレーズの質問と回答をプロビジョニングできます。『*Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド*』の「セキュリティ: ベストプラクティス」を参照してください。

2.3 Identity Manager の実装に関する技術面の計画

- ◆ 54 ページのセクション 2.3.1 「Designer の使用」
- ◆ 54 ページのセクション 2.3.2 「Identity Manager がサーバで必要とするオブジェクトの複製」
- ◆ 56 ページのセクション 2.3.3 「スコープフィルタリングを使用した異なるサーバ上のユーザの管理」

2.3.1 Designer の使用

Identity Manager には、Designer というユーティリティが付属しています。Designer を使用すると、Identity Manager ドライバを設計、テスト、および文書化できます。また、パスワード同期およびデータフローの様子を参照することもできます。詳細については、『*Designer 2.1 for Identity Manager 3.5.1*』管理ガイドを参照してください。

2.3.2 Identity Manager がサーバで必要とするオブジェクトの複製

Identity Manager 環境で、複数の Identity Manager ドライバを実行するために複数のサーバを呼び出す場合は、計画において、それらの Identity Manager ドライバを実行するサーバ上で特定の eDirectory オブジェクトが複製されていることを確認してください。

読み込み、または同期を行うためにドライバに必要なオブジェクト、および属性のすべてがフィルタされたレプリカに含まれているのであれば、フィルタされたレプリカを使用することもできます。

Identity Manager のドライバオブジェクトに、同期対象のすべてのオブジェクトに対する十分な eDirectory 権限を付与する必要がある点に注意してください。これは、権限を明示的に付与するか、必要な権限を持つオブジェクトと同等のドライバオブジェクトセキュリティを作成することにより行います。

Identity Manager ドライバが実行されている (またはリモートローダを使用している場合はドライバが参照している) eDirectory サーバには、次のもののマスタレプリカまたは読み書き可能レプリカが保持されている必要があります。

- ◆ そのサーバのドライバセットオブジェクト。

Identity Manager が実行されている各サーバには、1つのドライバセットオブジェクトが必要です。特定の必要がない限り、複数のサーバを同じドライバセットオブジェクトに関連付けしないでください。

注: ドライバセットオブジェクトを作成する際は、デフォルト設定を使用して独立したパーティションが作成されます。ドライバセットオブジェクトには、独立したパーティションを作成することをお勧めします。Identity Manager が機能するには、ドライバセットオブジェクトの完全なレプリカがサーバに保持されている必要があります。ドライバセットオブジェクトがインストールされている場所の完全なレプリカがサーバにある場合、パーティションは必要ありません。

- ◆ そのサーバのサーバオブジェクト。

サーバオブジェクトは、ドライバがオブジェクトの鍵のペアを生成できるようにするために必要です。さらに、リモートローダの認証にも必要です。

- ◆ ドライバのこのインスタンスを同期するオブジェクト。

ドライバは、オブジェクトのレプリカがドライバと同じサーバにない場合は、それらのオブジェクトを同期できません。実際に、Identity Manager ドライバは、サーバで複製されるすべてのコンテナ内のオブジェクトを同期します。ただし、それ以外の動作を指定するルール(「スコープフィルタリング」のルール)を作成した場合は別です)。

ドライバがすべてのユーザオブジェクトを同期するようにするには、たとえばすべてのユーザのマスタレプリカまたは読み書き可能レプリカが保持されているサーバ上にある、ドライバの1つのインスタンスを使用するのが最も簡単な方法です。

ただし、多くの環境にはすべてのユーザのレプリカが含まれる1つのサーバがありません。むしろ、ユーザの完全なセットは複数のサーバに分散しています。この場合、次の3つから選択します。

- ◆ **ユーザを1つのサーバに集約します。** 既存のサーバにレプリカを追加することにより、すべてのユーザを保持する1つのサーバを作成できます。必要なユーザオブジェクトおよび属性がフィルタされたレプリカに含まれている限り、必要に応じてフィルタされたレプリカを使用し、eDirectory データベースのサイズを小さくできます。
- ◆ **スコープフィルタリングを行って、複数のサーバ上にあるドライバの複数のインスタンスを使用します。** ユーザを1つサーバに集約したくない場合は、どのサーバセットにすべてのユーザを保持するかを判別し、それらの各サーバに Identity Manager ドライバの1つのインスタンスを設定する必要があります。

ドライバの別々のインスタンスが同じユーザを同期しないようにするには、「スコープフィルタリング」を使用して、ドライバの各インスタンスが同期するユーザを定義する必要があります。スコープフィルタリングは、特定のコンテナに対するドライバの管理範囲を制限するルールを各ドライバに追加することを意味しています。詳細については、56 ページの「**スコープフィルタリングを使用した異なるサーバ上のユーザの管理**」を参照してください。

- ◆ スコープフィルタリングを行わずに、複数のサーバにあるドライバの複数のインスタンスを使用します。フィルタされたレプリカを使用せずに、複数のサーバでドライバの複数のインスタンスを実行する場合は、ドライバが同じ識別ボールド内でさまざまなオブジェクトセットを処理できるようにするポリシーを、複数のドライバインスタンスで定義する必要があります。
- ◆ テンプレートの使用を選択した場合は、ユーザの作成時にドライバで使用されるテンプレートオブジェクト。

Identity Manager ドライバが、ユーザの作成時に **eDirectory** テンプレートオブジェクトを指定するよう求めることはありません。ただし、**eDirectory** でユーザを作成する際にドライバがテンプレートを使用するように指定した場合は、ドライバが実行されているサーバでテンプレートオブジェクトを複製する必要があります。

- ◆ **Identity Manager** ドライバがユーザの管理に使用するすべてのコンテナ。
たとえば、無効になったユーザアカウントを保持する **Inactive Users** という名前のコンテナを作成した場合、ドライバが実行されているサーバ上にそのコンテナのマスタレプリカまたは読み書き可能レプリカ (可能であればマスタレプリカ) が必要です。
- ◆ ドライバが参照する必要のある他のすべてのオブジェクト (たとえば、**Avaya**^{*} **PBX** ドライバ用のワークオーダーオブジェクト)。
他のオブジェクトがドライバに読み込まれるだけで変更されない場合、サーバ上にあるそれらのオブジェクトのレプリカは読み込み専用レプリカとすることができます。

2.3.3 スコープフィルタリングを使用した異なるサーバ上のユーザの管理

スコープフィルタリングは、特定のコンテナに対するドライバのアクション範囲を制限するルールを各ドライバに追加することを意味しています。スコープフィルタリングを使用する必要のある2つの状況を次に示します。

- ◆ ドライバにより、特定のコンテナ内のユーザだけを同期する。

Identity Manager ドライバは、デフォルトでは、実行されているサーバで複製されるすべてのコンテナ内にあるオブジェクトを同期します。範囲を絞り込むには、スコープフィルタリングルールを作成する必要があります。

- ◆ **Identity Manager** ドライバによりすべてのユーザを同期するが、一部のユーザは同じサーバ上で複製しない。

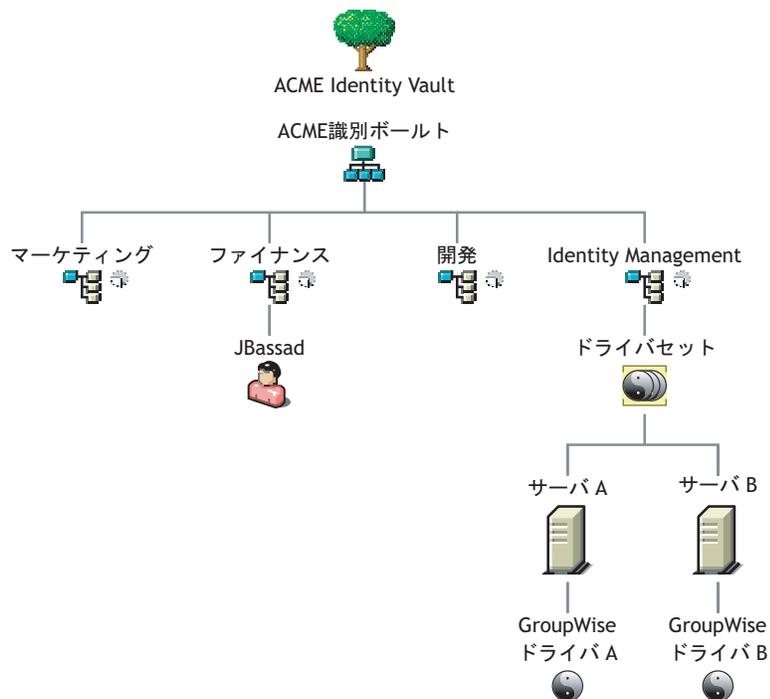
すべてのユーザを1つのサーバ上で複製せずに同期する場合は、どのサーバセットですべてのユーザを保持するかを決定し、それらの各サーバで **Identity Manager** ドライバのインスタンスを作成する必要があります。ドライバの2つのインスタンスが同じユーザを同期しないようにするには、スコープフィルタリングを使用して、ドライバの各インスタンスが同期するユーザを定義する必要があります。

注: スコープフィルタリングは、サーバのレプリカが今のところ重複していない場合でも使用してください。今後、レプリカがサーバに追加され、意図せずに重複が発生する可能性があります。スコープフィルタリングを適切な場所に設定すると、今後レプリカがサーバに追加された場合でも、**Identity Manager** ドライバは同じサーバを同期しなくなります。

次に、スコープフィルタリングの使用例を示します。

次の図は、ユーザを保持する3つのコンテナ(マーケティング、ファイナンス、および開発)が存在する識別ボールドを示しています。また、ドライバセットを保持する Identity Manager コンテナも示しています。これらの各コンテナは、独立したパーティションです。

図 2-5 スコープフィルタリングのツリーの例



この例では、58 ページの 図 2-6 にもあるように Identity Manager 管理者は2つの識別ボールドサーバ(サーバ A およびサーバ B)を持っています。どちらのサーバにも、すべてのユーザのコピーが含まれているわけではありません。各サーバには、3つのパーティションのうち2つが含まれているため、サーバが保持している対象の範囲が重複しています。

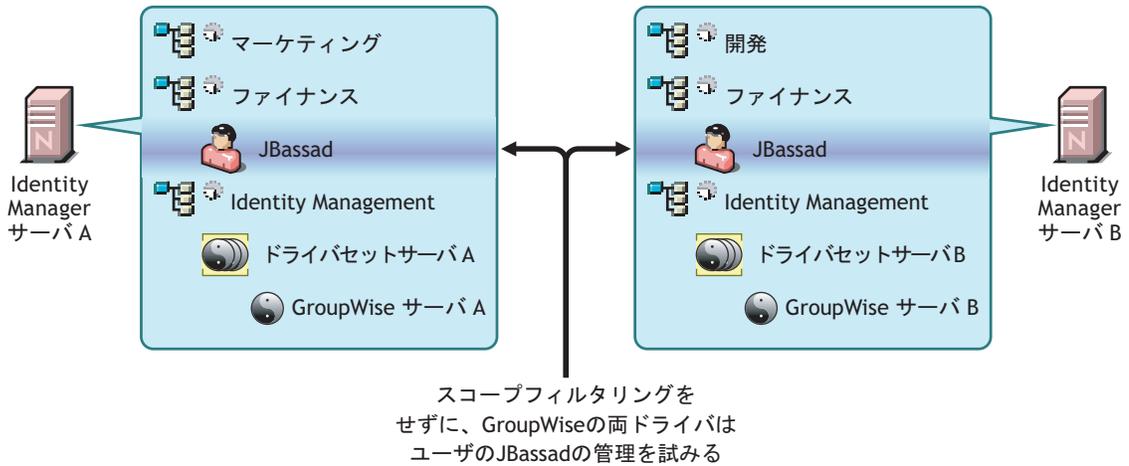
管理者にとっては、ツリー内のすべてのユーザを GroupWise ドライバにより同期することが望ましいのですが、すべてのユーザのレプリカを1つのサーバに集約することは望ましくありません。代わりに、GroupWise ドライバの2つのインスタンスを使用する(各サーバに1つのインスタンスを使用)よう指定します。Identity Manager をインストールして、各 Identity Manager サーバで GroupWise ドライバを設定します。

サーバ A は、マーケティングコンテナおよびファイナンスコンテナのレプリカを保持しています。さらに、このサーバは、サーバ A のドライバセットおよびサーバ A の GroupWise ドライバオブジェクトを保持する Identity Management コンテナのレプリカでもあります。

サーバ B は、開発コンテナおよびファイナンスコンテナのレプリカと、サーバ B のドライバセットおよびサーバ B の GroupWise ドライバオブジェクトを保持する Identity Management コンテナのレプリカを保持しています。

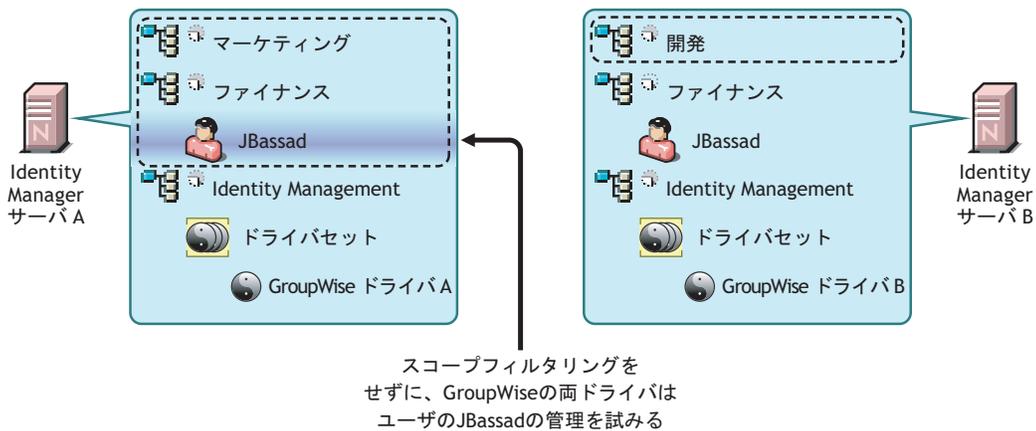
サーバ A とサーバ B はどちらもファイナンスコンテナのレプリカを保持しているため、どちらのサーバもファイナンスコンテナにあるユーザ JBassad を保持しています。スコープフィルタリングを設定しないと、GroupWise Driver A および GroupWise Driver B の両方により JBassad が同期されます。

図 2-6 レプリカが重複していてスコープフィルタリングの設定されていない2つのサーバ



次の図は、スコープフィルタリングで各コンテナを同期するドライバを定義することにより、ドライバの2つのインスタンスで同じユーザを管理するのを回避する様子を示しています。

図 2-7 スコープフィルタリングによる、各コンテナを同期するドライバの定義



Identity Manager 3.5.1 には、定義済みルールが付属しています。スコープフィルタリングに役立つ2つのルールがあります。『*Understanding Policies for Identity Manager 3.5.1*』の「Event Transformation - Scope Filtering - Include Subtrees」および「Event Transformation - Scope Filtering - Exclude Subtrees」で説明されています。

この例では、サーバ A およびサーバ B には定義済みルール **Include Subtrees** を使用します。指定されたコンテナのユーザだけを同期するように、各ドライバには異なる範囲を定義します。サーバ A は、マーケティングおよびファイナンスを同期します。サーバ B は、開発を同期します。

アップグレード

Identity Manager には、多くの異なる部分があります。Identity Manager のアップグレードを正常に行うには、製品のすべての側面を考慮に入れる必要があります。

- ◆ 59 ページのセクション 3.1 「アップグレードパス」
- ◆ 59 ページのセクション 3.2 「ポリシーアーキテクチャの変更点」
- ◆ 60 ページのセクション 3.3 「アップグレード手順」
- ◆ 63 ページのセクション 3.4 「パスワード同期のアップグレード」
- ◆ 63 ページのセクション 3.5 「RNS から Novell Audit へのアップグレード」
- ◆ 64 ページのセクション 3.6 「DirXML 1.1a ドライバ環境設定のアップグレード」
- ◆ 64 ページのセクション 3.7 「Identity Manager のアクティベート」

では、いくつかのアップグレードシナリオについて説明します。46 ページのセクション 2.2 「一般的なインストールシナリオの計画」

3.1 アップグレードパス

次の表は、Identity Manager のさまざまなバージョンでサポートされるアップグレードシナリオを示しています。シナリオごとに、サポートの有無が示されています。

表 3-1 アップグレードパスのシナリオ

インストール済みのバージョン	現在のバージョン	アップグレードのサポート
DirXML® 1.1a	Identity Manager 3.5.1	はい
Identity Manager 2.x	Identity Manager 3.5.1	はい
Identity Manager 3.0x	Identity Manager 3.5.1	はい

3.2 ポリシーアーキテクチャの変更点

Identity Manager 3.5 および 3.5.1 では、新しいポリシーアーキテクチャが採用されており、ドライバがポリシーを参照する方法に影響が生じます。3.5.1 のドライバアーキテクチャにより Identity Manager 3.5.1 環境では機能が向上しますが、3.0.x のメタディレクトリエンジンで 3.5.1 のドライバ設定を実行することはできません。

ただし、Identity Manager 3.5 および 3.5.1 で 3.0.x のドライバ設定を実行することはできません。3.0.x のドライバ設定を 3.0.x と 3.5.1 の両方のメタディレクトリエンジンに関連付けている場合は、3.0.x ドライバをアップグレードしないでください。3.0.x ドライバ設定は 3.5.1 環境で動作しますが、Identity Manager 3.5 以降のように機能は向上しません。3.0.x ドライバが 3.5 以降のメタディレクトリエンジンにのみ関連付けられている場合は、3.0.x ドライバ設定を 3.5.1 にアップグレードすることをお勧めします。

ポリシーアーキテクチャおよび 3.5.1 へのドライバのアップグレードの詳細については、『*Understanding Policies for Identity Manager 3.5.1*』の「[Upgrading Identity Manager Policies](#)」を参照してください。

3.3 アップグレード手順

Identity Manager 3.5.1 へのアップグレードを正常に行うには、次の手順を完了する必要があります。

- ◆ 60 ページのセクション 3.3.1 「ドライバのエクスポート」
- ◆ 61 ページのセクション 3.3.2 「最小要件の確認」
- ◆ 62 ページのセクション 3.3.3 「エンジンのアップグレード」
- ◆ 63 ページのセクション 3.3.4 「リモートローダのアップグレード」
- ◆ 63 ページのセクション 3.3.5 「UNIX/Linux 環境のアップグレード」

3.3.1 ドライバのエクスポート

アップグレードを行う前の最も重要な手順として、現在のドライバとそれらの環境設定情報をバックアップします。ドライバをバックアップするには、それらをエクスポートする必要があります。

- ◆ 60 ページの 「ConsoleOne からのエクスポート」
- ◆ 60 ページの 「iManager からのエクスポート」
- ◆ 61 ページの 「Designer からのエクスポート」

ConsoleOne からのエクスポート

- 1 ConsoleOne[®] で、ドライバセットオブジェクトを右クリックして、`[プロパティ] > [DirXML] > [ドライバ]` の順に選択します。
- 2 エクスポートファイルを作成するドライバを選択し、`[エクスポート]` をクリックします。
- 3 ファイル名を指定します。デフォルトの拡張子の `.xml` をそのままにして `[保存]` をクリックします。
- 4 `[エクスポート環境設定]` をクリックします。

iManager では、ドライバをエクスポートすることも、ドライバセット全体をエクスポートすることもできます。ドライバセットをエクスポートした場合は、環境設定ファイルが 1 つ作成されます。各ドライバをエクスポートした場合は、ドライバごとに環境設定ファイルが作成されます。

iManager からのエクスポート

- 1 iManager で、`[DirXML ユーティリティ] > [ドライバのエクスポート]` の順に選択します。
- 2 エクスポートするドライバまたはドライバセットを参照して選択し、`[次へ]` を選択します。
- 3 プロンプトフィールドを空白のままにしてドライバのそのままのコピーを作成して、`[次へ]` をクリックします。
- 4 `[ドライバセット]` オブジェクトを選択した場合は、各ドライバのプロンプトページが表示されます。各ドライバのフィールドを空白のままにして、ドライバのコピーを作成します。

- 5 [名前を付けて保存] をクリックします。
- 6 [File Download (ファイルのダウンロード)] ウィンドウの [保存] をクリックします。
- 7 エクスポートファイルの場所を参照してファイル名を指定し、[保存] をクリックします。

重要: ファイルを保存するときは .xml 拡張子を指定する必要があります。

ドライバのエクスポートファイルを作成したら、テスト環境でエクスポートファイルをテストします。ドライバのエクスポートファイルをインポートしてドライバをテストし、すべてのパラメータが正しく、全機能が整っていることを確認します。

Designer からのエクスポート

- 1 Designer から、モデラー表示でドライバまたはドライバセットオブジェクトを右クリックして、[Export to Configuration File (環境設定ファイルへのエクスポート)] を選択します。
- 2 [Export Driver Configuration (ドライバ設定のエクスポート)] ウィンドウで、エクスポートするファイルの場所と名前を参照して指定し、[保存] をクリックします。

3.3.2 最小要件の確認

Identity Manager 3.5.1 にアップグレードするには、Identity Manager サービスを実行するサーバが、最小要件を満たしている必要があります。各プラットフォームの最小要件については、[29 ページの表 1-3](#) を参照してください。

サポートするコンポーネントをアップグレードする必要がある場合、次の順序でアップグレードを行ってください。

1. OS を、サポートされるバージョンにアップグレードします。たとえば、NetWare[®] 6.0 から NetWare 6.5 にアップグレードします。
2. eDirectory[™] を、最新のサポートパックが適用された eDirectory 8.7.3.6 にアップグレードするか、最新のサポートパックが適用された eDirectory 8.8 にアップグレードします。
3. SSL をサポートするには、Security Services 2.0.5 と NMAS[™] 3.1.3 が必要です。
4. iManager を、最新のサポートパックが適用された iManager 2.6 または 2.7 にアップグレードします (Apache 2.0.52 以降および Tomcat 4.1.18 以降へのアップグレードを含む)。
5. また、Novell[®] Audit 2.0.2 スターターパックまたは Sentinel[™] 5.1.3 がネットワークにインストールされている必要があります。
6. Identity Manager ユーザアプリケーションおよびプロビジョニングについては、[97 ページのセクション 5.1 「インストールの必要条件」](#) を参照してください。
7. Identity Manager をアップグレードします。
8. メタディレクトリエンジンとアップグレードされたすべてのドライバを有効にします。

3.3.3 エンジンのアップグレード

サポートするコンポーネントをアップグレードした後、DirXML または Identity Manager エンジンをアップグレードします。

- 1 アップグレードの前に、ドライバを適切にエクスポートしたことを確認します。詳細については、60 ページのセクション 3.3.1 「ドライバのエクスポート」を参照してください。
- 2 ドライバを停止します。
 - 2a iManager で、*[Identity Manager] > [Identity Manager の概要]* の順に選択します。
 - 2b ドライバセットオブジェクトを参照して選択し、*[検索]* をクリックします。
 - 2c ドライバアイコンの右上隅をクリックし、*[ドライバの停止]* を選択します。
- 3 ドライバを手動起動に設定します。
 - 3a iManager で、*[Identity Manager] > [Identity Manager の概要]* の順に選択します。
 - 3b ドライバセットオブジェクトを参照して選択し、*[検索]* をクリックします。
 - 3c ドライバアイコンの右上隅をクリックし、*[プロパティの編集]* をクリックします。
 - 3d *[ドライバ環境設定]* ページの *[起動オプション]* で、*[手動]* を選択します。
- 4 Identity Manager 3.5.1 をインストールします。

Identity Manager 3.5.1 にアップグレードする手順は、Identity Manager 3.5 のインストール手順と同じです。Identity Manager のインストール方法については、65 ページの第 4 章「Identity Manager のインストール」を参照してください。

Identity Manager 3.5.1 は旧バージョンの Identity Manager をコピーし、バイナリを更新します。iManager と Designer の両方により、ドライバが新しい機能に更新されます。

 - 4a iManager でドライバをクリックして、ドライバアップグレードウィザードを開始します。

Designer は、古いドライバを検出すると、自動的にドライバアップグレードウィザードを開始します。
- 5 ドライバ起動オプションを設定します。
 - 5a iManager で、*[Identity Manager] > [Identity Manager の概要]* の順に選択します。
 - 5b ドライバセットオブジェクトを参照して選択し、*[検索]* をクリックします。
 - 5c ドライバアイコンの右上隅をクリックし、*[プロパティの編集]* をクリックします。
 - 5d *[ドライバ環境設定]* ページの *[起動オプション]* で、*[自動スタート]* を選択するか、または希望するドライバ起動方法を選択します。
- 6 ドライバパラメータおよびポリシーを調べて、すべての項目が希望どおりに設定されていることを確認します。
- 7 ドライバを起動します。
 - 7a iManager で、*[Identity Manager] > [Identity Manager の概要]* の順に選択します。
 - 7b ドライバセットオブジェクトを参照して選択し、*[検索]* をクリックします。
 - 7c ドライバアイコンの右上隅をクリックし、*[ドライバの起動]* を選択します。

3.3.4 リモートローダのアップグレード

リモートローダを実行している場合は、リモートローダファイルもアップグレードする必要があります。

- 1 リモートローダ環境設定ファイルのバックアップを作成します。このファイルのデフォルトの場所は次のとおりです。
 - ◆ Windows の場合 : C:\Novell\RemoteLoader\remoteloadername-config.txt。
 - ◆ Linux の場合 : rdxml のパスに独自の環境設定ファイルを作成します。
- 2 リモートローダサービスまたはデーモンを停止します。
- 3 リモートローダのインストールプログラムを実行します。

これにより、ファイルとバイナリが最新のバージョンに更新されます。『*Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド*』の「リモートローダのインストール」を参照してください。

3.3.5 UNIX/Linux 環境のアップグレード

UNIX または Linux 環境において Identity Manager 3.0.1 を Identity Manager 3.5.1 にアップグレードする場合、アンインストール用の場所が 2 つ作成され、パッケージが完全に削除されません。たとえば、SLES 9 などの UNIX プラットフォームで起動して、Identity Manager 3.0.1 をインストールした場合、Identity Manager のアンインストーラは /root/dirXML ディレクトリに配置されます。rpm -qa | grep -i dxml と入力すると、dxml パッケージがインストールされた場所がわかります。

この状態で、この展開を Identity Manager 3.5.1 にアップグレードすると、命名方法が変更されているため、アンインストール用の新しい場所が /root/idm ディレクトリに作成されます。rpm -qa と入力すると、更新されたパッケージがいつインストールされたかがわかります。

ディレクトリが変更されているため、管理者が Identity Manager 3.5.1 をアンインストールした場合、このアンインストーラでは、すべての項目が正常に削除されたというメッセージが表示されますが、一部のパッケージは削除されていません。残りのパッケージを削除するには、DirXML のアンインストーラを使用してください。

3.4 パスワード同期のアップグレード

DirXML 1.1a から Identity Manager 3.5.1 にアップグレードする場合、パスワード同期をアップグレードする必要があります。『*Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド*』の「*Password Synchronization 1.0 のアップグレード*」を参照してください。

Identity Manager 2.x からアップグレードする場合、パスワード同期は同一レベルのため、アップグレードしません。

3.5 RNS から Novell Audit へのアップグレード

レポートリングと通知サービス (RNS) は、Identity Manager の今後のリリース製品ではサポートされなくなりますが、現在 RNS を使用している場合、エンジンは引き続き RNS 機能を処理します。Novell Audit は RNS によって提供される機能を拡張している上に、RNS は将来の Identity Manager リリースではサポートされないため、Novell Audit への移行を計画することをお勧めします。

詳細については、『[Identity Manager 3.5.1 Logging and Reporting](#)』の「[Querying and Reporting](#)」を参照してください。

3.6 DirXML 1.1a ドライバ環境設定のアップグレード

DirXML 1.1a から Identity Manager 3.5.1 にアップグレードすると、ドライバ環境設定がアップグレードされることがあります。ドライバ環境設定のアップグレードには、次の 2 つの側面があります。

- ◆ Identity Manager ポリシーへの DirXML ルールの変換。これは、変換ツールにより行われ、ドライバの機能は拡張されません。従来のドライバはこの変換を行わずに実行されますが、変換を行うと Identity Manager iManager プラグインで既存のドライバ環境設定を参照できるようになります。

十分なテストを実施して、この手順が有効であることを確認する必要があります。また、ソリューションのテスト、分析、および開発が可能なテスト/開発環境を用意することを強くお勧めします。作業が滞りなく進むようになったら、最終製品を運用環境に展開します。

- ◆ ドライバポリシーのアップグレードによる新しい機能の追加。たとえば、これまでスタイルシートに含まれていた機能に対して、Identity Manager で DirXML スクリプトを使用できるようになります。このレベルの機能は、Identity Manager のエキスパートが行うことをお勧めします。

『[Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド](#)』の「[DirXML 1.1a から Identity Manager 3.5.1 形式へのドライバ環境設定のアップグレード](#)」および「[Identity Manager 環境での DirXML 1.1a ドライバの管理](#)」を参照してください。

別の方法として、Identity Manager ドライバ環境設定から始めて、DirXML 1.1a 環境設定と同じようにそれらの環境設定をカスタマイズすることもできます。

3.7 Identity Manager のアクティベート

アップグレードが完了したら、メタディレクトリエンジンとアップグレードしたすべてのドライバを 90 日以内にアクティベートにする必要があります。エンジンおよびドライバをアクティベートしなかった場合、90 日経過すると動作しなくなります。Identity Manager をアクティベートする方法については、[185 ページの第 6 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする」](#)を参照してください。

Identity Manager のインストール

4

この節では、Identity Manager および Identity Manager ドライバのインストールの要件と手順について説明します。

- ◆ 65 ページのセクション 4.1 「インストールの準備」
- ◆ 65 ページのセクション 4.2 「Identity Manager のコンポーネントとシステム要件」
- ◆ 65 ページのセクション 4.3 「NetWare への Identity Manager のインストール」
- ◆ 71 ページのセクション 4.4 「Windows への Identity Manager のインストール」
- ◆ 77 ページのセクション 4.5 「Windows での接続システムオプションのインストール」
- ◆ 81 ページのセクション 4.6 「UNIX/Linux プラットフォームでの GUI を使用した Identity Manager のインストール」
- ◆ 86 ページのセクション 4.7 「コンソールを使用した UNIX/Linux プラットフォームへの Identity Manager のインストール」
- ◆ 90 ページのセクション 4.8 「コンソールを使用した UNIX/Linux への接続システムのインストール」
- ◆ 93 ページのセクション 4.9 「ルート以外への Identity Manager のインストール」
- ◆ 95 ページのセクション 4.10 「インストール後のタスク」
- ◆ 96 ページのセクション 4.11 「カスタムドライバのインストール」

4.1 インストールの準備

Identity Manager をインストールする前に、39 ページの第 2 章「計画」を参照してください。

4.2 Identity Manager のコンポーネントとシステム要件

Novell® Identity Manager には、複数のシステムおよびプラットフォームの環境にインストール可能なコンポーネントが含まれています。システム構成によっては、適切なシステムに Identity Manager コンポーネントをインストールするために、Identity Manager インストールプログラムを複数回実行しなければならない場合があります。

29 ページの i 1-3§ 「Identity Manager のシステムコンポーネントと要件」は、Identity Manager のインストールコンポーネントと、各システムの要件を示しています。

4.3 NetWare への Identity Manager のインストール

この手順では、メタディレクトリサーバ、Web コンポーネント、および NetWare® のユーティリティのインストールについて説明します。始める前に、システムが 65 ページのセ

クシヨ ン 4.2 「Identity Manager のコンポーネントとシステム要件」 に示されている要件を満 たしていることを確認してください。

- 1 必要な Identity Manager の .iso イメージファイルをダウンロードします。Identity Manager の .iso イメージファイルは、Novell のダウンロードサイト (<http://download.novell.com>) からダウンロードできます。

Identity Manager の NetWare インストールは、Identity_Manager_3_5_1_NW_Win.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にあります。

- 2 ファイルを抽出してイメージファイルをディスクに保存したら、ディスクをサーバの CD ドライブに挿入して、ディスクをボリュームとしてマウントできるようにします。
- 3 NetWare GUI を起動し (サーバコンソールのプロンプトで STARTX と入力します)、`[Novell] > [インストール]` の順に選択します。
- 4 [インストール済みの製品] ウィンドウで [追加] を選択し、\NW ディレクトリにある Identity Manager の product.ini ファイルのパスを指定します。[OK] をクリックします。もう一度 [OK] をクリックして、Identity Manager のインストールプログラムのロードを開始します。
- 5 ファイルのコピーが完了すると、[Identity Manager 製品インストール] ページが表示されます。[次へ] をクリックしてインストールを開始します。



- 6 使用許諾契約を表示する言語を選択するか、またはデフォルト (英語) を使用します。

Identity Manager のインストールプログラムは、インストール先マシンの言語で自動的に実行されます。インストールプログラムがお使いのマシンで使用している言語に翻訳されていない場合は、デフォルトで英語が使用されます。

- 7 使用許諾契約を読み、[I Accept (使用許諾契約の条件に同意します)] をクリックします。
- 8 システムタイプ (メタディレクトリサーバを含む)、Web コンポーネント、およびユーティリティについて説明した [概要] ページを確認し、[次へ] をクリックして続行します。

この情報については、29 ページの表 1-3 も参照してください。

- 9 [Identity Manager のインストール] ページで、インストールするコンポーネントを選択します。詳細については、29 ページの表 1-3 を参照してください。



次のオプションを指定できます。通常のインストールでは、すべてのコンポーネントを選択します。

- ◆ **メタディレクトリサーバ:** メタディレクトリエンジンとサービスドライバがインストールされます。NetWare プラットフォームの場合、これらには、AVAYA、区切りテキスト、eDirectory™、GroupWise®、JDBC*、JMS*、LDAP、Linux/UNIX 設定、RACF*、SOAP、SIF*、Top Secret、および Work Order 用の Identity Manager ドライバが含まれます。このオプションを選択すると、eDirectory スキーマも拡張されます。

重要: このオプションをインストールするには、最新のパッチが適用された Novell eDirectory 8.7.3.6 以降と Security Services 2.0.5 (NMASTM 3.1.3) がインストールされている必要があります。メタディレクトリサーバコンポーネントは、Identity Manager のメタディレクトリエンジンを実行する場所にインストールします。適切なバージョンの NMASTM がインストールされていない場合は、警告メッセージが表示され、Identity Manager の機能を使用できません。

- ◆ **接続システム:** 接続システムと、メタディレクトリエンジンを実行するサーバの間にリンクを確立できるようにするリモートローダがインストールされます。Identity Manager と NetWare の組み合わせでインストールする場合、このオプションは使用できないため [インストール] 画面に表示されません。
- ◆ **Identity Manager Web コンポーネント:** このオプションでは、Identity Manager プラグインとドライバ環境設定がインストールされます。Novell iManager は、このオプションをインストールする前にインストールする必要があります。

- ◆ ユーティリティ: JDBC ドライバの他のスクリプトと、他のドライバのユーティリティがインストールされます。通常のドライバには、接続ユーティリティがありません。ドライバユーティリティには次が含まれている場合があります。
 - ◆ JDBC ドライバ用 SQL スクリプト
 - ◆ JMS コンポーネント
 - ◆ PeopleSoft コンポーネント
 - ◆ ライセンス監査ツール
 - ◆ Active Directory ディスカバリツール
 - ◆ Lotus Notes ディスカバリツール
 - ◆ SAP ユーティリティ

別のユーティリティを使うと、Identity Manager 用の Novell Audit システムコンポーネントを登録できます(このユーティリティをインストールするには、有効なバージョンの eDirectory と Novell Audit ログサーバがツリーにインストールされている必要があります)。

10 [次へ] をクリックします。

11 インストールするドライバを選択し、[次へ] をクリックします。



エンジンインストールのドライバを選択するページには、対応するプラットフォームにどのドライバをインストールできるかが表示されます。たとえば、NetWare サーバでは、Windows Active Directory ドライバはインストールできません。

デフォルトでは、そのオプションで選択可能なすべてのドライバが選択されています。別のドライバが必要になった場合に後でインストールプログラムを実行しなくてもよいように、選択されたドライバファイルをすべてインストールすることをお勧めします。ドライバファイルは、iManager または Designer を使用して設定された後、展開されるまで使用されません。

一部のドライバをインストールしない場合は、[すべてクリア] をクリックして必要なドライバを選択するか、またはインストールしないドライバをクリックして選択解除します。将来別のドライバが必要になった場合は、このインストールプログラムを再度実行して、選択しなかったドライバをインストールする必要があります。

Designer を使用してドライバファイルを作成、変更、および展開することもできます。

- 12 製品のアクティベーションに関する情報メッセージが表示されたら、[OK] をクリックします。

ドライバはインストール後 90 日以内にアクティベートする必要があります。アクティベートしなかった場合、ドライバはシャットダウンします。

- 13 [スキーマ拡張] ページで、次の情報を指定します。

- ◆ **ユーザ名** : スキーマを拡張する権限を持つユーザのユーザ名を指定します (CN=admin,O=novell などの LDAP 形式)。このページで、eDirectory スキーマを拡張する十分な権利を持つユーザ (Admin など、ツリーのルートに対するスーパーバイザ権を持つユーザ) を選択します。
- ◆ **ユーザパスワード** : ユーザのパスワードを指定し、

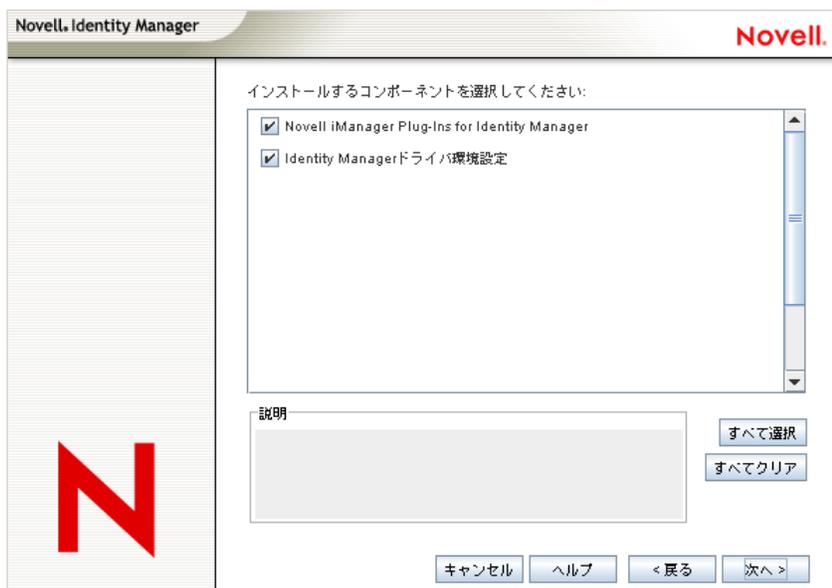
- 14 [次へ] をクリックします。

ユーザ情報が有効な場合、[コンポーネント] ページの 1 ページ目 (2 ページ中) が表示されます。

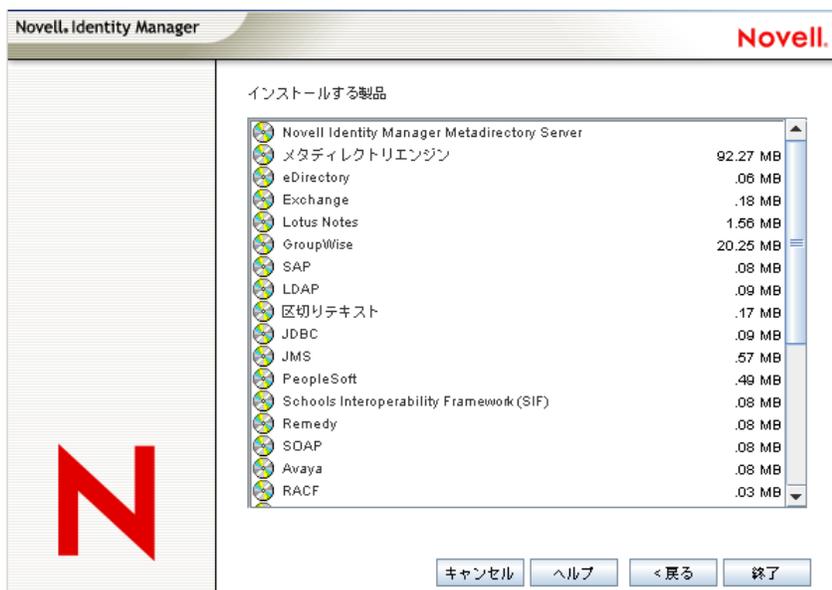
サーバに Novell Audit システムがインストールされている場合は、[コンポーネント] ページの 1 ページ目で、[Novell Audit System Components for Identity Manager] が選択されています。インストールされていない場合は、未選択です。[アプリケーションコンポーネント] を選択すると、JDBC や PeopleSoft などのアプリケーションシステムのコンポーネントがインストールされます。

インストーラが既存のドライバ設定ファイルを検出すると、それらはバックアップパスに移動されます。

- 15 [次] をクリックします。



- 16 [コンポーネント] ページの 2 ページ目では、ユーティリティをインストールします。プラットフォーム固有のユーティリティは、インストール先のプラットフォームで使用できない場合は淡色表示になります。NetWare の場合、選択できるのは SQL Scripts for JDBC Driver および JMS コンポーネントのみです。必要なコンポーネントを選択して、[次へ] をクリックします。
- 17 [概要] ページで選択内容を確認して、[終了] をクリックします。



Novell Identity Manager のインストールプロセスにより、eDirectory はシャットダウンされ、スキーマが拡張されます。インストールプロセスにより、選択した製品とコンポーネントのインストールが開始されます。



- 18 インストールが完了すると、[インストールが完了しました] ダイアログボックスが表示されるので、[閉じる] をクリックします。
- 19 インストール済みのプラグインを iManager に認識させるため、ここで Web サービスを再起動し、Tomcat を再起動します。

Identity Manager ドライバをインストールした場合は、iManager 2.6 以降の Identity Manager 設定ウィザードを使用するか、Designer を使用してドライバを設定できます。

4.4 Windows への Identity Manager のインストール

この手順では、Windows でのメタディレクトリサーバ、Web コンポーネント、およびユーティリティのインストールについて説明します。

始める前に、システムが 29 ページの表 1-3 に示されている要件を満たしていることを確認してください。

- 1 必要な Identity Manager の .iso イメージファイルをダウンロードします。Identity Manager の .iso イメージファイルは、Novell のダウンロードサイト (<http://download.novell.com>) からダウンロードできます。

Identity Manager の Windows インストールは、Identity_Manager_3_5_1_NW_Win.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にあります。

- 2 ファイルを抽出したら、\NT ディレクトリにある install.exe ファイルをダブルクリックします。

ファイルのコピーが完了すると、[Identity Manager 製品インストール] ページが表示されます。



- 3 [次へ] をクリックして、インストールを開始します。
- 4 使用許諾契約を表示する言語を選択するか、またはデフォルト (英語) を使用します。

Identity Manager のインストールプログラムは、インストール先マシンの言語で自動的に実行されます。インストールプログラムがお使いのマシンで使用している言語に翻訳されていない場合は、デフォルトで英語が使用されます。

- 5 使用許諾契約を読み、[I Accept (使用許諾契約の条件に同意します)] をクリックします。
- 6 システムタイプ (メタディレクトリサーバを含む)、Web コンポーネント、およびユーティリティについて説明した [概要] ページを確認し、[次へ] をクリックして続行します。

この情報については、29 ページの表 1-3 も参照してください。

7 [Identity Manager のインストール] ページで、インストールするコンポーネントを選択します。



次のオプションを指定できます。

- ◆ **メタディレクトリサーバ**：メタディレクトリエンジンとサービスドライバがインストールされます。これらには、Active Directory、Avaya、区切りテキスト、eDirectory、Exchange、GroupWise、JDBC、JMS、LDAP、Linux/UNIX 設定、Lotus Notes、PeopleSoft、RACF、Remedy、SOAP、SAP、SIF、および Top Secret 用の Identity Manager ドライバが含まれます。このオプションを選択すると、eDirectory スキーマも拡張されます。

重要：このオプションをインストールするには、最新のパッチが適用された Novell eDirectory 8.7.3.6 または 8.8 および Security Services 2.0.5 (NMAS 3.1.3) がインストールされている必要があります。メタディレクトリサーバコンポーネントは、Identity Manager のメタディレクトリエンジンを実行する場所にインストールします。適切なバージョンの NMAS がインストールされていない場合は、警告メッセージが表示され、Identity Manager の機能を使用できません。

- ◆ **接続システム**：接続システムと、メタディレクトリエンジンを実行するサーバの間にリンクを確立できるようにするリモートローダがインストールされます。Windows の場合、このオプションを選択すると、Active Directory、Avaya、区切りテキスト、eDirectory、Exchange、GroupWise、JDBC、JMS、LDAP、Linux/UNIX 設定、Lotus Notes、PeopleSoft、RACF、Remedy、SOAP、SAP、SIF、および Top Secret 用の各ドライバがインストールされます。

接続システムは、アプリケーションサーバから、メタディレクトリエンジンを実行する eDirectory ベースのサーバにアプリケーション接続できるようにするためにインストールします。この手順は、77 ページのセクション 4.5 「Windows での接続システムオプションのインストール」で説明されています。

- ◆ **Web コンポーネント**：このオプションでは、ドライバ環境設定、iManager プラグイン、アプリケーションスクリプトおよびユーティリティがインストールされます。

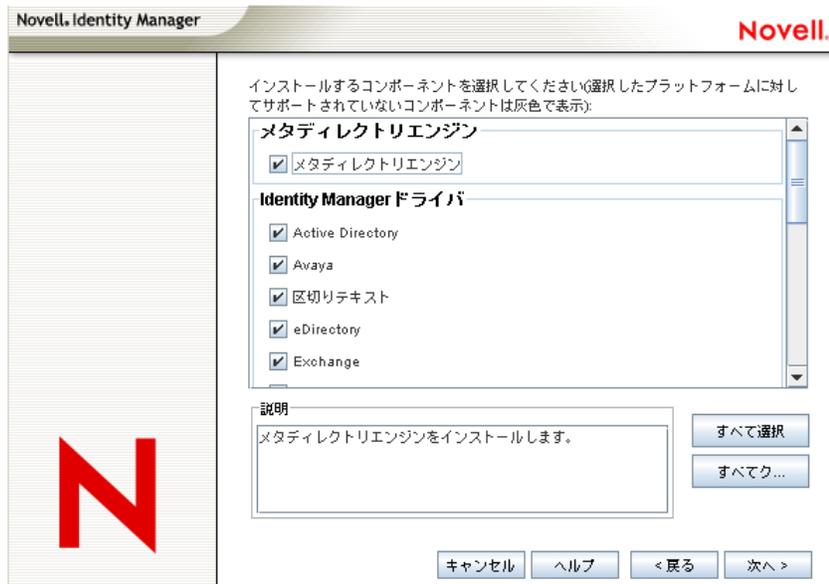
Novell iManager は、このオプションをインストールする前にインストールする
必要があります。

- ◆ ユーティリティ: JDBC ドライバの他のスクリプトと、他のドライバのユーティ
リティがインストールされます。通常のドライバには、接続ユーティリティがあ
りません。ドライバユーティリティには次が含まれている場合があります。
 - ◆ JDBC ドライバ用 SQL スクリプト
 - ◆ JMS コンポーネント
 - ◆ PeopleSoft コンポーネント
 - ◆ ライセンス監査ツール
 - ◆ Active Directory ディスカバリツール
 - ◆ Lotus Notes ディスカバリツール
 - ◆ SAP ユーティリティ
 - ◆ スクリプティングドライバインストーラおよび環境設定ツール

別のユーティリティを使うと、Identity Manager 用の Novell Audit システムコン
ポーネントを登録できます(このユーティリティをインストールするには、有効
なバージョンの eDirectory と Novell Audit ログサーバがツリーにインストールさ
れている必要があります)。

8 [次へ] をクリックします。

9 インストールするドライバを選択し、[次へ] をクリックします。



エンジンインストールのドライバを選択するページには、対応するプラットフォーム
にどのドライバをインストールできるかが表示されます。デフォルトでは、選択可能
なすべてのドライバが選択されています。

別のドライバが必要になった場合に後でインストールプログラムを実行しなくてもよ
いように、ドライバファイルをすべてインストールすることをお勧めします。ドライ
バファイルは、iManager または Designer を使用して設定されるまで使用されません。

10 製品のアクティベーションに関する情報メッセージが表示されたら、[OK] をクリッ
クします。

ドライバはインストール後 90 日以内にアクティベートする必要があります。アクティベートしなかった場合、ドライバはシャットダウンします。

- 11 Password Synchronization のアップグレードの警告メッセージが表示されたら、[OK] をクリックします。

このメッセージは、Password Synchronization 1.0 を実行している Windows のものです。1.0 への後方互換性が必要な場合、ドライバ環境設定ファイルに他のポリシーを追加する必要があります。ポリシーがない場合、Password Synchronization 1.0 は既存のアカウントには機能しますが、新しいアカウントや名前が変更されたアカウントでは機能しません。

- 12 [スキーマ拡張] ページで、次の情報を指定します。

- ◆ **ユーザ名** : eDirectory スキーマを拡張する管理を持つユーザ (Admin など、ツリーのルートに対してスーパーバイザ権を持つユーザ) のユーザ名を指定します (CN=admin,O=novell などの LDAP 形式)。
- ◆ **ユーザパスワード** : ユーザのパスワードを指定し、

- 13 [次へ] をクリックします。ユーザ情報が有効な場合、[コンポーネント] ページの 1 ページ目 (2 ページ中) が表示されます。

ツリー上に有効なバージョンの eDirectory と Novell Audit ログインサーバがインストールされている場合は、[インストールするコンポーネントの選択] ページで [Identity Manager の Novell Audit システムコンポーネントを登録する] が選択されています。インストールされていない場合は、未選択です。[アプリケーションコンポーネント] を選択すると、JDBC や PeopleSoft などのアプリケーションシステムのコンポーネントがインストールされます。

インストーラが既存のドライバ設定ファイルを検出すると、それらはバックアップパスに移動されます。

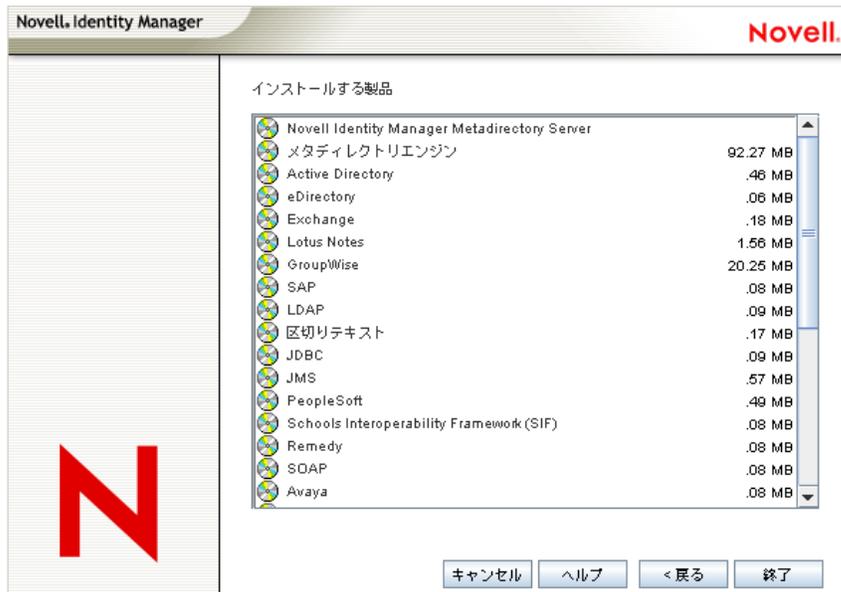
[Novell Identity Manager 用 Client Login Extension] を選択すると、Client Login Extension のインストーラがファイルシステムにコピーされます。Novell Identity Manager 用 Client Login Extension の詳細については、『Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド』の「Novell Identity Manager 3.5.1 用 Client Login Extension」を参照してください。

- 14 インストールするコンポーネントを選択し、[次へ] をクリックします。



- 15 SSL ポート 443 を使用して iManager 用の Identity Manager プラグインをインストールするための追加のページが表示されます。[次へ] をクリックします。
- 16 [コンポーネント] ページの 2 ページ目では、ユーティリティをインストールします。Windows へのインストールでは、アプリケーションコンポーネントがあるディレクトリを示す追加のページが表示されます。デフォルトでは、C:\Novell\NDS\DirXMLUtilities です。[次へ] をクリックします。
- 17 [インストールするコンポーネントの選択] ページでは、プラットフォーム固有のユーティリティは、インストール先のプラットフォームで使用できない場合は淡色表示になります。Windows の場合、JDBC ドライバ用 SQL スクリプト、JMS コンポーネント、PeopleSoft コンポーネント、ライセンス監査ツール、Active Directory 検出ツール、Lotus Notes 検出ツール、SAP ユーティリティ、およびスクリプティングドライバインストーラと環境設定ツールを含むすべてのコンポーネントを使用できます。必要なコンポーネントを選択して、[次へ] をクリックします。
- 18 Novell Identity Manager 用 Client Login Extension をファイルシステムにコピーするよう選択した場合は、インストールパスを選択するか、またはデフォルトのパスである C:\Novell\NDS\DirXMLUtilities\cle を使用します。[次へ] をクリックします。

- 19 [概要] ページで選択内容を確認して、[終了] をクリックします。



Novell Identity Manager のインストールプロセスにより、eDirectory はシャットダウンされ、スキーマが拡張されます。インストールプロセスにより、選択した製品とコンポーネントのインストールが開始されます。

- 20 インストールが完了すると、[インストールが完了しました] ダイアログボックスが表示されるので、[閉じる] をクリックします。
- 21 インストール済みのプラグインを iManager に認識させるため、ここで Web サービスを再起動し、Tomcat を再起動します。

Identity Manager ドライバをインストールした場合は、iManager 2.6 以降の Identity Manager 設定ウィザードを使用するか、Designer を使用してドライバを設定できます。

4.5 Windows での接続システムオプションのインストール

71 ページのセクション 4.4 「Windows への Identity Manager のインストール」では、Windows でのメタディレクトリサーバ、Web コンポーネント、およびユーティリティのインストールについて説明しました。さらに、Windows サーバでは接続システムオプションも使用できます。

eDirectory サービスとメタディレクトリエンジンのオーバーヘッドをアプリケーションサーバにかけないようにするには、接続システムオプションを使用します。リモートローダにより、他の場所でアクセス可能なアプリケーションをロードせずに、Identity Manager を使用して必要な同期を行えるようになります。

始める前に、システムが **29 ページの表 1-3** に示されている要件を満たしていることを確認してください。

- 1 必要な Identity Manager の .iso イメージファイルをダウンロードします。Identity Manager の .iso イメージファイルは、**Novell のダウンロードサイト** (<http://download.novell.com>) からダウンロードできます。

Identity Manager の Windows インストールは、Identity_Manager_3_5_1_NW_Win.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にあります。

- 2 \NT ディレクトリから install.exe を実行します。
- 3 [ようこそ] の情報を読み、[次へ] をクリックします。
- 4 使用許諾契約を表示する言語を選択するか、またはデフォルト (英語) を使用します。

Identity Manager のインストールプログラムは、インストール先マシンの言語で自動的に実行されます。インストールプログラムがお使いのマシンで使用している言語に翻訳されていない場合は、デフォルトで英語が使用されます。

- 5 使用許諾契約を読み、[I Accept (使用許諾契約の条件に同意します)] をクリックします。
- 6 さまざまなシステムおよびコンポーネントに関する [概要] ページを確認し、[次へ] をクリックしてインストールを開始します。
- 7 接続システムオプションを選択するには、まず [すべてクリア] をクリックしてから、**接続システム**とユーティリティを選択します。iManager ユーティリティがこのサーバにインストールされており、Identity Manager の Identity Manager プラグインとドライバ環境設定を追加する場合は、**Web** コンポーネントも選択してください。



- ◆ **接続システム** : 接続システムと、メタディレクトリエンジンを実行するサーバの間にリンクを確立できるようにするリモートローダがインストールされます。Windows の場合、このオプションを選択すると、Active Directory、Avaya、区切りテキスト、eDirectory、Exchange、GroupWise、JDBC、JMS、LDAP、Linux/

UNIX 設定、Lotus Notes、PeopleSoft、RACF、Remedy、SOAP、SAP、SIF、および Top Secret 用の各ドライバがインストールされます。

- ◆ ユーティリティ : JDBC ドライバの他のスクリプトと、他のドライバのユーティリティがインストールされます。通常のドライバには、接続ユーティリティがありません。ドライバユーティリティには次が含まれている場合があります。
 - ◆ JDBC ドライバ用 SQL スクリプト
 - ◆ JMS コンポーネント
 - ◆ PeopleSoft コンポーネント
 - ◆ ライセンス監査ツール
 - ◆ Active Directory ディスカバリツール
 - ◆ Lotus Notes ディスカバリツール
 - ◆ SAP ユーティリティ
 - ◆ スクリプティングドライバインストーラおよび環境設定ツール

別のユーティリティを使うと、Identity Manager 用の Novell Audit システムコンポーネントを登録できます (このユーティリティをインストールするには、有効なバージョンの eDirectory と Novell Audit ログサーバがツリーにインストールされている必要があります)。

8 [次へ] をクリックします。

9 [インストール先] ページで、[次へ] をクリックしてデフォルトのディレクトリパス (C:\Novell\RemoteLoader) を受け入れます。



- 10 [Select Drivers for Remote Loader のインストール] ページで、ロードする Identity Manager ドライバを選択して、[次へ] をクリックします。



選択できるドライバには、Active Directory、Avaya、区切りテキスト、eDirectory、Exchange、GroupWise、JDBC、JMS、LDAP、Linux/UNIX 設定、Lotus Notes、PeopleSoft、RACF、Remedy、SOAP、SAP、SIF、および Top Secret が含まれます。

一部のドライバをインストールしない場合は、[すべてクリア] をクリックして必要なドライバを選択するか、またはインストールしないドライバをクリックして選択解除します。将来別のドライバが必要になった場合は、このインストールプログラムを再度実行して、選択しなかったドライバをインストールする必要があります。Designer を使用してドライバファイルを作成、変更、および展開することもできます。

- 11 製品のアクティベーションに関する情報メッセージが表示されたら、[OK] をクリックします。

ドライバはインストール後 90 日以内にアクティベートする必要があります。アクティベートしなかった場合、ドライバはシャットダウンします。

- 12 Password Synchronization のアップグレードの警告メッセージが表示されたら、[OK] をクリックします。

このメッセージは、Password Synchronization 1.0 を実行している Windows のものです。1.0 への後方互換性が必要な場合、ドライバ環境設定ファイルに他のポリシーを追加する必要があります。ポリシーがない場合、Password Synchronization 1.0 は既存のアカウントには機能しますが、新しいアカウントや名前が変更されたアカウントでは機能しません。

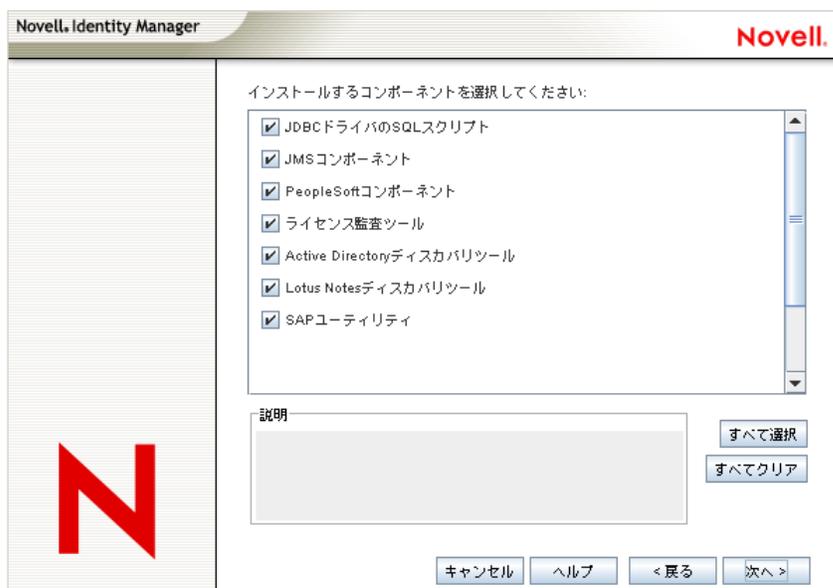
- 13 リモートローダコンソールのショートカットをデスクトップに作成する場合は、[はい] をクリックします。ショートカットを作成しない場合は、[いいえ] をクリックします。

ツリー上に有効なバージョンの eDirectory と Novell Audit ログインサーバがインストールされている場合は、[インストールするコンポーネントの選択] ページで [Identity Manager の Novell Audit システムコンポーネントを登録する] が選択されています。インストールされていない場合は、未選択です。[アプリケーションコン

ポーネント] を選択すると、JDBC や PeopleSoft などのアプリケーションシステムのコンポーネントがインストールされます。

[Novell Identity Manager 用 Client Login Extension] を選択すると、Client Login Extension のインストーラがファイルシステムにコピーされます。Novell Identity Manager 用 Client Login Extension の詳細については、『Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド』の「Novell Identity Manager 3.5.1 用 Client Login Extension」を参照してください。

- 14 インストールするコンポーネントを選択し、[次へ] をクリックします。
- 15 [次へ] をクリックして、Identity Manager ユーティリティのデフォルトのインストールパス (C:\Novell\NDS\DirXMLUtilities) を受け入れます。
- 16 インストールするドライバコンポーネントとユーティリティを選択して、[次へ] をクリックします。



- 17 Novell Identity Manager 用 Client Login Extension をファイルシステムにコピーするよう選択した場合は、インストールパスを選択するか、またはデフォルトのパスである C:\Novell\NDS\DirXMLUtilities\cle を使用します。[次へ] をクリックします。
- 18 [概要] ページに表示されている項目を確認します。承認する場合は、[終了] をクリックしてコンポーネントをインストールします。
- 19 [閉じる] をクリックして、インストールプログラムを終了します。

4.6 UNIX/Linux プラットフォームでの GUI を使用した Identity Manager のインストール

始める前に、システムが 65 ページのセクション 4.2 「Identity Manager のコンポーネントとシステム要件」に示されている要件を満たしていることを確認してください。

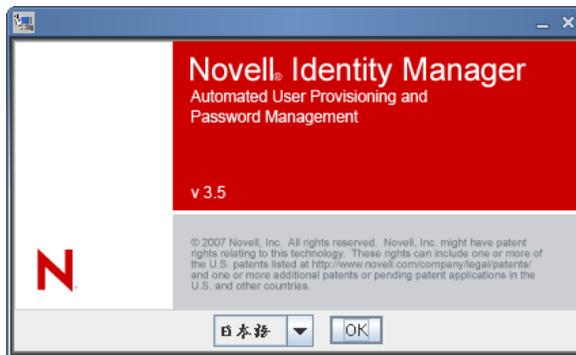
- 1 必要な Identity Manager の .iso イメージファイルをダウンロードします。Identity Manager の .iso イメージファイルは、Novell のダウンロードサイト (<http://download.novell.com>) からダウンロードできます。

Identity Manager の Linux インストールは、Identity_Manager_3_5_1_Linux.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にありますが、AIX および Solaris は Identity_Manager_3_5_1_Unix.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にあります。

- 2 ホストコンピュータで、root としてログインします。
- 3 Linux に GUI をインストールするには、ルートディレクトリにある install.bin ファイルをクリックします。インストールファイルをターミナルモードで実行するか、それとも表示モードで実行するかを尋ねるメッセージが表示されます。[Terminal] を選択します。install.bin ファイルが Xwindows が存在するかどうかをチェックし、存在する場合は、Identity Manager の Linux 用 GUI インストールプログラムを起動します。

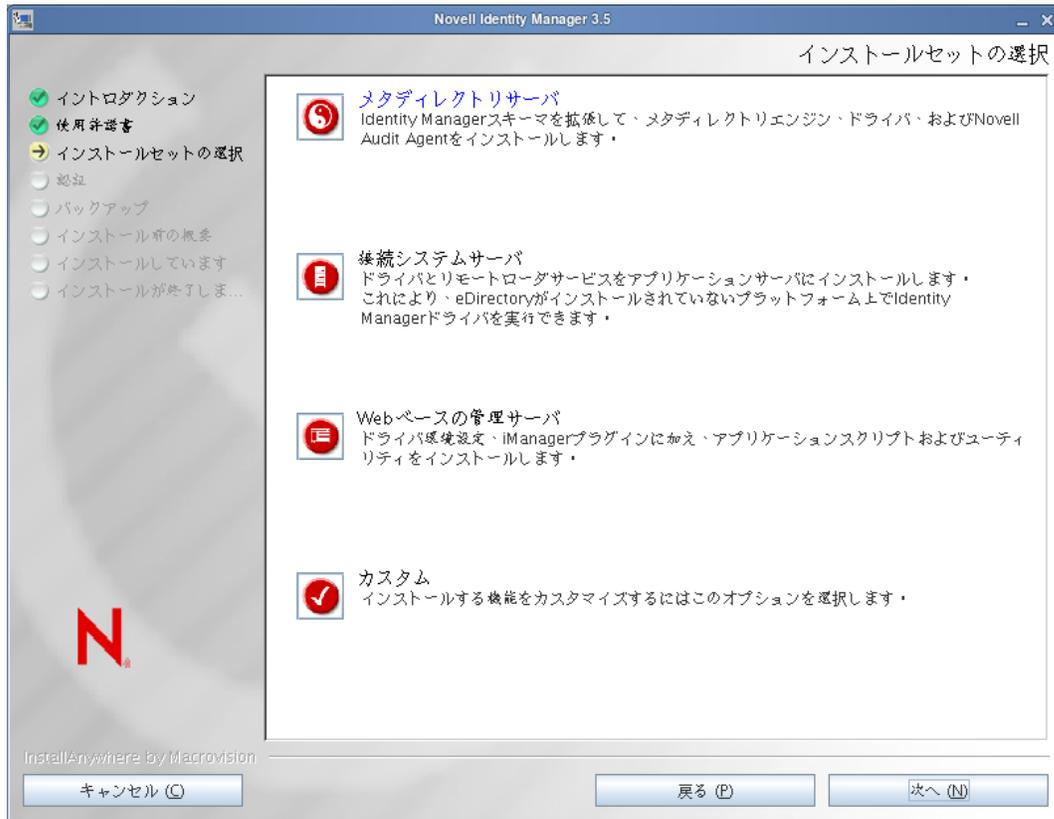
注: install.bin をクリックしても GUI インストールプログラムが起動しない場合は、ターミナルウィンドウを開いて install.bin を手動で実行してください。Solaris サーバで eDirectory 8.8.x を実行している場合は、GUI なしの Identity Manager のインストールプログラムを実行します。詳細については、[86 ページのセクション 4.7 「コンソールを使用した UNIX/Linux プラットフォームへの Identity Manager のインストール」](#)を参照してください。

- 4 インストールプログラムを実行する言語を選択するか、デフォルト (英語) を使用します。[OK] をクリックします。



- 5 [ようこそ] 画面の情報を確認し、[次へ] をクリックしてインストールを続行します。

- 6 使用許諾契約を読み、[I accept the terms of the License Agreement (使用許諾契約の条件に同意します)], [次へ] の順に選択します。



- 7 インストールするインストールセットを指定します。インストールセットには、次のコンポーネントが含まれています。

- ◆ **メタディレクトリサーバ:** メタディレクトリエンジンおよびサービスドライバ、Identity Manager ドライバ、Novell Audit エージェントがインストールされ、eDirectory スキーマが拡張されます。

このオプションをインストールするには、最新のサポートパックが適用された Novell eDirectory 8.7.3.6 以降および Security Services 2.0.5 (NMAS 3.1.3) がインストールされている必要があります。これらがインストールされていない場合、Identity Manager のインストールプロセスは停止します。

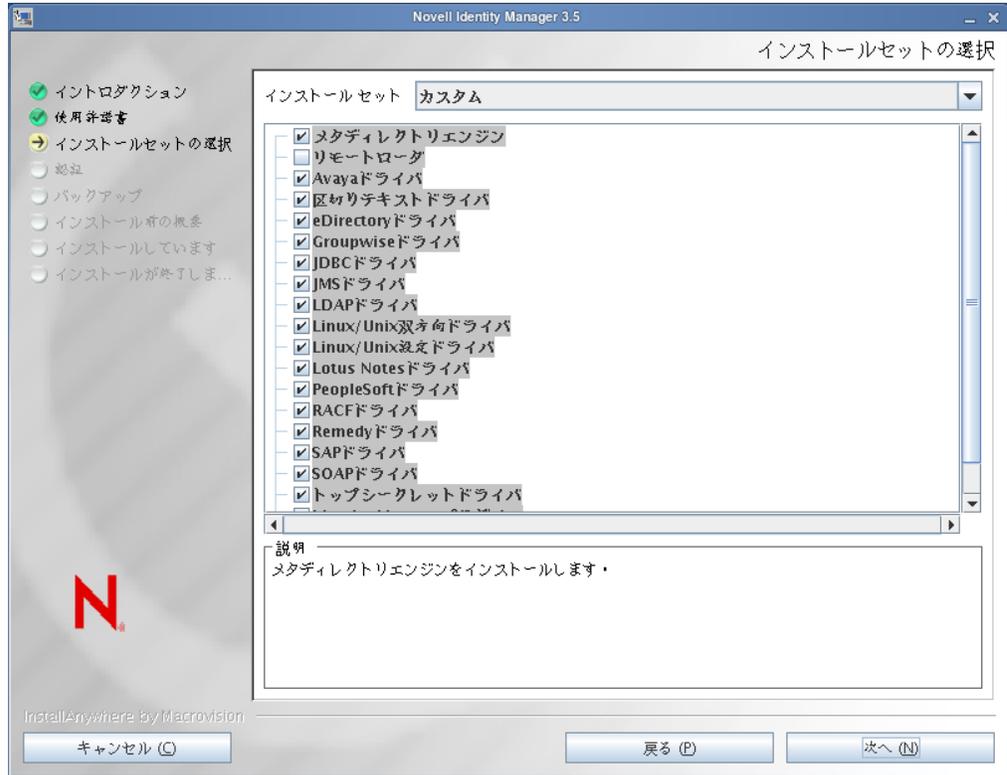
- ◆ **接続システムサーバ:** リモートローダと、Avaya、区切りテキスト、GroupWise、JDBC、JMS、LDAP、Linux/UNIX 設定、Linux/UNIX Bidirectional、Lotus Notes、PeopleSoft、RACF、Remedy、SAP、SIF、Top Secret、および Work Order の各ドライバがインストールされます。eDirectory サービスとメタディレクトリエンジンのオーバーヘッドをアプリケーションサーバにかけないようにするには、接続システムオプションを選択します。
- ◆ **Web ベースの管理サーバ:** Identity Manager プラグインと Identity Manager ドライバポリシーがインストールされます。

Novell iManager は、このオプションをインストールする前にインストールする必要があります。

デフォルトでは、Identity Manager ドライバユーティリティは Linux/UNIX インストールにはインストールされません。Identity Manager のインストール CD から

Identity Manager サーバにユーティリティを手動でコピーする必要があります。すべてのユーティリティはプラットフォームの\setup\utilities ディレクトリにあります。

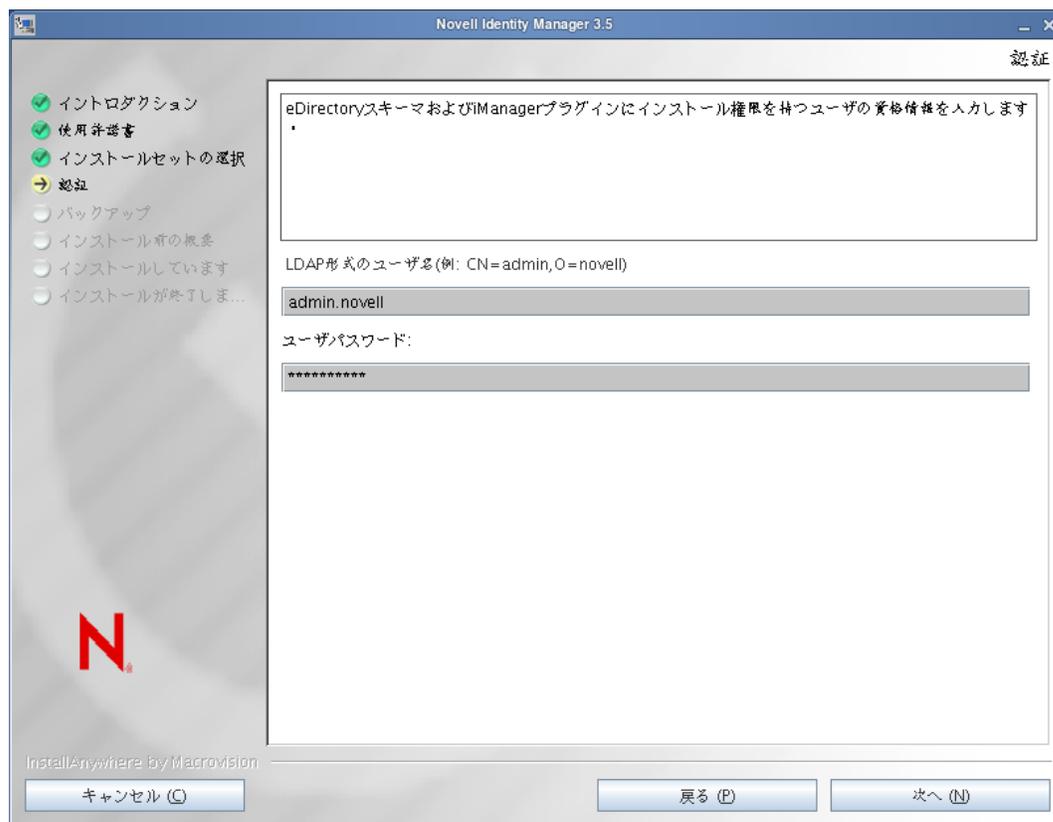
- ◆ **カスタマイズ:** すべてのコンポーネントのリストから選択した特定のコンポーネントがインストールされます。



[戻る] を選択すると、前にメニューに戻ってインストールオプションを変更できます。

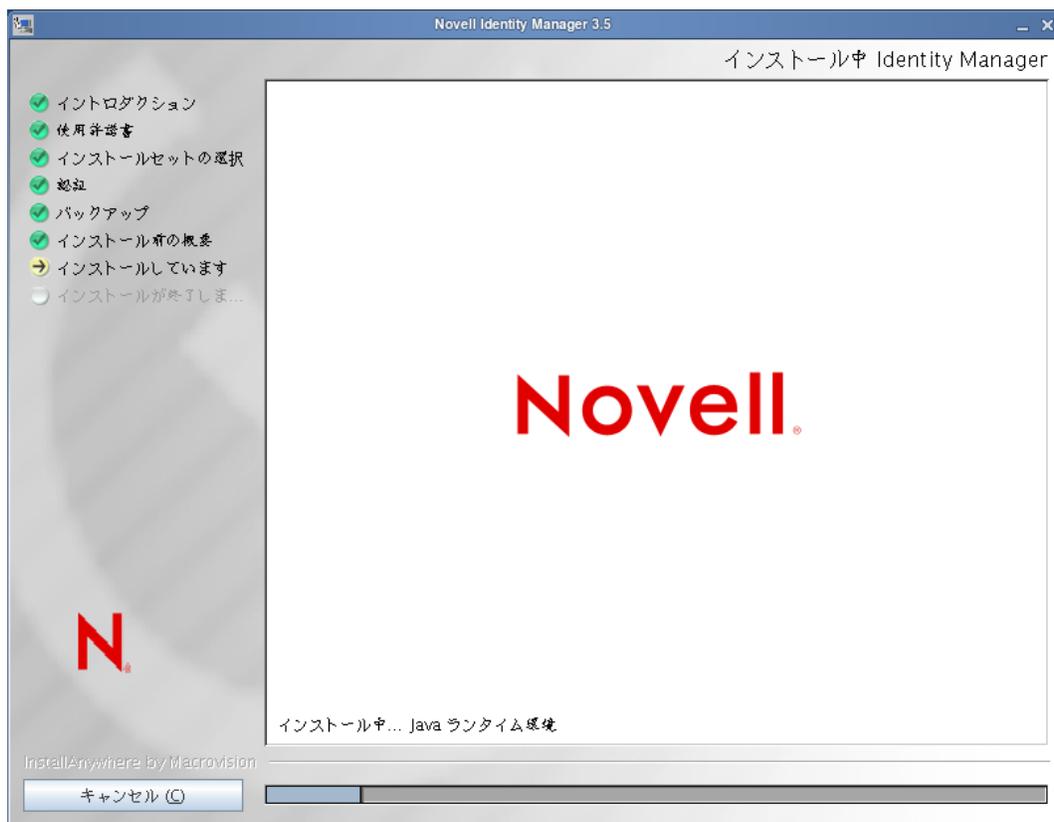
- 8 (オプション) 選択したオプション (メタディレクトリサーバなど) と、eDirectory v8.8 を実行しているかどうかに応じて、LD_LIBRARY_PATH 環境変数パスを設定するようプロンプトが表示されます。これを行うには、/opt/novell/eDirectory/bin/ndspath と入力して /opt/novell/eDirectory/bin/ndspath スクリプトを実行した後、インストールを再実行します。
- 9 メタディレクトリサーバをインストールするよう選択した場合は、LDAP ユーザ名 (CN=admin,O=novell) とパスワードを入力するようメッセージが表示されます。

eDirectory スキーマを拡張する十分な権利を持つユーザ (admin など、ツリーのルートに対するスーパーバイザ権を持つユーザ) を選択します。



重要 : (Solaris へのインストールの場合のみ) eDirectory が存在するサーバと同じサーバに Web ベースの管理サーバをインストールする場合、Web サーバのセキュアポートを入力するようメッセージが表示されたら、デフォルト値を変更して、空いているポート (8443 など) に変更してください。

- 10 [インストール前の概要] ページに藤されている情報が正しいことを確認し、[インストール] をクリックしてパッケージのインストールを開始します。



メタディレクトリエンジンとスキーマファイルをインストールする際、eDirectory が一時的にシャットダウンされます。デフォルトでは、使用可能なすべてのドライバがインストールされるため、別のドライバが必要になった場合に後でインストールプログラムを実行する必要はありません。ドライバファイルは、iManager または Designer を使用して設定された後、展開されるまで使用されません。

- 11 [インストールが完了しました] ページが表示されたら、[完了] をクリックして、インストールプログラムを閉じます。

4.7 コンソールを使用した UNIX/Linux プラットフォームへの Identity Manager のインストール

始める前に、システムが 29 ページの表 1-3 に示されている要件を満たしていることを確認してください。

- 1 必要な Identity Manager の .iso イメージファイルをダウンロードします。Identity Manager の .iso イメージファイルは、Novell のダウンロードサイト (<http://download.novell.com>) からダウンロードできます。

Identity Manager の Linux インストールは、Identity_Manager_3_5_1_Linux.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にありますが、AIX および Solaris は Identity_Manager_3_5_1_Unix.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にあります。

- 2 ホストコンピュータで、root としてログインします。

3 セットアップディレクトリから .bin ファイルを実行します。

現在の作業ディレクトリを、インストールファイルが存在する setup ディレクトリに変更します。続いて、次のコマンドのいずれかを入力してインストールを実行します。

プラットフォーム	パスの例	インストールファイル
Linux	linux/setup/	idm_linux.bin
Solaris	solaris/setup/	idm_solaris.bin
AIX	aix/setup/	idm_aix.bin

これらのパスは、インストールイメージのルートと相対的なもので、インストールイメージを展開した場所、または CD をマウントした場所になります。また、ダウンロードした ISO イメージによっても変わります。たとえば、Linux は Identity_Manager_3_5_1_Linux.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にありますが、AIX と Solaris は Identity_Manager_3_5_1_Unix.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にあります。

現在の作業ディレクトリをインストールプログラムが存在する場所にしないと、インストールプログラムはインストールするパッケージを見つけることができません。

4 インストールプログラムを実行する言語を選択するか、デフォルト (英語) を使用します。数字を入力して、<Enter> キーを押します。

```
linuxWM:/media/IDM3_5_Lin_NW_Win/linux/setup # ./idm_linux.bin
Preparing to install...
Extracting the JRE from the installer archive...
Unpacking the JRE...
Extracting the installation resources from the installer archive...
Configuring the installer for this system's environment...

Launching installer...

Preparing CONSOLE Mode Installation...

=====
Choose Locale...
-----

    1- English
    ->2- 日本語

CHOOSE LOCALE BY NUMBER: █
```

5 [ようこそ] の情報を確認し、<Enter> キーを押してインストールを続行します。

```
CHOOSE LOCALE BY NUMBER: 2
=====
Identity Manager                               (created with InstallAnywhere by Macrovision)
=====

イントロダクション
-----

Novell Identity Manager 3.5のインストールへようこそ。

ご使用のシステムの構成によっては、Identity Managerのコンポーネントを適切なシステムにインストールするために、このインストールプログラムを数回実行する必要があります。システムには次のようなものが考えられます。

* メタディレクトリサーバ
* 接続システムサーバ
* Webベースの管理サーバ

続行するには <ENTER> キーを押します。 : █
```

6 <Enter> キーを押して使用許諾契約を最後まで確認し、使用条件に同意する場合は Y と入力します。同意しない場合は、N と入力してインストールプログラムを終了します。

```
=====
インストールセットの選択
-----

このインストーラでインストールするインストール セットを選択してください。

->1- メタディレクトリサーバ
   2- 接続システムサーバ
   3- Webベースの管理サーバ

   4- カスタマイズ...

インストール セットの番号を入力するか、デフォルトを使用する場合は <ENTER> キーを押してください。
: █
```

7 インストールするインストールセットの適切な番号(1～4)を指定します。インストールセットには、次のコンポーネントが含まれています。

- **1- メタディレクトリサーバ** : メタディレクトリエンジンおよびサービスドライバ、Identity Manager ドライバ、Novell Audit エージェントがインストールされ、eDirectory スキーマが拡張されます。

このオプションをインストールするには、最新のサポートパックが適用された Novell eDirectory 8.7.3.6 または 8.8 および Security Services 2.0.5 (NMS 3.1.3) がインストールされている必要があります。これらがインストールされていない場合、Identity Manager のインストールプロセスは停止します。

- **2- 接続システムサーバ** : リモートローダと、Avaya、区切りテキスト、GroupWise、JDBC、JMS、LDAP、Linux/UNIX 設定、Linux/UNIX Bidirectional、Lotus Notes、PeopleSoft、RACF、Remedy、SAP、SIF、Top Secret、および Work Order の各ドライバがインストールされます。eDirectory サービスとメタディレクトリエンジンのオーバーヘッドをアプリケーションサーバにかけないようにするには、[接続システムサーバ] オプションを選択できます。
- **3- Web ベースの管理サーバ** : Identity Manager プラグインと Identity Manager ドライバポリシーがインストールされます。

Novell iManager は、このオプションをインストールする前にインストールする必要があります。

デフォルトでは、Identity Manager ドライバユーティリティは Linux/UNIX インストールにはインストールされません。Identity Manager のインストール CD から

Identity Manager サーバにユーティリティを手動でコピーする必要があります。
すべてのユーティリティはプラットフォームの `\setup\utilities` ディレクトリにあります。

- **4- カスタマイズ:** すべてのコンポーネントのリストから選択した特定のコンポーネントがインストールされます。

インストール セット
メタディレクトリサーバ

製品 コンポーネント:
SAP ドライバ,
eDirectory ドライバ,
LDAP ドライバ,
メタディレクトリエンジン,
JDBC ドライバ,
区切りテキスト ドライバ,
Lotus Notes ドライバ,
Groupwise ドライバ,
Avaya ドライバ,
SOAP ドライバ,
Remedy ドライバ,
PeopleSoft ドライバ,
JMS ドライバ,
Linux/Unix 双方向 ドライバ,
Linux/Unix 設定 ドライバ,
RACF ドライバ,
トップシークレット ドライバ

続行するには <ENTER> キーを押します。: █

prev と入力すると、前のメニューに戻ってインストールオプションを変更できます。

- 8 (オプション) 選択したオプション (メタディレクトリサーバなど) と、eDirectory v8.8 を実行しているかどうかに応じて、`LD_LIBRARY_PATH` 環境変数パスを設定するようプロンプトが表示されます。このためには、`/opt/novell/eDirectory/bin/ndspath` を、`./opt/novell/eDirectory/bin/dspath` と入力して実行し、インストールを再実行します。
- 9 メタディレクトリサーバをインストールするよう選択した場合は、LDAP ユーザ名 (CN=admin,O=novell) とパスワードを入力するようメッセージが表示されます。eDirectory スキーマを拡張する十分な権利を持つユーザ (Admin など、ツリーのルートに対するスーパーバイザ権を持つユーザ) を選択します。

重要: (Solaris へのインストールの場合のみ) eDirectory が存在するサーバと同じサーバに Web ベースの管理サーバをインストールする場合、Web サーバのセキュアポートを入力するようメッセージが表示されたら、デフォルト値を変更して、空いているポート (8443 など) に変更してください。

- 10 概要に表示されている情報が正しいことを確認し、<Enter> キーを押してパッケージのインストールを開始します。

```
=====
インストール中...
-----

[=====|=====|=====|=====]
[-----|-----|-----|-----entered |wrap_cr
eateNMASTMethodCheckVersion
-----]

=====
インストールが完了しました
-----

処理が完了しました。システムにNovell Identity Manager 3.5が正常にインストールさ
れました。

Identity Managerプラグインをインストールしている場合は、アプリケーションサーバを
再起動してください。

<ENTER> キーを押すと、インストーラが終了します。: █
```

メタディレクトリエンジンとスキーマファイルをインストールする際、eDirectory が一時的にシャットダウンされます。デフォルトでは、使用可能なすべてのドライバがインストールされるため、別のドライバが必要になった場合に後でインストールプログラムを実行する必要はありません。ドライバファイルは、iManager または Designer を使用して設定された後、展開されるまで使用されません。

- 11 [インストールが完了しました] 画面が表示されたら、<Enter> キーを押してインストールプログラムを閉じます。

4.8 コンソールを使用した UNIX/Linux への接続システムのインストール

86 ページのセクション 4.7 「コンソールを使用した UNIX/Linux プラットフォームへの Identity Manager のインストール」では、UNIX プラットフォームでのメタディレクトリサーバ、Web コンポーネント、およびユーティリティのインストールについて説明しました。さらに、UNIX または Linux サーバでは接続システムオプションも使用できます。

eDirectory サービスとメタディレクトリエンジンのオーバーヘッドをアプリケーションサーバにかけないようにするには、接続システムオプションを使用します。リモートローダにより、他の場所でアクセス可能なアプリケーションをロードせずに、Identity Manager を使用して必要な同期を行えるようになります。

始める前に、システムが 29 ページの表 1-3 に示されている要件を満たしていることを確認してください。

- 1 必要な Identity Manager の .iso イメージファイルをダウンロードします。Identity Manager の .iso イメージファイルは、Novell のダウンロードサイト (<http://download.novell.com>) からダウンロードできます。

Identity Manager の Linux インストールは、Identity_Manager_3_5_1_Linux.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にありますが、AIX および Solaris のインストールは Identity_Manager_3_5_1_Unix.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にあります。

- 2 ホストコンピュータで、root としてログインします。
- 3 セットアップディレクトリから .bin ファイルを実行します。

現在の作業ディレクトリを、インストールファイルが存在する `setup` ディレクトリに変更します。続いて、次のコマンドのいずれかを入力してインストールを実行します。

プラットフォーム	パスの例	インストールファイル
Linux	<code>linux/setup/</code>	<code>idm_linux.bin</code>
Solaris	<code>solaris/setup/</code>	<code>idm_solaris.bin</code>
AIX	<code>aix/setup/</code>	<code>idm_aix.bin</code>

これらのパスは、インストールイメージのルートと相対的なもので、インストールイメージを展開した場所、または CD をマウントした場所になります。

現在の作業ディレクトリをインストールプログラムが存在する場所にしないと、インストールプログラムはインストールするパッケージを見つけることができません。

- 4 インストールプログラムを実行する言語を選択するか、デフォルト (英語) を使用します。数字を入力して、<Enter> キーを押します。

```
linuxWM:/media/IDM3_5_Lin_NW_Win/linux/setup # ./idm_linux.bin
Preparing to install...
Extracting the JRE from the installer archive...
Unpacking the JRE...
Extracting the installation resources from the installer archive...
Configuring the installer for this system's environment...

Launching installer...

Preparing CONSOLE Mode Installation...

=====
Choose Locale...
=====
    1- English
    ->2- 日本語
CHOOSE LOCALE BY NUMBER: █
```

- 5 [ようこそ] の情報を確認し、<Enter> キーを押してインストールを続行します。
- 6 <Enter> キーを押して使用許諾契約を最後まで確認し、使用条件に同意する場合は Y と入力します。同意しない場合は、N と入力してインストールプログラムを終了します。
- 7 接続システムサーバをインストールするには、番号 2 を指定します。

インストールセットには、リモートローダと、Avaya、区切りテキスト、GroupWise、JDBC、JMS、LDAP、Linux/UNIX 設定、Linux/UNIX Bidirectional、Lotus Notes、

PeopleSoft、RACF、Remedy、SAP、SIF、Top Secret、および Work Order の各ドライバが含まれています。

インストール セット
接続システムサーバ

製品 コンポーネント:
LDAPドライバ,
SAPドライバ,
JDBCドライバ,
区切りテキストドライバ,
Lotus Notesドライバ,
リモートローダ,
Groupwiseドライバ,
Avayaドライバ,
SOAPドライバ,
Remedyドライバ,
PeopleSoftドライバ,
JMSドライバ,
Linux/Unix双方向ドライバ,
Linux/Unix設定ドライバ,
RACFドライバ,
トップシークレットドライバ

続行するには <ENTER> キーを押します。: █

- 8 [インストール前の概要] 画面に表示された項目を確認します。<Enter> キーを押してコンポーネントをインストールします。

```
=====
インストール中...
-----

[=====|=====|=====|=====]
[-----|-----|-----|-----entered Wrap_cr
eateNMASMethodCheckVersion
-----]

=====
インストールが完了しました
-----

処理が完了しました。システムにNovell Identity Manager 3.5が正常にインストール
されました。

Identity Managerプラグインをインストールしている場合は、アプリケーションサーバを
再起動してください。

<ENTER> キーを押すと、インストーラが終了します。: █
```

デフォルトでは、使用可能なすべてのドライバがインストールされるため、別のドライバが必要になった場合に後でインストールプログラムを実行する必要はありません。ドライバファイルは、iManager または Designer を使用して設定された後、展開されるまで使用されません。

デフォルトでは、Identity Manager ドライバユーティリティは Linux/UNIX インストールにはインストールされません。Identity Manager のインストール CD から Identity Manager サーバにユーティリティを手動でコピーする必要があります。すべてのユーティリティはプラットフォームの \setup\utilities ディレクトリにあります。

- 9 [インストールが完了しました] 画面が表示されたら、<Enter> キーを押してインストールプログラムを閉じます。

4.9 ルート以外への Identity Manager のインストール

このリリースの Identity Manager では、Identity Manager メタディレクトリエンジンを、ルート以外にインストールされた eDirectory にインストールできます。

このオプションをインストールするには、最新のパッチが適用された Novell Security Services 2.0.4 (NMA 3.1.3) および eDirectory 8.8 がルート以外にインストールされている必要があります。ルート以外のユーザとして NICI をインストールする方法の詳細については、『Novell eDirectory 8.8 Installation Guide (<http://www.novell.com/documentation/edir88/index.html>)』の見出し「3.0 Installing or Upgrading Novell eDirectory on Linux」の下にある「Installing NICI」サブセクションを参照してください。

NICI をインストールしたら、ルート以外に eDirectory 8.8 をインストールする手順に従います。この手順は、『Novell eDirectory 8.8 Installation Guide (<http://www.novell.com/documentation/edir88/index.html>)』の見出し「3.0 Installing or Upgrading Novell eDirectory on Linux」の下にある「Nonroot User Installing eDirectory 8.8」サブセクションに記載されています。

- 1 必要な Identity Manager の .iso イメージファイルをダウンロードします。Identity Manager の .iso ファイルは、Novell のダウンロードサイト (<http://download.novell.com>) からダウンロードできます。

Linux は Identity_Manager_3_5_1_Linux.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にありますが、AIX と Solaris は Identity_Manager_3_5_1_Unix.iso または Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso にあります。ルート以外へのインストールプログラムは、この .iso イメージに含まれています。

- 2 ホストコンピュータで、eDirectory をインストールしたルート以外のディレクトリに、書き込み権限を持つユーザとしてログインします。
- 3 /setup/ ディレクトリから idm-nonroot-install ファイルを実行します。このためには、現在の作業ディレクトリを setup ディレクトリに変更します、次のコマンドを入力して、ルート以外へのインストールを実行します。

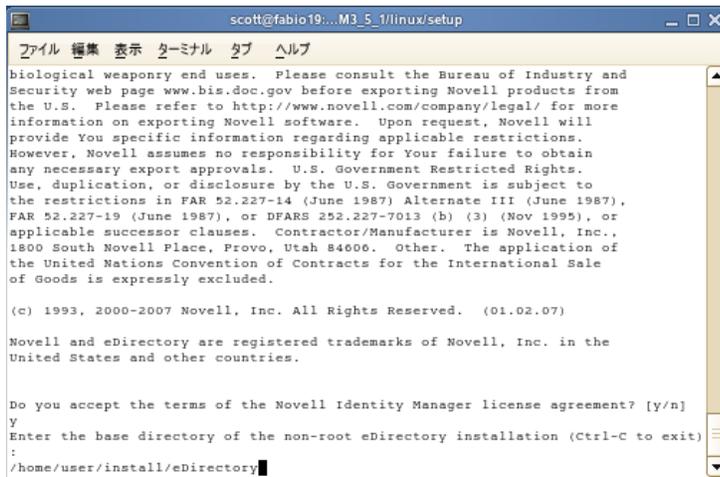
```
./idm-nonroot-install
```

プラットフォーム	パスの例	インストールファイル
Linux	linux/setup/	idm-nonroot-install
Solaris	solaris/setup/	idm-nonroot-install
AIX	aix/setup/	idm-nonroot-install

これらのパスは iso イメージのルートを基準にした相対パスなので、現在の作業ディレクトリをインストールプログラムが存在するディレクトリにしない限り、インストールプログラムはインストールするパッケージを見つけることができません。

- 4 <Enter> キーを押して、エンドユーザ使用許諾契約を表示し、スペースバーを押して契約の最後までスクロールします。使用条件に同意する場合は Y と入力します。同意しない場合は、N と入力してインストールプログラムを終了します。
- 5 ルート以外の eDirectory が存在する場所を指すパスを入力します。例：

/home/user/installed/eDirectory



```
scott@fabio19:~ M3_5_1/linux/setup
ファイル 編集 表示 ターミナル タブ ヘルプ
biological weaponry end uses. Please consult the Bureau of Industry and
Security web page www.bis.doc.gov before exporting Novell products from
the U.S. Please refer to http://www.novell.com/company/legal/ for more
information on exporting Novell software. Upon request, Novell will
provide You specific information regarding applicable restrictions.
However, Novell assumes no responsibility for Your failure to obtain
any necessary export approvals. U.S. Government Restricted Rights.
Use, duplication, or disclosure by the U.S. Government is subject to
the restrictions in FAR 52.227-14 (June 1987) Alternate III (June 1987),
FAR 52.227-19 (June 1987), or DFARS 252.227-7013 (b) (3) (Nov 1995), or
applicable successor clauses. Contractor/Manufacturer is Novell, Inc.,
1800 South Novell Place, Provo, Utah 84606. Other. The application of
the United Nations Convention of Contracts for the International Sale
of Goods is expressly excluded.

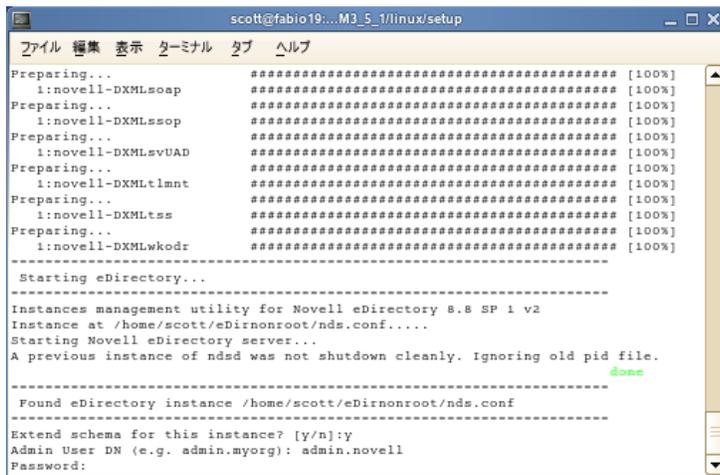
(c) 1993, 2000-2007 Novell, Inc. All Rights Reserved. (01.02.07)

Novell and eDirectory are registered trademarks of Novell, Inc. in the
United States and other countries.

Do you accept the terms of the Novell Identity Manager license agreement? [y/n]
y
Enter the base directory of the non-root eDirectory installation (Ctrl-C to exit)
:
/home/user/install/eDirectory
```

インストールスクリプトによって、Avaya、区切りテキスト、、GroupWise、JDBC、JMS、LDAP、Linux/UNIX 設定、Linux/UNIX Bidirectional、Lotus Notes、PeopleSoft、RACF、Remedy、SAP、SIF、Top Secret、および Work Order の各ドライバとともに Identity Manager がインストールされます。

- 6 続いて、ログインユーザが所有する eDirectory の各インスタンスのスキーマを拡張するようメッセージが表示されます。各インスタンスに対して、そのインスタンスのスキーマを拡張する場合は Y を、拡張しない場合は N をそれぞれ入力します。
- 7 スキーマを拡張するよう選択した場合は、スキーマを拡張する権限を持つユーザの識別名 (DN) (admin.novell など) を入力します。eDirectory スキーマを拡張する十分な権利を持つユーザ (admin など、ツリーのルートに対するスーパーバイザ権を持つユーザ) を選択します。



```
scott@fabio19:~ M3_5_1/linux/setup
ファイル 編集 表示 ターミナル タブ ヘルプ
Preparing... [100%]
1:novell-DXMLsoap [100%]
Preparing... [100%]
1:novell-DXMLssop [100%]
Preparing... [100%]
1:novell-DXMLsvUAD [100%]
Preparing... [100%]
1:novell-DXMLtmnt [100%]
Preparing... [100%]
1:novell-DXMLtss [100%]
Preparing... [100%]
1:novell-DXMLwkodr [100%]
-----
Starting eDirectory...
-----
Instances management utility for Novell eDirectory 8.8 SP 1 v2
Instance at /home/scott/eDirnonroot/nds.conf....
Starting Novell eDirectory server...
A previous instance of ndsd was not shutdown cleanly. Ignoring old pid file.
done
-----
Found eDirectory instance /home/scott/eDirnonroot/nds.conf
-----
Extend schema for this instance? [y/n]:y
Admin User DN (e.g. admin.myorg): admin.novell
Password:
```

- 8 パスワードを入力して、<Enter> キーを押します。拡張する eDirectory の各インスタンスに対して、手順 7 と 8 を実行する必要があります。

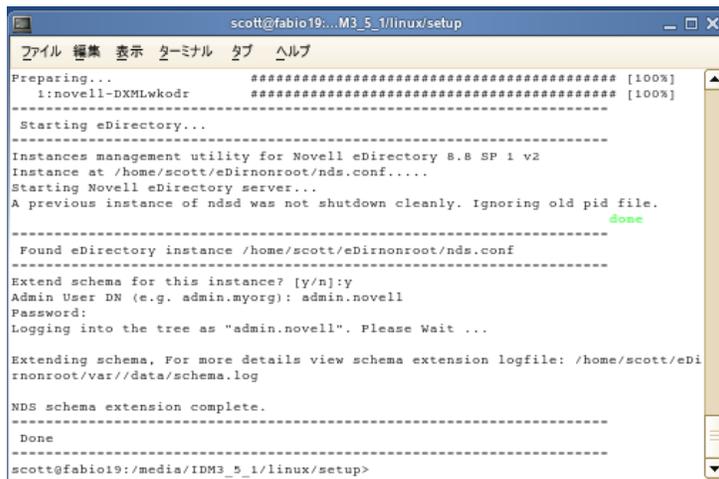
後から eDirectory の他のインスタンスのスキーマを拡張する場合は、ルート以外にインストールされた eDirectory の opt/novell/eDirectory/bin サブディレクトリにある idm-nonroot-install スクリプトを実行します。このスクリプトは、拡張する eDirectory インスタンスの所有者としてログインしている間に実行してください。

インストールスクリプトが eDirectory ツリーにログインして、スキーマを拡張します。スキーマ拡張プロセスの詳細については、`/home/user/eDirnonroot/var/data/schema.log` ファイルを参照してください。

デフォルトでは、使用可能なすべてのドライバがインストールされるため、別のドライバが必要になった場合に後でインストールプログラムを実行する必要はありません。ドライバファイルは、iManager または Designer を使用して設定された後、展開されるまで使用されません。

デフォルトでは、Identity Manager ドライバユーティリティは Linux/UNIX インストールにはインストールされません。Identity Manager のインストール CD から Identity Manager サーバにユーティリティを手動でコピーする必要があります。すべてのユーティリティはプラットフォームの `\setup\utilities` ディレクトリにあります。

- 9 スキーマの拡張が完了すると、Identity Manager がインストールされます。



```
scott@fabio19:.. M3_5_1/linux/setup
ファイル 編集 表示 ターミナル タブ ヘルプ
Preparing...
1:novell-DXMLwkodr [100%]
Starting eDirectory...
-----
Instances management utility for Novell eDirectory 8.8 SP 1 v2
Instance at /home/scott/eDirnonroot/nds.conf....
Starting Novell eDirectory server...
A previous instance of ndsd was not shutdown cleanly. Ignoring old pid file.
-----
Found eDirectory instance /home/scott/eDirnonroot/nds.conf
-----
Extend schema for this instance? [y/n]:y
Admin User DN (e.g. admin.myorg): admin.novell
Password:
Logging into the tree as "admin.novell". Please Wait ...
-----
Extending schema. For more details view schema extension logfile: /home/scott/eDirnonroot/var//data/schema.log
-----
NDS schema extension complete.
-----
Done
-----
scott@fabio19:/media/IDM3_5_1/linux/setup>
```

4.10 インストール後のタスク

Identity Manager モジュールは Identity Manager ドライバの起動時にロードされるため、Identity Manager を手動でロードまたはアンロードする必要はありません。ドライバのパラメータのいずれかが、自動起動に設定されていて、ドライバと eDirectory が実行中の場合、ドライバにより Identity Manager モジュールが自動的に起動されます。ドライバのパラメータのいずれかが、手動に設定されている場合、Identity Manager モジュールは Identity Manager ドライバの起動時にロードされます。

Identity Manager のインストールが完了したら、インストールしたドライバを設定して、ビジネスプロセスとして定義したポリシーと要件を実装する必要があります。インストール後のタスクには、通常次の項目が含まれます。

- ◆ 接続システムを設定する。ドライバ固有の環境設定方法については、[Identity Manager ドライバのマニュアル \(http://www.novell.com/documentation/dirxml/drivers\)](http://www.novell.com/documentation/dirxml/drivers) を参照してください。
- ◆ ドライバを作成して設定する。iManager または Designer ユーティリティを使用して、ドライバを作成するか、既存のドライバを設定します。『*Designer 2.1 for Identity Manager 3.5.1*』ガイドの「[Importing a Driver Configuration File](#)」を参照してください。
- ◆ ポリシーを定義する。iManager または Designer ユーティリティを使用して、ドライバがビジネスニーズに合うようにポリシーを定義します。『*Policies in Designer 2.1*』ガ

イドの「[Creating a Policy](#)」、または『[Understanding Policies for Identity Manager 3.5.1](#)』を参照してください。

- ◆ ドライバを起動、停止、または再起動する。iManager または Designer ユーティリティを使用して、ドライバのアクティビティを管理します。『[Designer 2.1 for Identity Manager 3.5.1](#)』ガイドの「[Importing a Driver Configuration File](#)」を参照してください。
- ◆ Identity Manager をアクティベートします。詳細については、[185 ページの第 6 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする」](#)を参照してください。

4.11 カスタムドライバのインストール

カスタムドライバの構成内容の例は次のとおりです。

- ◆ .jar またはネイティブ (.dll、.nlm、あるいは .so) ファイル
- ◆ ドライバを設定するための XML ルールファイル
- ◆ マニュアル

カスタムドライバの作成またはインストールの詳細については、[Novell Developer Kit \(http://developer.novell.com/ndk/dirxml-index.htm\)](http://developer.novell.com/ndk/dirxml-index.htm) を参照してください。さらに、『[Novell Identity Manager 3.5.1 管理ガイド](#)』の「[ドライバ環境設定ファイルの編集](#)」も参照してください。

ユーザアプリケーションのインストール

5

この項では、Identity Manager ユーザアプリケーションをインストールする方法について説明します。主なトピックは次のとおりです。

- ◆ 97 ページのセクション 5.1 「インストールの必要条件」
- ◆ 105 ページのセクション 5.2 「インストールと環境設定」
- ◆ 105 ページのセクション 5.3 「ユーザアプリケーションドライバの作成」
- ◆ 110 ページのセクション 5.4 「インストールプログラムの概要」
- ◆ 112 ページのセクション 5.5 「インストール GUI からの JBoss アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール」
- ◆ 143 ページのセクション 5.6 「WebSphere アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール」
- ◆ 170 ページのセクション 5.7 「コンソールインタフェースからのユーザアプリケーションのインストール」
- ◆ 171 ページのセクション 5.8 「単一コマンドによるユーザアプリケーションのインストール」
- ◆ 178 ページのセクション 5.9 「インストール後のタスク」
- ◆ 182 ページのセクション 5.10 「インストール後の IDM WAR ファイルの再設定」
- ◆ 182 ページのセクション 5.11 「トラブルシューティング」

5.1 インストールの必要条件

Identity Manager ユーザアプリケーションをインストールする前に、次の要件を満たしていることを確認してください。

表 5-1 インストールの必要条件

環境の必要条件	説明
Java* 開発 Kit	<p>Java 2 Platform Standard Edition 開発 Kit 5.0 をダウンロードしてインストールします。JRE バージョン 1.5.0_10 を使用してください。WebSphere では、制限なしのポリシーファイルを適用した状態で、IBM* JDK* を使用します。</p> <p>ユーザアプリケーションで使用するために、JAVA_HOME 環境変数を JDK を指すように設定します。または、ユーザアプリケーションのインストール時に手動でパスを指定して、JAVA_HOME を上書きします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Linux または Solaris のコマンドプロンプトで、echo \$JAVA_HOME と入力します。Java_HOME を作成または変更するには、次のように ~/.profile を作成または編集します (SUSE® Linux の場合)。 <pre># Java Home export JAVA_HOME=/usr/java/jdk1.5.0_10 #JRE HOME export JRE_HOME=\$JAVA_HOME/jre</pre> <ul style="list-style-type: none"> ◆ Windows の場合は、[コントロールパネル] > [システム] > [詳細] > [環境変数] > [システム環境変数] の順に表示します。
JBoss アプリケーションサーバ	<p>JBoss を使用する場合は、JBoss 4.2.0 アプリケーションサーバをダウンロードしてインストールします (このサーバはユーザアプリケーションのインストール後に起動します。178 ページのセクション 5.9 「インストール後のタスク」を参照してください)。</p> <p>RAM: ユーザアプリケーション実行時の JBoss アプリケーションサーバの推奨 RAM 容量は、最小で 512MB です。</p> <p>ポート: アプリケーションサーバが使用するポートを記録しておきます (アプリケーションサーバのデフォルトは 8080 です)。</p> <p>SSL: 外部のパスワード管理機能を使用する計画の場合は、ユーザアプリケーションと IDMPwdMgt.war ファイルを展開した JBoss サーバで SSL を有効にします。方法については、JBoss のマニュアルを参照してください。また、ファイアウォールの SSL ポートが開いていることも確認してください。IDMPwdMgt.war ファイルの詳細については、179 ページのセクション 5.9.4 「外部パスワード WAR へのアクセス」を参照してください。また、『IDM 3.5.1 ユーザアプリケーション: 管理ガイド (http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html)』も参照してください。</p>
WebSphere アプリケーションサーバ	<p>WebSphere を使用する場合は、WebSphere 6.1 アプリケーションサーバをダウンロードしてインストールします。</p>
iChain ログアウトの有効化	<p>Novell Access Manager™ または iChain® の [Cookie Forward] オプションをオンにして、Identity Manager ユーザアプリケーションで ICS ログアウトを有効にします。</p>

環境の必要条件	説明
データベース	<p>データベースとデータベースドライバをインストールして、データベースまたはデータベースインスタンスを作成します。ホストとポートを記録します。これらは 122 ページのセクション 5.5.7「データベースのホストとポートの指定」 で使用します。データベース名、ユーザ名、およびユーザのパスワードを記録します。これらは 123 ページのセクション 5.5.8「データベース名および権限を持つユーザの指定」 で使用します。</p> <p>データソースファイルがこのデータベースを指している必要があります。これは、使用しているアプリケーションサーバに応じて異なる方法で処理されます。JBoss の場合、ユーザアプリケーションのインストールプログラムによって、このデータベースを指すアプリケーションサーバのデータソースファイルが作成され、ユーザアプリケーションの WAR ファイルに基づいてファイルに名前が付けられます。WebSphere の場合は、インストール前に手動でデータソースを設定します。</p> <p>データベースでは UTF-8 を有効にする必要があります。</p> <p>IDM ユーザアプリケーションユーティリティを使って MySQL をインストールするか、または MySQL を独自にインストールする場合は、104 ページのセクション 5.1.3「MySQL データベースの環境設定」 を参照してください。</p> <hr/> <p>注： データベースを移行する場合は、インストールプログラムで移行オプションを選択する前にデータベースを起動しておきます。データベースを移行しない場合は、ユーザアプリケーションのインストール時にデータベースが実行されていないにもかかわらずかまいません。この場合、アプリケーションサーバを起動する前にデータベースを起動してください。</p>
IDM 3.5.1 ユーザアプリケーションを Linux または Solaris にインストールする場合	<p>デフォルトのインストール先の場所は /opt/novell/idm です。インストール手順中に別のデフォルトのインストールディレクトリを選択できます。このディレクトリが存在していて、root 以外のユーザが書き込み可能であることを確認してください。</p>
IDM 3.5.1 ユーザアプリケーションを Windows にインストールする場合	<p>インストールディレクトリ： デフォルトのインストール先の場所は C:\Novell\IDM です。このディレクトリが存在していて書き込み可能であることを確認してください。インストール手順中に別のデフォルトのインストールディレクトリを選択できます。</p>
Identity Manager 3.5.1	<p>ユーザアプリケーションドライバを作成してユーザアプリケーションをインストールするには、Identity Manager 3.5.1 メタディレクトリサーバをインストールする必要があります。</p>
ユーザアプリケーションドライバ	<p>ユーザアプリケーションドライバは、ユーザアプリケーションをインストールする前にすでに存在している必要があります (ただしオンにはしないでください)。</p>
識別ボールドのアクセス権	<p>ユーザアプリケーションでは、ユーザアプリケーションのユーザが存在するコンテキストに対して管理者アクセス権を持つユーザが必要です。</p>
IDM ユーザアプリケーションのストレージ	<p>ユーザアプリケーションをインストールするコンピュータには、320 MB 以上の空き領域が必要です。</p>

すべての必要条件を確認したら、次の項に記載されているインストール手順に従います。

- ◆ 100 ページのセクション 5.1.1「JBoss アプリケーションサーバと MySQL データベースのインストール」
- ◆ 103 ページのセクション 5.1.2「JBoss アプリケーションサーバのサービスとしてのインストール」
- ◆ 104 ページのセクション 5.1.3 「MySQL データベースの環境設定」

5.1.1 JBoss アプリケーションサーバと MySQL データベースのインストール

JbossMysql ユーティリティを使用して、JBoss アプリケーションサーバと MySQL をシステムにインストールします。

このユーティリティでは、JBoss アプリケーションサーバは Windows サービスとしてインストールされません。JBoss アプリケーションサーバを Windows システムにサービスとしてインストールするには、103 ページのセクション 5.1.2 「JBoss アプリケーションサーバのサービスとしてのインストール」を参照してください。

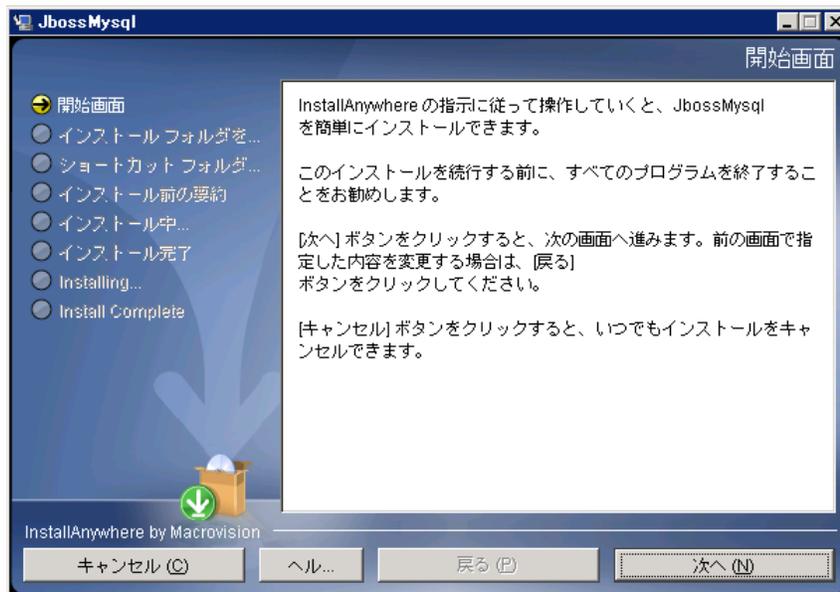
- 1 JbossMysql.bin または JbossMysql.exe を参照して実行します。このユーティリティは、次の場所にあるユーザアプリケーションインストーラにバンドルされています。

/linux/user_application (Linux の場合)

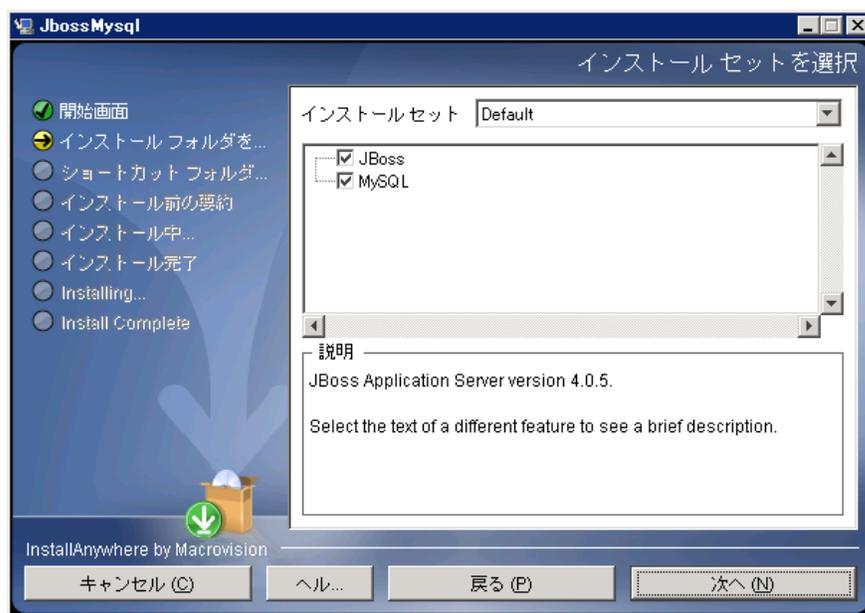
/nt/user_application (Windows の場合)

Solaris 用のユーティリティはありません。

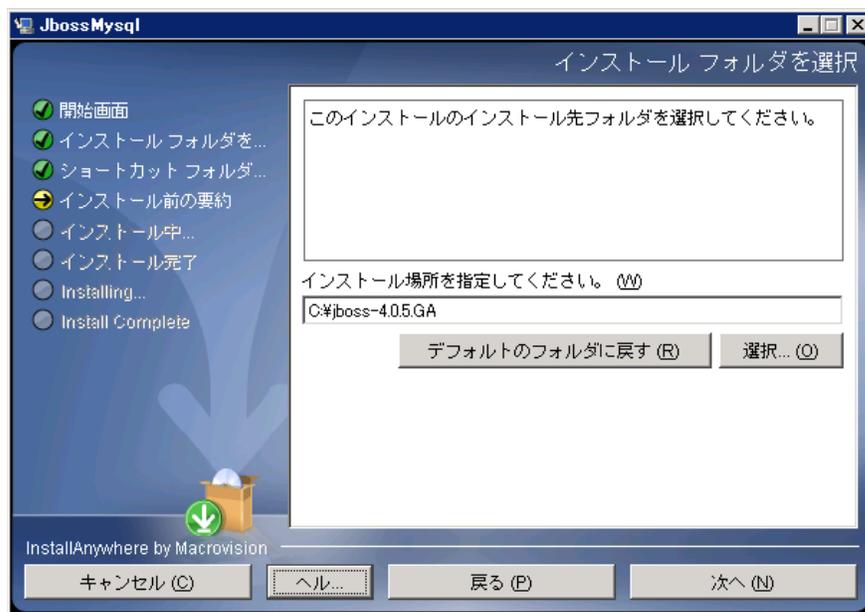
- 2 ロケールを選択します。
- 3 導入ページを読み、[次へ] をクリックします。



- 4 インストールする製品を選択し、[次へ] をクリックします。

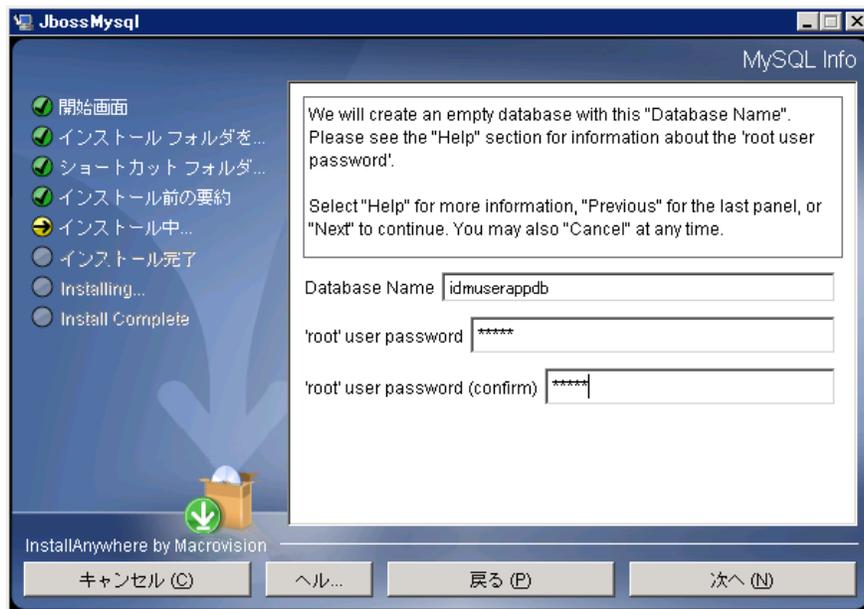


- 5 [選択] をクリックして、選択した製品をインストールする基本フォルダを選択し、[次へ] をクリックします。



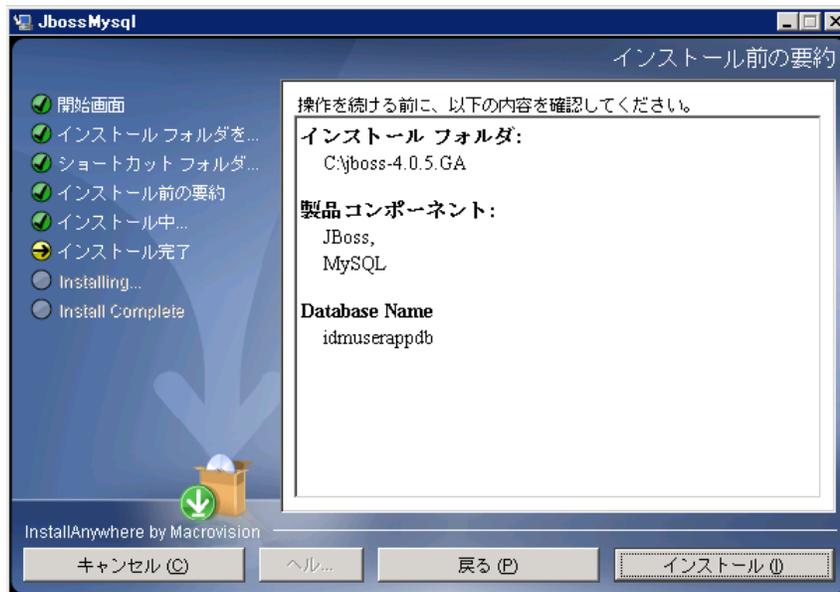
- 6 データベースの名前を指定します。この名前はユーザアプリケーションをインストールするために必要です。

7 データベースの root ユーザのパスワードを指定します。



8 [次へ] をクリックします。

9 [インストール前の概要] で指定した内容を確認し、[インストール] をクリックします。



選択した製品がインストールされると、正常に完了したことを示すメッセージが表示されます。MySQL データベースをインストールした場合は、[104 ページのセクション 5.1.3 「MySQL データベースの環境設定」](#)に進みます。

5.1.2 JBoss アプリケーションサーバのサービスとしてのインストール

JBoss アプリケーションサーバをサービスとして実行するには、Java Service Wrapper またはサードパーティのユーティリティを使用します。<http://wiki.jboss.org/wiki/Wiki.jsp?page=RunJBossAsAServiceOnWindows> (<http://wiki.jboss.org/wiki/Wiki.jsp?page=RunJBossAsAServiceOnWindows>) に掲載されている JBoss の指示を参照してください。

- ◆ 103 ページの「Java Service Wrapper の使用」
- ◆ 103 ページの「サードパーティのユーティリティの使用」

Java Service Wrapper の使用

Java Service Wrapper を使用すると、JBoss アプリケーションサーバを Windows サービス、あるいは Linux または UNIX のデーモンとしてインストール、起動、および停止できます。使用できるユーティリティとダウンロードサイトについては、インターネットで確認してください。

このようなラップの 1 つは、<http://wrapper.tanukisoftware.org/doc/english/integrate-simple-win.html> (<http://wrapper.tanukisoftware.org/doc/english/integrate-simple-win.html>) にあります。これは、JMX (<http://wrapper.tanukisoftware.org/doc/english/jmx.html#jboss>) (<http://wrapper.tanukisoftware.org/doc/english/jmx.html#jboss>) を参照) で管理します。次に、サンプル環境設定ファイルをいくつか示します。

wrapper.conf :

```
wrapper.java.command=%JAVA_HOME%/bin/java
wrapper.java.mainclass=org.tanukisoftware.wrapper.WrapperSimpleApp
wrapper.java.classpath.1=%JBOSS_HOME%/server/default/lib/wrapper.jar
wrapper.java.classpath.2=%JAVA_HOME%/lib/tools.jar wrapper.java.classpath.3=./run.jar
wrapper.java.library.path.1=%JBOSS_HOME%/server/default/lib wrapper.java.additional.1=-
server wrapper.app.parameter.1=org.jboss.Main wrapper.logfile=%JBOSS_HOME%/server/
default/log/wrapper.log wrapper.ntservice.name=JBoss wrapper.ntservice.displayname=JBoss
Server
```

警告 : JBOSS_HOME 環境変数を正しく設定する必要があります。ラップ自体はこの環境変数を設定しません。

```
java-service-wrapper-service.xml : <Xml version="1.0" encoding="UTF-8"?><!DOCTYPE
server><server> <mbean code="org.tanukisoftware.wrapper.jmx.WrapperManager"
name="JavaServiceWrapper:service=WrapperManager"/> <mbean
code="org.tanukisoftware.wrapper.jmx.WrapperManagerTesting"
name="JavaServiceWrapper:service=WrapperManagerTesting"/></server
```

サードパーティのユーティリティの使用

以前のバージョンでは、JavaService といったサードパーティのユーティリティを使用して、JBoss アプリケーションサーバを Windows サービスとしてインストール、開始、および停止することができましたが、

警告: 現在では、JBoss は JavaService の使用を推奨していません。詳細については、<http://wiki.jboss.org/wiki/Wiki.jsp?page=JavaService> (<http://wiki.jboss.org/wiki/Wiki.jsp?page=JavaService>) を参照してください。

5.1.3 MySQL データベースの環境設定

MySQL と Identity Manager 3.5.1 が連携動作するように、MySQL の環境設定を行う必要があります。MySQL を自分でインストールした場合は、設定も自分で行う必要があります。JbossMysql ユーティリティを使用して MySQL をインストールした場合は、このユーティリティが正しい値を設定してくれますが、次のために維持する値を知っておく必要があります。

- ◆ 104 ページの「文字セット」
- ◆ 104 ページの「INNODB ストレージエンジンとテーブルタイプ」
- ◆ 105 ページの「大文字と小文字の区別」

文字セット

サーバ全体またはデータベース単体に対し、文字セットとして UTF-8 を指定します。サーバ全体に UTF-8 を指定するには、my.cnf (Linux または Solaris の場合) または my.ini (Windows の場合) に次のオプションを含めます。

character-set-server=utf8 または

次のコマンドを使用して、データベースの作成時にデータベースの文字セットを指定します。

```
create database databasename character set utf8 collate utf8_bin;
```

データベースの文字セットを指定した場合は、次に示すように、IDM-ds.xml ファイルの JDBC URL にも文字セットを指定する必要があります。

```
<connection-url>jdbc:mysql://localhost:3306/  
databasename?useUnicode=true&characterEncoding
```

INNODB ストレージエンジンとテーブルタイプ

ユーザアプリケーションは INNODB ストレージエンジンを使用します。これにより、MySQL の INNODB テーブルタイプを選択できます。テーブルタイプを指定せずに MySQL テーブルを作成した場合、テーブルはデフォルトで MyISAM テーブルタイプを受け付けます。Identity Manager のインストール手順に従って MySQL をインストールした場合は、この手順で発行される MySQL は、INNODB テーブルタイプが指定された状態で付属します。MySQL サーバが確実に INNODB を使用するようするには、my.cnf (Linux または Solaris の場合) または my.ini (Windows の場合) に次のオプションが含まれていることを確認します。

```
default-table-type=innodb
```

このファイルには skip-innodb オプションが含まれてはなりません。

大文字と小文字の区別

サーバまたはプラットフォーム全体でデータをバックアップおよびリストアする計画の場合は、大文字と小文字の区別がサーバまたはプラットフォーム全体で統一されていることを確認します。統一されているかどうかを確認するには、デフォルトをそのまま使用するのではなく (Windows ではデフォルトで 0 に、Linux ではデフォルトで 1 に設定されます)、すべての my.cnf ファイル (Linux または Solaris の場合) または my.ini ファイル (Windows の場合) の lower_case_table_names に同じ値 (0 または 1) を指定します。データベースを作成して Identity Manager のテーブルを作成する前に、この値を指定します。たとえば、次のように指定します。

```
lower_case_table_names=1
```

これは、データベースのバックアップおよびリストアを計画しているすべてのプラットフォームの my.cnf および my.ini ファイルに指定します。

5.2 インストールと環境設定

- 1 ユーザアプリケーションドライバを作成して、オフのままにしておきます。

この手順により、識別ポールの新しいオブジェクトが作成されます。一部のオブジェクトにはデフォルトのデータ値が設定されます。詳細については、[105 ページのセクション 5.3 「ユーザアプリケーションドライバの作成」](#) を参照してください。

- 2 ユーザアプリケーションのインストールプログラムを実行します。

詳細については、[112 ページのセクション 5.5 「インストール GUI からの JBoss アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール」](#) または [143 ページのセクション 5.6 「WebSphere アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール」](#) を参照してください。

WebSphere のユーザは、WAR ファイルを手動で展開する必要があります。

重要 : Identity Manager ユーザアプリケーションをインストールするには、アプリケーションのインストール前にすでにユーザアプリケーションドライバが存在する必要があります。ただし、ドライバは Identity Manager ユーザアプリケーションをインストールした「後」に起動してください。そうしないと、ユーザアプリケーションドライバがエラーを返す場合があります。

5.3 ユーザアプリケーションドライバの作成

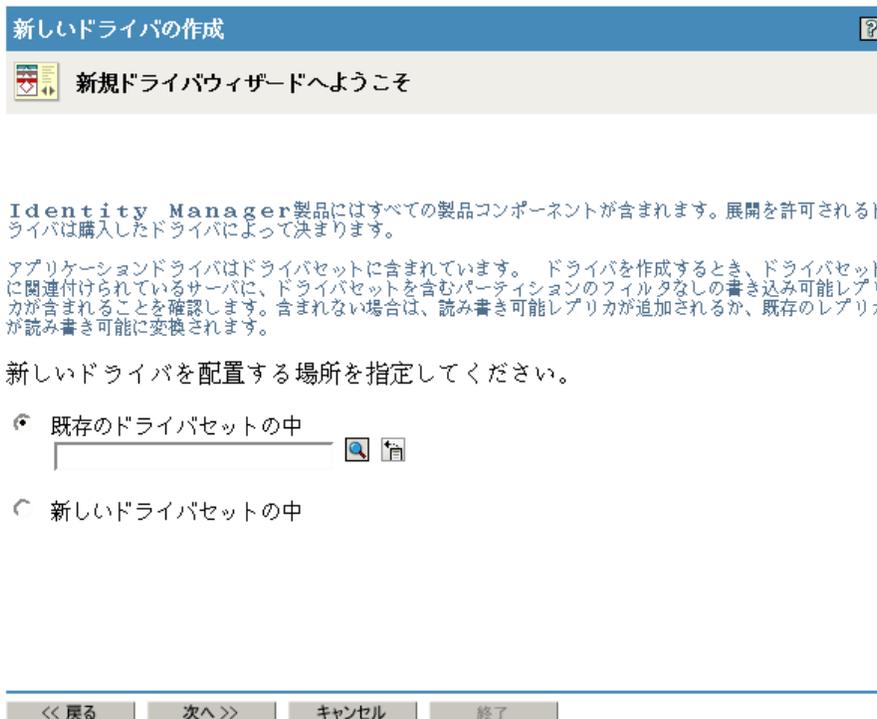
クラスタ上のユーザアプリケーションを除き、各ユーザアプリケーションごとに別個のユーザアプリケーションドライバを作成する必要があります。同じクラスタに属するユーザアプリケーションは、単一のユーザアプリケーションドライバを共有する必要があります。クラスタでユーザアプリケーションを実行する場合の詳細については、『[Identity Manager 3.5.1 ユーザアプリケーション管理ガイド](http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html) (<http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html>)』を参照してください。

ユーザアプリケーションでは、アプリケーション環境を制御および設定するためのアプリケーション固有データがドライバに保持されます。たとえば、アプリケーションサーバのクラスタ情報や、ワークフローエンジン環境設定情報などが保持されます。

重要: クラスタではないユーザアプリケーションを単一のドライバを共有するように設定すると、ユーザアプリケーション内で実行される1つ以上のコンポーネントで設定があいまいになったり、設定ミスが生じたりします。発生した問題の原因を突き止めるのは困難です。

ユーザアプリケーションドライバを作成してドライバセットに関連付ける

- 1 iManager を使用して識別ポータルにログインします (まだログインしていない場合)。
- 2 [Roles and Tasks (役割とタスク)] > [Identity Manager ユーティリティ] の順に選択し、[新規ドライバ] を選択してドライバ作成ウィザードを起動します。



- 3 既存のドライバセット内にドライバを作成するには、[既存のドライバセットの中] を選択して、オブジェクトセレクトアイコンをクリックします。続いて、[次へ] をクリックして **ステップ 4** に進みます。

または

新しいドライバセットを作成する必要がある場合 (たとえば、ユーザアプリケーションドライバを他のドライバとは異なるサーバに配置する場合など)、[新しいドライバセットの中] を選択して [次へ] をクリックし、新しいドライバセットのプロパティを定義します。

3a 新しいドライバセットの名前、コンテキスト、およびサーバを指定します。

新しいドライバの作成

<不明> NCP Server

<不明> (ドライバセット)

新規ドライバセットのプロパティを定義してください。

名前:

コンテキスト:

サーバ:

このドライバセットに新規パーティションを作成

<< 戻る 次へ >> キャンセル 終了

3b [次へ] をクリックします。

4 [サーバからのドライバ環境設定のインポート (XML ファイル)] をクリックします。

新しいドライバの作成

sakukuld NCP Server

Driver Set (ドライバセット)

設定をこのドライバセットにインポートします。

サーバーから環境設定をインポートします (XMLファイル)。
UserApplication_3_5_0-IDM3_5_0-V1.xml

クライアントから環境設定をインポートします (XMLファイル)。
ファイル: 参照...

<< 戻る 次へ >> キャンセル 終了

5 ドロップダウンリストから [UserApplication.xml] を選択します。

これが新しいドライバの設定ファイルになります。

6 [次] をクリックします。

[Userapplication.xml] がドロップダウンリストにない場合は、Identity Manager 3.5.1 のインストールで Web ベースの管理サーバの部分を実行していません。

7 ドライバのパラメータを入力するようプロンプトが表示されます (すべてを表示するにはスクロールします)。パラメータを記録します。これらのパラメータはユーザアプリケーションをインストールする際に必要になります。

フィールド	説明
ドライバ名	作成するドライバの名前。
認証 ID	ユーザアプリケーション管理者の識別名。これは、ユーザアプリケーションポータルでの管理権限を付与するユーザアプリケーション管理者になります。admin.orgunit.novell などの eDirectory™ 形式を使用するか、ユーザを参照して特定します。このフィールドは必須です。
パスワード	[認証 ID] で指定したユーザアプリケーション管理者のパスワード。
アプリケーションコンテキスト	ユーザアプリケーションのコンテキスト。これは、ユーザアプリケーション WAR ファイルのコンテキスト部分です。デフォルトは IDM です。
ホスト	Identity Manager ユーザアプリケーションが展開されたアプリケーションサーバのホスト名または IP アドレス。 クラスタで実行されている場合は、ディスパッチャのホスト名または IP アドレスを入力します。
ポート	上でリストに表示されているホストのポート。
イニシエータの無効化を許可: (値は [はい] / [いいえ] です)	[はい] を選択すると、プロビジョニング管理者は、自分を代理として指定したユーザになりかわってワークフローを開始できます。

8 [次へ] をクリックします。

9 [同等セキュリティの定義] をクリックして、[同等セキュリティ] ウィンドウを表示します。管理者または他のスーパーバイザオブジェクトを参照して選択し、[追加] をクリックします。

この手順により、ドライバに必要な許可が付与されます。この手順の重要性の詳細については、Identity Manager のマニュアルを参照してください。

10 (オプション、ただし推奨) [Exclude Administrative Roles (管理者の役割を除外する)] をクリックします。

11 [追加] をクリックして、ドライバアクションから除外するユーザ (管理者の役割など) を選択します。

12 [OK] を 2 回クリックして、[次へ] をクリックします。

- 13 [OK] をクリックして、[同等セキュリティ] ウィンドウを閉じ、概要ページを表示します。



- 14 表示されている情報が正しければ、[終了] または [概要の終了] をクリックします。

重要: ドライバはデフォルトでは無効になっています。ユーザアプリケーションをインストールするまで、ドライバは無効のままにしてください。

Identity Managerの概要

1 個のドライバセットが次の場所に見つかりました: context
0 ライブラリオブジェクト 検索された場所: context

ドライバセット: Driver Set:context アクティベーションが必要です 期限: 11 juin 2007



5.4 インストールプログラムの概要

ユーザアプリケーションのインストールプログラムは次の処理を実行します。

- ◆ 使用する既存のバージョンのアプリケーションサーバを指定する。
- ◆ 使用する既存のバージョンのデータベースを指定する (MySQL、Oracle、Microsoft SQL Server など)。データベースには、ユーザアプリケーションのデータとユーザアプリケーションの設定情報が保存されます。
- ◆ ユーザアプリケーション (アプリケーションサーバ上で実行されている) が識別ポータルおよびユーザアプリケーションドライバと安全に通信できるように、JDK の証明書ファイルを設定する。
- ◆ Novell Identity Manager ユーザアプリケーション用の Java Web アプリケーションアーカイブ (WAR) ファイルを設定し、JBoss アプリケーションサーバに展開する。
- ◆ Novell Audit のログを有効にするよう選択した場合、ログを有効にする。
- ◆ 既存のマスタキーをインポートして、ユーザアプリケーションの特定のインストールのリストアや、クラスタのサポートを有効にする。
- ◆ 111 ページのセクション 5.4.1 「インストールスクリプトおよび実行可能ファイル」
- ◆ 111 ページのセクション 5.4.2 「インストール時に必要な値」

インストールプログラムは、次の 3 つのモードのいずれかで起動できます。

- ◆ グラフィカルユーザインタフェース (112 ページのセクション 5.5 「インストール GUI からの JBoss アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール」を参照してください)。
- ◆ コンソール (コマンドライン) インタフェース (170 ページのセクション 5.7 「コンソールインタフェースからのユーザアプリケーションのインストール」を参照してください)。

- ◆ サイレントインストール。詳細については、171 ページのセクション 5.8 「単一コマンドによるユーザアプリケーションのインストール」を参照してください。

5.4.1 インストールスクリプトおよび実行可能ファイル

次のいずれかの方法で、Identity Manager 3.5.1 のインストールファイル入手します。

- ◆ システムに適したユーザアプリケーションの.isoイメージまたは.zipファイルをダウンロードする。正しいイメージまたはファイルは、Identity_Manager_3_5_1_User_Application.iso または Identity_Manager_3_5_1_User_Application_Provisioning.iso です。ダウンロードイメージは、Novell 用ダウンロード (<http://download.novell.com/index.jsp>) から入手できます。
- ◆ 製品 DVD Identity_Manager_3_5_1_DVD.iso を Novell, Inc. からダウンロードする。

表 5-2 は、Identity Manager 3.5.1 ユーザアプリケーションのインストールに必要なファイルとスクリプトのリストを示しています。

表 5-2 Identity Manager 3.5.1 ユーザアプリケーションのインストールに必要なファイルとスクリプト

ファイル	説明
ユーザアプリケーションの WAR	次のいずれかを選択します。 IDM.war. Identity セルフサービス機能が付いた Identity Manager 3.5.1 のユーザアプリケーションが含まれています。 IDMProv.war. Identity セルフサービス機能とプロビジョニングモジュールが付いた Identity Manager 3.5.1 ユーザアプリケーションが含まれています。

お使いのシステム用の WAR ファイルと、IdmUserApp.jar および silent.properties ファイルは、初期状態では、システムに適した次の配信 CD のディレクトリにあります。

/linux/user_application (Linux の場合)
/nt/user_application (Windows の場合)
/solaris/user_application (Solaris の場合)

5.4.2 インストール時に必要な値

表 5-3 は、JBoss へのインストール時に使用する予定のインストールパラメータを記録するためのワークシートです。ユーザアプリケーション環境設定パラメータはインストール時にも設定できます。129 ページのセクション 5.5.14 「ユーザアプリケーションの設定」を参照してください。

表 5-3 インストールパラメータワークシート JBoss 用

パラメータ	サンプル値	実際に設定した値
インストールフォルダ	C:\IDM\IDMinstalllocation	
データベースプラットフォーム	MySQL	

パラメータ	サンプル値	実際に設定した値
データベースホスト	localhost	
データベースポート	3306	
データベース名または sid	IDM	
データベースユーザ	root	
データベースユーザのパスワード		
Java のルートフォルダ	C:\Java\jdk1.5.0_10\	
(JBoss) 基本フォルダ	C:\jboss	
JBoss ホスト	localhost	
JBoss ポート	8080	
ワークフローエンジン ID (クラスタにインストールする場合。各クラスタメンバーごとに固有でなければなりません)。		
アプリケーション名 (URL コンテキスト)	IDM	
Novell Audit サーバ	[名前または IP アドレス]	
暗号化されたマスタキー。詳細については、 128 ページのセクション 5.5.13 「マスタキーの指定」 を参照してください。	_ + FEJEefMAgIH0A= =:3VRmp04lub21Y3GpdaXCY)LG qS1nBaL/	

5.5 インストール GUI からの JBoss アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール

この項では、グラフィカルユーザインタフェースバージョンのインストーラを使用して、JBoss アプリケーションサーバに Identity Manager ユーザアプリケーションをインストールする方法について説明します。

- ◆ [113 ページのセクション 5.5.1 「インストーラ GUI の起動」](#)
- ◆ [115 ページのセクション 5.5.2 「アプリケーションサーバプラットフォームの選択」](#)
- ◆ [115 ページのセクション 5.5.3 「データベースの移行」](#)
- ◆ [117 ページのセクション 5.5.4 「WAR の場所の指定」](#)
- ◆ [118 ページのセクション 5.5.5 「インストールフォルダの選択」](#)
- ◆ [120 ページのセクション 5.5.6 「データベースプラットフォームの選択」](#)
- ◆ [122 ページのセクション 5.5.7 「データベースのホストとポートの指定」](#)
- ◆ [123 ページのセクション 5.5.8 「データベース名および権限を持つユーザの指定」](#)
- ◆ [124 ページのセクション 5.5.9 「Java のルートディレクトリの指定」](#)
- ◆ [124 ページのセクション 5.5.10 「Jboss アプリケーションサーバ設定の指定」](#)

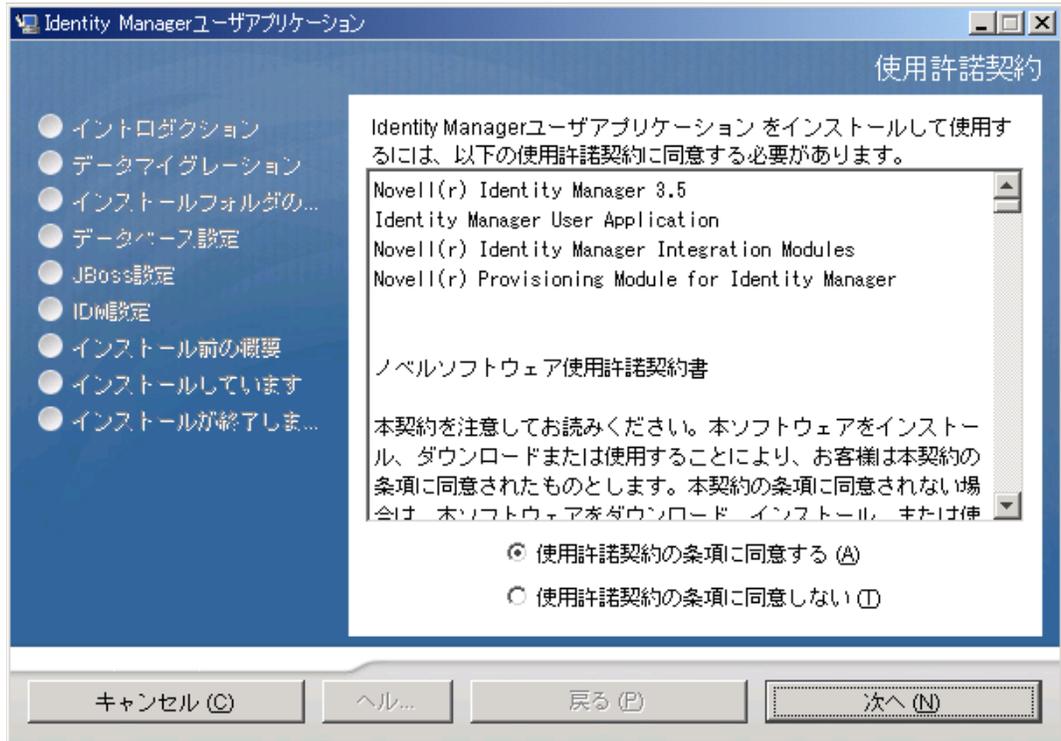
- ◆ 126 ページのセクション 5.5.11 「アプリケーションサーバ環境設定タイプの選択」
- ◆ 127 ページのセクション 5.5.12 「Novell Audit のログの有効化」
- ◆ 128 ページのセクション 5.5.13 「マスタキーの指定」
- ◆ 129 ページのセクション 5.5.14 「ユーザアプリケーションの設定」
- ◆ 142 ページのセクション 5.5.15 「選択内容の確認とインストール」
- ◆ 142 ページのセクション 5.5.16 「ログファイルの表示」

5.5.1 インストーラ GUI の起動

- 1 111 ページの表 5-2 で説明されている手順に従って、インストールファイルを含むディレクトリへの移動します。
- 2 使用しているプラットフォーム用のインストーラをコマンドラインから起動します。
`java -jar IdmUserApp.jar`
- 3 ドロップダウンメニューから言語を選択してから、[OK] をクリックします。



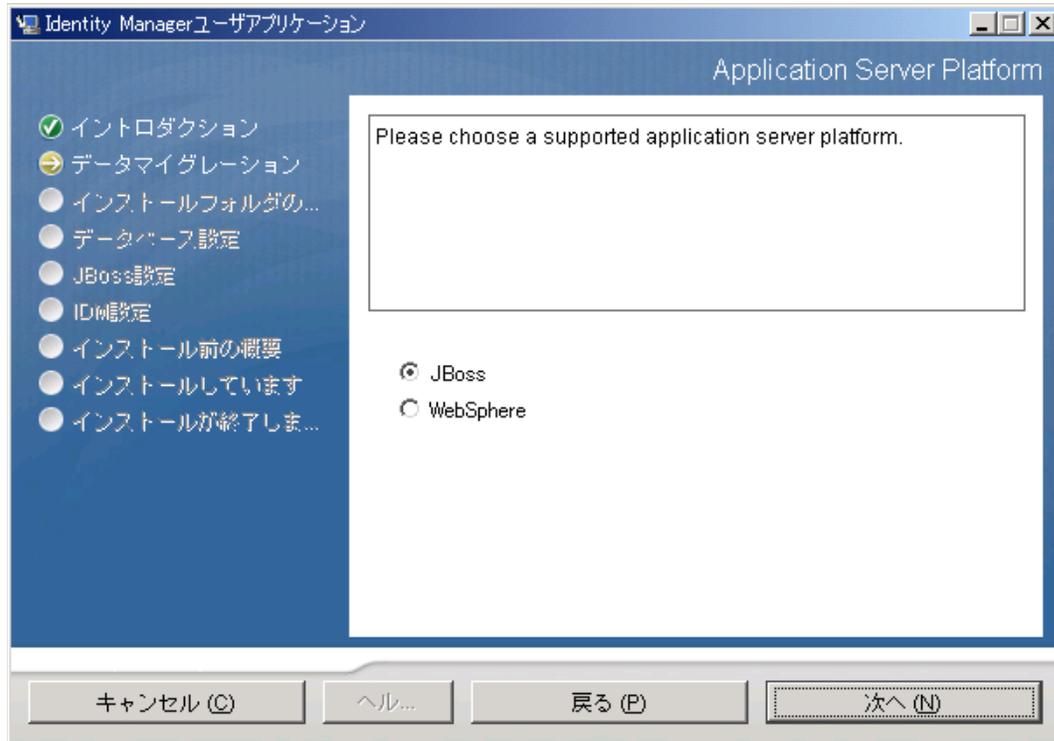
- 4 使用許諾契約を読み、[I accept the terms of the License Agreement (使用許諾契約の条件に同意します)], [次へ] の順に選択します。



- 5 インストールウィザードの [イントロダクション] ページを読み、[次へ] をクリックします。
- 6 115 ページのセクション 5.5.2 「アプリケーションサーバプラットフォームの選択」に進みます。

5.5.2 アプリケーションサーバプラットフォームの選択

- 1 JBoss アプリケーションサーバのプラットフォームを選択して、[次へ] をクリックします。



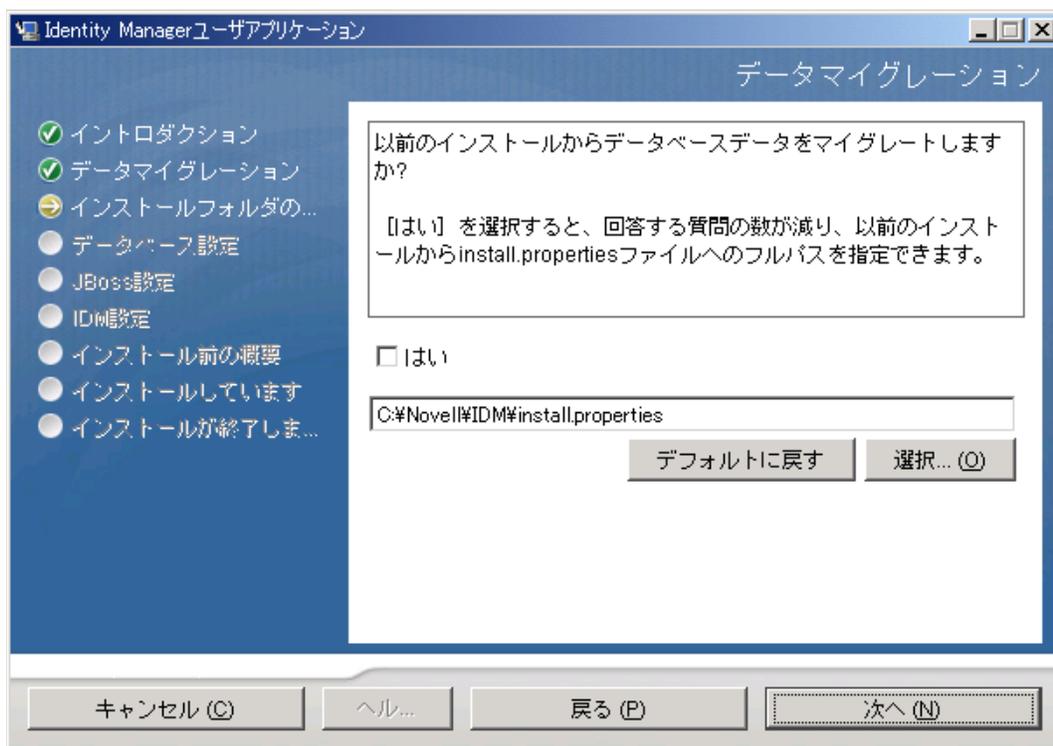
5.5.3 データベースの移行

データベースを移行する場合は、[次へ] をクリックして、[117 ページのセクション 5.5.4 「WAR の場所の指定」](#)に進みます。

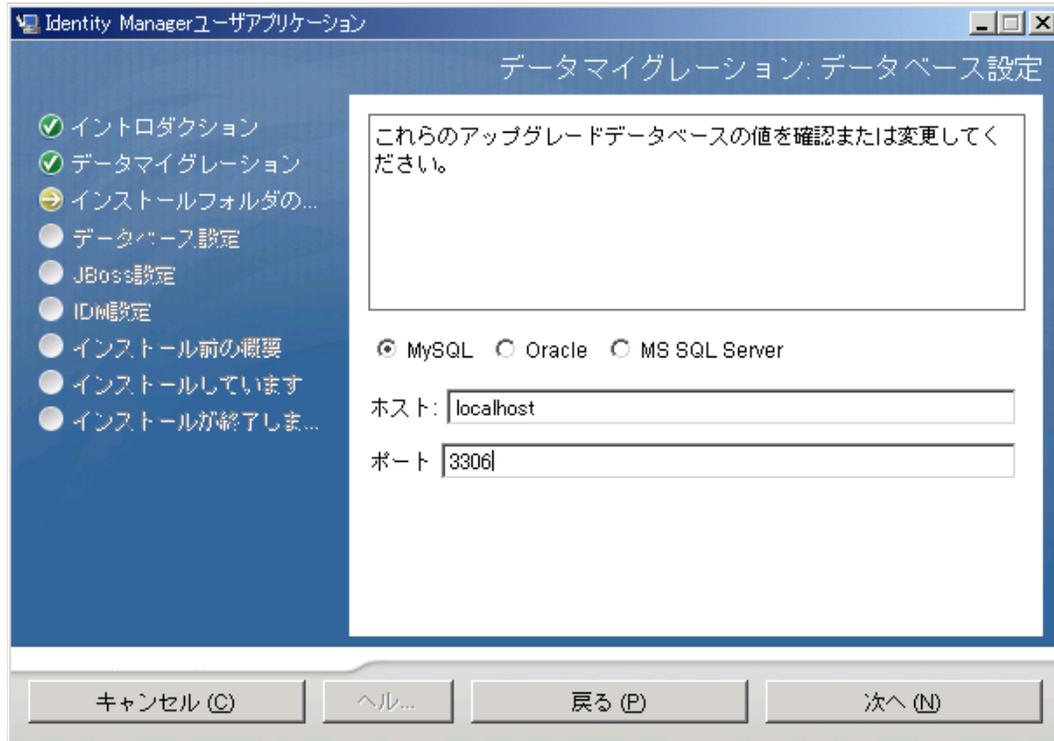
バージョン 3.0 またはバージョン 3.01 のユーザアプリケーションから既存のデータベースを使用する場合は、データベースを移行する必要があります。

- 1 移行するデータベースが開始されたことを確認します。
- 2 インストールプログラムの [データマイグレーション] ページで [はい] をクリックします。
- 3 [選択] をクリックして、Identity Manager 3.0 または 3.01 のユーザアプリケーションのインストールディレクトリにある `install.properties` ファイルに移動します。

前のインストールから `install.properties` ファイルの場所を指定すると、次のページで指定する項目数を減らすことができます。



- 4 データベースのタイプ、ホスト名、およびポートを確認するようメッセージが表示されます。各項目を確認して、[次へ] をクリックします。



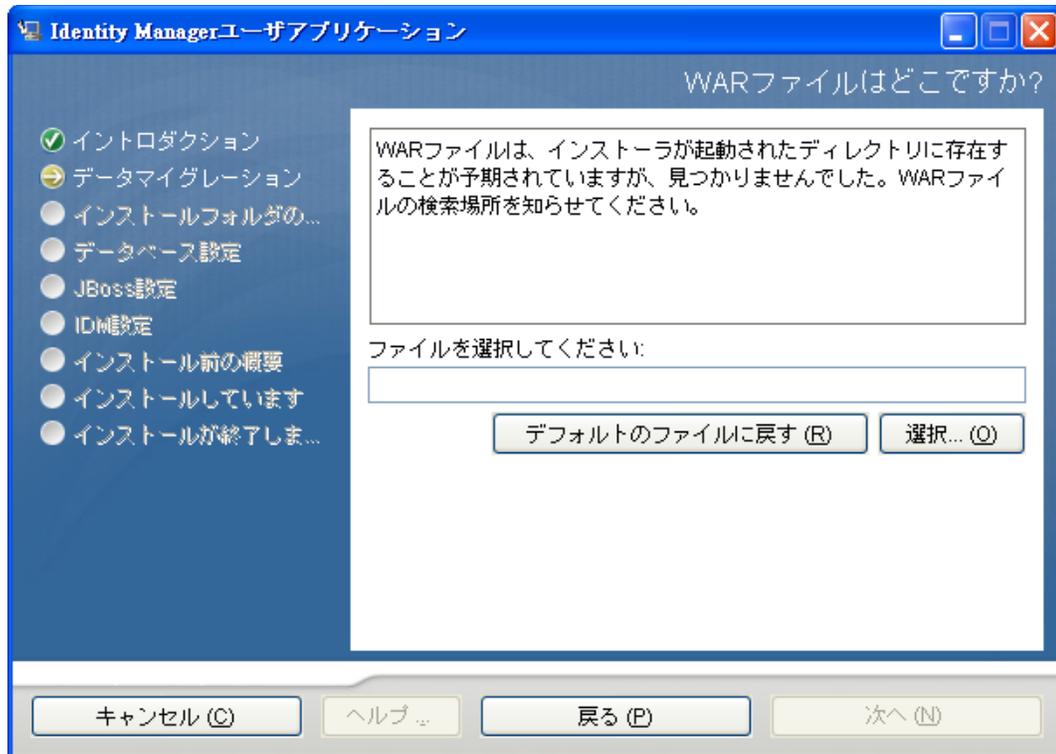
- 5 [次へ] をクリックして、117 ページのセクション 5.5.4 「WAR の場所の指定」または 118 ページのセクション 5.5.5 「インストールフォルダの選択」に進みます。

ユーザアプリケーションのインストーラによって、ユーザアプリケーションが更新され、データがバージョン 3.0 または 3.0.1 データベースからバージョン 3.5.1 で使用するデータベースに移行されます。データベースの移行に関する詳細と補足ステップについては、『[Identity Manager ユーザアプリケーション: マイグレーションガイド](http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html) (<http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html>)』を参照してください。

5.5.4 WAR の場所の指定

Identity Manager ユーザアプリケーションの WAR ファイルがインストーラとは別のディレクトリにある場合は、インストーラによって WAR へのパスを入力するようメッセージが表示されます。

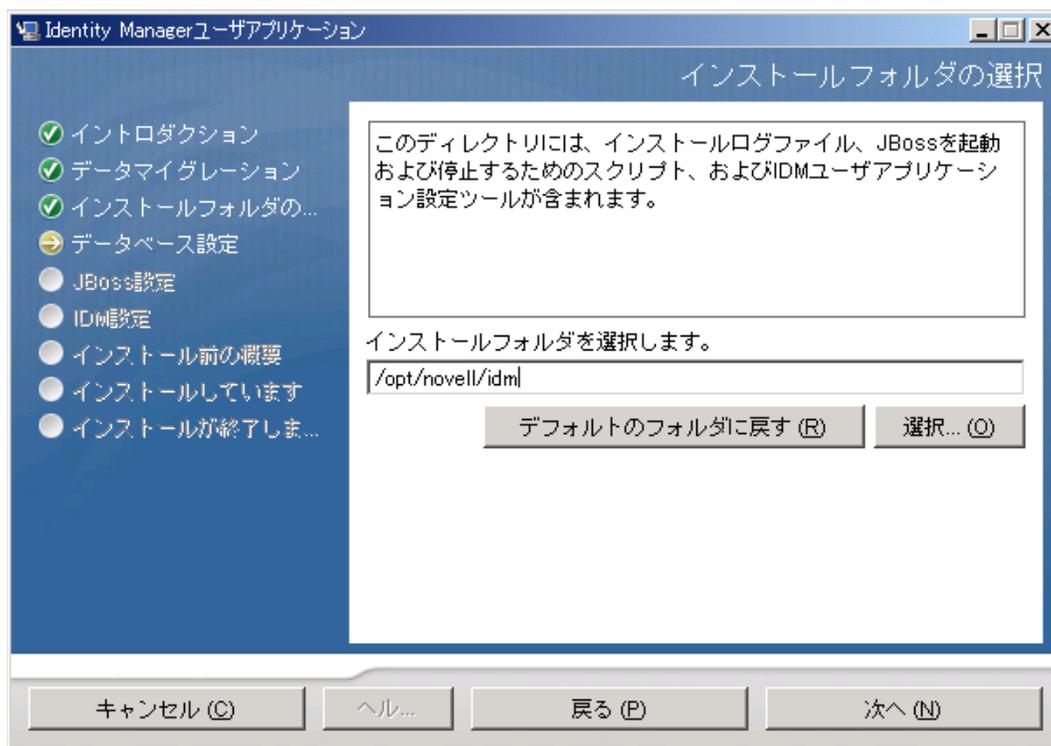
- 1 WAR がデフォルトの場所にある場合は、[*Restore Default Folder*] をクリックします。
または、WAR ファイルの場所を指定する場合は、[*選択*] をクリックして場所を選択します。
- 2 [次へ] をクリックして、118 ページのセクション 5.5.5 「インストールフォルダの選択」に進みます。



5.5.5 インストールフォルダの選択

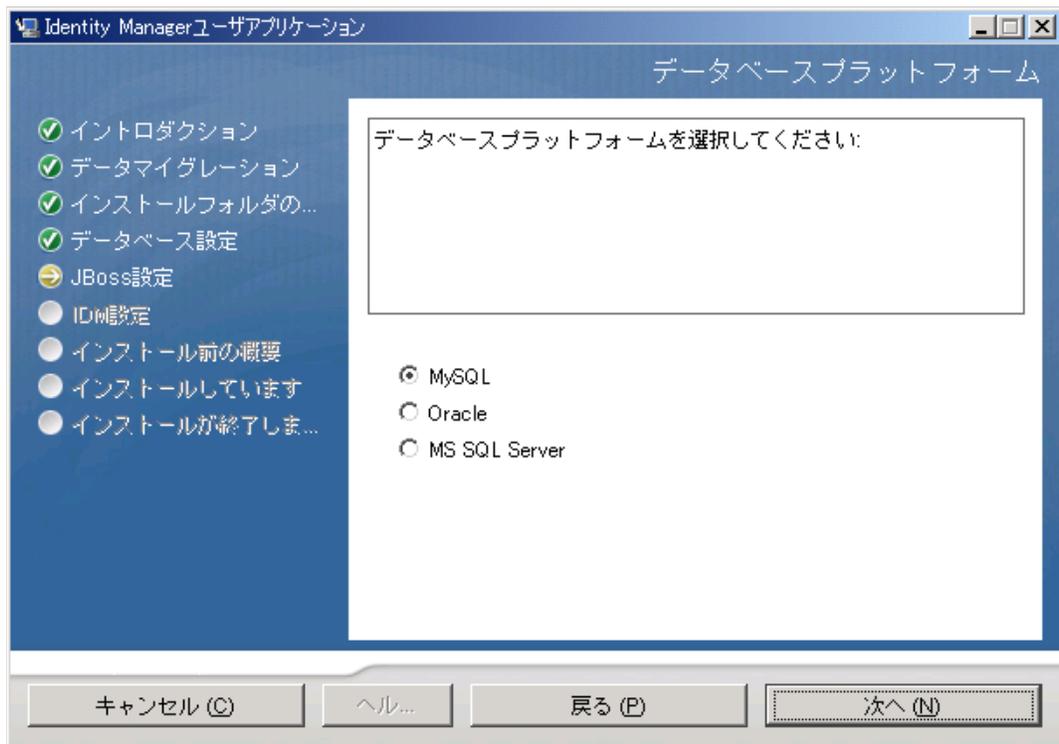
- 1 [インストールフォルダ] ページで、ユーザアプリケーションをインストールする場所を選択します。デフォルトの場所を記憶して使用する必要がある場合は、[デフォルトのフォルダに戻す] をクリックします。または、インストールファイルに別の場所を選択する場合は、[選択] をクリックして場所を参照します。

- 2 [次へ] をクリックして、120 ページのセクション 5.5.6 「データベースプラットフォームの選択」に進みます。



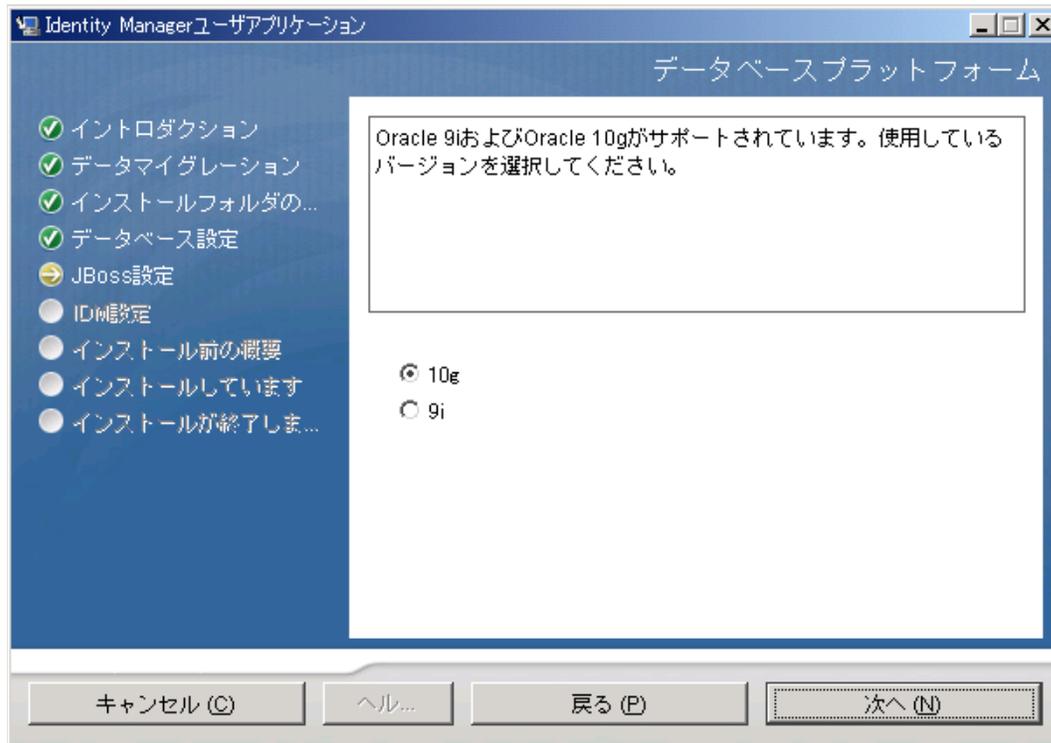
5.5.6 データベースプラットフォームの選択

- 1 使用するデータベースプラットフォームを選択します。



- 2 Oracle データベースを使用している場合は、**ステップ 3**に進みます。それ以外の場合は、スキップして**ステップ 4**に進みます。

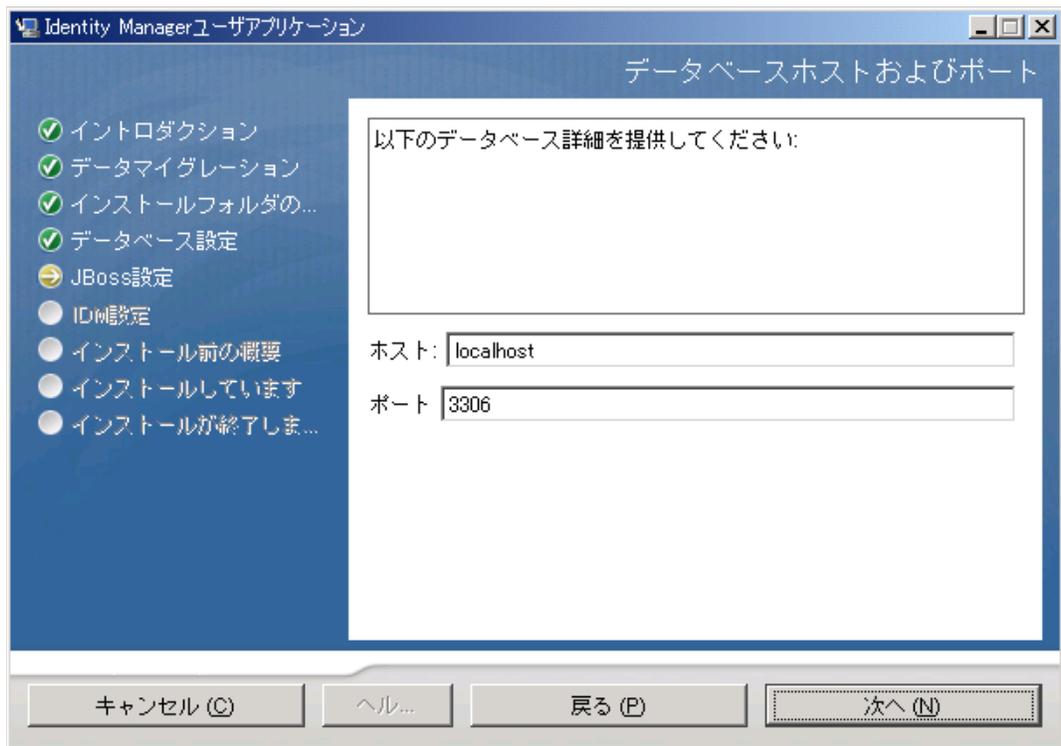
- 3 Oracle データベースを使用している場合は、インストーラによって、使用しているバージョンの入力が要求されます。バージョンを選択します。



- 4 [次へ] をクリックして、122 ページのセクション 5.5.7 「データベースのホストとポートの指定」に進みます。

5.5.7 データベースのホストとポートの指定

1 次のフィールドに入力します。



フィールド	説明
ホスト	データベースサーバのホスト名または IP アドレスを指定します。 クラスタでは、クラスタの各メンバには同じホスト名または IP アドレスを指定します。
ポート	データベースの待ち受けポート番号を指定します。 クラスタでは、クラスタの各メンバには同じポートを指定します。

2 [次へ] をクリックして、123 ページのセクション 5.5.8 「データベース名および権限を持つユーザの指定」に進みます。

5.5.8 データベース名および権限を持つユーザの指定

1 次のフィールドに入力します。

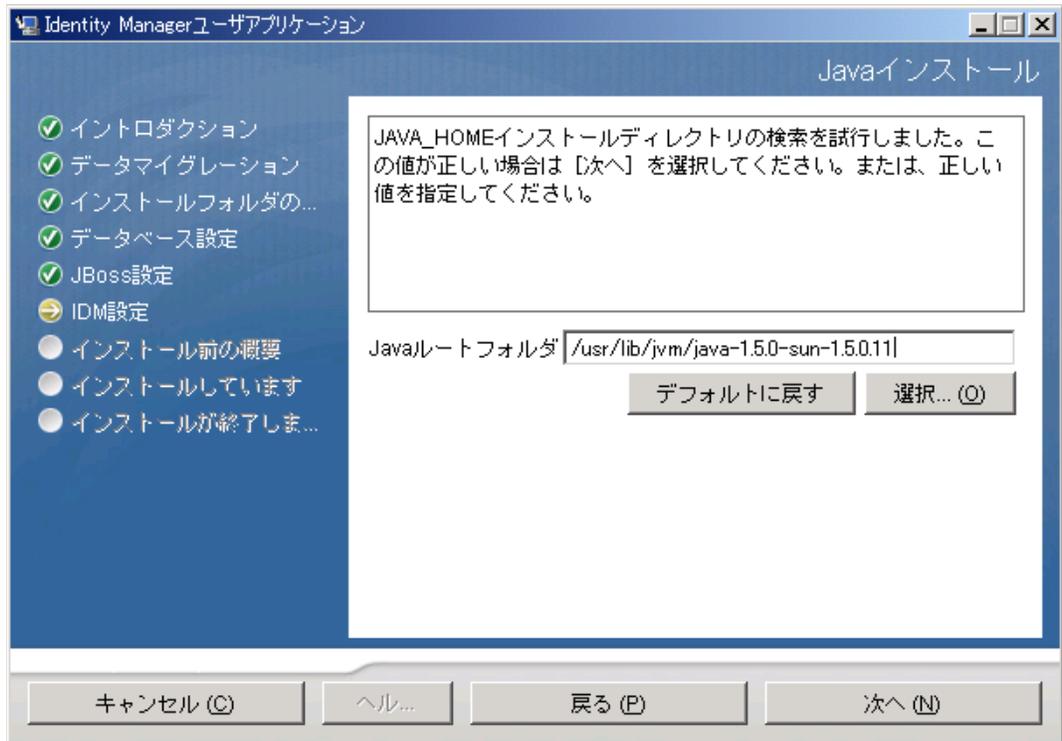
The screenshot shows a window titled "Identity Manager ユーザアプリケーション" with a sub-header "データベース名および権限ユーザ". On the left is a navigation pane with several options, including "データベース設定" which is selected. The main area contains a text box with the instruction "以下を提供してください". Below this are four input fields: "データベース名(SID)" with the value "idmuserappdb", "データベースユーザ" with "root", "データベースユーザパスワード" with "*****", and "(確認)" with "*****". At the bottom are buttons for "キャンセル (C)", "ヘル...", "戻る (P)", and "次へ (N)".

フィールド	説明
データベース名 (または sid)	MySQL または MS SQL Server では、設定済みデータベースの名前を指定します。Oracle では、前に作成した Oracle システム ID(SID) を指定します。 クラスタでは、クラスタの各メンバには同じデータベース名または SID を指定します。
データベースユーザ	データベースのユーザを指定します。 クラスタでは、クラスタの各メンバには同じデータベースユーザを指定します。
データベースのパスワード/パスワードの確認	データベースのパスワードを指定します。 クラスタでは、クラスタの各メンバには同じデータベースパスワードを指定します。

2 [次へ] をクリックして、124 ページのセクション 5.5.9 「Java のルートディレクトリの指定」に進みます。

5.5.9 Java のルートディレクトリの指定

- 1 [選択] をクリックして、Java のルートフォルダをブラウズします。デフォルトの場所を使用するには、[デフォルトの復元] をクリックします。



- 2 [次へ] をクリックして、124 ページのセクション 5.5.10 「Jboss アプリケーションサーバ設定の指定」に進みます。

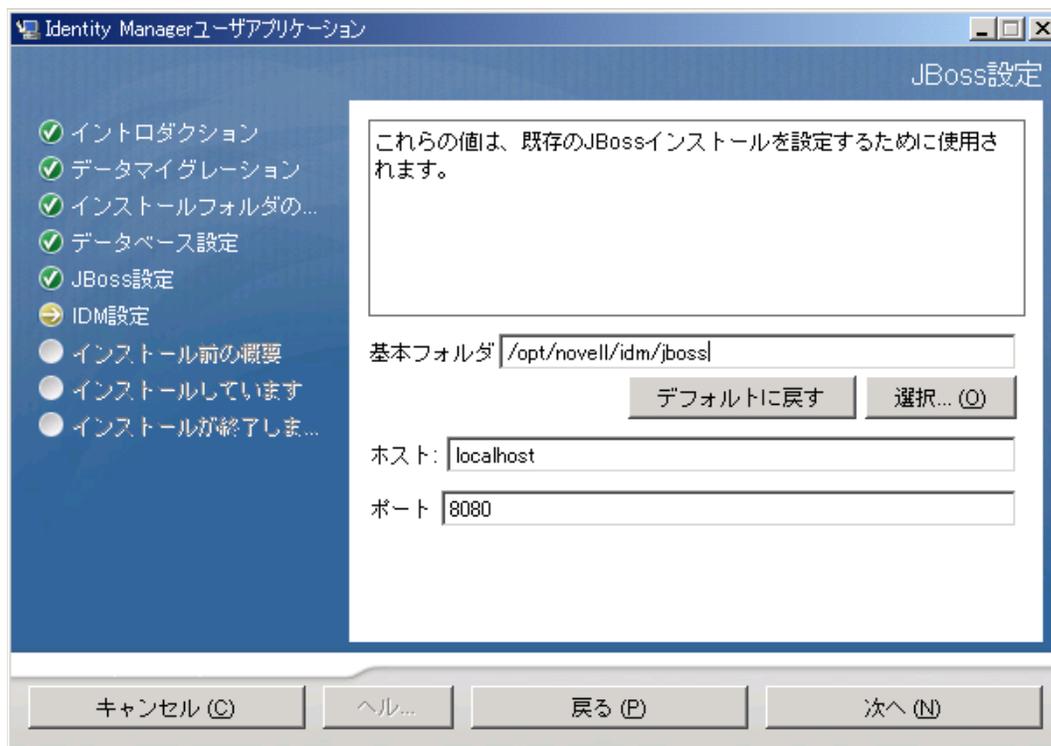
5.5.10 Jboss アプリケーションサーバ設定の指定

このページで、ユーザアプリケーションに JBoss アプリケーションサーバの位置を指定します。

このインストール手順では、JBoss アプリケーションサーバはインストールされません。JBoss アプリケーションサーバのインストールの指示については、100 ページのセク

クション 5.1.1 「JBoss アプリケーションサーバと MySQL データベースのインストール」を参照してください。

- 1 基本フォルダ、ホスト、およびポートを指定します。

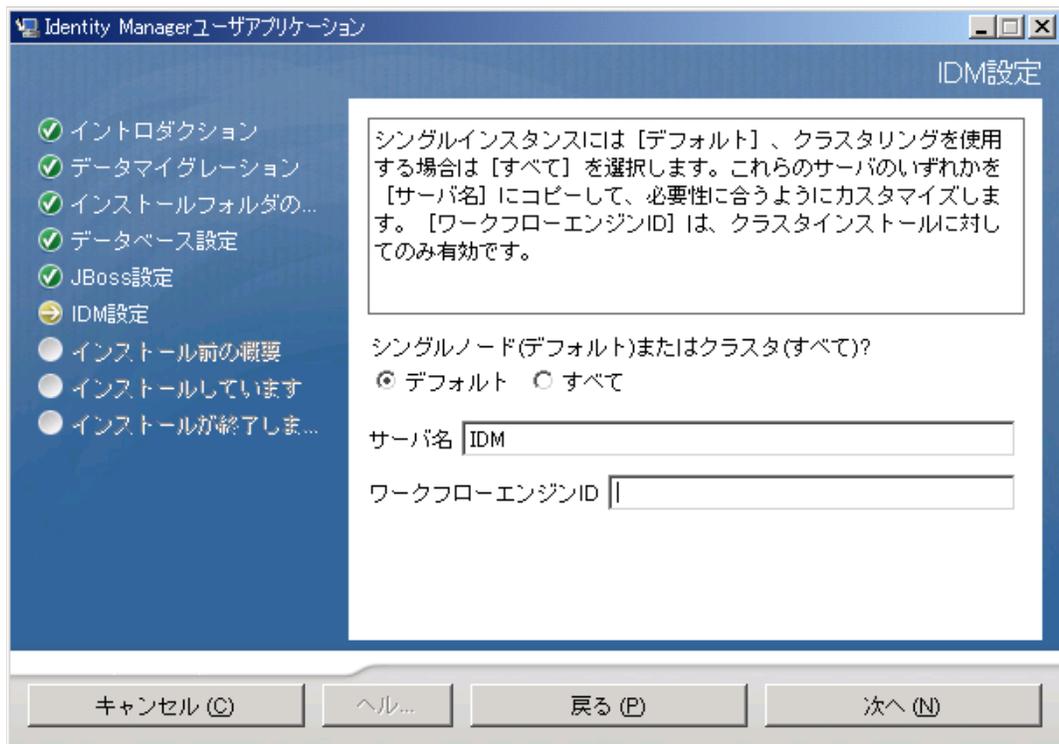


フィールド	説明
基本フォルダ	アプリケーションサーバの場所を指定します。
ホスト	アプリケーションサーバのホスト名または IP アドレスを指定します。
ポート	アプリケーションサーバの待ち受けポート番号を指定します。JBoss デフォルトポートは 8080 です。

- 2 [次へ] をクリックして、126 ページのセクション 5.5.11 「アプリケーションサーバ環境設定タイプの選択」に進みます。

5.5.11 アプリケーションサーバ環境設定タイプの選択

1 次のフィールドに入力します。



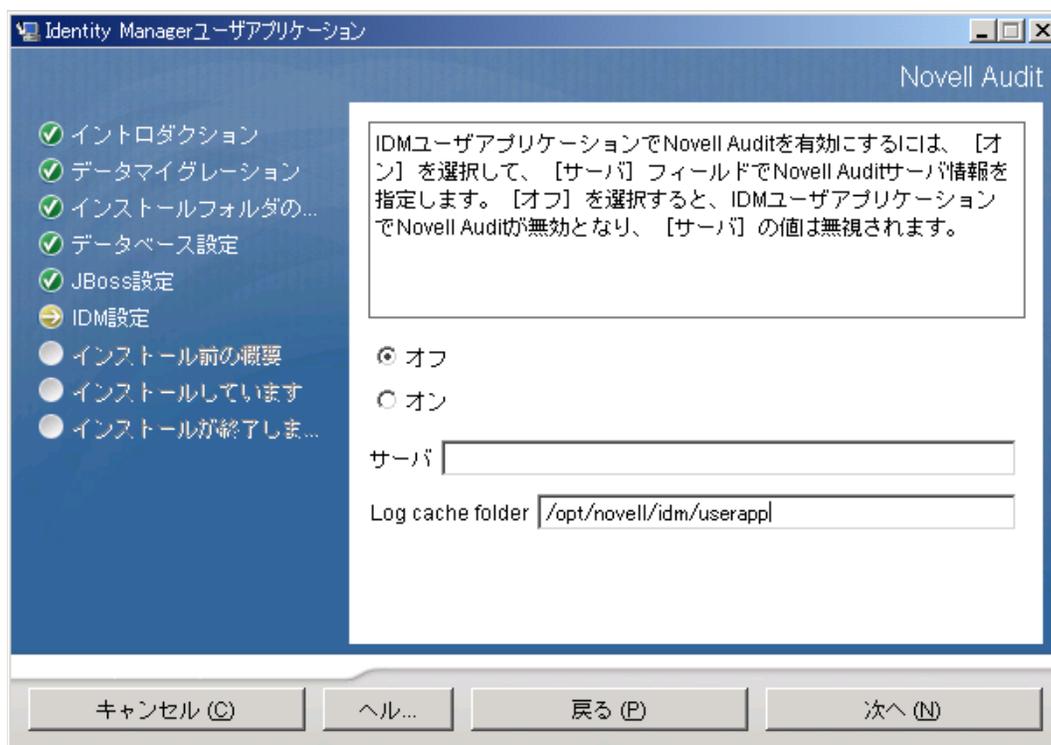
オプション	説明
[単一] (デフォルト) または [クラスタリング] (すべて)	アプリケーションサーバ設定のタイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none">◆ このインストールがクラスタの一部の場合は、[すべて] を選択します。◆ このインストールが、クラスタの一部でない1つのノード上の場合、[デフォルト] を選択します。
サーバ名	サーバ名を指定します。 <p>サーバ名は、アプリケーションサーバ設定の名前、アプリケーション WAR ファイルの名前、および URL コンテキストの名前です。インストールスクリプトによってサーバ設定が作成され、デフォルト名で [アプリケーション名] に基づいた設定が作成されます。</p> <p>Identity Manager ユーザアプリケーションをブラウザから開始する場合は、アプリケーション名に注意して、アプリケーション名を URL に含めてください。</p>
ワークフローエンジンID	クラスタ内のサーバには、一意のワークフローエンジン ID を設定する必要があります。ワークフローエンジン ID については、『Identity Manager ユーザアプリケーション: 管理ガイド』の第 3.5.4 項「クラスタ化のワークフローの設定」で説明されています。

- 2 [次へ] をクリックして、127 ページのセクション 5.5.12 「Novell Audit のログの有効化」に進みます。

5.5.12 Novell Audit のログの有効化

(オプション) ユーザアプリケーションの Novell Audit のログを有効にするには、次の操作を行います。

- 1 次のフィールドに入力します。



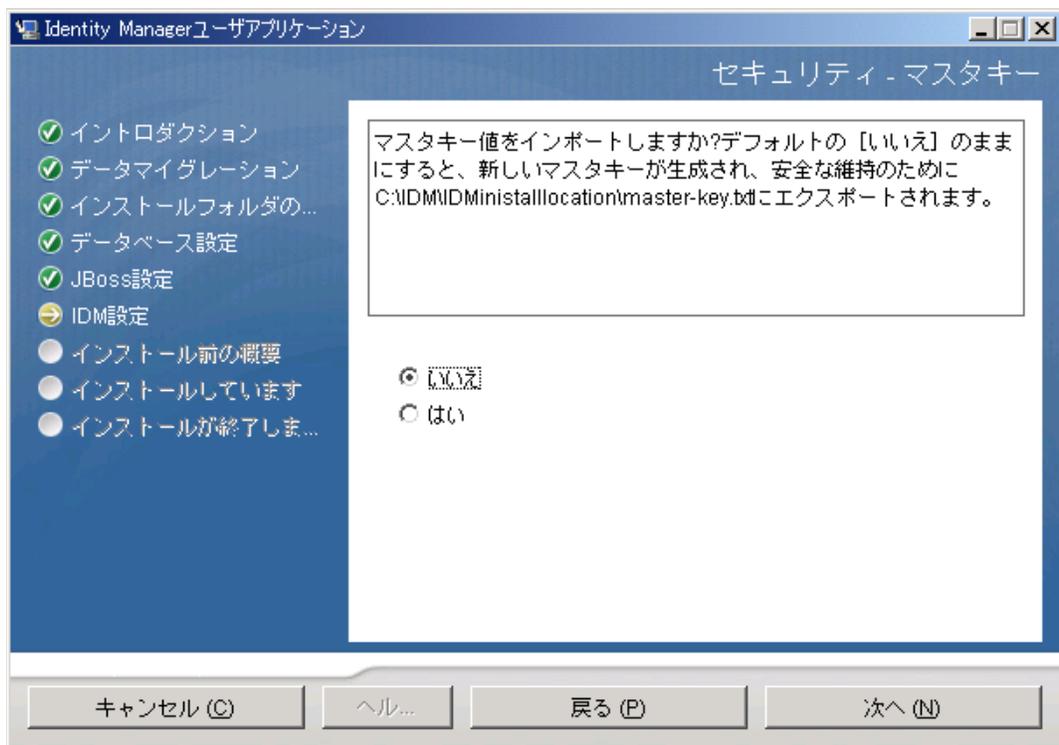
オプション	説明
オン	ユーザアプリケーションで Novell Audit のログが有効になります。 Novell Audit のログの設定の詳細については、『Identity Manager ユーザアプリケーション: 管理ガイド』を参照してください。
オフ	ユーザアプリケーションで Novell Audit のログが無効になります。ユーザアプリケーションの [管理] タブを使用すると、後でログを有効にできます。 Novell Audit のログを有効にする方法については、『Identity Manager ユーザアプリケーション: 管理ガイド』を参照してください。
サーバ	Novell Audit ログをオンにする場合は、Novell Audit サーバのホスト名または IP アドレスを指定します。ログをオフにする場合は、この値は無視されます。

- 2 [次へ] をクリックして、129 ページのセクション 5.5.14 「ユーザアプリケーションの設定」に進みます。

5.5.13 マスタキーの指定

既存のマスタキーをインポートするか、新しいマスタキーを作成するかを指定します。既存のマスタキーをインポートする理由には、次のようなものがあります。

- ◆ インストールファイルをステージングシステムから運用システムに移動中で、ステージングシステムで使用したデータベースへのアクセスを保持する場合。
 - ◆ ユーザアプリケーションを最初の JBoss クラスタのメンバーにインストールしており、現在はクラスタの次のメンバーにインストールしている場合 (同じマスタキーが必要)。
 - ◆ ディスク故障のため、ユーザアプリケーションを復元する必要がある場合。ユーザアプリケーションを再インストールして、以前のインストールで使用したのと同じ暗号化マスタキーを指定する必要があります。これによって、前に保存した暗号化データにアクセスできます。
- 1 [はい] をクリックして既存のマスタキーをインポートするか、または [いいえ] をクリックして新しいマスタキーを作成します。



- 2 [次へ] をクリックします。

インストール手順で、インストールディレクトリにある master-key.txt ファイルに暗号化マスタキーが書き込まれます。

[いいえ] を選択する場合は、129 ページのセクション 5.5.14 「ユーザアプリケーションの設定」までスキップされます。インストール終了後、178 ページのセクション 5.9.1 「マスタキーの記録」で示すように、マスタキーを手動で記録します。

[はい] を選択して、**ステップ 3**に進みます。

- 3 既存の暗号化マスタキーのインポートを選択する場合は、該当するキーをインストール手順ウィンドウに切り取りおよび貼り付けします。



- 4 [次へ] をクリックし、**129 ページのセクション 5.5.14 「ユーザアプリケーションの設定」**に進みます。

5.5.14 ユーザアプリケーションの設定

ユーザアプリケーションをインストールすると、ユーザアプリケーション環境設定パラメータを設定できます。インストールすると、これらのパラメータの多くは `configupdate.sh` または `configupdate.bat` でも編集可能です。例外はパラメータ説明に記述されています。

クラスタの場合は、クラスタの各メンバーに同じユーザアプリケーション環境設定パラメータを指定します。

- 1 表 5-4 で説明されている、基本のユーザアプリケーション環境設定パラメータを設定してから、**ステップ 2**に進みます。

The screenshot shows the 'ユーザアプリケーション環境設定' (User Application Environment Settings) dialog box. It is divided into several sections:

- eDirectory接続設定 (eDirectory Connection Settings):**
 - LDAPホスト: mysystem.mycompany.com
 - LDAP非セキュアポート: 389
 - LDAPセキュアポート: 636
 - LDAP管理者: cn=admin,o=context
 - LDAP管理者パスワード: *****
 - パブリック匿名アカウントの使用:
 - LDAPゲスト: cn=guest,ou=idmsample-test,o=context
 - LDAPゲストパスワード: *****
 - セキュアな管理者接続:
 - セキュアなユーザ接続:
- eDirectory DN (eDirectory DN):**
 - ルートコンテナDN: ou=idmsample-test,o=context
 - プロビジョニングドライバDN: cn=myDriver,cn=TestDriver,o=context
 - ユーザアプリケーション管理者: cn=admin,ou=idmsample-test,o=context
 - プロビジョニングアプリケーション管理者: cn=adminprov,ou=idmsample-test,o=context
 - ユーザコンテナDN: ou=idmsample-test,o=context
 - グループコンテナDN: ou=groups,ou=idmsample-test,o=context
- eDirectory証明書 (eDirectory Certificate):**
 - キーストアパス: C:\Program Files\Java\jdk1.5.0_06\jre\lib\secu...
 - キーストアパスワード: *****
 - キーストアパスワードの確認: *****
- 電子メール (Email):**
 - 通知テンプレートホストURL: [Empty field]

At the bottom, there are buttons for 'OK', 'キャンセル...' (Cancel), and '詳細オプションの表示' (Show Detailed Options).

表 5-4 ユーザアプリケーション環境設定: 基本パラメータ

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory 接続設定	LDAP ホスト	必須。LDAP サーバのホスト名または IP アドレスと、そのセキュアポートを指定します。たとえば、次のようにします。 myLDAPhost
	LDAP 非セキュアポート	LDAP サーバの非セキュアポートを指定します。たとえば、「389」のように指定してください。
	LDAP セキュアポート	LDAP サーバのセキュアポートを指定します。たとえば、「636」のように指定してください。
	LDAP 管理者	必須。LDAP 管理者の資格情報を指定します。このユーザは既に存在している必要があります。ユーザアプリケーションは、このアカウントを使用して識別ボールドへの管理接続を行います。この値は、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	LDAP 管理者パスワード	必須。LDAP 管理者パスワードを指定します。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	パブリック匿名アカウントの使用	ログインしていないユーザに、LDAP パブリック匿名アカウントへのアクセスを許可します。
	LDAP ゲスト	ログインしていないユーザに、許可されたポートレットへのアクセスを許可します。このユーザアカウントは、識別ボールドにすでに存在している必要があります。[LDAP ゲスト] を有効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] の選択を解除する必要があります。[ゲストユーザ] を無効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] を選択します。
	LDAP ゲストパスワード	LDAP ゲストパスワードを指定します。
	セキュアな管理者接続	このオプションを選択すると、管理者アカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります (このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。
	セキュアなユーザ接続	このオプションを選択すると、ログインユーザのアカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります (このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory DN	ルートコンテナDN	必須。ルートコンテナの LDAP 識別名を指定します。これは、ディレクトリ抽象化層で検索ルートが指定されない場合に、デフォルトのエンティティ定義検索ルートとして使用されます。
	プロビジョニングドライバDN	必須。前述の 105 ページのセクション 5.3 「ユーザアプリケーションドライバの作成」 で作成したユーザアプリケーションドライバの識別名を指定します。たとえば、ドライバが UserApplicationDriver でドライバセットの名前が myDriverSet であり、ドライバセットが o=myCompany のコンテキストにある場合は、次の値を入力します。 <code>cn=UserApplicationDriver,cn=myDriverSet,o=myCompany</code>
	ユーザアプリケーション管理者	必須。指定されたユーザアプリケーションのユーザコンテナについての管理タスクを実行する権限のある、識別ポータル内の既存のユーザ。このユーザは、ユーザアプリケーションの [管理者] タブを使用してポータルを管理できます。 ユーザアプリケーション管理者が、 iManager 、 Novell Designer for identity Manager 、またはユーザアプリケーション ([要求と承認] タブ) に公開されているワークフロー管理タスクに参加する場合は、この管理者に、ユーザアプリケーションドライバに含まれるオブジェクトインスタンスに対する適切なトラスティ権限を与える必要があります。詳細は、 IDM ユーザアプリケーション: 管理ガイド を参照してください。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。
	プロビジョニングアプリケーション管理者	この役割は Identity Manager 3.5.1 のプロビジョニングバージョンで使用可能です。プロビジョニングアプリケーション管理者は、 [プロビジョニング] タブ ([管理] タブの下) を使用して、プロビジョニングワークフロー機能を管理します。これらの機能は、ユーザアプリケーションの [要求と承認] タブでユーザが使用可能です。このユーザは、プロビジョニングアプリケーション管理者に指定される前に、識別ポータルに存在する必要があります。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory DN(続き)	ユーザ コンテナ DN	<p>必須。ユーザコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。これにより、ユーザおよびグループの検索スコープが定義されます。このコンテナ内 (およびその下) のユーザが、ユーザアプリケーションにログインできます。</p> <hr/> <p>重要: ユーザがワークフローを実行できるようにする場合は、ユーザアプリケーションドライバの設定中に指定したユーザアプリケーション管理者は、このコンテナ内に存在する点に注意してください。</p>
	グループコンテナ DN	<p>必須。グループコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。</p> <p>ディレクトリ抽象化レイヤ内のエンティティ定義で使用します。</p>
eDirectory 証明書	キーストアパス	<p>必須。アプリケーションサーバが実行に使用しているの JDK のキーストア (cacerts) ファイルへのフルパスを指定するか、小さなブラウザボタンをクリックして cacerts ファイルに移動します。</p> <p>Linux または Solaris では、ユーザにはこのファイルへの書き込み許可が必要です。</p>
	キーストアパスワード/キーストアパスワードの確認	<p>必須。cacerts のパスワードを指定します。デフォルトは、「changeit」です。</p>
電子メール	通知テンプレートホストトークン	<p>Identity Manager ユーザアプリケーションをホストしているアプリケーションサーバを指定します。たとえば、次のようにします。</p> <p>myapplication serverServer</p> <p>この値は、電子メールテンプレートの \$HOST\$ トークンと置き換えられます。作成される url は、プロビジョニング要求タスクと承認通知へのリンクです。</p>
	通知テンプレートポートトークン	<p>プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$PORT\$ トークンの置き換えに使用されます。</p>
	通知テンプレートセキュアポートトークン	<p>プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$SECURE_PORT\$ トークンの置き換えに使用します。</p>
	通知 SMTP 電子メール送信者:	<p>プロビジョニング電子メール内のユーザから電子メールが送信されるように指定します。</p>
	通知 SMTP 電子メールホスト:	<p>プロビジョニング電子メールを使用している SMTP 電子メールホストを指定します。これは、IP アドレスまたは DNS 名が可能です。</p>

設定のタイプ	フィールド	説明
パスワード管理	外部パスワードWARの使用	<p>この機能によって、外部の [パスワードを忘れた場合の War] にある [パスワードを忘れた場合] ページと、外部の [パスワードを忘れた場合の WAR] が Web サービスを経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用する URL を指定できます。</p> <p>[外部パスワードWARの使用] をオンにする場合は、[パスワードを忘れた場合のリンク] および [パスワードを忘れた場合の返信リンク] に値を指定する必要があります。</p> <p>[外部パスワードWarの使用] を選択しない場合は、デフォルトの内部パスワード管理機能が使用されます。/jsps/pwdmgmt/ForgotPassword.jsf(最初は http(s) プロトコルなし)。これは、ユーザを、外部 WAR ではなく、ユーザアプリケーションに組み込まれた [パスワードを忘れた場合] 機能にリダイレクトします。</p>
	パスワードを忘れた場合のリンク	<p>この URL は [パスワードを忘れた場合] 機能ページを指します。外部または内部のパスワード管理 WAR にある ForgotPassword.jsf ファイルを指定します。詳細については、141 ページの「パスワード WAR の使用」を参照してください。</p>
	パスワードを忘れた場合の返信リンク	<p>外部のパスワード管理 WAR を使用している場合は、外部の [パスワード管理 WAR] が Web サービス、たとえば <code>https://idmhost:sslport/idm</code> を経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用するパスを指定します。</p>

- 2 追加ユーザアプリケーション環境設定パラメータに設定する場合は、[詳細オプションの表示] をクリックします。(スクロールしてパネル全体を表示します。) [表 5-5](#) は、詳細オプションのパラメータについて説明します。

このステップで説明した追加パラメータを設定しない場合は、スキップして [ステップ 3](#) に進みます。

表 5-5 ユーザアプリケーション環境設定: すべてのパラメータ

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory 接続設定	LDAP ホスト	必須。LDAP サーバのホスト名または IP アドレスを指定します。たとえば、次のようにします。 myLDAPhost
	LDAP 非セキュアポート	LDAP サーバの非セキュアポートを指定します。たとえば、「389」のように指定してください。
	LDAP セキュアポート	LDAP サーバのセキュアポートを指定します。たとえば、「636」のように指定してください。
	LDAP 管理者	必須。LDAP 管理者の資格情報を指定します。このユーザは既に存在している必要があります。ユーザアプリケーションは、このアカウントを使用して識別ボールドへの管理接続を行います。この値は、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	LDAP 管理者パスワード	必須。LDAP 管理者パスワードを指定します。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	パブリック匿名アカウントの使用	ログインしていないユーザに、LDAP パブリック匿名アカウントへのアクセスを許可します。
	LDAP ゲスト	ログインしていないユーザに、許可されたポートレットへのアクセスを許可します。このユーザアカウントは、識別ボールドにすでに存在している必要があります。[LDAP ゲスト] を有効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] の選択を解除する必要があります。[ゲストユーザ] を無効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] を選択します。
	LDAP ゲストパスワード	LDAP ゲストパスワードを指定します。
	セキュアな管理者接続	このオプションを選択すると、管理者アカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります(このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。
	セキュアなユーザ接続	このオプションを選択すると、ログインユーザのアカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります(このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory DN	ルートコンテナDN	必須。ルートコンテナのLDAP 識別名を指定します。これは、ディレクトリ抽象化層で検索ルートが指定されない場合に、デフォルトのエンティティ定義検索ルートとして使用されます。
	プロビジョニングドライバDN	必須。前述の 105 ページのセクション 5.3 「ユーザアプリケーションドライバの作成」 で作成したユーザアプリケーションドライバの識別名を指定します。たとえば、ドライバが UserApplicationDriver でドライバセットの名前が myDriverSet であり、ドライバセットが o=myCompany のコンテキストにある場合は、次の値を入力します。 <code>cn=UserApplicationDriver,cn=myDriverSet,o=myCompany</code>
	ユーザアプリケーション管理者	必須。指定されたユーザアプリケーションのユーザコンテナについての管理タスクを実行する権限のある、識別ポータル内の既存のユーザ。このユーザは、ユーザアプリケーションの [管理者] タブを使用してポータルを管理できます。 ユーザアプリケーション管理者が、 iManager 、 Novell Designer for identity Manager 、またはユーザアプリケーション ([要求と承認] タブ) に公開されているワークフロー管理タスクに参加する場合は、この管理者に、ユーザアプリケーションドライバに含まれるオブジェクトインスタンスに対する適切なトラスティ権限を与える必要があります。詳細は、 IDM ユーザアプリケーション: 管理ガイド を参照してください。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。
	プロビジョニングアプリケーション管理者	この役割は Identity Manager 3.5.1 のプロビジョニングバージョンで使用可能です。プロビジョニングアプリケーション管理者は、ユーザアプリケーションの [要求と承認] タブで使用可能なプロビジョニングワークフロー機能を管理します。このユーザは、プロビジョニングアプリケーション管理者に指定される前に、識別ポータルに存在する必要があります。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。

設定のタイプ	フィールド	説明
メタディレクトリユーザ ID	ユーザ コンテナ DN	<p>必須。ユーザコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。</p> <p>これにより、ユーザおよびグループの検索スコープが定義されます。</p> <p>このコンテナ内 (およびその下) のユーザが、ユーザアプリケーションにログインできます。</p> <hr/> <p>重要: ユーザがワークフローを実行できるようにする場合は、ユーザアプリケーションドライバの設定中に指定したユーザアプリケーション管理者は、このコンテナ内に存在する点に注意してください。</p>
	ユーザオブジェクトクラス	LDAP ユーザオブジェクトクラス (通常は inetOrgPerson)。
	ログイン属性	ユーザのログイン名を表す LDAP 属性 (たとえば CN)。
	名前付け属性	ユーザまたはグループをルックアップする際に ID として使用する LDAP 属性これはログイン属性と同じではありません。ログイン属性はログイン中にのみ使用し、ユーザおよびグループの検索中には使用しません。
メタディレクトリユーザグループ	ユーザメンバーシップ属性	オプション。ユーザのグループメンバーシップを表す LDAP 属性です。この名前にはスペースを使用しないでください。
	グループコンテナ DN	必須。グループコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。ディレクトリ抽象化レイヤ内のエンティティ定義で使用します。
	グループオブジェクトクラス	LDAP オブジェクトクラス (通常は groupofNames)。
	グループメンバーシップ属性	ユーザのグループメンバーシップを表す属性です。この名前にはスペースを使用しないでください。
	ダイナミックグループの使用	ダイナミックグループを使用する場合は、このオプションを選択します。
	ダイナミックグループオブジェクトクラス	LDAP ダイナミックグループオブジェクトクラス (通常は dynamicGroup)。

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory 証明書	キーストアパス	必須。アプリケーションサーバが実行に使用しているの JRE のキーストア (cacerts) ファイルへのフルパスを指定するか、小さなブラウザボタンをクリックして cacerts ファイルに移動します。 ユーザアプリケーションのインストールによって、キーストアファイルが変更されます。 Linux または Solaris では、ユーザにはこのファイルへの書き込み許可が必要です。
	キーストアパスワード	必須。 cacerts のパスワードを指定します。デフォルトは、「 changeit 」です。
	キーストアパスワードの確認	
プライベートキーストア	プライベートキーストアパス	プライベートキーストアには、ユーザアプリケーションのプライベートキーおよび証明書が含まれます。予約済み。入力しない場合は、このパスはデフォルトで /jre/lib/security/cacerts になります。
	プライベートキーストアパスワード	このパスワードは、別のパスワードを指定するまでは changeit です。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	プライベートキーの別名	この別名は、別の別名を指定するまでは novellIDMUserApp です。
	プライベートキーパスワード	このパスワードは、別のパスワードを指定するまでは novel1IDM です。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
トラステッドキーストア	トラステッドキーストアパス	トラステッドキーストアには、有効なデジタル署名に使用するすべてのトラステッド署名者の証明書が含まれます。入力しない場合は、ユーザアプリケーションはシステムプロパティ javax.net.ssl.trustStore からパスを取得します。パスがそこではない場合は、 jre/lib/security/cacerts だと推測されます。
	トラステッドキーストアパスワード	このフィールドを入力しない場合は、ユーザアプリケーションはシステムプロパティ javax.net.ssl.trustStorePassword からパスワードを取得します。値がそこではない場合は、が使用されます。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
Novell Audit デジタル署名および証明書キー		Novell Audit デジタル署名キーおよび証明書が含まれます。
	Novell Audit デジタル署名証明書	デジタル署名証明書が表示されます。
	Novell Audit デジタル署名秘密鍵	デジタル署名秘密鍵が表示されます。このキーは、マスタキーに基づいて暗号化されます。

設定のタイプ	フィールド	説明
iChain 設定	ICS ログアウトが有効	このオプションが選択されている場合は、ユーザアプリケーションによってユーザアプリケーションおよび iChain® または Novell Access Manager の同時ログアウトがサポートされます。Novell Access Manager にログアウト時にクッキーがあるかどうかをチェックされ、クッキーが存在する場合は、ユーザを ICS ログアウトページに再ルーティングします。
	ICS ログアウトページ	iChain または Novell Access Manager ログアウトページへの URL は、iChain または Novell Access Manager が期待する URL がホスト名である場所です。ICS ログが有効な場合は、ユーザはユーザアプリケーションからログアウトし、ユーザはこのページを再ルーティングします。
電子メール	通知テンプレートホストトークン	Identity Manager ユーザアプリケーションをホストしているアプリケーションサーバを指定します。たとえば、次のようにします。 <code>myapplication serverServer</code> この値は、電子メールテンプレートの \$HOST\$ トークンと置き換えられます。作成される url は、プロビジョニング要求タスクと承認通知へのリンクです。
	通知テンプレートポートトークン	プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$PORT\$ トークンの置き換えに使用されます。
	通知テンプレートセキュアポートトークン	プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$SECURE_PORT\$ トークンの置き換えに使用します。
	通知テンプレートプロトコルトークン	非セキュアプロトコル、HTTP を参照してください。プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$PROTOCOL\$ トークンの置き換えに使用します。
	通知テンプレートセキュアプロトコルトークン	セキュアプロトコル、HTTP を参照してください。プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$SECURE_PROTOCOL\$ トークンの置き換えに使用されます。
	通知 SMTP 電子メール送信者:	プロビジョニング電子メール内のユーザからの電子メールを指定します。
	通知 SMTP 電子メールホスト:	プロビジョニング電子メールを使用している SMTP 電子メールホストを指定します。これは、IP アドレスまたは DNS 名が可能です。

設定のタイプ	フィールド	説明
パスワード管理	外部パスワード WAR の使用	<p>この機能によって、外部の [パスワードを忘れた場合の War] にある [パスワードを忘れた場合] ページと、外部の [パスワードを忘れた場合の WAR] が Web サービスを経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用する URL を指定できます。</p> <p>[外部パスワード WAR の使用] を選択する場合は、[パスワードを忘れた場合のリンク] および [パスワードを忘れた場合の返信リンク] に値を指定する必要があります。</p> <p>[外部パスワード War の使用] を選択しない場合は、デフォルトの内部パスワード管理機能が使用されます。/jsps/pwdmgt/ForgotPassword.jsf(最初は http(s) プロトコルなし)。これは、ユーザを、外部 WAR ではなく、ユーザアプリケーションに組み込まれた [パスワードを忘れた場合] 機能にリダイレクトします。</p>
	パスワードを忘れた場合のリンク	<p>この URL は [パスワードを忘れた場合] 機能ページを指します。外部または内部のパスワード管理 WAR にある ForgotPassword.jsf ファイルを指定します。詳細については、141 ページの「パスワード WAR の使用」を参照してください。</p>
	パスワードを忘れた場合の返信リンク	<p>外部のパスワード管理 WAR を使用している場合は、外部の [パスワード管理 WAR] が Web サービス、たとえば <code>https://idmhost:sslport/idm</code> を経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用するパスを指定します。</p>
その他	セッションのタイムアウト	<p>アプリケーションセッションのタイムアウト。</p>
	OCSP URI	<p>クライアントインストールが On-Line Certificate Status Protocol (OCSP) を使用する場合は、Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。たとえば、フォーマットは <code>http://host:port/ocspLocal</code> です。OCSP URI によって、トラステッド証明書オンラインの状態は更新されます。</p>
	許可設定パス	<p>許可環境設定ファイルの完全修飾名。</p>

設定のタイプ	フィールド	説明
コンテナオブジェクト	選択済み	使用する各コンテナオブジェクトタイプを選択します。
	コンテナオブジェクトタイプ	地域、国、部門、組織、およびドメインの規格コンテナから選択します。iManager内で自分のコンテナを定義でき、これを「新規コンテナオブジェクトの追加」の下に追加できます。
	コンテナ属性名	コンテナオブジェクトタイプに関連する属性タイプ名をリストします。
	新規コンテナオブジェクトの追加: コンテナオブジェクトタイプ	コンテナとして使用できる識別ポールドからオブジェクトクラスのLDAP名を指定します。 コンテナの詳細については、『Novell iManager 2.6 Administration Guide (http://www.novell.com/documentation/imanager26/pdfdoc/imanager_admin_26/imanager_admin_26.pdf)』を参照してください。
	新規コンテナオブジェクトの追加: コンテナ属性名	コンテナオブジェクトの属性名を指定します。

注: インストール後には、このファイルでほとんどの設定を編集できます。編集するには、インストールサブディレクトリにある `configupdate.sh` スクリプトまたは Windows `configupdate.bat` ファイルを実行します。クラスタ内でこれを記憶します。このファイルの設定はクラスタのすべてのメンバーで同じである必要があります。

- 3 設定で環境設定を完了したら、[OK] をクリックして、142 ページのセクション 5.5.15 「選択内容の確認とインストール」に進みます。

パスワード WAR の使用

[パスワードを忘れた場合のリンク] 環境設定パラメータを使用して、[パスワードを忘れた場合] 機能を含む WAR の場所を指定します。ユーザアプリケーションの外部または内部の WAR を指定できます。

外部パスワード管理 WAR の指定

- 1 インストール手順または `configupdate` ユーティリティを使用します。
- 2 ユーザアプリケーション環境設定パラメータで、[外部パスワード WAR の使用] 環境設定パラメータチェックボックスをオンにします。
- 3 [パスワードを忘れた場合のリンク] 環境設定パラメータには、外部パスワード WAR の場所を指定します。
ホストおよびポートを含めます。たとえば、`http://localhost:8080/`。外部パスワード WAR は、ユーザアプリケーションを保護するファイアウォールの外側にできます。
- 4 [パスワードを忘れた場合の返信リンク] には、外部の [パスワード管理 WAR] が Web サービス、たとえば `https://idmhost:sslport/idm` を経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用する外部パスワード管理 WAR パスを指定します。

返信リンクでは、SSL を使用して、ユーザアプリケーションにセキュアな Web サービス通信を確保する必要があります。179 ページのセクション 5.9.3 「JBoss サーバ間の SSL 通信の設定」も参照してください。

- 5 インストーラを使用している場合は、このステップで情報を読み、**ステップ 6**に進みます。

configupdate ユーティリティを使用して、インストールのルートディレクトリ内の外部パスワード WAR を使用している場合は、このステップを読み、手動で WAR の名前を [パスワードを忘れた場合のリンク] で指定した最初のディレクトリに名前変更します。そのあと、**ステップ 6**に進みます。

インストールの終了前に、インストーラによって IDMPwdMgt.war(インストーラにバンドルされています) は指定する最初のディレクトリの名前に名前変更されます。名前変更された IDMPwdMgt.war は外部パスワード WAR になります。たとえば、http://www.idmpwdmgthost.com/ExternalPwd/jsps/pwdmgt/ForgotPassword.jsf を指定する場合は、インストーラによって IDMPwdMgt.war は ExternalPwd.war に名前変更されます。インストーラによって、名前変更された WAR はインストールルートディレクトリに移動されます。

- 6 ExternalPwd.war を、外部パスワード WAR 機能を実行するリモート JBoss サーバ展開ディレクトリに、手動でコピーします。

内部パスワード管理 WAR の指定

- 1 [外部パスワード WAR の使用] を選択しないでください。
- 2 [パスワードを忘れた場合のリンク] のデフォルトの場所を受諾するか、別のパスワード WAR の URL を指定します。
- 3 [パスワードを忘れた場合の返信リンク] のデフォルトの値を受諾します。

5.5.15 選択内容の確認とインストール

- 1 [インストール前の概要] ページを読んで、インストールパラメータの選択を確認します。
- 2 必要に応じて、[戻る] を使用して前のインストールページに戻り、インストールパラメータを変更します。

ユーザアプリケーション環境設定ページでは値は保存されませんので、インストールの前のページを再指定した後に、ユーザアプリケーション環境設定値を再入力する必要があります。
- 3 インストールおよび環境設定パラメータで満足したら、[Pre-Install Summary (インストール前の概要)] ページに戻り、[インストール] をクリックします。

5.5.16 ログファイルの表示

- 1 インストールがエラーなしで完了した場合は、178 ページのセクション 5.9 「インストール後のタスク」に移動します。
- 2 インストールでエラーまたは警告が発生した場合は、次のようなログファイルを確認して、問題を判断してください。
 - ◆ Identity_Manager_User_Application_InstallLog.log には、基本的なインストールタスクの結果が格納されています。

- ◆ Novell-Custom-Install.log には、インストール中に行ったユーザアプリケーション環境設定についての情報があります。

問題を解決するヘルプについては、[182 ページのセクション 5.11 「トラブルシューティング」](#)を参照してください。

5.6 WebSphere アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール

この項では、グラフィカルユーザインタフェースバージョンのインストーラを使用して、WebSphere アプリケーションサーバに IDM ユーザアプリケーションをインストールする方法について説明します。

- ◆ [143 ページのセクション 5.6.1 「インストーラ GUI の起動」](#)
- ◆ [145 ページのセクション 5.6.2 「アプリケーションサーバプラットフォームの選択」](#)
- ◆ [145 ページのセクション 5.6.3 「WAR の場所の指定」](#)
- ◆ [146 ページのセクション 5.6.4 「インストールフォルダの選択」](#)
- ◆ [148 ページのセクション 5.6.5 「データベースプラットフォームの選択」](#)
- ◆ [150 ページのセクション 5.6.6 「Java のルートディレクトリの指定」](#)
- ◆ [151 ページのセクション 5.6.7 「Novell Audit のログの有効化」](#)
- ◆ [152 ページのセクション 5.6.8 「マスタキーの指定」](#)
- ◆ [153 ページのセクション 5.6.9 「ユーザアプリケーションの設定」](#)
- ◆ [166 ページのセクション 5.6.10 「選択内容の確認とインストール」](#)
- ◆ [167 ページのセクション 5.6.11 「ログファイルの表示」](#)
- ◆ [167 ページのセクション 5.6.12 「ユーザアプリケーション環境設定ファイルと JVM システムプロパティの追加」](#)
- ◆ [168 ページのセクション 5.6.13 「WebSphere キーストアへの eDirectory ルート認証局のインポート」](#)
- ◆ [169 ページのセクション 5.6.14 「IDM WAR ファイルの展開」](#)
- ◆ [170 ページのセクション 5.6.15 「アプリケーションの起動」](#)
- ◆ [170 ページのセクション 5.6.16 「ユーザアプリケーションポータルへのアクセス」](#)

5.6.1 インストーラ GUI の起動

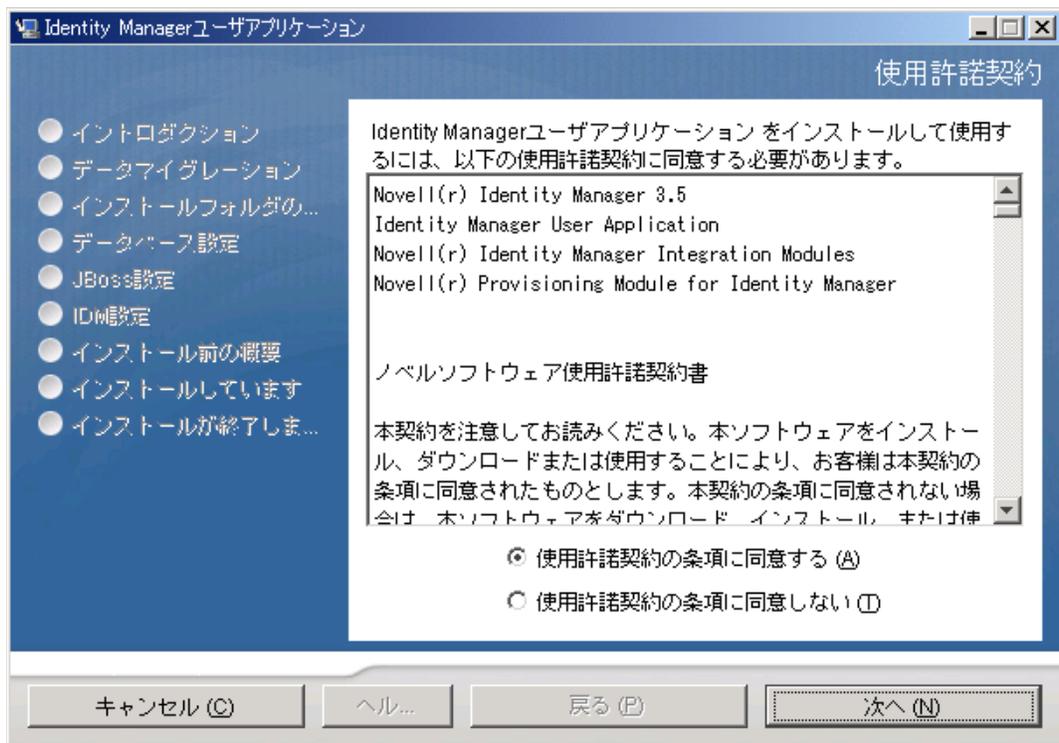
- 1 インストールファイルが含まれるディレクトリに移動します。
- 2 次のコマンドを入力して、インストーラを起動します。

```
java -jar IdmUserApp.jar
```

- 3 ドロップダウンメニューから言語を選択してから、[OK] をクリックします。



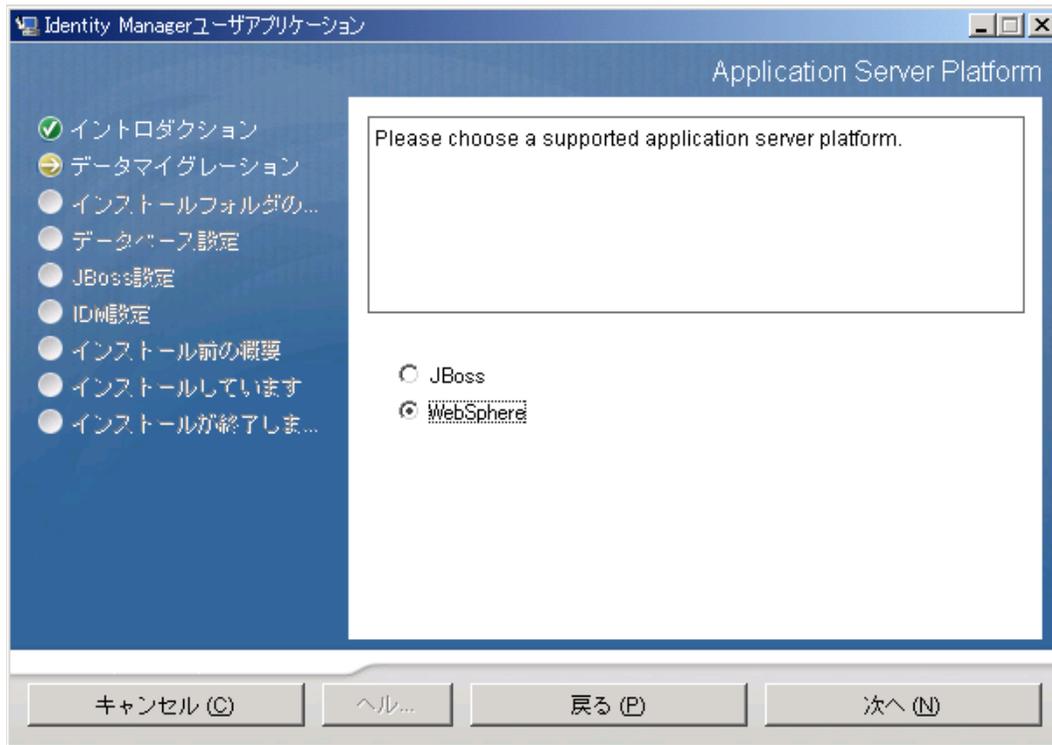
- 4 使用許諾契約を読み、[i accept the terms of the License agreement (使用許諾契約の条件に同意します)], [次へ] の順にクリックします。



- 5 インストールウィザードの [イントロダクション] ページを読み、[次へ] をクリックします。
- 6 145 ページのセクション 5.6.2 「アプリケーションサーバプラットフォームの選択」に進みます。

5.6.2 アプリケーションサーバプラットフォームの選択

- 1 [アプリケーションサーバのプラットフォーム] ウィンドウで、WebSphere アプリケーションサーバプラットフォームを選択します。
- 2 [次へ] を選択します。それが終了したら [145 ページのセクション 5.6.3 「WAR の場所の指定」](#)に進みます。

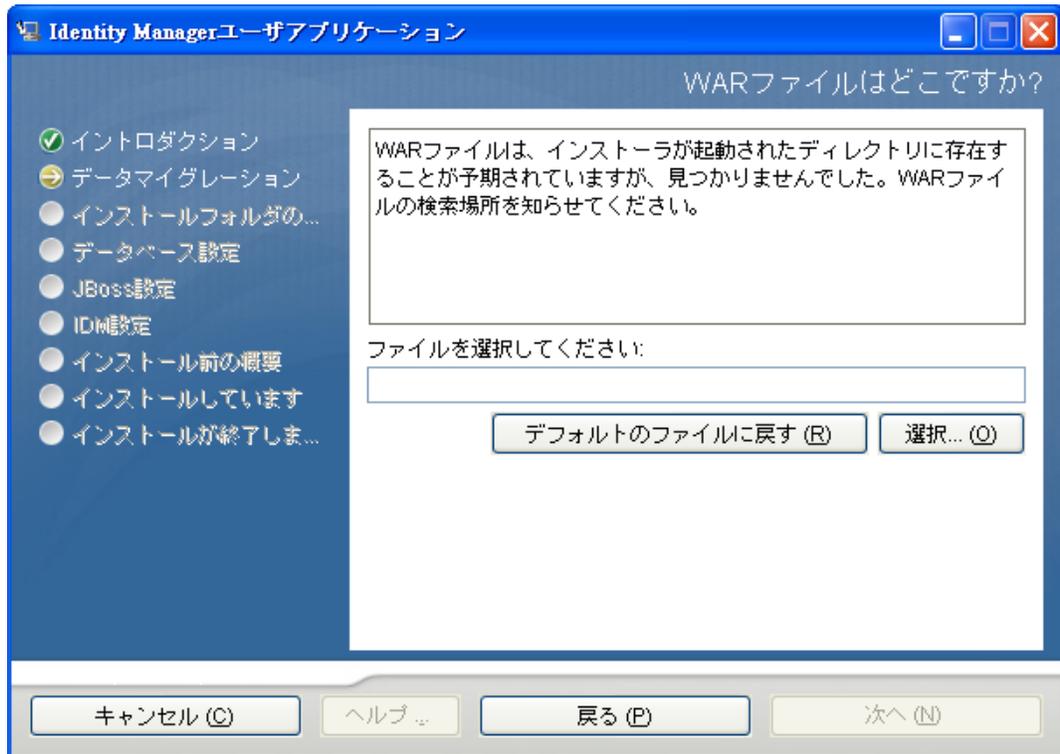


5.6.3 WAR の場所の指定

Identity Manager ユーザアプリケーションの WAR ファイルがインストーラとは別のディレクトリにある場合は、インストーラによって WAR へのパスを入力するようメッセージが表示されます。

- 1 WAR がデフォルトの場所にある場合は、[デフォルトのフォルダに戻す] をクリックできます。

または、WAR ファイルの場所を指定する場合は、[選択] をクリックして場所を選択します。

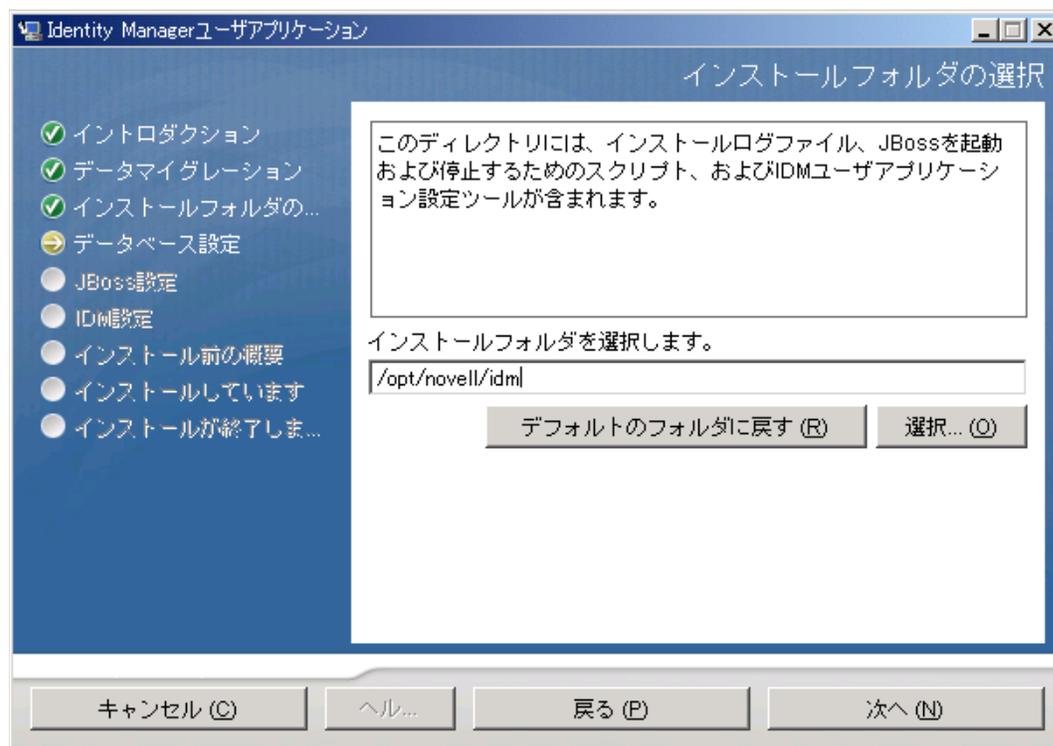


- 2 [次へ] をクリックして、146 ページのセクション 5.6.4 「インストールフォルダの選択」に進みます。

5.6.4 インストールフォルダの選択

- 1 [インストールフォルダ] ページで、ユーザアプリケーションをインストールする場所を選択します。デフォルトの場所を記憶して使用する必要がある場合は、[Restore

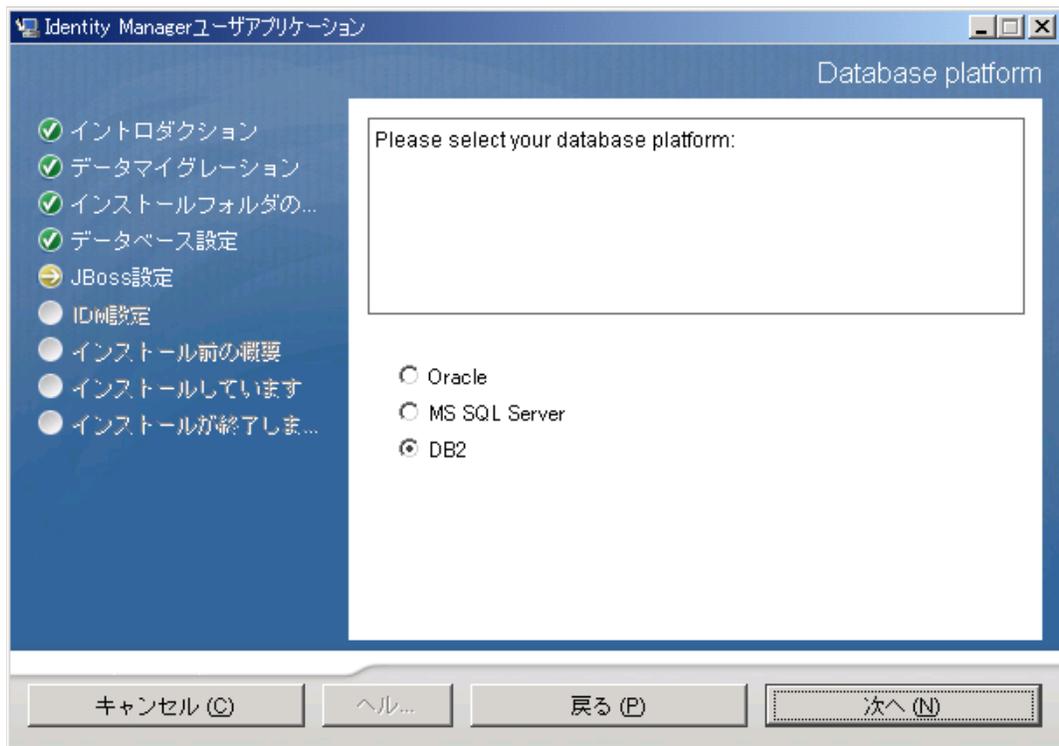
Default Folder] をクリックします。または、インストールファイルの別の場所を選択する場合は、*選択* をクリックして場所を参照します。



- 2 [次へ] をクリックして、148 ページのセクション 5.6.5 「データベースプラットフォームの選択」に進みます。

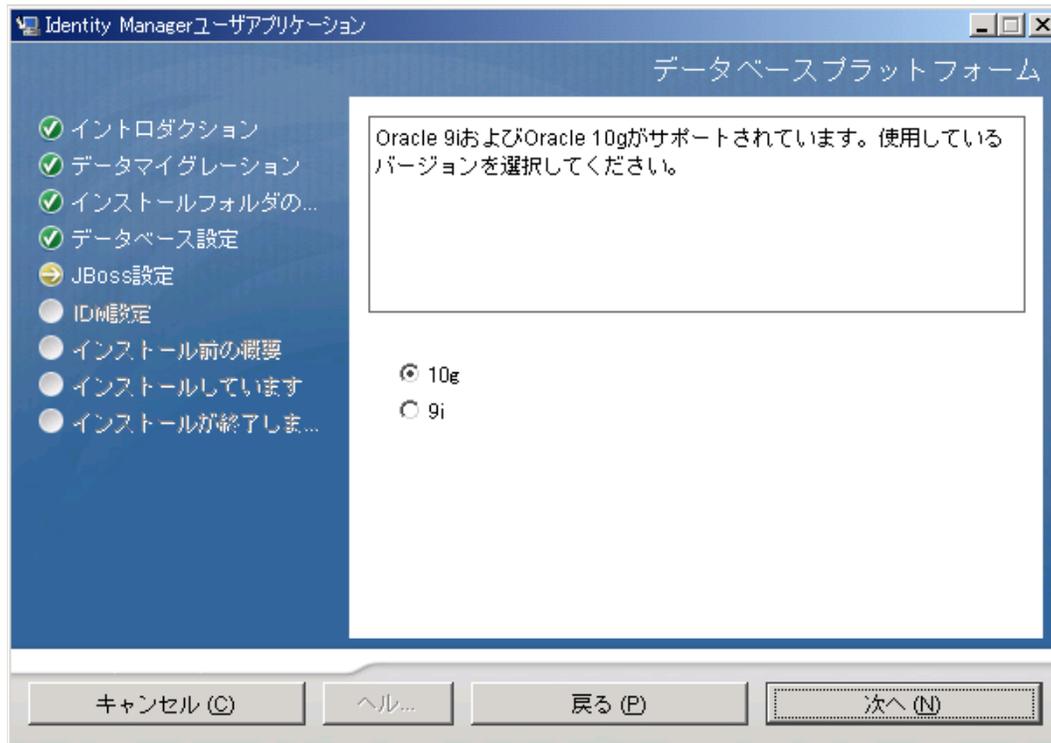
5.6.5 データベースプラットフォームの選択

- 1 使用するデータベースプラットフォームを選択します。



- 2 Oracle データベースを使用している場合は、**ステップ 3**に進みます。それ以外の場合は、スキップして**ステップ 4**に進みます。

- 3 Oracle データベースを使用している場合は、インストーラによって、使用しているバージョンの入力が要求されます。バージョンを選択します。

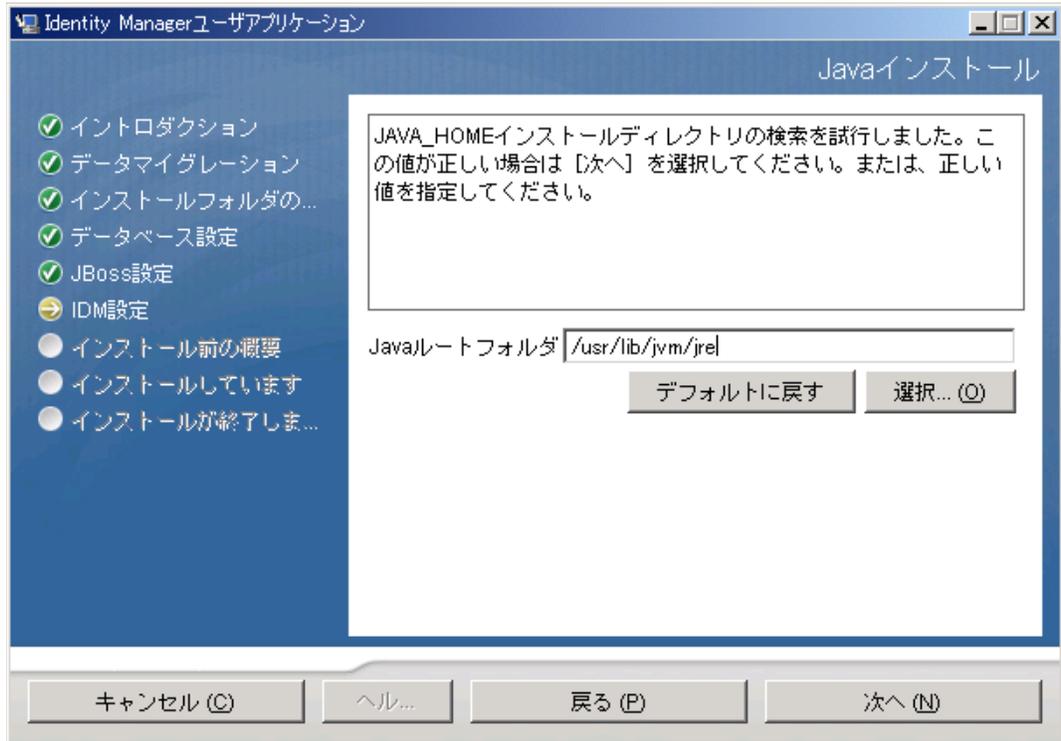


- 4 [次へ] をクリックして、150 ページのセクション 5.6.6 「Java のルートディレクトリの指定」に進みます。

5.6.6 Java のルートディレクトリの指定

注：WebSphere では、制限なしのポリシーファイルが適用された IBM JDK を使用する必要があります。

- 1 [選択] をクリックして、Java のルートフォルダを参照します。デフォルトの場所を使用するには、[デフォルトの復元] をクリックします。

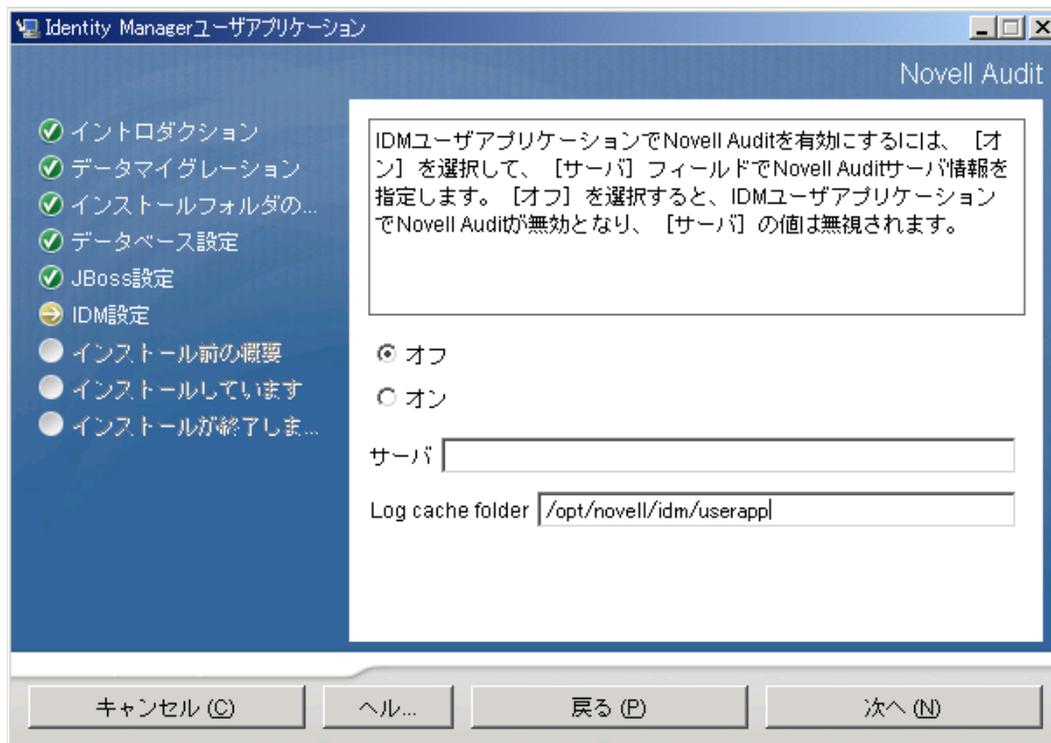


- 2 [次へ] をクリックして、151 ページのセクション 5.6.7 「Novell Audit のログの有効化」に進みます。

5.6.7 Novell Audit のログの有効化

ユーザアプリケーションの Novell Audit のログ (オプション) を有効にする

1 次のフィールドに入力します。



オプション	説明
オフ	ユーザアプリケーションで Novell Audit のログが無効になります。ユーザアプリケーションの [管理] タブを使用すると、後でログを有効にできます。 Novell Audit のログの有効化の詳細については、『 <i>Identity Manager ユーザアプリケーション: 管理ガイド</i> 』を参照してください。
オン	ユーザアプリケーションで Novell Audit のログが有効になります。 Novell Audit のログの設定の詳細については、『 <i>Identity Manager ユーザアプリケーション: 管理ガイド</i> 』を参照してください。
サーバ	Novell Audit ログをオンにする場合は、 Novell Audit サーバのホスト名または IP アドレスを指定します。ログをオフにする場合は、この値は無視されます。
ログキャッシュフォルダ	ログキャッシュ用のディレクトリを指定します。

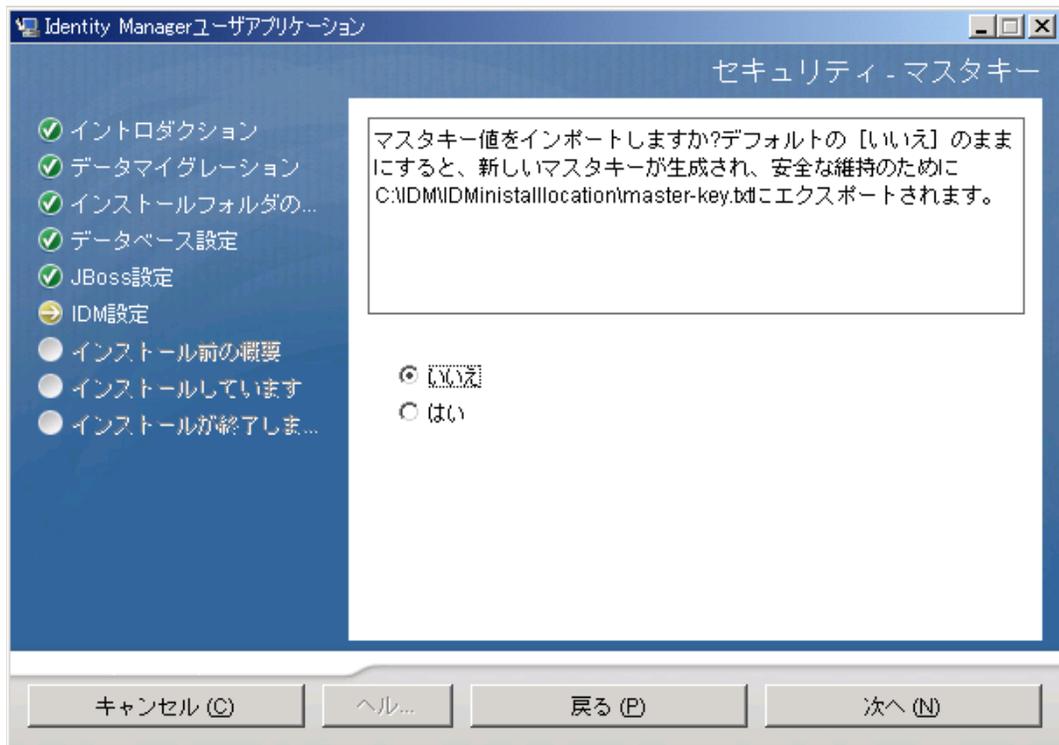
2 [次へ] をクリックし、152 ページのセクション 5.6.8 「マスタキーの指定」に進みます。

5.6.8 マスタキーの指定

既存のマスタキーをインポートするか、新しいマスタキーを作成するかを指定します。既存のマスタキーをインポートする理由には、次のようなものがあります。

- ◆ インストールファイルをステージングシステムから運用システムに移動中で、ステージングシステムで使用したデータベースへのアクセスを保持する場合。
- ◆ ユーザアプリケーションを最初のクラスタのメンバーにインストールしており、現在はクラスタの次のメンバーにインストールしている場合 (同じマスタキーが必要)。
- ◆ ディスク故障のため、ユーザアプリケーションを復元する必要がある場合。ユーザアプリケーションを再インストールして、以前のインストールで使用したのと同じ暗号化マスタキーを指定する必要があります。これによって、前に保存した暗号化データにアクセスできます。

- 1 [はい] をクリックして既存のマスタキーをインポートするか、または [いいえ] をクリックして新しいマスタキーを作成します。

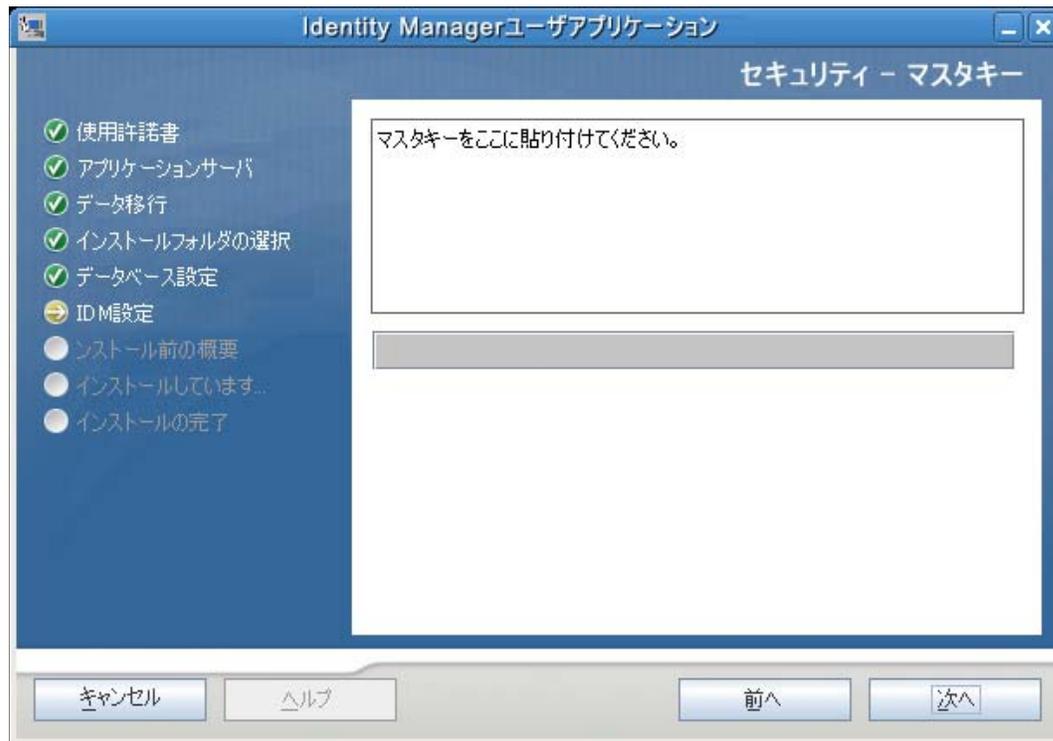


- 2 [次へ] をクリックします。

インストール手順で、インストールディレクトリにある `master-key.txt` ファイルに暗号化マスタキーが書き込まれます。

[いいえ] を選択する場合は、153 ページのセクション 5.6.9 「ユーザアプリケーションの設定」までスキップされます。インストールが完了したら、マスタキーを手動で記録する必要があります。[はい] を選択した場合は、ステップ 3 に進みます。

- 3 既存の暗号化マスタキーのインポートを選択する場合は、該当するキーを切り取ってインストール手順ウィンドウに貼り付けます。

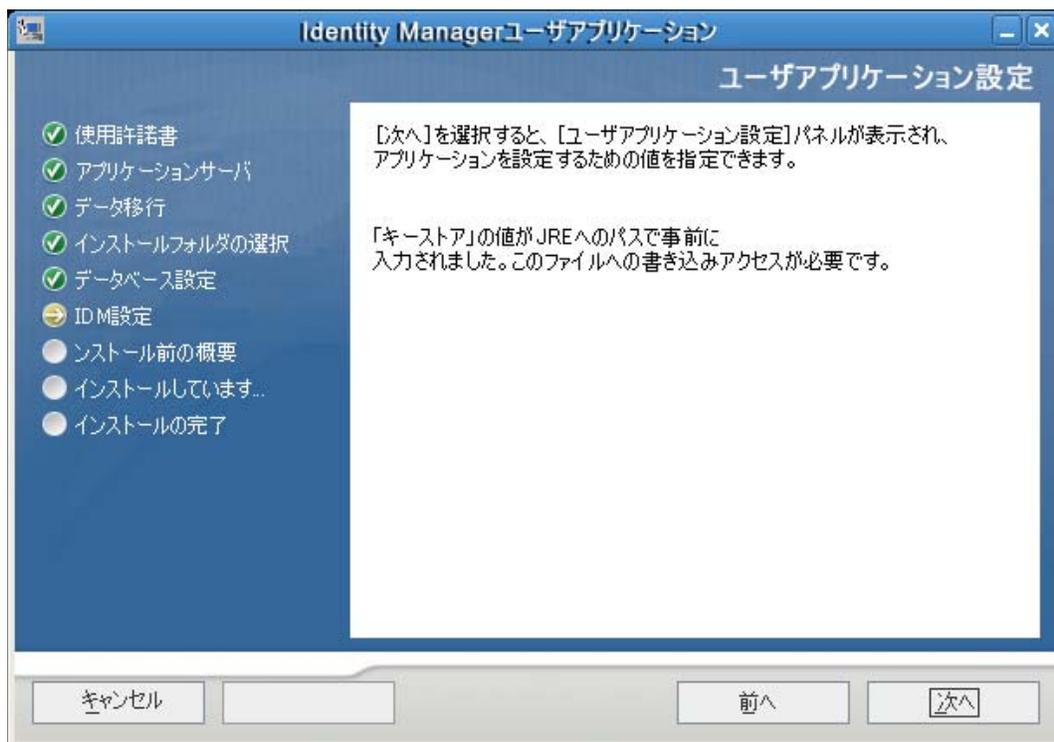


- 4 [次へ] をクリックし、153 ページのセクション 5.6.9 「ユーザアプリケーションの設定」に進みます。

5.6.9 ユーザアプリケーションの設定

ユーザアプリケーションをインストールすると、ユーザアプリケーション環境設定パラメータを設定できます。インストールすると、これらのパラメータの多くは `configupdate.sh` または `configupdate.bat` でも編集可能です。例外はパラメータ説明に記述されています。クラスタの場合は、クラスタの各メンバーに同じユーザアプリケーション環境設定パラメータを指定します。

- 1 [次へ] をクリックして、[ユーザアプリケーション環境設定] ページの 1 ページ目に移動します。



- 2 156 ページの表 5-6 で説明されている、基本のユーザアプリケーション環境設定パラメータを設定してから、ステップ 3 に進みます。

ユーザアプリケーション設定

eDirectory接続設定

LDAPホスト: your_LDAP_host

LDAP非セキュアポート: 389

LDAPセキュアポート: 636

LDAP管理者:

LDAP管理者パスワード:

パブリック匿名アカウントの使用:

LDAPゲスト:

LDAPゲストパスワード:

セキュアな管理者接続:

セキュアなユーザ接続:

eDirectory DN

ルートコンテナDN:

プロビジョニングドライバDN:

ユーザアプリケーション管理者:

プロビジョニングアプリケーション管理者:

ユーザコンテナDN:

グループコンテナDN:

eDirectory証明書

キーストアパス: /opt/novell/idm

キーストアパスワード: *****

キーストアパスワードの確認: *****

電子メール

通知テンプレートホストトークン:

通知テンプレートポートトークン:

通知テンプレートセキュアポートトークン:

通知SMTP電子メール送信者:

通知SMTP電子メールホスト:

パスワード管理

外部パスワードWARの使用:

パスワードを忘れた場合のリンク: ./jsps/pwdmgt/ForgotPassword.jsf

パスワードを忘れた場合の返信リンク:

OK キャンセル 詳細オプションの表示

表 5-6 ユーザアプリケーション環境設定: 基本パラメータ

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory 接続設定	LDAP ホスト	必須。LDAP サーバのホスト名または IP アドレスと、そのセキュアポートを指定します。たとえば、次のようにします。 myLDAPhost
	LDAP 非セキュアポート	LDAP サーバの非セキュアポートを指定します。たとえば、「389」のように指定してください。
	LDAP セキュアポート	LDAP サーバのセキュアポートを指定します。たとえば、「636」のように指定してください。
	LDAP 管理者	必須。LDAP 管理者の資格情報を指定します。このユーザは既に存在している必要があります。ユーザアプリケーションは、このアカウントを使用して識別ボールドへの管理接続を行います。この値は、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	LDAP 管理者パスワード	必須。LDAP 管理者パスワードを指定します。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	パブリック匿名アカウントの使用	ログインしていないユーザに、LDAP パブリック匿名アカウントへのアクセスを許可します。
	LDAP ゲスト	ログインしていないユーザに、許可されたポートレットへのアクセスを許可します。このユーザアカウントは、識別ボールドにすでに存在している必要があります。[LDAP ゲスト] を有効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] の選択を解除する必要があります。[ゲストユーザ] を無効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] を選択します。
	LDAP ゲストパスワード	LDAP ゲストパスワードを指定します。
	セキュアな管理者接続	このオプションを選択すると、管理者アカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります (このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。
セキュアなユーザ接続	このオプションを選択すると、ログインユーザのアカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります (このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。	

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory DN	ルートコンテナDN	必須。ルートコンテナの LDAP 識別名を指定します。これは、ディレクトリ抽象化層で検索ルートが指定されない場合に、デフォルトのエンティティ定義検索ルートとして使用されます。
	プロビジョニングドライバDN	必須。ユーザアプリケーションドライバの識別名を指定します。たとえば、ドライバが UserApplicationDriver でドライバセットの名前が myDriverSet であり、ドライバセットが o=myCompany のコンテキストにある場合は、次の値を入力します。 cn=UserApplicationDriver,cn=myDriverSet,o=myCompany
	ユーザアプリケーション管理者	必須。指定されたユーザアプリケーションのユーザコンテナについての管理タスクを実行する権限のある、識別ボールド内の既存のユーザ。このユーザは、ユーザアプリケーションの [管理者] タブを使用してポータルを管理できます。 ユーザアプリケーション管理者が、 iManager 、 Novell Designer for identity Manager 、またはユーザアプリケーション ([要求と承認] タブ) に公開されているワークフロー管理タスクに参加する場合は、この管理者に、ユーザアプリケーションドライバに含まれるオブジェクトインスタンスに対する適切なトラスティ権限を与える必要があります。詳細は、 IDM ユーザアプリケーション: 管理ガイド を参照してください。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。
	プロビジョニングアプリケーション管理者	この役割は Identity Manager 3.5.1 のプロビジョニングバージョンで使用可能です。プロビジョニングアプリケーション管理者は、 [プロビジョニング] タブ ([管理] タブの下) を使用して、プロビジョニングワークフロー機能を管理します。これらの機能は、ユーザアプリケーションの [要求と承認] タブでユーザが使用可能です。このユーザは、プロビジョニングアプリケーション管理者に指定される前に、識別ボールドに存在する必要があります。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory DN(続き)	ユーザ コンテナ DN	<p>必須。ユーザコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。これにより、ユーザおよびグループの検索スコープが定義されます。このコンテナ内 (およびその下) のユーザが、ユーザアプリケーションにログインできます。</p> <hr/> <p>重要: ユーザがワークフローを実行できるようにする場合は、ユーザアプリケーションドライバの設定中に指定したユーザアプリケーション管理者は、このコンテナ内に存在する点に注意してください。</p>
	グループコンテナ DN	<p>必須。グループコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。</p> <p>ディレクトリ抽象化レイヤ内のエンティティ定義で使用します。</p>
eDirectory 証明書	キーストアパス	<p>必須。アプリケーションサーバが実行に使用しているの JDK のキーストア (cacerts) ファイルへのフルパスを指定するか、小さなブラウザボタンをクリックして cacerts ファイルに移動します。</p> <p>Linux または Solaris では、ユーザにはこのファイルへの書き込み許可が必要です。</p>
	キーストアパスワード/キーストアパスワードの確認	<p>必須。cacerts のパスワードを指定します。デフォルトは、「changeit」です。</p>
電子メール	通知テンプレートホストトークン	<p>Identity Manager ユーザアプリケーションをホストしているアプリケーションサーバを指定します。たとえば、次のようにします。</p> <p>myapplication serverServer</p> <p>この値は、電子メールテンプレートの \$HOST\$ トークンと置き換えられます。作成される url は、プロビジョニング要求タスクと承認通知へのリンクです。</p>
	通知テンプレートポートトークン	<p>プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$PORT\$ トークンの置き換えに使用されます。</p>
	通知テンプレートセキュアポートトークン	<p>プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$SECURE_PORT\$ トークンの置き換えに使用します。</p>
	通知 SMTP 電子メール送信者:	<p>プロビジョニング電子メール内のユーザから電子メールが送信されるように指定します。</p>
	通知 SMTP 電子メールホスト:	<p>プロビジョニング電子メールを使用している SMTP 電子メールホストを指定します。これは、IP アドレスまたは DNS 名が可能です。</p>

設定のタイプ	フィールド	説明
パスワード管理	外部パスワードWARの使用	<p>この機能によって、外部の [パスワードを忘れた場合の War] にある [パスワードを忘れた場合] ページと、外部の [パスワードを忘れた場合の WAR] が Web サービスを経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用する URL を指定できます。</p> <p>[外部パスワードWARの使用] を選択する場合は、[パスワードを忘れた場合のリンク] および [パスワードを忘れた場合の返信リンク] に値を指定する必要があります。</p> <p>[外部パスワードWarの使用] を選択しない場合は、デフォルトの内部パスワード管理機能が使用されます。/jsps/pwdmgt/ForgotPassword.jsf(最初は http(s) プロトコルなし)。これは、ユーザを、外部 WAR ではなく、ユーザアプリケーションに組み込まれた [パスワードを忘れた場合] 機能にリダイレクトします。</p>
	パスワードを忘れた場合のリンク	この URL は [パスワードを忘れた場合] 機能ページを指します。外部または内部のパスワード管理 WAR にある ForgotPassword.jsf ファイルを指定します。
	パスワードを忘れた場合の返信リンク	外部のパスワード管理 WAR を使用している場合は、外部の [パスワード管理 WAR] が Web サービス、たとえば https://idmhost:sslport/idm を経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用するパスを指定します。

- 3 追加ユーザアプリケーション環境設定パラメータに設定する場合は、[詳細オプションの表示] をクリックします。(スクロールしてパネル全体を表示します。)表 160 ページの表 5-7 は、詳細オプションのパラメータについて説明しています。このステップで説明した追加パラメータを設定しない場合は、スキップしてステップ 4 に進みます。

表 5-7 ユーザアプリケーション環境設定: すべてのパラメータ

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory 接続設定	LDAP ホスト	必須。LDAP サーバのホスト名または IP アドレスを指定します。たとえば、次のようにします。 myLDAPhost
	LDAP 非セキュアポート	LDAP サーバの非セキュアポートを指定します。たとえば、「389」のように指定してください。
	LDAP セキュアポート	LDAP サーバのセキュアポートを指定します。たとえば、「636」のように指定してください。
	LDAP 管理者	必須。LDAP 管理者の資格情報を指定します。このユーザは既に存在している必要があります。ユーザアプリケーションは、このアカウントを使用して識別ボールドへの管理接続を行います。この値は、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	LDAP 管理者パスワード	必須。LDAP 管理者パスワードを指定します。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	パブリック匿名アカウントの使用	ログインしていないユーザに、LDAP パブリック匿名アカウントへのアクセスを許可します。
	LDAP ゲスト	ログインしていないユーザに、許可されたポートレットへのアクセスを許可します。このユーザアカウントは、識別ボールドにすでに存在している必要があります。[LDAP ゲスト] を有効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] の選択を解除する必要があります。[ゲストユーザ] を無効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] を選択します。
	LDAP ゲストパスワード	LDAP ゲストパスワードを指定します。
	セキュアな管理者接続	このオプションを選択すると、管理者アカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります(このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。
	セキュアなユーザ接続	このオプションを選択すると、ログインユーザのアカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります(このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory DN	ルートコンテナDN	必須。ルートコンテナの LDAP 識別名を指定します。これは、ディレクトリ抽象化層で検索ルートが指定されない場合に、デフォルトのエンティティ定義検索ルートとして使用されます。
	プロビジョニングドライバDN	必須。ユーザアプリケーションドライバの識別名を指定します。たとえば、ドライバが UserApplicationDriver でドライバセットの名前が myDriverSet であり、ドライバセットが o=myCompany のコンテキストにある場合は、次の値を入力します。 cn=UserApplicationDriver,cn=myDriverSet,o=myCompany
	ユーザアプリケーション管理者	必須。指定されたユーザアプリケーションのユーザコンテナについての管理タスクを実行する権限のある、識別ポータル内の既存のユーザ。このユーザは、ユーザアプリケーションの [管理者] タブを使用してポータルを管理できます。 ユーザアプリケーション管理者が、 iManager 、 Novell Designer for identity Manager 、またはユーザアプリケーション ([要求と承認] タブ) に公開されているワークフロー管理タスクに参加する場合は、この管理者に、ユーザアプリケーションドライバに含まれるオブジェクトインスタンスに対する適切なトラスティ権限を与える必要があります。詳細は、 IDM ユーザアプリケーション: 管理ガイド を参照してください。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。
	プロビジョニングアプリケーション管理者	この役割は Identity Manager 3.5.1 のプロビジョニングバージョンで使用可能です。プロビジョニングアプリケーション管理者は、ユーザアプリケーションの [要求と承認] タブで使用可能なプロビジョニングワークフロー機能を管理します。このユーザは、プロビジョニングアプリケーション管理者に指定される前に、識別ポータルに存在する必要があります。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。

設定のタイプ	フィールド	説明
メタディレクトリユーザ ID	ユーザ コンテナ DN	<p>必須。ユーザコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。</p> <p>これにより、ユーザおよびグループの検索スコープが定義されます。</p> <p>このコンテナ内 (およびその下) のユーザが、ユーザアプリケーションにログインできます。</p> <hr/> <p>重要: ユーザがワークフローを実行できるようにする場合は、ユーザアプリケーションドライバの設定中に指定したユーザアプリケーション管理者は、このコンテナ内に存在する点に注意してください。</p>
	ユーザオブジェクトクラス	LDAP ユーザオブジェクトクラス (通常は inetOrgPerson)。
	ログイン属性	ユーザのログイン名を表す LDAP 属性 (たとえば CN)。
	名前付け属性	ユーザまたはグループをルックアップする際に ID として使用する LDAP 属性これはログイン属性と同じではありません。ログイン属性はログイン中にのみ使用し、ユーザおよびグループの検索中には使用しません。
メタディレクトリユーザグループ	ユーザメンバーシップ属性	オプション。ユーザのグループメンバーシップを表す LDAP 属性です。この名前にはスペースを使用しないでください。
	グループコンテナ DN	必須。グループコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。ディレクトリ抽象化レイヤ内のエンティティ定義で使用します。
	グループオブジェクトクラス	LDAP オブジェクトクラス (通常は groupofNames)。
	グループメンバーシップ属性	ユーザのグループメンバーシップを表す属性です。この名前にはスペースを使用しないでください。
	ダイナミックグループの使用	ダイナミックグループを使用する場合は、このオプションを選択します。
	ダイナミックグループオブジェクトクラス	LDAP ダイナミックグループオブジェクトクラス (通常は dynamicGroup)。

設定のタイプ	フィールド	説明
eDirectory 証明書	キーストアパス	必須。アプリケーションサーバが実行に使用しているの JRE のキーストア (cacerts) ファイルへのフルパスを指定するか、小さなブラウザボタンをクリックして cacerts ファイルに移動します。 ユーザアプリケーションのインストールによって、キーストアファイルが変更されます。 Linux または Solaris では、ユーザにはこのファイルへの書き込み許可が必要です。
	キーストアパスワード	必須。 cacerts のパスワードを指定します。デフォルトは、「changeit」です。
	キーストアパスワードの確認	
プライベートキーストア	プライベートキーストアパス	プライベートキーストアには、ユーザアプリケーションのプライベートキーおよび証明書が含まれます。予約済み。入力しない場合は、このパスはデフォルトで /jre/lib/security/cacerts になります。
	プライベートキーストアパスワード	このパスワードは、別のパスワードを指定するまでは changeit です。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
	プライベートキーの別名	この別名は、別の別名を指定するまでは novellIDMUserApp です。
	プライベートキーパスワード	このパスワードは、別のパスワードを指定するまでは novel1IDM です。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
トラステッドキーストア	トラステッドキーストアパス	トラステッドキーストアには、有効なデジタル署名に使用するすべてのトラステッド署名者の証明書が含まれます。入力しない場合は、ユーザアプリケーションはシステムプロパティ javax.net.ssl.trustStore からパスを取得します。パスがそこではない場合は、 jre/lib/security/cacerts だと推測されます。
	トラステッドキーストアパスワード	このフィールドを入力しない場合は、ユーザアプリケーションはシステムプロパティ javax.net.ssl.trustStorePassword からパスワードを取得します。値がそこではない場合は、が使用されます。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されます。
Novell Audit デジタル署名および証明書キー		Novell Audit デジタル署名キーおよび証明書が含まれます。
	Novell Audit デジタル署名証明書	デジタル署名証明書が表示されます。
	Novell Audit デジタル署名秘密鍵	デジタル署名秘密鍵が表示されます。このキーは、マスタキーに基づいて暗号化されず。

設定のタイプ	フィールド	説明
iChain 設定	ICS ログアウトが有効	このオプションが選択されている場合は、ユーザアプリケーションによってユーザアプリケーションおよび iChain または Novell Access Manager の同時ログアウトがサポートされます。Novell Access Manager にログアウト時にクッキーがあるかどうかをチェックされ、クッキーが存在する場合は、ユーザを ICS ログアウトページに再ルーティングします。
	ICS ログアウトページ	iChain または Novell Access Manager ログアウトページへの URL は、iChain または Novell Access Manager が期待する URL がホスト名である場所です。ICS ログが有効な場合は、ユーザはユーザアプリケーションからログアウトし、ユーザはこのページを再ルーティングします。
電子メール	通知テンプレートホストトークン	Identity Manager ユーザアプリケーションをホストしているアプリケーションサーバを指定します。たとえば、次のようにします。 <code>myapplication serverServer</code> この値は、電子メールテンプレートの \$HOST\$ トークンと置き換えられます。作成される url は、プロビジョニング要求タスクと承認通知へのリンクです。
	通知テンプレートポートトークン	プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$PORT\$ トークンの置き換えに使用されます。
	通知テンプレートセキュアポートトークン	プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$SECURE_PORT\$ トークンの置き換えに使用します。
	通知テンプレートプロトコルトークン	非セキュアプロトコル、HTTP を参照してください。プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$PROTOCOL\$ トークンの置き換えに使用します。
	通知テンプレートセキュアプロトコルトークン	セキュアプロトコル、HTTP を参照してください。プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの \$SECURE_PROTOCOL\$ トークンの置き換えに使用されます。
	通知 SMTP 電子メール送信者:	プロビジョニング電子メール内のユーザからの電子メールを指定します。
	通知 SMTP 電子メールホスト:	プロビジョニング電子メールを使用している SMTP 電子メールホストを指定します。これは、IP アドレスまたは DNS 名が可能です。

設定のタイプ	フィールド	説明
パスワード管理	外部パスワード WAR の使用	<p>この機能によって、外部の [パスワードを忘れた場合の War] にある [パスワードを忘れた場合] ページと、外部の [パスワードを忘れた場合の WAR] が Web サービスを経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用する URL を指定できます。</p> <p>[外部パスワード WAR の使用] を選択する場合は、[パスワードを忘れた場合のリンク] および [パスワードを忘れた場合の返信リンク] に値を指定する必要があります。</p> <p>[外部パスワード War の使用] を選択しない場合は、デフォルトの内部パスワード管理機能が使用されます。/jsps/pwdmgt/ForgotPassword.jsf(最初は http(s) プロトコルなし)。これは、ユーザを、外部 WAR ではなく、ユーザアプリケーションに組み込まれた [パスワードを忘れた場合] 機能にリダイレクトします。</p>
	パスワードを忘れた場合のリンク	この URL は [パスワードを忘れた場合] 機能ページを指します。外部または内部のパスワード管理 WAR にある ForgotPassword.jsf ファイルを指定します。
	パスワードを忘れた場合の返信リンク	外部のパスワード管理 WAR を使用している場合は、外部の [パスワード管理 WAR] が Web サービス、たとえば https:// idmhost:sslport/ idm を経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用するパスを指定します。
その他	セッションのタイムアウト	アプリケーションセッションのタイムアウト。
	OCSP URI	クライアントインストールが On-Line Certificate Status Protocol (OCSP) を使用する場合は、Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。たとえば、フォーマットは http:// host:port/ocspLocal です。OCSP URI によって、トラステッド証明書オンラインの状態は更新されます。
	許可設定パス	許可環境設定ファイルの完全修飾名。
	eDirectory インデックスの作成	
	サーバ DN	

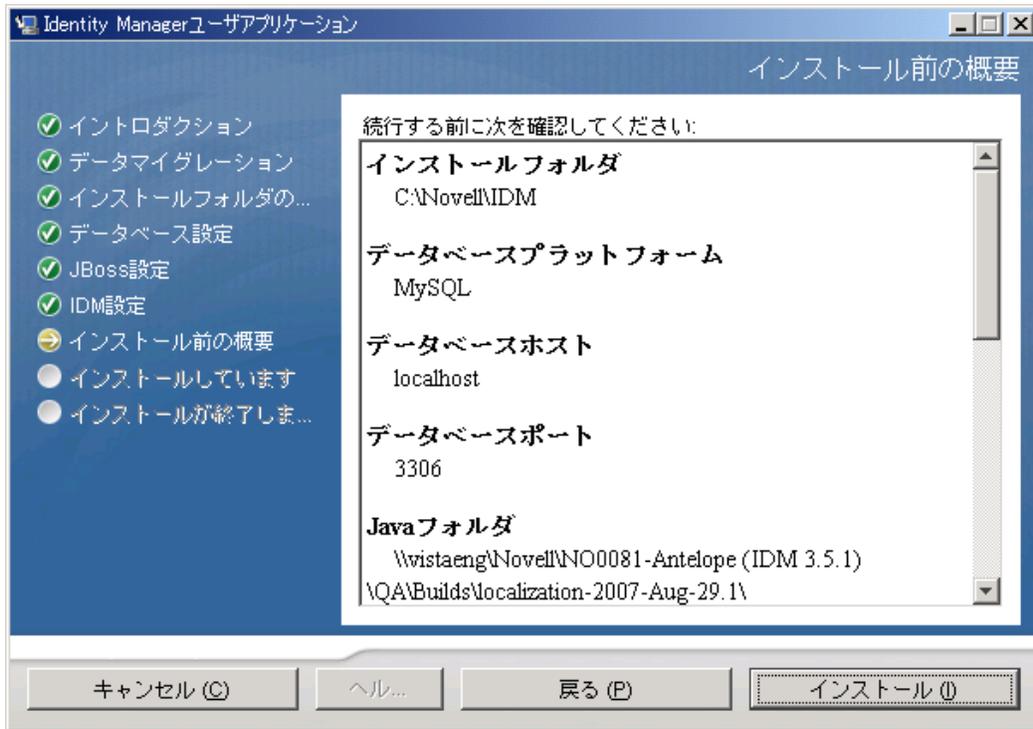
設定のタイプ	フィールド	説明
コンテナオブジェクト	選択済み	使用する各コンテナオブジェクトタイプを選択します。
	コンテナオブジェクトタイプ	地域、国、部門、組織、およびドメインの規格コンテナから選択します。iManager 内で自分のコンテナを定義でき、これを [新規コンテナオブジェクトの追加] の下に追加できます。
	コンテナ属性名	コンテナオブジェクトタイプに関連する属性タイプ名をリストします。
	新規コンテナオブジェクトの追加: コンテナオブジェクトタイプ	コンテナとして使用できる識別ボールドからオブジェクトクラスの LDAP 名を指定します。 コンテナの詳細については、『Novell iManager 2.6 Administration Guide (http://www.novell.com/documentation/imanager26/pdfdoc/imanager_admin_26/imanager_admin_26.pdf)』を参照してください。
	新規コンテナオブジェクトの追加: コンテナ属性名	コンテナオブジェクトの属性名を指定します。

- 4 設定で環境設定を完了したら、[OK] をクリックして、166 ページのセクション 5.6.10 「選択内容の確認とインストール」に進みます。

5.6.10 選択内容の確認とインストール

- 1 [インストール前の概要] ページを読んで、インストールパラメータの選択を確認します。
- 2 必要に応じて、[戻る] を使用して前のインストールページに戻り、インストールパラメータを変更します。

ユーザアプリケーション環境設定ページでは値は保存されないため、インストール時に前のページを再指定したら、ユーザアプリケーション環境設定値を再入力する必要があります。
- 3 インストールおよび環境設定パラメータに問題がなければ、[インストール前の概要] ページに戻り、[インストール] をクリックします。167 ページのセクション 5.6.11 「ログファイルの表示」に進みます。



5.6.11 ログファイルの表示

エラーが発生せずにインストールが完了した場合は、[167 ページのセクション 5.6.12 「ユーザアプリケーション環境設定ファイルと JVM システムプロパティの追加」](#)に進みます。

インストールでエラーまたは警告が発生した場合は、次のようなログファイルを確認して、問題を判断してください。

- ◆ Identity_Manager_User_Application_InstallLog.log には、基本的なインストールタスクの結果が格納されています。
- ◆ Novell-Custom-Install.log には、インストール中に行ったユーザアプリケーション環境設定についての情報があります。

5.6.12 ユーザアプリケーション環境設定ファイルと JVM システムプロパティの追加

- 1 ユーザアプリケーションのインストールディレクトリから、sys-configuration-xmldata.xml ファイルを、WebSphere サーバをホストしているマシン上のディレクトリ (例: /UserAppConfigFiles) にコピーします。ユーザアプリケーションのインストールディレクトリとは、ユーザアプリケーションをインストールしたディレクトリです。
- 2 JVM システムプロパティで、sys-configuration-xmldata.xml ファイルのパスを設定します。これを行うには、WebSphere 管理コンソールに管理者ユーザとしてログインしてください。
- 3 左側のパネルから、[サーバ] > [アプリケーションサーバ] の順に移動します。

- 4 サーバリストでサーバ名 (例: server1) をクリックします。
- 5 右側の設定リストで、[*Server Infrastructure*] の下にある [*Java and Process Management*] に移動します。
- 6 リンクを展開して、[*Process Definition*] を選択します。
- 7 [*Additional Properties*] リストの下にある [*Java 仮想マシン*] を選択します。
- 8 [JVM] ページの [*Additional Properties*] という見出しの下にある [*Custom Properties*] を選択します。
- 9 [*新規*] をクリックして、新しい JVM システムプロパティを追加します。
 - 9a [*名前*] には、`extend.local.config.dir` を指定します。
 - 9b [*値*] には、`sys-configuration-xmldata.xml` ファイルをコピーしたディレクトリ (`UserAppConfigFiles` など) を指定します。
 - 9c [*説明*] には、プロパティの説明 (`path to sys-configuration-xmldata.xml` など) を指定します。
 - 9d [*OK*] をクリックしてプロパティを保存します。
- 10 [*新規*] をクリックして、別の新しい JVM システムプロパティを追加します。
 - 10a [*名前*] には、`idmuserapp.logging.config.dir` を指定します。
 - 10b [*値*] には、`sys-configuration-xmldata.xml` ファイルをコピーしたディレクトリ (`UserAppConfigFiles` など) を指定します。
 - 10c [*説明*] には、プロパティの説明 (`path to sys-configuration-xmldata.xml` など) を指定します。
 - 10d [*OK*] をクリックしてプロパティを保存します。

注: `idmuserapp-logging.xml` ファイルは、このディレクトリに存在する必要はありません。このファイルは、ログ環境設定を変更すると作成されます。

- 11 項 168 ページのセクション 5.6.13 「WebSphere キーストアへの eDirectory ルート認証局のインポート」に進みます。

5.6.13 WebSphere キーストアへの eDirectory ルート認証局のインポート

- 1 ユーザアプリケーションのインストール中に、eDirectory ルート認証局の証明書が、ユーザアプリケーションをインストールするディレクトリにエクスポートされます。これらの証明書を、WebSphere サーバをホストするマシンにコピーします。
- 2 証明書を WebSphere のキーストアにインポートします。この作業は、WebSphere の管理者コンソール (168 ページの 「WebSphere 管理者コンソールを使用した証明書のインポート」) またはコマンドライン (169 ページの 「コマンドラインを使用した証明書のインポート」) を使って実行できます。
- 3 証明書をインポートしたら、169 ページのセクション 5.6.14 「IDM WAR ファイルの展開」に進みます。

WebSphere 管理者コンソールを使用した証明書のインポート

- 1 WebSphere 管理者コンソールに管理者ユーザとしてログインします。

- 2 左側のパネルから、[セキュリティ] > [SSL Certificate and Key Management] の順に移動します。
- 3 右側の設定リストで、[Additional Properties] の下にある [Key stores and certificates] に移動します。
- 4 [NodeDefaultTrustStore] (または使用している認証ストア) を選択します。
- 5 右側の [Signer Certificates] の下にある [Additional Properties] を選択します。
- 6 [追加] をクリックします。
- 7 エイリアス名と証明書ファイルのフルパスを入力します。
- 8 ドロップダウンでデータタイプを [Binary DER data] に変更します。
- 9 [OK] をクリックします。これで、署名者証明書リストに証明書が表示されます。

コマンドラインを使用した証明書のインポート

- 1 WebSphere サーバをホストするマシンのコマンドラインから鍵ツールを実行して、WebSphere キーストアに証明書をインポートします。

注: WebSphere の鍵ツールを使用しないと、この手順は有効ではありません。また、ストアタイプが PKCS12 であることを確認してください。

WebSphere の鍵ツールは /IBM/WebSphere/AppServer/java/bin にあります。

鍵ツールコマンドのサンプル

```
keytool -import -trustcacerts -file servercert.der -alias myserveralias -keystore trust.p12 -storetype PKCS12
```

システム上に複数の trust.p12 ファイルがある場合は、ファイルへのフルパスを指定しなければならないことがあります。

5.6.14 IDM WAR ファイルの展開

- 1 WebSphere 管理者コンソールに管理者ユーザとしてログインします。
- 2 左側のパネルから、[アプリケーション] > [Install New Application] の順に移動します。
- 3 IDM War ファイルの場所を参照します (IDM WAR ファイルはユーザアプリケーションのインストール中に設定されます。このファイルは、ユーザアプリケーションのインストール時に指定したユーザアプリケーションのインストールディレクトリにあります)。
- 4 アプリケーションのコンテキストルートを入力します (例: IDMPProv)。これは URL のパスになります。
- 5 [Prompt me only when additional information is required] が選択されていることを確認し、[次へ] をクリックして [Select installation options] ページに移動します。
- 6 このページのデフォルト値をそのまま使用し、[次へ] をクリックして [Map modules to servers] 画面に移動します。
- 7 このページの項目はすべてデフォルトのままにして、[次へ] をクリックして [Map resource references to resources] ページに移動します。

- 8 認証方法では、[*User default method*] チェックボックスをオンにします。続いて、[*Authentication data entry*] ドロップダウンで、先に作成したエイリアス (MyServerNode01/MyAlias など) を選択します。
- 9 認証設定の下の表で、展開するモジュールを検索します。[*Target Resource JNDI Name*] というタイトルのカラムの下で、参照ボタンをクリックして JNDI 名を指定します。これによりリソースのリストが表示されます。先に作成したデータソースを選択して [適用] ボタンをクリックし、[*Map resource references to resources*] ページに戻ります (例: MyDataSource)。
- 10 [次へ] を選択して、[*Map virtual hosts for Web modules*] ページに移動します。
- 11 このページの項目はすべてデフォルトのままにし、[次へ] をクリックして [概要] ページに移動します。
- 12 [終了] をクリックして展開を完了します。
- 13 展開が完了したら、[保存] をクリックして変更内容を保存します。
- 14 **170 ページのセクション 5.6.15 「アプリケーションの起動」**に進みます。

5.6.15 アプリケーションの起動

- 1 WebSphere 管理者コンソールに管理者ユーザとしてログインします。
- 2 左側のナビゲーションパネルで、[アプリケーション] > [エンタープライズアプリケーション] の順に移動します。
- 3 起動するアプリケーションの横にあるチェックボックスをオンにし、[起動] をクリックします。
起動すると、[*Application status*] カラムに緑色の矢印が表示されます。

5.6.16 ユーザアプリケーションポータルへのアクセス

- 1 展開中に指定したコンテキストを使用してポータルにアクセスします。

WebSphere 上の Web コンテナのデフォルトポートは 9080 です。または、セキュアポートの場合は 9443 です。URL のフォーマットは次のとおりです。

```
http:// <server>:9080/IDMProv
```

5.7 コンソールインタフェースからのユーザアプリケーションのインストール

この項では、コンソール (コマンドライン) バージョンのインストーラを使用して Identity Manager ユーザアプリケーションをインストールする方法について説明します。

- 1 **111 ページの表 5-2** で説明されている手順に従って、適切なインストールファイル入手します。
- 2 ログインして、端末のセッションを開きます。
- 3 次のコマンドを使用して、使用しているプラットフォーム用のインストーラを Java とともに起動します。

```
java -jar IdmUserApp.jar -i console
```

- 4 112 ページのセクション 5.5 「インストール GUI からの JBoss アプリケーションサーバへのユーザアプリケーションのインストール」の下にあるグラフィカルユーザインタフェースについて説明されたのと同じステップに従って、コマンドラインのプロンプトを読み、コマンドラインに対する応答を入力して、マスタキーをインポートまたは作成します。
- 5 ユーザアプリケーション環境設定パラメータを設定するには、手動で `configupdate` ユーティリティを起動する必要があります。コマンドラインで、`configupdate.sh` (Linux または Solaris) あるいは `configupdate.bat` (Windows) と入力して、129 ページのセクション 5.5.14 「ユーザアプリケーションの設定」で説明されている値を入力します。
- 6 外部パスワード管理 WAR を使用している場合は、これをインストールディレクトリおよび、外部パスワード WAR 機能を実行するリモート JBoss サーバ展開ディレクトリにコピーします。
- 7 178 ページのセクション 5.9 「インストール後のタスク」に進みます。

5.8 単一コマンドによるユーザアプリケーションのインストール

このセクションでは、サイレントインストールの方法について説明します。サイレントインストールには、インストール中のやりとりが必要なく、特に複数のシステムにインストールする場合には、時間を節約できます。サイレントインストールは、Linux および Solaris でサポートされています。

- 1 111 ページの表 5-2 でリストされている手順に従って、適切なインストールファイルを手入します。
- 2 ログインして、端末のセッションを開きます。
- 3 IDM プロパティファイル、`silent.properties` を配置します。これはインストールファイルにバンドルされています。CD からインストールしている場合は、このファイルのローカルコピーを作成します。
- 4 `silent.properties` を編集して、インストールパラメータおよびユーザアプリケーション環境設定パラメータを指定します。

各インストールパラメータの例については、`silent.properties` ファイルを参照してください。インストールパラメータは、GUI またはコンソールインストール手順で設定したインストールパラメータに対応します。

ユーザアプリケーション環境設定パラメータの説明については、表 5-8 を参照してください。ユーザアプリケーション環境設定パラメータは、GUI またはコンソールインストール手順または `configupdate` ユーティリティで設定したのと同じパラメータです。

- 5 サイレントインストールは次の方法で起動します。

```
java -jar IdmUserApp.jar -i silent -f /yourdirectorypath/silent.properties
```

そのファイルがインストーラスクリプトとは別のディレクトリにある場合は、`silent.properties` へのフルパスを入力します。スクリプトによって、必要なファイルが一時ディレクトリに解凍され、サイレントインストールが起動されます。

表 5-8 サイレントインストールのユーザアプリケーション環境設定パラメータ

silent.properties にあるユーザアプリケーションのパラメータ名	ユーザアプリケーション環境設定パラメータファイルにある相当するパラメータ名、および説明
NOVL_CONFIG_LDAPHOST=	eDirectory 接続設定 : LDAP ホスト。必須。LDAP サーバのホスト名または IP アドレスを指定します。
NOVL_CONFIG_LDAPADMIN=	必須。LDAP 管理者の資格情報を指定します。このユーザは既に存在している必要があります。ユーザアプリケーションは、このアカウントを使用して識別ポールドへの管理接続を行います。この値は、マスタキーに基づいて暗号化されます。
NOVL_CONFIG_LDAPADMINPASS=	eDirectory 接続設定 : LDAP 管理者パスワード。必須。LDAP 管理者パスワードを指定します。このパスワードは、マスタキーに基づいて暗号化されません。
NOVL_CONFIG_ROOTCONTAINERNAME=	eDirectory DN: ルートコンテナ DN。必須。ルートコンテナの LDAP 識別名を指定します。これは、ディレクトリ抽象化層で検索ルートが指定されない場合に、デフォルトのエンティティ定義検索ルートとして使用されます。
NOVL_CONFIG_PROVISIONROOT=	eDirectory DN: プロビジョニングドライバ DN。必須。前述の 105 ページのセクション 5.3 「ユーザアプリケーションドライバの作成」 で作成したユーザアプリケーションドライバの識別名を指定します。たとえば、ドライバが <code>UserApplicationDriver</code> でドライバセットの名前が <code>myDriverSet</code> であり、ドライバセットが <code>o=myCompany</code> のコンテキストにある場合は、次の値を入力します。 <code>cn=UserApplicationDriver,cn=myDriverSet,o=myCompany</code>
NOVL_CONFIG_LOCKSMITH=	eDirectory DN: ユーザアプリケーション管理者。必須。指定されたユーザアプリケーションのユーザコンテナについての管理タスクを実行する権限のある、識別ポールド内の既存のユーザ。このユーザは、ユーザアプリケーションの <code>[管理者]</code> タブを使用してポータルを管理できます。 ユーザアプリケーション管理者が、 <code>iManager</code> 、 <code>Novell Designer for identity Manager</code> 、またはユーザアプリケーション (<code>[要求と承認]</code> タブ) に公開されているワークフロー管理タスクに参加する場合は、この管理者に、ユーザアプリケーションドライバに含まれるオブジェクトインスタンスに対する適切なトラスティ権限を与える必要があります。詳細は、 <i>IDM ユーザアプリケーション: 管理ガイド</i> を参照してください。 ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの <code>[管理]</code> > <code>[セキュリティ]</code> ページを使用する必要があります。

silent.properties にあるユーザアプリケーションのパラメータ名 ユーザアプリケーション環境設定パラメータファイルにある相当するパラメータ名、および説明

NOVL_CONFIG_PROVLOCKSMITH=

eDirectory DN: プロビジョニングアプリケーション管理者。この役割は Identity Manager 3.5.1 のプロビジョニングバージョンで使用可能です。プロビジョニングアプリケーション管理者は、[プロビジョニング] タブ ([管理] タブの下) を使用して、プロビジョニングワークフロー機能を管理します。これらの機能は、ユーザアプリケーションの [要求と承認] タブでユーザが使用可能です。このユーザは、プロビジョニングアプリケーション管理者に指定される前に、識別ボールドに存在する必要があります。

ユーザアプリケーションの展開後にこの割り当てを変更するには、ユーザアプリケーションの [管理] > [セキュリティ] ページを使用する必要があります。

NOVL_CONFIG_USERCONTAINERDN=

メタディレクトリユーザ ID: ユーザコンテナ DN。必須。ユーザコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。これにより、ユーザおよびグループの検索スコープが定義されます。このコンテナ内 (およびその下) のユーザが、ユーザアプリケーションにログインできます。

重要: ユーザがワークフローを実行できるようにする場合は、ユーザアプリケーションドライバの設定中に指定したユーザアプリケーション管理者は、このコンテナ内に存在する点に注意してください。

NOVL_CONFIG_GROUPCONTAINERDN=

メタディレクトリユーザグループ: グループコンテナ DN。必須。グループコンテナの LDAP 識別名 (DN) または完全修飾 LDAP 名を指定します。ディレクトリ抽象化レイヤ内のエンティティ定義で使用します。

NOVL_CONFIG_KEYSTOREPATH=

eDirectory 証明書: キーストアパス。必須。アプリケーションサーバが使用している JRE の (cacerts) キーストアファイルへのフルパスを指定します。ユーザアプリケーションのインストールによって、キーストアファイルが変更されます。Linux または Solaris では、ユーザにはこのファイルへの書き込み許可が必要です。

NOVL_CONFIG_KEYSTOREPASSWORD=

eDirectory 証明書: キーストアパスワード。必須。cacerts のパスワードを指定します。デフォルトは、「changeit」です。

<code>silent.properties</code> にあるユーザアプリケーションのパラメータ名	ユーザアプリケーション環境設定パラメータファイルにある相当するパラメータ名、および説明
<code>NOVL_CONFIG_SECUREADMINCONNECTION=</code>	<p>eDirectory 接続設定：セキュア管理者接続。</p> <p>[True] を選択すると、管理者アカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります (このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。</p> <p>管理者アカウントがセキュアソケット通信を使用しない場合は、[False] を指定します。</p>
<code>NOVL_CONFIG_SECUREUSERCONNECTION=</code>	<p>eDirectory 接続設定：セキュアユーザ接続。</p> <p>[True] を選択すると、ログインユーザのアカウントを使用したすべての通信でセキュアなソケットを使用する必要があります (このオプションを使用すると、パフォーマンスに深刻な悪影響を及ぼすことがあります)。</p> <p>ユーザのアカウントがセキュアソケット通信を使用しない場合は、[False] を指定します。</p>
<code>NOVL_CONFIG_SESSIONTIMEOUT=</code>	<p>その他：セッションのタイムアウト。アプリケーションセッションのタイムアウト間隔を指定します。</p>
<code>NOVL_CONFIG_LDAPPLAINPORT=</code>	<p>eDirectory 接続設定：LDAP 非セキュアポート。LDAP サーバの非セキュアポートを、たとえば「389」のように指定します。</p>
<code>NOVL_CONFIG_LDAPSECUREPORT=</code>	<p>eDirectory 接続設定：LDAP セキュアポート。LDAP サーバのセキュアポートを、たとえば「636」のように指定します。</p>
<code>NOVL_CONFIG_ANONYMOUS=</code>	<p>eDirectory 接続設定：パブリック匿名アカウントの使用</p> <p>[True] を選択して、ログインしていないユーザに、LDAP パブリック匿名アカウントへのアクセスを許可します。</p> <p>[False] を指定して、かわりに <code>NOVL_CONFIG_GUEST</code> を有効にします。</p>
<code>NOVL_CONFIG_GUEST=</code>	<p>eDirectory 接続設定：LDAP ゲスト。ログインしていないユーザに、許可されたポートレットへのアクセスを許可します。[パブリック匿名アカウントの使用] の選択も解除する必要があります。ゲストユーザアカウントは、識別ボールドにすでに存在する必要があります。[ゲストユーザ] を無効にするには、[パブリック匿名アカウントの使用] を選択します。</p>
<code>NOVL_CONFIG_GUESTPASS=</code>	<p>eDirectory 接続設定：LDAP ゲストパスワード。</p>

<code>silent.properties</code> にあるユーザアプリケーションのパラメータ名	ユーザアプリケーション環境設定パラメータファイルにある相当するパラメータ名、および説明
<code>NOVL_CONFIG_EMAILNOTIFYHOST=</code>	<p>電子メール: 通知テンプレートホストトークン。 Identity Manager ユーザアプリケーションをホストしているアプリケーションサーバを指定します。たとえば、次のようにします。</p> <pre>myapplication serverServer</pre> <p>この値は、電子メールテンプレートの <code>\$HOST\$</code> トークンと置き換えられます。作成される <code>url</code> は、プロビジョニング要求タスクと承認通知へのリンクです。</p>
<code>NOVL_CONFIG_EMAILNOTIFYPORT=</code>	<p>電子メール: 通知テンプレートポートトークン。プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの <code>\$PORT\$</code> トークンの置き換えに使用されます。</p>
<code>NOVL_CONFIG_EMAILNOTIFYSECUREPORT=</code>	<p>電子メール: 通知テンプレートセキュアポートトークン。プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの <code>\$SECURE_PORT\$</code> トークンの置き換えに使用します。</p>
<code>NOVL_CONFIG_NOTFSMTPEMAILFROM=</code>	<p>電子メール: 通知 SMTP 電子メール送信者。プロビジョニング電子メール内のユーザからの電子メールを指定します。</p>
<code>NOVL_CONFIG_NOTFSMTPEMAILHOST=</code>	<p>電子メール: 通知 SMTP 電子メールホスト。プロビジョニング電子メールを使用している SMTP 電子メールホストを指定します。これは、IP アドレスまたは DNS 名が可能です。</p>
<code>NOVL_CONFIG_USEEXTPWDWAR=</code>	<p>パスワード管理: 外部パスワード <code>WAR</code> の使用。</p> <p>外部パスワード管理 <code>WAR</code> を使用している場合は、<code>[True]</code> を指定します。<code>[True]</code> を指定する場合は、<code>NOVL_CONFIG_EXTPWDWARPTH</code> および <code>NOVL_CONFIG_EXTPWDWARRTNPATH</code> にも値を指定する必要があります。</p> <p><code>[False]</code> を指定して、デフォルトの内部パスワード管理機能を使用します。<code>/jsps/pwdmgt/ForgotPassword.jsf</code> (最初は <code>http(s)</code> プロトコルなし)。これは、ユーザを、外部 <code>WAR</code> ではなく、ユーザアプリケーションに組み込まれた [パスワードを忘れた場合] 機能にリダイレクトします。</p>
<code>NOVL_CONFIG_EXTPWDWARPATH=</code>	<p>パスワード管理: パスワードを忘れた場合のリンク。外部または内部のパスワード管理 <code>WAR</code> で、[パスワードを忘れた場合] 機能ページ <code>ForgotPassword.jsf</code> の URL を指定します。または、デフォルトの内部パスワード管理 <code>WAR</code> を受諾します。詳細については、141 ページの「パスワード WAR の使用」 を参照してください。</p>

<code>silent.properties</code> にあるユーザアプリケーションのパラメータ名	ユーザアプリケーション環境設定パラメータファイルにある相当するパラメータ名、および説明
<code>NOVL_CONFIG_EXTPWDWARRTPATH=</code>	パスワード管理: パスワードを忘れた場合の返信リンク。外部のパスワード管理 <code>WAR</code> を使用している場合は、外部の [パスワード管理 <code>WAR</code>] が <code>Web</code> サービス、たとえば <code>https:// idmhost:sslport/ idm</code> を経由してユーザアプリケーションを呼び戻すのに使用するパスを指定します。
<code>NOVL_CONFIG_USEROBJECTATTRIBUTE=</code>	メタディレクトリユーザ ID: ユーザオブジェクトクラス。LDAP ユーザオブジェクトクラス (通常は <code>inetOrgPerson</code>)。
<code>NOVL_CONFIG_LOGINATTRIBUTE=</code>	メタディレクトリユーザ ID: ログイン属性。ユーザのログイン名を表す LDAP 属性 (たとえば <code>CN</code>)。
<code>NOVL_CONFIG_NAMINGATTRIBUTE=</code>	メタディレクトリユーザ ID: 名前付け属性。ユーザまたはグループをルックアップする際に ID として使用する LDAP 属性 これはログイン属性と同じではありません。ログイン属性はログイン中のみ使用し、ユーザおよびグループの検索中には使用しません。
<code>NOVL_CONFIG_USERMEMBERSHIPATTRIBUTE=</code>	メタディレクトリユーザ ID: ユーザメンバーシップ属性。オプション。ユーザのグループメンバーシップを表す LDAP 属性です。この名前にはスペースを使用しないでください。
<code>NOVL_CONFIG_GROUPOBJECTATTRIBUTE=</code>	メタディレクトリユーザグループ: グループオブジェクトクラス。LDAP オブジェクトクラス (通常は <code>groupofNames</code>)。
<code>NOVL_CONFIG_GROUPMEMBERSHIPATTRIBUTE=</code>	メタディレクトリユーザグループ: グループメンバーシップ属性。ユーザのグループメンバーシップを表す属性を指定します。この名前にはスペースを使用しないでください。
<code>NOVL_CONFIG_USEDYNAMICGROUPS=</code>	メタディレクトリユーザグループ: ダイナミックグループを使用します。[<code>True</code>] を指定してダイナミックグループを使用します。使用しない場合は、[<code>False</code>] を指定します。
<code>NOVL_CONFIG_DYNAMICGROUPOBJECTCLASS=</code>	メタディレクトリユーザグループ: ダイナミックグループオブジェクトクラス。LDAP ダイナミックグループオブジェクトクラスを指定します (通常は <code>dynamicGroup</code>)。
<code>NOVL_CONFIG_PRIVATESTOREPATH=</code>	プライベートキーストア: プライベートキーストアパス。ユーザアプリケーションのプライベートキーと証明書を含むプライベートキーストアへのパスを指定します。予約済み。入力しない場合は、このパスはデフォルトで <code>/jre/lib/security/cacerts</code> になります。
<code>NOVL_CONFIG_PRIVATESTOREPASSWORD=</code>	プライベートキーストア: プライベートキーストアパスワード。
<code>NOVL_CONFIG_PRIVATEKEYALIAS=</code>	プライベートキーストア: プライベートキー別名。この別名は、別の別名を指定するまでは <code>novellIDMUserApp</code> です。

<code>silent.properties</code> にあるユーザアプリケーションのパラメータ名	ユーザアプリケーション環境設定パラメータファイルにある相当するパラメータ名、および説明
<code>NOVL_CONFIG_PRIVATEKEYPASSWORD=</code>	プライベートキーストア: プライベートキーパスワード。
<code>NOVL_CONFIG_TRUSTEDSTOREPATH=</code>	トラステッドキーストア: トラステッドストアパス。トラステッドキーストアには、有効なデジタル署名に使用するすべてのトラステッド署名者の証明書が含まれます。入力しない場合は、ユーザアプリケーションはシステムプロパティ <code>javax.net.ssl.trustStore</code> からパスを取得します。パスがそこではない場合は、 <code>jre/lib/security/cacerts</code> と推測されます。
<code>NOVL_CONFIG_TRUSTEDSTOREPASSWORD=</code>	トラステッドキーストア: トラステッドストアパスワード。
<code>NOVL_CONFIG_AUDITCERT=</code>	Novell Audit デジタル署名証明書
<code>NOVL_CONFIG_AUDITKEYFILEPATH=</code>	Novell Audit デジタル署名プライベートキーファイルのパス。
<code>NOVL_CONFIG_ICSSLOGOUTENABLED=</code>	iChain 設定: ICS ログアウト有効。 [True] を指定して、ユーザアプリケーションおよび iChain または Novell Access Manager の同時ログアウトを有効にします。Novell Access Manager にログアウト時にクッキーがあるかどうかをチェックされ、クッキーが存在する場合は、ユーザを ICS ログアウトページに再ルーティングします。 [False] を指定して、同時ログアウトを無効にします。
<code>NOVL_CONFIG_ICSSLOGOUTPAGE=</code>	iCHAIN 設定: ICS ログアウトページ。Ichain または Novell Access Manager ログアウトページへの URL を指定します。このページ j は、iChain または Novell Access Manager が期待する URL がホスト名である場所です。ICS ログが有効な場合は、ユーザはユーザアプリケーションからログアウトし、ユーザはこのページを再ルーティングします。
<code>NOVL_CONFIG_EMAILNOTIFYPROTOCOL=</code>	電子メール: 通知テンプレートプロトコルトークン。非セキュアプロトコル、HTTP を参照してください。プロビジョニング要求タスクと承認通知で使用する電子メールテンプレートの <code>\$PROTOCOL\$</code> トークンの置き換えに使用します。
<code>NOVL_CONFIG_EMAILNOTIFYSECUREPROTOCOL=</code>	電子メール: 通知テンプレートセキュアポートトークン。
<code>NOVL_CONFIG_OCSPURI=</code>	その他: OCSP URI。クライアントインストールが On-Line Certificate Status Protocol(OCSP) を使用する場合は、Uniform Resource Identifier(URI) を指定します。たとえば、フォーマットは <code>http://hstport/ocspLocal</code> です。OCSP URI によって、トラステッド証明書オンラインの状態は更新されます。

silent.properties にあるユーザアプリケーションのパラメータ名	ユーザアプリケーション環境設定パラメータファイルにある相当するパラメータ名、および説明
---	---

NOVL_CONFIG_AUTHCONFIGPATH=	その他：許可設定パス。許可環境設定ファイルの完全修飾名。
-----------------------------	------------------------------

5.9 インストール後のタスク

インストールしてユーザアプリケーションを設定した後は、インストール後のタスクに注意を払ってください。

- ◆ 178 ページのセクション 5.9.1 「マスタキーの記録」
- ◆ 179 ページのセクション 5.9.2 「クラスタインストールのチェック」
- ◆ 179 ページのセクション 5.9.3 「JBoss サーバ間の SSL 通信の設定」
- ◆ 179 ページのセクション 5.9.4 「外部パスワード WAR へのアクセス」
- ◆ 180 ページのセクション 5.9.5 「[パスワードを忘れた場合の設定] の更新」
- ◆ 180 ページのセクション 5.9.6 「電子メール通知の設定」
- ◆ 180 ページのセクション 5.9.7 「インストールのテスト JBoss アプリケーションサーバの場合」
- ◆ 181 ページのセクション 5.9.8 「プロビジョニングチームと要求の設定」
- ◆ 182 ページのセクション 5.9.9 「eDirectory でのインデックスの作成」

5.9.1 マスタキーの記録

インストール後すぐに、暗号化マスタキーをコピーして安全な場所に記録します。

- 1 インストールディレクトリで master-key.txt ファイルを開きます。
- 2 暗号化マスタキーを、システム障害の場合にアクセスできる安全な場所にコピーします。

警告：暗号化マスタキーのコピーは常に保持してください。たとえば装置障害などのためにマスタキーが失われた場合に、暗号化データへのアクセスを回復するために暗号化マスタキーが必要です。

このインストールがクラスタの最初のメンバー上の場合、クラスタのほかのメンバーへのユーザアプリケーションのインストール時にこの暗号化マスタキーを使用します。

マスタキーの詳細は、『*Identity Manager ユーザアプリケーション：管理ガイド* (<http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html>)』「*Encryption of Sensitive User Application Data*」および「*Clustering JBoss*」のセクションを参照してください。

5.9.2 クラスインストールのチェック

クラスインストールをチェックします。JBoss クラスタ内の各 JBoss サーバに次の項目が設定されていることを確認します。

- ◆ 固有のパーティション名 (パーティション名)
- ◆ 固有のパーティション UDP(partition.udpGroup)
- ◆ 固有のワークフローエンジン ID
- ◆ 同じ (同一の) WAR ファイル。WAR は、デフォルトで jboss\server\IDM\deploy ディレクトリにインストールによって書き込まれます

WebSphere クラスタ内の各サーバに固有のワークフローエンジン ID が設定されていることを確認します。

詳細は、『*Identity Manager ユーザアプリケーション: 管理ガイド* (<http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html>)』の4章のクラスタについてのセクションを参照してください。

5.9.3 JBoss サーバ間の SSL 通信の設定

インストール中にユーザアプリケーション設定ファイルで [外部パスワード WAR の使用] をオンにする場合は、ユーザアプリケーション WAR および IDMPwdMgt.war ファイルを展開する JBoss サーバの間の SSL 通信を設定する必要があります。手順については、JBoss マニュアルを参照してください。

5.9.4 外部パスワード WAR へのアクセス

外部パスワード WAR があり、[パスワードを忘れた場合] 機能をテストする場合は、次の2つの場所でこれにアクセスできます。

- ◆ ブラウザ。外部パスワード WAR で [パスワードを忘れた場合] ページに移動します。たとえば、<http://localhost:8080/ExternalPwd/jsps/pwdmgt/ForgotPassword.jsf> に移動します。
- ◆ ユーザアプリケーションのログインページ。[パスワードを忘れた場合] リンクをクリックします。

5.9.5 [パスワードを忘れた場合の設定] の更新

インストール後に、[パスワードを忘れた場合のリンク] および [パスワードを忘れた場合の返信リンク] の値を変更できます。configupdate ユーティリティまたはユーザアプリケーションを使用します。

configupdate ユーティリティを使用する コマンドラインで、ディレクトリをインストールディレクトリに変更して、configupdate.sh (Linux または Solaris) あるいは configupdate.bat (Windows) と入力します。外部パスワード管理 WAR を作成して編集する場合は、リモートの JBoss サーバにコピーする前に、WAR を手動で名前変更する必要があります。

ユーザアプリケーションを使用する ユーザアプリケーションの管理者としてログインして、[管理] > [アプリケーション] > [アプリケーション環境設定] > [パスワードモジュールのセットアップ] > [ログイン] の順に移動します。次のフィールドを変更します。

- [パスワードを忘れた場合のリンク] (たとえば <http://localhost:8080/ExternalPwd/jsps/pwdmgt/ForgotPassword.jsf>)
- [パスワードを忘れた場合の返信リンク] (たとえば <https://idmhost:sslport/idm>)

5.9.6 電子メール通知の設定

[パスワードを忘れた場合] およびワークフロー電子メール通知機能を実装するには、次のようにします。

- 1 iManager の [Roles and Tasks] の下で、[ワークフロー管理]、[電子メールサーバオプション] の順に選択します。
- 2 [ホスト名] の下で SMTP サーバ名を指定します。
- 3 [送信者] の隣で、電子メールアドレス (たとえば noreply@novell.com) を指定してから、[OK] をクリックします。

5.9.7 インストールのテスト JBoss アプリケーションサーバの場合

- 1 データベースを起動します。手順については、データベースマニュアルを参照してください。
- 2 ユーザアプリケーションサーバ (JBoss) を起動します。コマンドラインで、インストールディレクトリを作業ディレクトリにして、次のスクリプトを実行します (ユーザアプリケーションのインストールで提供)。

start-jboss.sh(Linux および Solaris)

start-jboss.bat(Windows)

アプリケーションサーバを停止する必要がある場合は、stop-jboss.sh または stop-jboss.bat、または start-jboss.sh または start-jboss.bat を実行しているウィンドウを閉じます。

- 3 ユーザアプリケーションドライバを起動します。これによって、ユーザアプリケーションドライバへの通信は有効になります。
 - 3a iManager にログインします。
 - 3b 左のナビゲーションフレームに表示されている [Roles and Tasks] で、[Identity Manager] の下にある [Identity Manager の概要] を選択します。
 - 3c 表示されたコンテンツビューで、ユーザアプリケーションドライバを含むドライバセットを指定し、[検索] をクリックします。ドライバセットとそれに関連付けられたドライバを示すグラフィックが表示されます。
 - 3d ドライバで赤と白のアイコンをクリックします。
 - 3e [ドライバの起動] を選択します。ドライバ状態は陰陽記号に変更され、ドライバが起動されていることが表示されます。

起動時にドライバはユーザアプリケーションと「握手」しようとします。アプリケーションサーバが実行されていないか WAR が正常に展開されなかった場合は、ドライバはエラーを返します。

- 4 ユーザアプリケーションを起動してログインするには、Web ブラウザを使用して次のアドレスにアクセスします。

`http://hostname:port/ApplicationName`

この場合、*hostname:port* はアプリケーションサーバのホスト名で (たとえば、「myserver.domain.com」)、ポートはアプリケーションサーバのポートです (たとえば、JBoss のデフォルトは「8080」)。ApplicationName はデフォルトで IDM です。アプリケーションサーバ設定情報を指定した場合は、インストール中にアプリケーション名を指定しています。

Novell Identity Manager のユーザアプリケーションの表示ページが表示されるはずで

- 5 そのページの右上隅で、[ログイン] をクリックしてユーザアプリケーションにログインします。

このようなステップの完了後に、ブラウザに Identity Manager のユーザアプリケーションのページが表示されない場合は、エラーメッセージがないかどうか端末のコンソールを確認して、182 ページのセクション 5.11 「トラブルシューティング」を参照します。

5.9.8 プロビジョニングチームと要求の設定

プロビジョニングチームとプロビジョニングチーム要求を設定して、ワークフロータスクを有効にします。手順については、『Identity Manager 3.5.1 ユーザアプリケーション: 管理ガイド (<http://www.novell.com/documentation/idm35/index.html>)』を参照してください。

5.9.9 eDirectory でのインデックスの作成

IDM ユーザアプリケーションのパフォーマンスを改善するには、eDirectory 管理者で、manager、ismanager、および srvrprvUUID の属性についてのインデックスを作成する必要があります。これらの属性にインデックスがなくても、ユーザアプリケーションのユーザは特にクラスタ化された環境でのユーザアプリケーションのパフォーマンス向上を経験できます。Index Manager を使用してインデックスを作成する方法については、『Novell eDirectory 管理ガイド(<http://www.novell.com/documentation>)』を参照してください。

5.10 インストール後の IDM WAR ファイルの再設定

- 1 configupdate.sh または configupdate.bat を実行して、ユーザアプリケーションのインストールディレクトリにある ConfigUpdate ユーティリティを実行します。これにより、インストールディレクトリの WAR ファイルを更新できます。

ConfigUpdate ユーティリティのパラメータの詳細については、[129 ページのセクション 5.5.14 「ユーザアプリケーションの設定」](#) または [153 ページのセクション 5.6.9 「ユーザアプリケーションの設定」](#) を参照してください。

- 2 新しい WAR ファイルをアプリケーションサーバに展開します。

5.11 トラブルシューティング

Novell の担当者は、想定されるセットアップおよび環境設定のあらゆる問題に対応いたします。差し当たり、問題が発生した場合の対処方法をリストします。

表 5-9 ユーザアプリケーションのトラブルシューティング

項目	推奨されるアクション
インストール中に作成したユーザアプリケーションの環境設定を変更するとします。たとえば、次のような環境設定と仮定します。 <ul style="list-style-type: none">◆ 識別ポールの接続および証明書◆ 電子メール設定◆ メタディレクトリのユーザ識別情報、ユーザグループ◆ iChain 設定	インストーラとは別に、環境設定ユーティリティを実行できます。 Linux および Solaris では、インストールディレクトリ (デフォルトでは、 <code>/opt/novell/idm</code>) から次のコマンドを実行します。 <code>configupdate.sh</code> Windows では、インストールディレクトリ (デフォルトでは、 <code>c:\opt\novell\idm</code>) から次のコマンドを実行します。 <code>configupdate.bat</code>
アプリケーションサーバのスタートアップ時に、ログメッセージ「ポート 8080 使用中、使用されている」とともに例外がスローされる。	すでに実行されている Tomcat (または他のサーバソフトウェア) のすべてのインスタンスをシャットダウンします。アプリケーションサーバを再設定して 8080 以外のポートを使用する場合は、必ず iManager のユーザアプリケーションドライバの config 環境設定を編集してください。

項目	推奨されるアクション
アプリケーションサーバの起動時に、トラステッド証明書が見つからないというメッセージが表示される。	ユーザアプリケーションのインストールで指定した JDK を使用して、アプリケーションサーバを起動するようにします。
ポータル管理ページにログインできない。	ユーザアプリケーションの管理者アカウントが存在することを確認します。これを、 iManager の管理者アカウントと混同しないでください。2つの別の管理者オブジェクトがあります(またはある必要があります)。
管理者としてログインできるが、新規ユーザを作成することができない。	ユーザアプリケーションの管理者は、最上位のコンテナのトラスティでなければならず、スーパーバイザ権限が必要です。応急処置として、 LDAP 管理者と同等の権限を持つ、ユーザアプリケーションの管理者権限の設定を試みることができます(iManager を使用)。
アプリケーションサーバの起動時に、MySQL 接続エラーが発生する。	<p>root として実行しないでください(ただし、IDM で提供された MySQL のバージョンを実行している場合は、この問題はあまり発生しません)。</p> <p>MySQL が実行されていること(および正しいコピーが実行されていること)を確認してください。MySQL の他のすべてのインスタンスを強制終了します。/idm/mysql/start-mysql.sh を実行してから、/idm/start-jboss.sh を実行します。</p> <p>テキストエディタで /idm/mysql/setup-mysql.sh を調べ、疑わしい値をすべて修正してください。次に、スクリプトを実行し、/idm/start-jboss.sh を実行します。</p>
アプリケーションサーバの起動時に、キーストアエラーが発生する。	<p>アプリケーションサーバで、ユーザアプリケーションのインストール時に指定した JDK を使用されていません。</p> <p>次のように keytool コマンドを使用して、証明書ファイルをインポートします。</p> <pre>keytool -import -trustcacerts -alias aliasName -file certFile -keystore ..\lib\security\cacerts -storepass changeit</pre> <ul style="list-style-type: none"> ◆ aliasName は、この証明書に選択した一意の名前に置き換えます。 ◆ certFile は、証明書ファイルのフルパスおよび名前に置き換えます。 ◆ デフォルトのキーストアパスワードは、changeit です(別のパスワードがある場合は、それを指定します)。

項目	推奨されるアクション
電子メール通知が送信されない。	<p data-bbox="873 258 1409 373">configupdate ユーティリティを実行して、[E-Mail From] および [E-Mail Host User Application] 設定パラメータに値を指定しているかどうかを確認します。</p> <p data-bbox="873 394 1409 483">Linux および Solaris では、インストールディレクトリ (デフォルトでは、/opt/novell/idm) から次のコマンドを実行します。</p> <p data-bbox="873 493 1112 518"><code>configupdate.sh</code></p> <p data-bbox="873 539 1409 627">Windows では、インストールディレクトリ (デフォルトでは <code>c:\opt\novell\idm</code>) から次のコマンドを実行します。</p> <p data-bbox="873 638 1128 663"><code>configupdate.bat</code></p>

Novell Identity Manager 製品を有効にする

6

ここでは、Novell® Identity Manager をベースとする製品でアクティベーションがどのように機能するかについて説明します。Identity Manager、統合モジュール、およびプロビジョニングモジュールは、インストールから 90 日以内にアクティベートする必要があります。アクティベートしないと、90 日後にシャットダウンします。90 日以内のいつでも、またはその後でも、Identity Manager 製品をアクティベートするよう選択できます。

Identity Manager とドライバをアクティベートするには、次のタスクを完了します。

- ◆ Identity Manager 製品のライセンスの購入
- ◆ 資格情報を使用した Identity Manager 製品のアクティベート
- ◆ プロダクトアクティベーションキーのインストール
- ◆ Identity Manager およびドライバのプロダクトアクティベーションの表示

6.1 Identity Manager 製品のライセンスの購入

Identity Manager 製品のライセンスを購入するには、「[Novell Identity Manager How to Buy Web page \(http://www.novell.com/products/identitymanager/howtobuy.html\)](http://www.novell.com/products/identitymanager/howtobuy.html)」を参照してください。

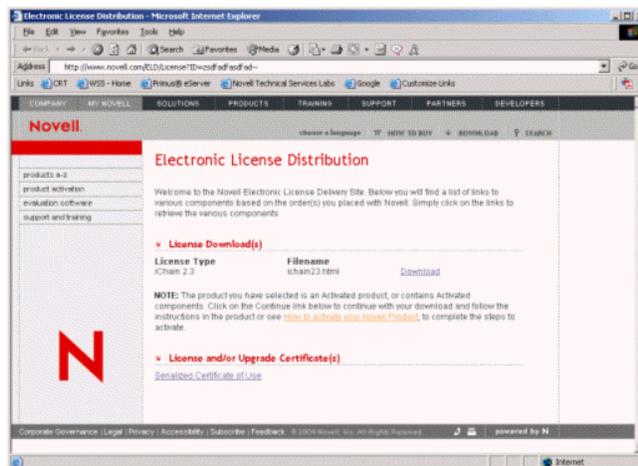
製品のライセンスをご購入になると、Novell より電子メールでカスタマ ID が送信されます。電子メールには、資格情報を入手可能な Novell サイトの URL も含まれています。カスタマ ID を記憶したり受信したりしたくない場合は、Novell Activation Center まで、米国では、1-800-418-8373、米国外では、1-801-861-8373 に電話してください (801 のエリアコードを使用して電話を変更します)。

6.2 資格情報を使用した Identity Manager 製品のアクティベート

- 1 ライセンスを購入すると、Novell からカスタマ ID の電子メールが送信されます。電子メールの「注文の詳細」セクションには、資格情報を入手可能なサイトへのリンクも含まれています。リンクをクリックすると、サイトに移動します。

重要：電子メールは製品の有効化には必要ではありません。会社内の誰かに電子メールが送信された場合は、詳細のために Novell Activation Center にお問い合わせください。

リンクをクリックすると、次のページと同様のページが表示されます。



- 2 ライセンスのダウンロードリンクをクリックして、保存 (ダウンロード) するか、.html ファイルを開きます。

ファイルを開くと、次の図に示す内容と同様の内容が表示されます。



- 3 Identity Manager コンポーネントのアクティベーションの方法については、187 ページのセクション 6.3 「プロダクトアクティベーションキーのインストール」に進んでください。

6.3 プロダクトアクティベーションキーのインストール

プロダクトアクティベーションキーは、iManager を使用してインストールする必要があります。

- 1 プロダクトアクティベーションキーが記載された Novell の電子メールを開きます。
- 2 次のいずれかの操作を行います。
 - ◆ プロダクトアクティベーションキーファイルを保存します。
または
 - ◆ プロダクトアクティベーションキーファイルを開き、プロダクトアクティベーションキーの内容をクリップボードにコピーします。注意深く内容をコピーし、余分な線やスペースが含まれないようにします。資格情報の最初のダッシュ (-) から (---BEGIN PRODUCT ACTIVATION CREDENTIAL) 資格情報の最後のダッシュ (-) まで (END PRODUCT ACTIVATION CREDENTIAL-----) をコピーする必要があります。
- 3 iManager を開きます。
- 4 *[Identity Manager] > [Identity Manager の概要]* の順に選択します。
- 5 ドライバセットを選択するか、ドライバセットを参照し、*[次へ]* をクリックします。
- 6 *[Identity Manager の概要]* で、ドライバセットを検索し、赤い *[アクティベーションの要求元]* リンクをクリックしてから、*[Install Activation (アクティベーションのインストール)]* をクリックします。
- 7 Identity Manager コンポーネントを有効にするドライバセットを選択します。
- 8 次のいずれかの操作を行います。
 - ◆ Identity Manager アクティベーションキーを保存した場所を指定し、*[次へ]* をクリックします。
または
 - ◆ Identity Manager アクティベーションキーの内容をテキスト領域に貼り付け、*[次へ]* をクリックします。
- 9 *[完了]* をクリックします。

注：ドライバが含まれるドライバセットごとに有効にする必要があります。資格情報によってツリーを有効にできます。

6.4 Identity Manager およびドライバのプロダクトアクティベーションの表示

ドライバセットごとに、メタディレクトリエンジンおよび Identity Manager ドライバにインストールしたプロダクトアクティベーションキーを表示できます。プロダクトアクティベーション資格情報を表示する

- 1 iManager を開きます。
- 2 *[Identity Manager] > [Identity Manager の概要]* の順にクリックします。

- 3 オブジェクト名フィールドに、アクティベーション情報を表示するドライバセットまたはドライバの名前を指定します。
または
アクティベーション情報を表示するドライバセットまたはドライバを参照および選択します。
- 4 アクティベーション情報を表示するドライバセットを探し、ドライバセット名をクリックします。
- 5 [アクティベーション] タブを選択します。
アクティベーションキーのテキストを参照できます。エラーが報告された場合は、アクティベーションキーを削除できます。

注：ドライバセットの有効なプロダクトアクティベーションキーをインストールした後も、ドライバ名の横に「アクティベーションが必要です」と表示されることがあります。この場合、ドライバを再起動するとメッセージが消えます。
